

331.34-Ma59ㄅ



1200500737320



始





カール・マルクス著  
高畠素之譯

331.34  
Ma53  
(1)  
MA59  
(1)

# 資 本 論

第一卷 第一分冊

未 來 社 版





1010  
81

### 新改譯版について

茲に刊行する新改譯版は、舊改譯版（新潮社版）を基礎として幾多の訂正を加へたものである。訂正の大部分は、誤植、誤字の改修以上に出でなかつたが、なかには譯法に於いて可なり本質的の訂正を加へた點も少なくない。舊改譯版に對し、小泉信三、堺利彦兩氏より注意を與へられた個所については、熟慮の上、十分兩氏の示教に準據したつもりである。茲に兩氏の好意を謝し、併せてこの新版に對しても、諸家の忌憚なき示教を希求する次第である。尙、この新改譯版を以つて、一先づ拙譯資本論の定本たらしめんとするものであることを附言して置く。

昭和二年六月一日

高 島 素 之



## 舊改譯版序文

私が『資本論』の翻譯に着手したのは大正八年七月、最終の分冊を刊行したのは大正十三年七月、その間に五年の星霜を閲してゐる。同一出版物の勞作期間としては可なり大きな年月と言はねばならぬ。勿論、その間には種々なる餘技的享樂に時間を浪費したこともあるから、五ヶ年の全部を『資本論』のためにのみ没頭したとは言ひ得ないが、然しこの間に於ける私の注意と努力と時間の主要部分が『資本論』刊行の目的に集中されてゐたことは事實である。

それで昨年七月、最終分冊を刊行し終つたとき、私の過去五年間の努力は曲りなりにも大成された譯であるから、私としては大いに重荷を卸した気分になり、祝盃の一つも上げねばならなかつた筈であるが、事實は更らに苦痛を加へるのみであつた。それは私の過去に於ける勞作が、甚しく不出来に終つたといふ自意識に原因を置いてゐる。

私の翻譯は、何よりも先づ難解であつた。譯者たる私自身が讀んで見ても、原文を對照しないでは意味の通しない處が無限にある。これは一つには、『資本論』の名に脅威されて、私の譯筆が餘りに硬くなり過ぎたことにも起因してゐる。現に『資本論』以前に刊行した『資本論解説』の方は、不出来ながらも難解の缺點は比較的少なかつた。『資本論』も『解説』程度にやつたやれぬことはなかつたであらうが、何分にも硬くなつてしまつて日本文の體をなさなくなつた。

第二に、純然たる誤譯とすべきものが少なからず見出された。これは大抵ケークレス・ミステイクとして恕し得べきものであつたが、中には私の實力不足に依るものも可なりあつた。

第三に、印刷上の誤植その他不體裁の點が少なからず見出された。ことに舊版第一卷第一、二冊の如きは、刊行を急がされたためであらうか、随分物笑ひになりさうな缺點を含んでゐた。

然し、誤譯や誤植を改めるのは、まして時間と努力を要しない。一番困難なことは、難解の譯文をいま一度原文と對照して、日本人に解る日本語に全部譯し換へることである。それも些々たる小冊子ならば兎も角、大冊三卷に互り一難去つて更らにこの苦戦をきり抜けねばならぬかと思ふと、さう思つただけで氣が詰まりさうになる。それほど、私の神經と理解性の尖端は『資本論』のために麻痺し盡されてゐたのである。

然し、私としては、どうしてもこの仕事だけは完成せねばならぬ。原本が原本だけに恥を後世に遺すやうなことがあつては

申譯がない。十分とは行かぬ迄も、せめて日本文が讀めると假定したマルクスから、一流の冷笑を以つてあしらはれないだけの成績は收めて置きたい。舊版は兎に角失敗であつたが、第二巻に於いては少なくとも其處まで漕ぎつけた、といふのが絶えず私の心頭にこびりついて離れない念願であつた。

さういふ決心を以つて著手したのが、この改譯版である。忠實、眞摯の二點は勿論不動の出發點として、それ以外、この改譯版で最も力を單めたのは、舊版の最大缺點たる難解を一掃して、出來得る限り理解し易い日本文の『資本論』を綴ることであつた。この點に於いて私の努力がどの程度まで功を奏したかは、勿論權威ある評者の評價に待つ外はないが、私としては全力的に精根を絞つたつもりである。時間も可なり費した。昨年八月から著手して、少なくとも昨年一杯には第一巻だけは仕上げるとも思つたが、何分にも手入れを要する個所が多く、今日に及んで漸く第一巻を完了したやうな始末、その間十ヶ月は文字通りこの仕事のためにのみ没頭して來たのである。

改譯については、カウツキー編纂平民版資本論が非常な助けになつた。舊版序文にも斷つた通り、私の語學は英獨二語に限られてゐるため、その他の國語で原文のまま掲げられてゐる脚註や引抄は如何とも齒が立たぬのであるが、カウツキーの平民版にはそれが全部ドイツ語に翻譯されてゐるので、この點が先づ助かつた。次に、言ひ現しの曖昧な點、難解な點や、句切りの長い處などは、すべて讀者の便宜を標準として手際よく編纂されてゐる。これらの點も出來得る限り、平民版に従つたが、然し全體の骨子は舊拙譯版通り原本第六版を基礎として、平民版の編纂秩序には準據しなかつた。

以下、讀者の便宜のため、『資本論』全體の成立につき簡単な叙述を與へて置く。  
マルクスは第一版序文の中にも言つてゐる如く、最初本書を三卷に分かつ考であつた。即ち第一部『資本の生産行程』を第一卷に收め、第二部『資本の流通行程』と第三部『資本の總生産行程』とを第二卷に充て、第四部『餘剩價值學說史』を以つて第三卷の内容たらしめようとしたのであつた。

彼れは第一卷執筆當時、既に全三卷の主要部分をあらかじめ脳裡に築き上げてゐたのであるが、病氣のため第一卷を完成したきりで、一八八三年三月十四日その第三版印刷中にこの世を去つた。

彼れの死後、エンゲルスは第二卷の編輯に著手したが、その編輯中、彼れはマルクスの最初の計畫を變更して第二卷には前記の第二部、即ち『資本の流通行程』のみを含めることを適當と信じた。斯くてこの第二卷は一八八五年五月五日(マルクスの誕生日)第一卷に後ること正に十八年にして漸く刊行を見ることになつたのである。



第三卷の刊行は更らに後れた。一八九三年七月、第二卷再版の公にされたとき、エンゲルスは尙第三卷の編輯に従事してゐた。それが初めて公にされたのは、一八九四年十月四日、第一卷を距ること實に二十七年の後であつた。第三卷はこれを上下に分ち、マルクスが最初第二卷の後半として計畫した前記第三部『資本の總生産行程』を取り扱つた。

第二、第三兩卷の發行が斯く長引いた事と、マルクスの原稿を整理するに當つての困難とについて、エンゲルスはこの兩卷の序文の中に、立ち入つた叙述を與へてゐる。彼れはその勞作に對する彼れ自身の貢獻を努めて貶下しようとしてゐるが、事實彼れの苦心努力が如何ばかりであつたかは、到底筆紙に盡し難き所であらうと思ふ。彼れは數年間にわたる衰視のため、人工光線の助けに依つて辛うじて筆を手にし得るに至つたことを第三卷序文中に述べてゐる。實に『資本論』はマルクス、エンゲルスの嚴密の意味に於ける共同著作といふも過言でない程、エンゲルスの努力に負ふところが多かつたのである。

エンゲルスは、マルクスが第三卷として計畫した前記の第四部『餘剩價值學說史』をば第四卷として刊行する豫定であつたが、その目的を達せずして不幸協勞者の跡を追つた。それは一八九五年八月六日、第三卷が刊行されてから、わづかに一年足らずの後であつた。

然し、彼れはかねてこの事あるべきを覺悟してゐたので、死に先だつ數年、ドイツ社會主義者中の碩學カール・カウツキに第四卷編輯の任を託したのであつた。カウツキはエンゲルスの死後この事業に著手したが、材料が餘りに豊富であつたため、これを獨立の一書たらしむるを適當と信じ、『餘剩價值學說史』と題して刊行した。これは前後三卷より成り、第一卷は一九〇四年十月、第二卷（二部より成る）は一九〇五年八月五日、第三卷は一九一〇年三月十四日に發行された。目下森戸辰男氏等の手に依つて、これが邦譯進行中と聞く。學界のため、大成を祈望するものである。

拙譯第二卷は比較的手入れを要する處が少くないから、引續き刊行し得る豫定であるが、第三卷は相當の日子を要するであらうと豫期される。然し成るべく速成し得るやう、努力を密集することは言ふ迄もない。

終りに臨み、本書完成のため蔭ながら好意と間接の鞭撻を與へられてゐると聞く學界の一二權威者に對し、茲に特記して謝意を表す。

大正十四年五月九日

本館に於て

高 島 素 之

### 第一版原著者序文

茲に第一卷を刊行しよとする作は、一八五九年刊の拙著『經濟學批判』の續きと成るものである。その著手から續き迄の間が斯様に永引いたのは、幾度も幾度も私の仕事を中絶させた多年に亙る宿痼のためであつた。

『經濟學批判』の内容は、この卷の第一節第一章に概括されてゐる。その概括は單に聯絡及び完備を目的としたのみでなく、また説明をも改善したのである。如何やうにか事情の許す限り、彼の書に於いては單に暗示に止まつてゐた多くの點を、本書ではヨリ十分に説明した。反對に又、彼の書に於いて詳細に説明された點が本書ではただ暗示されたに止められてゐる處もある。彼の書に收めた價值説及び貨幣説の歴史に關する諸節は、本書に於いては當然に全く削除されてゐる。然し彼の書の讀者は、本書第一節第一章の諸註に、右の學說の歴史に關する新たな參考資料が提供されてゐるのを見出すであらう。

何事も初めが困難である。これは如何なる科學についても言ひ得ることである。されば本書に於いても第一章、特にその中の商品分析を含む一節の理解は、蓋し最大の困難を呈するであらう。で、價值の實體及び價值の大小の分析に關する特に細密なる點については、私は出來得る限り分析を通俗化した(一)。

(一) 斯くすることは、シュムツエデリツチに反對したフェルチナンド・ラツサレの文章の中、此等の問題に關する私の説明の『知的神髓』を述ぶると著者から指摘してある一節の中にさへ幾多の重大な誤解が含まれてゐるのを思ふとき、なほ更ら必要になつて来る。ついでに一言すべきは、ラツサレの經濟上の條件に含まれてある「一般學說上の命題が、例へば資本の史的性質に關するものも、また生産事情と生産方法との關係に關するものも、その他のもも、甚だしきは私の説明にかゝる問題の新術語に至る迄も、殆んど一顧も私の著作から、而も出所を断らずに採用したものであるといふことは、恐らく實際上の目的に出たものであらう。これは、彼れの歴史的經濟學利用について書ふのではないことは勿論である。それは私の關する所ではないからである。

價值形態——その十分に發達した姿容は貨幣形態であるが——なるものは、極めて無内容であり且つ單純なるものである。而かも人類は今日に至る迄二千年以上も、これを究めようとして空しき努力を費して來た。然るに一方、それよりも遙かに内容多き複雑なる諸現象の分析は、少なくとも殆んど、成功の域に達してゐるのである。これ何故であるか！發育した生産は、その組成分子たる細胞よりも研究し易いからである。加ふるに、經濟上の諸現象の分析に於いては顯微鏡も化學的反應料も用をなさぬ。抽象の力を以つて、この二つのものに代用せねばならぬ。然るにブルジョア的社會にとつては、勞働生産物の商品形態又は商品の價值形態は正に經濟上の細胞形態となつてゐるのである。素養のない人々には、此等の形態の分析は單に煩瑣



な區別立てを玩ぶだけのものとか見えぬであらう。成る程それに違ひないが、然しそれは顯微鏡的分析に於いてなされる區別立てと異なる所はないのである。

そこで價値形態を取扱つた一節を除いて考へるならば、本書は決して難解を以つて咎められ得るものではないであらう。斯く言ふについては勿論、何等か新たな事物を學ぼうとする讀者を、即ち自分自身で思惟しようとする讀者を、假定するのである。

物理學者は、自然現象が最も充實した形に現れる處に、他の影響に攪亂されることの最も少ない處に、これを觀察する。或は又、なし得る處に在つては、これが純粹の過程を確保せしめる條件の下に實驗を行ふ。私が本書に於いて攻究せんとすることは、資本制生産方法とそれに照應した生産事情並びに交換事情とである。此等のものの本場となつてゐるのは、今日迄のところイギリスである。これイギリスが、私の學理的説明の主要な例解として役立つ所以である。然しドイツの讀者がパリサイ教徒的に、イギリスの農工労働者状態に對して肩を聳かし、或は樂天家氣どりでドイツの状態がまだまだそんなに不良でないと思心してゐるならば、私は彼等に向つて『この話はお前のことを言つてゐるのだ』と叫ばねばならぬ。

資本制生産の自然律に起因する社會的對抗の發達程度の大小如何といふことは、それ自身としては問題でない。問題となるのは、この自然律それ自身である。この、鐵の如き堅固不動の必然性を以つて作用し貫徹する所の傾向が問題となるのである。要するに産業の比較的發達した國は、産業の發達が比較的幼稚な國に對して、將來の状態を豫示するものに過ぎぬのである。

だが、このことは暫く措き、兎に角ドイツに於いて資本制生産方法の既に十分馴化された處、例へば嚴密の意味の工場に在つては、イギリスよりも遙かに状態が不良となつてゐるのである。蓋しドイツには、工場法の對抗力が缺けてゐるからである。また自餘の諸方面について言へば、他の總べての西歐大陸諸國に於けると同じく、ドイツを苦しめるものは單に資本制生産の發達のみでなく、またこの發達の缺如せることも同様な結果を與へるのである。近世的の窮迫した状態と相並んで、時代錯誤の社會的及び政治的事情を伴ふ所の、古代的にして時世後れな生産方法の存続から生ずる幾多の傳來的な窮迫状態も亦、我々を壓迫してゐる。我々は實に、生ける物に依つて惱まされるのみでなく、また死せる物に依つても惱まされてゐるのである。死者生者を捕へる。

ドイツ及びその他の西歐大陸諸國の社會的統計は、イギリスのに比較すると至つて貧弱である。然しこの貧弱な統計を以つてしても、メドゥーザ夜叉の面相を窺はしむるに十分な程度までヴェールを吹き上げる。若し我が政府及び議會が、イギリスと同じく經濟状態に關する諸種の定時調査委員會を設け、これに眞理探求のためイギリスと同様の全權を附與するとすれば、而して又、この目的のためにイギリスの工場監督官、『公衆健康』に關する醫事報告者、婦人及び兒童の搾取や、住宅や、食物の状態やに關する調査委員の如き、堪能で、公平で、憚る所なき人々を見出すことが出來るとすれば、我々はドイツ國內の状態に愕然たらしめられるであらう。パーシウスは對手に見られぬやうに隠れ笠を被つて魔物を追跡した。然るに我々ドイツ人は、却つて魔物の存在を否定し得んがために隠れ笠を目標に被るのである。

然し我々は、この點について思慮をせしてはならぬ。十八世紀のアメリカ獨立戰爭が、ヨーロッパの中等階級に對する警鐘であつたと同じく、十九世紀のアメリカ南北戰爭は又、ヨーロッパの労働者階級に對する警鐘となつた。イギリスに於いては、社會的激變は極めて分明である。而してそれは或點に達すると、大陸諸國の上に反應作用せねばならぬ。イギリスに於けるこの社會的激變の進行は労働者階級それ自身の發達程度に準じて或時はヨリ粗暴な形を採り、或時は又ヨリ穩かな形を採るであらう。そこで、イギリスに於ける現在の支配階級にとつては、ヨリ高尚な動機は暫く措き、己れ自身の最も特殊な利益の上からしても、労働者階級の發達を妨げる所の、法律に依つて除去し得べき一切の障礙を廢除することが必要となつて來る。私は特にこの理由からして、イギリスに於ける工場法の歴史、内容、結果等について、本巻に極めて細密な敘述を與へた次第である。一の國民は他の國民から學ばねばならぬ。また學び得るのである。一の社會はその運動の自然律の向ふ所を明かにし得たとしても——而して近世社會の經濟的運動律を明かにすることは、本書終局の目的とする所であるが——決して自然に準據した發達段階を跳び越え得るものでなく、又、法令を以つてそれを廢除し得るものでもない。が、生みの苦しみを短縮し緩和し得ることは事實である。

なほ、萬一の誤解を避けるために一言したいことは、私は資本家及び土地所有者の姿を決して美しい方面からは描いて居らぬ。個々の人は經濟的範疇を人格化した者としてのみ、特殊の階級關係及び階級利害を負擔する者としてのみ、本書では問題とされるのである。私は社會の經濟的形態の發達を一の自然史的行程と解するものであつて、この立場からすれば、個々の人は主觀的には如何ほど四圍の事情を超越してゐるとしても、社會的にはその被造者たるを失はないのである。そこで、私の立場は、他の總べての人々の立場に比し、個々の人々をして四圍の事情につき責任を負はしめ得ることが最も少ないものとなる譯である。

科學の自由攻究は、經濟學の領域に於いても他の總べての領域に於けると同一の敵に逢着するといふのみではない。經濟學



の取扱ふ材料の特殊の性質は、人心の最も激越野卑にして悪意ある情念を、私利私害の仇神を、自由攻究の敵として戰場へ呼び立てることになるのである。例へばイギリスの國教會は、その収入の三十九分の一を失ふよりも、寧ろ三十九の信仰ヶ條のうち三十八ヶ條に對して向けられる攻撃を甘受するといふ有様であつて、無神論それ自身は、これを傳來的の所有關係に對する批判に比すれば、今日では些々たる輕罪となつてゐるに過ぎぬのである。

然しこの點についても、一の進歩があつたことは明かである。一例として、最近數週間に發表された青表紙本（イギリス政府の報告書）『産業問題及び勞働組合に關する遣外使節との通信』を挙げよう。この報告書の中で、イギリス皇帝の對外代表者たちは、ドイツ、フランス、約言すればヨーロッパ大陸の凡ゆる文明國を通じて今や資本と勞働の現存事情の一變動がイギリスと同様に感知され得るに至つてゐること、及びイギリスと同様にそれが不可避的となつてゐることを、飾り氣のない言葉で宣明してゐる。同時に又、太西洋彼岸に於いても、北アメリカ合衆國副大統領ウェード氏は、公開の席上に於いて、奴隸制度が廢止されてからは、資本關係及び土地所有關係の變動が普通のことになつてゐると言明した。斯くの如き事實は、紫袍黒衣を以つて蔽ふことの出來ぬ時代の徴候である。それは明日にも大奇蹟の行はれることを意味するものではなく、寧ろ支配階級の間に於いてさへ、現社會は固定の結晶體にあらずして可變性を有した不斷に變化しつつある有機體だといふ豫感が既に明かに萌してゐることを示すものである。

本書第二卷に於いては、資本の流通行程（第二部）と總生産行程の諸形態（第三部）とを取扱ひ、最終の第三卷（第四部）に於いては學說史を取扱ふことになるであらう。

科學的批判の精神に基く一切の評價は、私の歡迎する所である。けれども、私が未だ曾て讓歩したことのない、謂はゆる輿論なるものの偏見に對しては、私は依然として大詩人ダンテの格言を守る。

汝の道を進め。而して人々を彼等の言ふに任せよ！

一八六七年七月二十五日

ロンドンに於いて

カール・マルクス

## 第二版原著者序文

經濟學なるものは、ドイツに於いては、今日に至るまで一の外來科學となつてゐる。グスターフ・フォン・ギューリヒは、その著『農工商業の史的敘述』特に一八三〇年に刊行された同書の第一及び第二卷の中で、從來ドイツに於ける資本制生産方法の發達と隨つて又近世ブルジョアの社會の成立とを妨げた歴史的事情を大體に互つて究明してゐる。要するに、ドイツには經濟學の生きた地盤が缺けてゐたのである。それは、出來合の商品としてイギリス及びフランスから輸入された。ドイツの經濟學教授たちは、これを學んだ生徒に過ぎなかつた。斯くて外國の事實を學理的に表現した經濟學は、彼等教授の手に依つて、彼等を圍繞する小ブルジョア的世界の意味に翻譯された。誤り説明された。ドグマの集りに轉化されてしまつたのである。彼等はその制すべからざる科學的無力の感じと、實際に於いて繰返し問題につき先生顔せねばならぬといふ不安の意識とを學說史に關する博學の外飾の下に隠蔽しようとして試みた。又は他から得て來た材料を、前途有望なるドイツ官僚の志願者が得罪火として通過せねばならぬ諸知識の混淆物を代表してゐる所の官府學と稱するものから借用して來た材料を、混合せしめることに依つて、これを隠蔽しようとして試みたのである。

一八四八年以降、資本制生産はドイツに於いても急速に發達し、今や既にその投機的な開花期に達してゐる。而かも運命は依然として我が専門學者たちに背いてゐる。彼等が嘗て經濟學を公平無私に研究し得た時、近世的經濟事情は當時未だドイツの現實には存在して居らなかつた。然るに、その後この事情は出現したが、その時には最早、資本主義的視野の内部に於いてこれを公平に研究することを許さない状態の下にあつた。經濟學なるものは、それがブルジョア的である限り、即ち資本制度を以つて社會的生產が歴史的に通過する所の發達段階となさず、寧ろ反對に、社會的生產の絕對的にして終局的なる形態となしてゐる限り、單に階級闘争が潜伏状態に止まつてゐるか、又は僅か此處彼處に現れてゐるに止まる間のみ、一の科學となつて居れるに過ぎぬのである。

例へばイギリスを例に採らう。イギリスの正統派經濟學は、階級闘争が未だ發達しなかつた時代のものである。然るにその最終の偉大なる代表者リカードは、遂に階級的利害の對立を、勞銀と利潤、利潤と地代との對立を素朴に自然律と見做して、これを意識的に彼れの研究の出發點たらしめた。が、それと共に又、ブルジョアの經濟學は打越え難き限界に到達した。斯く



ブルジョアの存命中にも既に、ブルジョアの經濟學はリカルドに反抗して起つたシスモンディから批評を受けることになつたのである(1)。

(1) 拙著『經濟學批判』第三九頁を見よ。

續いて一八二〇年から三〇年に至る時代が、イギリスに於いては經濟學部面の科學的活氣を以つて秀でた時代であつた。これ正にリカルド説の俗化及び普及の時代であると共に、又、舊派に對するリカルド説の抗爭時代でもあつた。許多の素晴らしい試合が行はれた。而かもこの當時の出來事は、ヨーロッパ大陸には殆んど知られなかつた。なぜならば、この論戰は多くは評論雜誌の論文や、際物圖書や、パンフレットなどに散らばつてゐたからである。リカルド説は當時すでに、ブルジョアの經濟に對する攻撃の武器として使用されることも稀にはあつた。然しこの時代に於ける論戰の蔽ふ所なき特徴は、當時の狀態に依つて説明し得るものである。一方に於いて、當時の近世的大工業は漸くその幼年期を脱したばかりの所であつた。それは、一八二五年の恐慌と共に初めて大工業が近世的生活の週期的循環を開始したといふ事實に依つて示される所である。他方に、資本と勞働との階級闘争は、政治上には神聖同盟を中心として集まつた諸政府及び封建諸侯と、ブルジョアの手引率された多數民衆との間の軋轢に依り、又、經濟上には貴族の土地所有に對する産業資本の抗爭——フランスに於いては、大地主と小地主との對立の蔭に隠れ、イギリスに於いては穀物條例以後公然と爆發するに至つた所の——に依つて、依然背後に押し込められてゐた。この時代に於けるイギリスの經濟學文獻は、ドクター・ケネーの死後に於けるフランスの經濟的激動期を彷彿たらしむるものがあつた。けれども、それは小春日和が春を偲ばしむる如きものに過ぎなかつた。斯かる間に、一八三〇年を以つて最終決定の危機が始まつたのである。

ブルジョアは既にフランス及びイギリスに於いて、政權を奪ひ取つた。その時以後、階級闘争は實際上にも學理上にも、ますます公然たる脅威的の形を探るやうになつた。それは科學的なるブルジョア經濟學の弔鐘を鳴らすことになつたのである。斯くて最早、いづれの定理が正しいか正しくないかといふことでなく、いづれの定理が資本にとつて有利であるか有害であるか、便利であるか不便であるか、警察令違反的であるか否か、といふことが問題となつて來た。公平の研究に代つて錢取り試合が現れた。眞摯純正な科學的攻究に代つて、疚しい良心と辯解の邪惡な意圖とが現れた。それでも、工場主コブデン及びブライトに依つて統率された穀物條例反對同盟から濫發された所の、押しつけがましいパンフレット類でさへ、土地所有貴族に對する論戰に依つて、科學的關心は兎も角、少なくとも歴史的關心の對象とはなつたのである。然るに、サー・ロバート・ピー

ル以後の自由貿易主義立法者は、ブルジョアの俗學的經濟學から、この最後の刺針をも引き抜いてしまつた。

一八四八年のヨーロッパ大陸革命は、イギリスへも反應した。そこで尙未だ學問的格式を放棄することなく、支配階級の單なる說辯論者又は阿諛者たることを以つて満足しない人々は、資本の經濟學を當時既に無視し能はざるまでに發達してゐたプロレタリアの要求に一致せしめようとした。斯くてジョン・スチュアート・ミルを最良の代表者とする一の氣の抜けた混合主義が生じて來たのである。これ正にブルジョアの經濟學の破産を宣告したものである。ロシアの大學者にして大批評家なるニコライ・チエルニシェフスキーは、その著『ミルに從へる經濟要論』の中で、早くもこの事實の上に名工的な光明を投じた。

斯くの如く、ドイツに於ける資本制生産方法は、この生産方法の矛盾性が既にフランス及びイギリスに於いて歴史的闘争のため喧しく表面に現れた後、成熟状態に達したのである。と同時に、ドイツのプロレタリアはブルジョアに比して既に遙か確乎たる學理的階級意識を有してゐた。斯くてドイツのブルジョアの經濟學は、それが可能となつた如く見え始めるや否や、また不可能となつてしまつたのである。

斯かる状態の下に、ドイツに於けるブルジョアの經濟學の代辯者は二つの組に分かれた。一は伶俐にして營利心強き實際家たちであつて、此等の人々は俗學的經濟學の辯護術に於いて最も淺薄な、それ故に又、最も成功した代表者バスターアの旗下に集つた。他は自己専門の學問につき教授たるの尊嚴を誇る人々であつて、彼等は調和し得ざることを調和せしめんとする企圖に於いて、ジョン・スチュアート・ミルに隨從したのである。斯くてドイツ人は、ブルジョアの經濟學の隆昌期に於ける如く衰滅期に於いても亦、依然として單なる生徒たり、模倣者たり、隨從者たり、外國卸商の小行商人たるに止まつてゐた。

斯くの如く、ドイツ社會獨特の歴史的發達は、『ブルジョアの』經濟學の一切の獨創的な完成を不可能たらしめたが、批判の方面に於いては、さうでなかつた。蓋し、ブルジョア經濟學の批判は、それが苟くも一の階級を代表する限り、資本制生産方法の顛覆と階級そのものの終局的廢止とを歴史的使命とする所の階級たるプロレタリアのみを代表し得るからである。

ドイツに於けるブルジョアの代辯者たる學識ある者も無き者も、過去に於ける私の述作に對してなし得た如く、『資本論』に對しても同様に默殺的態度を採らうとした。然るに、この戰術が最早時宜に適しなくなるや否や、彼等は私の著述を批判するといふ口實の下に『ブルジョアの意識を安んぜしめる』處方箋を書いたのである。而も彼等は勞働者の新聞雜誌に於いて(例へば『フォルクス・シュタート』紙に於けるヨゼフ・チーッゲンの論文を見よ)力の優つた挑戰者を見出した。彼等は今日に至る迄、此等の挑戰者に對して答辯を借り放しにしてゐるのである(11)。



(二) ドイツに於ける俗學的經濟學の節制的な空談者どもは、拙著の書を振り及び表現を非難してゐる。「資本論」の文章上の缺點については、私自身ほど親切にこれを非難し得る者はないのである。が、此等の空談先生及び彼等の讀者たちには利用と喜びとを興へるため、敢てイギリス及びロシアの批評を一つ宛つてあげよう。私の見地と全く反対の立場に立つてゐる「サトウチー・レイヴン」誌は、「資本論」ドイツ初版に對する批評の中で書つた。——「資本論」の表現は「最も純粋な經濟學上の問題に、一種特別の能力を興へてゐる」と。また「サンクトペテルブルグスキー・キエドモスチ」誌は一八七二年四月廿日發行の紙上に述べて曰く「彼の表現は、過度に専門的な僅少の部分を除けば、科學上複雑なる主題を取扱つてゐるに拘らず、平明と非常なる活氣とを特色としてゐる。この點に於いて、著者は決して……ドイツに於ける多數の學者と違を同じうするものでない。……蓋し彼等の著書は、頗る雄渾な乾燥した書寫を以つて知られ、普通の人間では頭腦を碎かれてしまふ」と。然しドイツ流行の國民的自由主義的な教授たちの著書の讀者にとつては、頭腦とは全く興つたものが碎かれることになるのである。

「資本論」の優秀なるロシア譯本が、一八七二年の春ペテルスブルグで發行された。而してその第一版三千部は既に殆んど賣切れとなつた。これより幾、一八七一年キエフ大學經濟學教授ニコライ・ジューベル氏は、既にその著「價值及び資本に關するリカルドの學說」の中で、私の價值説、貨幣説及び資本説は、根柢に於いてスミス・リカルド説の必然的完成であるといふ論證を興へた。西部ヨーロッパの人々がこの純眞なる著書を読んで驚くことは、著者が純學理上の立場を一貫して固く把持してゐるといふ一事である。

「資本論」に應用した方法は、殆んど理解されて居らぬ。それは、これについて幾多の相矛盾した見解が行はれてゐるのを見て知り得る所である。

例へば、パリーの「レヴュー・ポジチヴィスト」誌は私を非難して曰く、マルクスは一方に、經濟學を形而上學的に取扱ふと共に、他方に(どうしたかと言へば)興へられたる事實に對して單なる批判的分析を興ふるに止まり、將來といふ一品料理屋のために處方(コント主義的の?)を作成して居らぬと。この形而上學云々の非難に對して、ジューベル教授は曰く、「嚴密の學說的方面について言ふ限り、マルクスの方法なるものは、總べての卓越した理論的經濟學者に共通するところの長所短所を有してゐるイギリス學派全體に依つて用ゐられた演譯方法に外ならぬ」と。ブロック氏は「ドイツに於ける社會主義理論家」(「エコノミスト」誌一八七二年、七、八月號よりの抜抄)の中で、私の方法が分析的であるといふ發見をなして曰く、「マルクス氏はこの著に依つて、分析主義學者として卓越した地位を占むるに至つた」と。ドイツの評論は、言ふ迄もなく私の「ヘーゲル式論辯學」を喧しく喋々してゐる。ペテルスブルグの「キエストニータ・エウロロイプイ」誌(一八七二年五月號第四二七乃至四三六頁)は専ら「資本論」の方法を論評した一論文の中で、マルクスの研究方法は嚴密に現實主義的であるが、表現方法は不幸にしてドイツ流辯證法的方法であることを發見したと言つてゐる。同誌は曰く「表現の外観に依つて判斷すれば、マルクスは一見如何にも最大の理想主義哲學者、而もドイツ流の悪い意味の理想主義哲學者であるやうに見える。が、實際のところ、彼は經濟學批判の勞作に於いては一切の先行者よりも無限にヨリ多く現實主義的である。……彼は決して理想主義者と名づけられる人ではない」と。

この論文の筆者に對しては、彼れ自身の批評の中から若干の點を拔萃するよりも以上に適當な答辭を興へることは出来ぬ。尙また、この拔萃はロシア原文を手にし得ざる多くの讀者諸君にとつて興味あることでもあらう。彼れは拙著「經濟學批判」の序文(私の方法の唯物論的基礎を論述したもの)から、一の引抄を興へた後、語を續けて言つた。——

「マルクスにとつては、研究の對象たる諸現象の法則を發見するといふ一點のみが重要であつた。而も彼れにとつて重要となつたものは、此等の現象が一の完成された形態を有し且つ興へられたる歴史的期間の範圍内に見られる如き相互聯絡を保つ限りに於いて支配を受ける所の法則だけではない。更らに、此等の現象の變化、此等の現象の發達の法則、即ち一の形態から他の形態への、一組の相互聯絡關係から他の一組の相互聯絡關係への經過こそ、彼れにとつては何よりも先づ第一に重要な問題なのである。彼れは一度この法則を發見するや否や、それが社會的生活のうち結果となつて現れる所のものを仔細に研究する。……隨つてマルクスは左の一事についてのみ努力することになる。それは即ち、嚴密なる科學的研究に依つて、社會的事情の特定の秩序の必然性を論證し、出來得る限り公平に彼れの研究の起點たり支持點たるべき事實を確定するといふことである。それには、現在に於ける秩序の必然性と同時に、この秩序が不可避免的に移りゆくべき他の秩序の必然性をも論證すれば十分であつて、斯かる必然性を人類が信ずるか否か、意識してゐるか否かといふことは、敢て問ふ所でないのである。マルクスは社會的の運動を以つて、單に人類の意志、意識及び意向から獨立するといふのみでなく、寧ろ人類の欲求、意識及び意向を決定する所の法則に依つて支配される自然史的の行程なりとしてゐる。……意識的の要素が文化史上斯く從屬的の役目を演ずるに過ぎぬとすれば、文化それ自體を對象とする所の批判的研究に於いては殊に、意識の何等かの形態又は結果を研究の基礎とし得ざること自明の事實である。即ちこの批判的研究の起點となり得るものは、觀念ではなく外部的の現象のみである。斯かる批判的研究の任務は、一の事實を、觀念に對してではなく、他の事實に對して比較對照することに限られるであらう。この研究にとつて重要なことは、甲乙二個の事實をば出來得る限り嚴密に檢覈し、甲が乙に對して事實上同一進化の相



異つた要素となつてゐることを發見するにある。殊に最も重要なことは、各秩序の順序を、斯かる進化の各段階が依つて現れる所の前後の順序及び聯絡を、更らに劣る所なく嚴密に究明するといふ一事である。然しながら、人或は言ふであらう。經濟生活上の普遍律なるものは、それが現在に應用されると過去に應用されるとを問はず、總べて同一のものであると。これこそ、マルクスが否認せんとする所のものである。マルクスに依れば、斯かる抽象的の法則は存在して居らぬのである。……彼れに依れば、寧ろ反對に、歴史的の各時代はそれ自身の法則を有してゐる。……人類の生活なるものは、一定の發達期を越えるや否や、即ち一の段階から他の段階に進み入るや否や、從來に於けるとは異つた法則に依つて支配され始める。一言以つてこれを覆へば、人類の經濟的生活は生物學の他の諸部門に於ける發達史と類似の一現象を呈するものである。……舊來の經濟學者が經濟上の法則をば物理化學上の法則に擬したことは、これ取りも直さず、經濟法則の性質を全く誤解したものである。……現象をヨリ深く分析することに依つて、社會的の各有機體は——動植物有機體に於けると同じく——根本的に相區別されるものであることが知られる。……しかのみならず、各有機體はその全構造を異にし、個々の器官も相一致することなく、斯かる器官の作用する條件も亦異つてゐるために、同一の現象も全く相異つた法則の支配を受けるやうになるのである。

『マルクスは例へば、人口律なるものは總べての時代、總べての場所を通じて同一であるといふ説を否認する。彼れは寧ろ反對に、各發達段階はそれ自身の人口律を有つてゐると説くのである。……生産力の發達が異なれば、それにつれて社會的事情及びこれを支配する所の法則も亦異なつて来る。マルクスがこの見地からして資本主義經濟制度を研究し説明すべき標的を立てたのは、これ畢竟、經濟生活の正確なる研究に缺くべからざる標的を嚴正科學的に樹立したことに外ならぬのである。……斯かる研究の科學的價值は、與へられたる社會的有機體の發生、存在、發達、及び死滅と、他のヨリ高級なる社會的有機體に依る代置とを規制する所の特殊法則を闡明した點に在る。而してマルクスのこの著述は實に、斯かる科學的價值を有するものである。』

評者は彼れがマルクスの眞の研究方法と呼ぶ所のものを斯く剽切に、又——この研究方法に關する私自身の應用についていへば——斯く好意を以つて、描述したのであるが、そこに描述されたものは、そもく辯證法的研究方法以外の何ものであつたか？

勿論表現方法は、形式の上からいへば研究方法とは異つたものでなければならぬ。研究方法に於いては材料を細大洩れなく採り集め、その様々の發達形態を分析し、此等の形態の内部的紐帶を探究すべきである。而してこの仕事は完了した後、初め

て現實の發達運動を適當に表現することが出来るのである。これがなし遷けられて、材料の生命が觀念上に反射する時、問題は宛らアブリオリ的に組み立てられたかの如く見えるかも知れぬ。

私の辯證法的方法是、單に根本に於いてヘーゲル流のそれとは異なるのみでなく、また正反對のものである。ヘーゲルにとつては、思惟行程——彼れは更らにこの行程を觀念と呼んで獨立の主體たらしめたのであるが——は現實世界の創造主であつて、現實はただ思惟行程の外部現象たるに過ぎぬ。これに反して、私の立場から見れば、觀念世界なるものは畢竟するところ、人類の頭腦の内て變更され翻譯された物質世界に外ならぬのである。

ヘーゲル式辯證法の神祕的方面については、今を距ること殆んど三十年前、即ちヘーゲル辯證法が尙流行してゐた時代に、私はこれを批判した。然るに私が『資本論』第一巻を書いてゐた當時、今日教化されたドイツに於いて巾を利かしてゐる所の、氣六づかしい、横柄な、凡庸な口眞似學者たちは、嘗てレッシングの時代に勇敢なるモゼス・メンデルスゾーンがスピノザを取扱つたのと同じ様に、『死んだ犬』としてヘーゲルを待遇することに満足を感じてゐた。私が大思想家ヘーゲルの門人なりとみづから公言し、おまけに價值説を取り扱つた章の此處彼處で、わざと彼れ獨特の口吻を弄んだ所以は茲にある。辯證法はヘーゲルの手で神祕化されたとはいへ、この事實は決してヘーゲルが辯證法の作用する一般的形態を、包括的に且つ意識的に表現した最初の學者であることを妨げるものでない。辯證法は、ヘーゲルに於いて逆立ちしてゐる。我々は神祕的外殼の内に合理的の核心を見出すため、この逆立ちした辯證法を更らに顛倒せしめねばならぬ。

辯證法は神祕化された形態を以つてドイツの流行となつた。それは現存の事態に光明あらしむるもの如く見たからである。反對に、合理的の姿に於ける辯證法は、ブルジョア及びその偏理的代辯者たちにとつて苦惱となり恐怖となるものである。なぜならば辯證法なるものは、現存事態に對する肯定的理解の中に、現存事態に對する否定的の理解をも、必然的消滅の理解をも含めてゐるからである。それは歴史的に生成した一切の形態をば、不斷流動しつつあるものとして、經過的の方面から觀察し、何ものにも怖れることなく、本質に於いて批判的、革命的たるが故である。

資本制社會の矛盾に充ちた運動は、近世産業の通過する週期的循環の轉變及びその絶頂たる一般的恐慌を通して、實際的ブルジョアの心裡に極めて痛切に印象される。この恐慌は今また——まだ初期の状態に止まつてゐるとはいへ——すでに進行しつつある。それは舞臺の多方面なることと、影響の強烈なることに依つて、神聖なるプロイセン的ドイツ新帝國の傀儡見たちの頭腦にも追々と辯證法を仕込むことになるであらう。



一八七三年一月二十四日

ロマンチック

カール・マルクス

### 第三版編輯者序文

マルクスは不幸にして、この第三版に手づから上梓し得るまでの準備を興へることが出来なかつた。このどえらい思想家！彼れの偉大の前には、今や反對者でさへも膝を屈してゐる——は一八八三年三月十四日に死んだのである。

私は彼れの死に依つて、四十年間に亙る最も固く結合された最良の友を失つた。私は言葉を以つて言ひ現し得るよりも以上のものを、この友に負うてゐる。而して今や、この第三版と手記のまま遺された第二巻との發行を處理すべき義務が私の上に落ちて來たのである。ところで此等の義務の前者を私は如何にして果したか、それについて讀者に願末を報告する義務がある。

マルクスは最初、第一巻の本文を大部分に互つて書き換へ、學說的方面に關した數個の點をヨリ鋭く言ひ現し、新たに若干の點を追加し、更らに歴史的及び統計的材料を、最近時まで含めて補足しようと目論んでゐた。ところが、彼れの病氣と第二巻編輯切りの切迫とは、遂に彼れをして最初の企圖を断念せしむるに至つた。そこで已むを得ず、最も切要な點だけを變更し、當時發行されたフランス版に含まれてゐる數個の補遺のみを新たに採り入れるといふことに限らねばならなくなつた。

彼れの遺稿中には、舊ドイツ版に所々訂正を興へフランス版への参照をも施したものが見出された。また利用すべき個所に嚴密の印しをつけたフランス版も一部あつた。だが此等の増訂は、少數の場合を除き、いづれも本書の最終部分（資本の蓄積行程と題する一篇）に限られてゐる。この部分は、舊版に於いては他の諸篇よりも著しく最初の立案に従つたものであつて、これに比べると他の諸篇はヨリ根本的に訂正されてゐた。この最終の一篇は、文章に活氣があり一氣呵成的であると同時に、叙述が疎漫で英語口調を混へ、曖昧な點も所々に見出される。且つ蓄積發展行程の説明には、此處彼處に空隙があつて、重要な點を單に暗示してゐるに過ぎぬ處も幾許があつた。

マルクスは文章の點で、この一篇の諸節に手づから根本的の訂正を加へてゐた。これに依り、またマルクスから直接屢々聞かされてゐた暗示に依つて、私は専門語その他に對する英語の言ひ現しを、どの點まで除去して可なるかの標準を興へられた。補遺増訂の個所については、マルクスはそれを更らに改訂して、冗長なフランス語に代ふるに、彼れ自身の引締つたドイツ語を以つてしたに違ひない。だが、私としては、出來得る限り原文に従ひドイツ語に書き換へることを以つて満足せねばな



らなかつた。

斯くてこの第三版に於いては、著者みづから確かに變更したであらうと信ぜられる以外の處には、一語も變更を加へて居らぬ。ドイツ經濟學者の慣用の言葉、例へば現金を支拂つて他人から労働を受ける人のことを労働の與へ主といひ、賃銀を受けて他人に労働を與へる人のことを労働の受け主と呼ぶやうな寢言を、『資本論』の中へ持ち込まうなどといふ考へは、固より私には起り得なかつた。フランス語でも、トラヴァイエといふ言葉は、日常生活に於いては『仕事』の意味に用ゐられてゐる。然し資本家のことをトラヴァイエの與へ主といひ、労働者のことをトラヴァイエの受け主と呼ぶやうとする經濟學者があるとするれば、フランス人は當然にこれを狂人と見做すであらう。

私は又、本文中に一貫して使用されてゐるイギリス式の貨幣及び度量衡名稱を、新ドイツ式のものに換算することを敢てしなかつた。第一版の刊行された當時、ドイツには一年の日子ほど多數の度量衡種類があつた。加ふるに、貨幣ではマルクが二種（現行の帝國統一マルクは、當時に於いてはこれを十九世紀三十年代の終末に發見したゼートペーアの頭の中のみあつたのである）、グルデンが二種、ターレルが少なくとも三種あつた。而してその三種のターレルのうち一種は、『新三分二貨』を單位とするものであつた。更らに、自然科學の方面には、メートル式度量衡が、また世界市場の方面には、イギリス式度量衡が専ら行はれてゐた。斯かる状態の下に、本書の如く事實上の例證を殆んど全くイギリスの産業關係のみから採り入れることを餘儀なくされた著述に於いて、イギリス式の度量衡單位を使用することは自明の事實であつた。而してこの理由は、今日に於いても依然、決定的となつてゐる。これは世界市場方面にイギリス式の單位を必要ならしめた諸種の事實關係が今日に至る迄殆んど變化する所なく、殊に主要なる諸産業（鐵及び棉花）に於いては、今日でも殆んどイギリス式の度量衡のみが行はれてゐるといふ事情に鑑みると、尙更ら然りといはねばならぬ。

最後に尙、世人に依つて殆んど理解されて居らぬマルクスの引抄法について一言する。純事實上の敘述及び描寫については、例へばイギリスの青表紙本（政府又は議會の報告書）からの引抄の如きは、言ふまでもなく單純なる説明的引例として役立つてゐるのであるが、他の經濟學者の學說の見解を引抄した處はさうでない。この方面の引抄は、説明の進行中に現れて來る一の經濟的思想が、何處に於て、何時、また何人に依つて、初めて、明白に言ひ現されたかを明かにすればいいのである。これについて問題となることは、經濟上の當該見地が經濟學の歴史に對して有意義であるか否か、また、それが學說として、當時の經濟状態を多かれ少なかれ適切に言ひ現してゐるか否か、といふことだけである。而してそれが本書の著者の立場に對

して尙絕對的又は相對的の效力を有してゐるか否か、それとも全く歴史に屬してしまつたか否か、といふことは、些かも問題とならぬ。要するに斯種の引抄は、本書の本文に對する經濟學史から援用した手近の註解たるに過ぎぬのであつて、經濟上に於ける學說の個々の重要な進歩をば、年月日と創始者とに従つて確定するものに過ぎぬのである。而してこの事實は、從來傾向的にして殆んど彙強附會的な無智のみを史家の特徴としてゐた一科學たる經濟學にとつては、極めて必要なことなのである。斯くてマルクスが何故、第二版の序文に述べた如く、ドイツ經濟學者の所論をばただ例外的にのみ引抄するに止めたかは容易に首肯し得る所となるであらう。

第二卷は一八八四年中に刊行し得るやうにしたいと思つてゐる。

一八八三年十一月七日

ROSENKRANTZ

フリードリヒ・エンゲルス



## 第四版編輯者序文

第四版に於いては、本文についても、脚註についても、出来得る限り終局的の確立を與へる必要があつた。私は如何にしてこの必要を充たしたか、それについて以下簡単に述べる。

私は一度フランス版とマルタスの手記とを比較した後、フランス版から尙若干の補遺をドイツ版に採り入れた。此等の補遺は本版(譯本)第八五頁、第四七九乃至四八〇頁、第五七一乃至五七六頁、第六一六乃至六一八頁、及び六二〇頁の註七十九に含まれてゐる。私は又、フランス版及びイギリス版に従つて、嶺山労働者に關する長文の脚註を本文に移し換へた(第四八一乃至四八七頁)。その他の小變更は、いづれも純技術的性質のものに止まつてゐる。

更らに、若干の補註をも追加したが、これは特に、歴史的事實の變動上から必要となつた如く見える箇所が多いのである。此等の補註はいづれも角形の括弧に納め、それに私の姓名の頭字「F. E.」又は編輯者なる語の略字「D. H.」を附した。

當時イギリス版が刊行された爲、幾多の引抄を完全に修正することが必要となつた。このイギリス版の爲に、マルタスの末女エラナーは、一切の引抄箇所を原文と對照するの勞をとつた。斯くて本書に於ける引抄の大部分を占めてゐるイギリス文獻からの引抄については、ドイツ文からの翻譯ではなく、イギリスの原文がその備用られることになつた。そこで第四版の編輯上、此等の原文を参照する必要が生じた。私はこの参照に依つて、幾多の些細な不確實を見出した。例へば、参照頁數の間違ひがあつた。これは一部分にはノートから寫しとる際の誤寫に因るものであり、一部分には又、三度び版を重ねてゐる中に積り積つた誤植の結果であらう。ノートから多數の引抄を書き移すに當つて避けられぬ如き、引抄符や省略符の位置の取り違ひもあつた。又、時折りは、幾分不適譯と思はれる言葉にも出くわした。或る箇所如きは、一八四三年から四五年に至る間マルタスのペリー在中に寫へられた古ノートから引抄されたものであるが、當時マルタスはまだ英語を知らず、イギリスの經濟學者の文獻はこれをフランス譯で讀んでゐた。それを更にドイツ語に重譯したのであるから、文章の調子に幾分變化を來たすことを免れなかつた。例へばスチュアートや、ユーアヤ、その他の著述家の場合がそれである。此等の箇所に対しては、今や英語の原文を利用し得るやうになつたのである。以上の外にも尙、同様の些細な不正確や不注意の點について訂正を加へた。然し、この第四版を前版と比較する時、此等一切の小面倒な訂正も何等語るに値する所の變更を本書の上に與へて居らぬ

ことが得心されるであらう。ただ一つ、リチャード・ジョンズからの引抄(第五八七頁、註四十七)のみは出處不明であつた。

これは多分、書名を書き誤つたものであらう。が、その他の引抄は、いづれも完全なる立證力を保持してゐる。或は寧ろ、本版に於ける正確な形態を以つて、その立證力を更に強められてゐるのである。

だが、私はこの場合、或る古い事件に溯る必要に迫られてゐる。

私はマルタスの引抄の確實性が疑はれた唯だ一つの場合を知つてゐる。この問題は、マルタスの死後まで持ち越されたものであるから、私は茲にそれを黙過することが出来ぬのである。

一八七二年三月七日のベルリン「コンコルデア」誌(ドイツ製造業者同盟の機關)に「カール・マルタスの引抄振り」と題する匿名の一文が現れた。論者はこの文章の中で、一八六三年四月十六日のグラッドストーンの演説から採用したマルタスの引抄——これは最初一八六四年の「國際労働者協會」の創立演説中に掲げられ、後ちまた「資本論」第一巻(第六四一頁)に再録されたものである——をば道徳的憤怒と非議會的言辭との濫發を以つて偽造呼はりしてゐる。論者の主張する所に依れば、マルタスの擧げた「富と權力との斯かる魔醉的増殖は……悉く有産階級にのみ限られてゐる」といふ一句は、ハンナードの半官報的議事速記録には、一語も現れて居らぬ。『この文句はグラッドストーンの演説の何處にも見出されない。彼れの演説には、寧ろ正反對のことが言はれてゐる。要するに(以下ゴチャツク體で)マルタスはこの文句をば、形式上にも實質上にも偽造挿入したものである』

マルタスは右の攻撃文の載つてゐる「コンコルデア」誌を同年五月に受け取り、同年六月一日の「フォルタス・シニタート」紙上で右の匿名氏に答へた。これに依れば、彼れは右の引抄を如何なる新聞報道から採用したか、もはや思ひ出せなかつた故先づその同じ引抄の文句が二つの英文出版物に載つてゐる事實を指摘し、續いて「タイムズ」紙に掲載された演説記事を引抄するに止めた。この記事に依れば、グラッドストーンは次ぎの如く言つてゐる。『以上は我國の富に關する状態である。兎に角、私は斷言せねばならぬ。若し富と權力との斯かる魔醉的増殖が、安樂階級にのみ限られてゐるといふことが私の信する所であるとするれば、私は殆んど憂慮と苦痛とを以つてこの増殖の事實を眺めねばならぬ。斯かる事實は労働民の状態を毫も顧みざるものである。正確な統計に基けるものと私が信じてゐる上述の増殖は、全く有産階級にのみ限られる所のものである。』つまり、グラッドストーンが茲に言ふことは、事實若しさうだとすれば残念なことだが、事實はその通りだといふのである。即ち富と權力の斯かる魔醉的増殖は、悉く有産階級にのみ限られてゐるといふことになるのである。更らに、半官報的ハ



ンサード速記録についてマルクスは斯う言つてゐる。——『グラッドストーン氏は、その後この點に手入れをした演説記録の版本の中から、イギリス大蔵卿の言葉としては確かに穩かならぬ右の一個所をば聰明にも削除した。然し斯様なことは、イギリス議會の常習であつて、決してかのペーベルを誦さうとしてなされたラスカーの發明の如きものではないのである。』

匿名氏は茲に於いて、まずく躍起となつた。彼れは七月四日の『コンコルヂア』誌に掲げられた答辯の中で、彼れ自身の用ゐた間接の證據材料を押し除けながら、きまり悪るさうに次の事實を仄めかした。即ち、議會の演説は速記録から引抄されるのが『習慣』であり、而も『タイムズ』紙の記事(偽造挿入した)文句を含む所の(とハンサードの記事(右の文句を含む所の))とは『内容に於いて完全に一致』し、且つ『タイムズ』紙の記事は、『創立演説中の、かの疑はしい個所とは正反對のもの』を含むといふのである。が、彼れは『タイムズ』紙の記事の中には、この自稱的な『正反對のもの』と相並んで『かの疑はしい個所』も亦、明かに含まれてゐることについては、慎重に沈黙を守つてゐたのである。

彼れは斯く主張しながらも、己れの主張が進退谷つたこと、而して新たな誤魔化しに依つてのみこの窮地から救はれ得ることを感した。そこで彼れは右に論證せる如き『鐵面皮の嘘』に充ちた文章を飾るに、『不誠意』、『不正直』、『虚偽の記述』、『かの虚偽なる引抄』、『鐵面皮の嘘』、『全く偽造された引抄』、『この偽造』、『全く恥づべき』等、等の教法師的な悪口を以つてすると同時に、また論點を他方面に押し移すことの必要を感じた。而して『大回の文章を以つて、我々(嘘つき)でない匿名氏』はかのグラッドストーンの言葉に如何なる意義を附すべきかを説明しよう」と約束した。照準となり得ない彼れ一個の私見が些かでもこの問題に關係する所あるかの如く——ところで、この約束の文章は、七月十一日の『コンコルヂア』誌に掲載されたのである。

マルクスはその後更らに、八月七日の『フォルクス・シュタート』紙上で答辯した。而してこの答辯に於いては、一八六三年四月十七日の『モーニング・スター』及び『モーニング・アドヴァイザー』兩紙から、問題の記事を引抄した。この兩記事に依れば、グラッドストーンの言ふ所は、彼れにして若し富と權力との斯かる魔醉的増殖が安樂階級にのみ限られてゐると信じたとすれば、彼れは憂慮と苦痛とを以つて、この増殖の事實を眺めたであらうといふことになる。然るにグラッドストーンは、この増殖が有産階級にのみ限られてゐると言つた。随つて右の兩記事は、かの匿名氏の稱する『偽造挿入した』文句をその儘含んでゐることになるのである。

マルクスは更らに『タイムズ』紙とハンサード速記録との本文を参照して、議事の翌日、以上三新聞に現れた夫々獨立してはゐるが然し互ひに一致してゐる所の紀事に依つて確實を保證された問題の一句が、人の知る『習慣』に従つて校閲されたハンサード速記録に缺けてゐること、及びグラッドストーンがマルクスの言ふ通りその一句を『後に及んで削除した』ものであることを確證した。而してマルクスは最後に、もはやこれ以上匿名氏と係り合ふ暇がないと宣明した。斯くして匿名氏は十分満足を與へられたやうに見えた。少なくとも、マルクスはその後も『コンコルヂア』誌の寄贈を受けなかつたのである。

斯くして、問題は死して葬られたやうに見えた。尤もその後二度、ケンブリッジ大學に關係ある人々の間から、マルクスが『資本論』の中で犯したと稱せられる言語道斷な著述上の罪惡に關する不可解な取沙汰が洩れて來た。が、これについてろく／＼取調べたが、確かなことは一つも知り得なかつた。然るに、一八八三年十一月二十九日(即ちマルクスの死後八ヶ月)に至り、在ケンブリッジ、トリニチー大學、セドレー・テラーなる署名の投書が『タイムズ』紙上に現れた。この小男は極めて温順な共同組合事業に手を出してゐる人物であるが、彼れは右の文章の中で、最初に捕へた機會を以つて、早くも、かのケンブリッジの取沙汰に關する手掛りのほか、更らに『コンコルヂア』誌の匿名氏に關する手掛りをも我々に與へたのである。

このトリニチー大學の小男は言ふ。——『かの創立演説中にグラッドストーンの演説を引抄せしめる動機となつたことが明かである所の惡意を暴露する任務が、ブレンタノ教授(當時プレスラウ大學に在り、今はシエトラウスブルグ大學にゐる)に留保されてゐたことは、頗る奇異の感を與ふる事實である。かの引抄を辯護しようとした……カール・マルクス氏は、ブレンタノの巧妙なる攻撃に依つて忽ち逐ひ詰められ、進退谷つた結果、無謀に主張して曰く、グラッドストーンは、一八六三年四月十七日の『タイムズ』紙に掲げられた演説記事の中から、大蔵卿としての自己の地位に危險なる一句を削除する爲に、該記事が、ハンサード速記録の中に公表せられるに先だち、早くもこれを改竄したと。然るに、一度ブレンタノが現れて、『タイムズ』紙及びハンサード速記録の演説記事本文を仔細に對照し、以つてこの兩記事がいづれも、かの前後の聯絡から狡猾に引きちぎつた引抄に依りグラッドストーンの言葉に嫁せられた意味を全然廢除する點に於いて、相一致する次第を論證するに及び、マルクスは時間が乏しいといふ口實の下に退却した。

問題の核心は茲にあつたのである！ 而して『コンコルヂア』誌上に於けるブレンタノ君の匿名論戰は、ケンブリッジの生産組合的想像に斯く燦爛と反射したのである！ ドイツ製造業者同盟の聖ジョーヂたる彼れは、實に斯く陣を布き、その『巧妙に處理した攻撃』に斯く刃を操つた。然るに、地獄の龍なるマルクスの方は、百計盡きた『窮地に追はれ、速かに』この聖ジョーヂの足もとで往生を遂げた！ といふのである。



而かも、このアリオスト式的全戦争記は、我が聖ヂョーヂの誤魔化しを隠蔽するに役立つのみである。この戦争記に於いては、もはや『偽造挿入』でなく、『前後の聯絡から狡猾に引きちぎつた引抄』が問題となつてゐる。斯くて、全問題は別途の方面に推し移されることになつた。而してこれが理由の如何は、聖ヂョーヂ並びにケンブリッジに於ける彼れの桶持に依つて確知されてゐる所であつた。

エラナー・マルクスは『タイムズ』紙に掲載を拒絶されたため、一八八四年二月號の月刊誌『ツデー』紙上でセドレー・テラー氏に答へた。彼女は論戦を問題となつた唯一の論點に引き約めた。即ち、マルクスは果して、件の文句を『偽造挿入』したか否か、といふのである。セドレー・テラー君はこれに答へて言ふ。――

『グラッドストーン氏の演説の中に、たま／＼或る一句があつたか否かの問題』は、自分の見る所に依れば、これを『件の引抄の目的がグラッドストーンの言葉の意味を單に正傳するものなるか、曲傳するものなるかの問題に比すれば』マルクス對ブレンタノの論戦に於いては『甚だ重要性の少ないものである』と。而して彼は『タイムズ』紙の記事の中に『實際、用語上の矛盾が含まれてゐる』ことは承認するが、然し前後の聯絡を正當に（即ち自由主義的・グラッドストーンの意義に解釋すれば、グラッドストーンの謂はんとした所は明かにこれを知ることが出来るといつてゐる。（一八八四年三月號『ツデー』誌）。茲に最も滑稽なことは、我がケンブリッジの小男が、匿名氏ブレンタノの謂はゆる『習慣』に従つてハンサード速記録から引抄しないで、ブレンタノが『當然斷片的』なりと評した『タイムズ』紙の記事から引抄すべきことを主張してゐる一事である。勿論、ハンサード速記録には、件の致命的な文句は載つてゐないのである。

エラナー・マルクスにとつては、以上の論辯を『ツデー』同號紙上で雲散霧消せしめることは容易であつた。テラー氏は一八七二年の論戦を讀んだか、然らずんば讀まなかつた管で、若し讀んだとすれば、彼れはいま『偽造挿入』してゐるのみでなく、『偽造省略』をもしてゐる譯である。又、讀まなかつたとすれば、彼れは口を嚙む義務を有する。いづれにしても彼れが、その友ブレンタノの口から出たマルクスは『偽造挿入』したといふ非難を、一瞬時も支持しようと思つたことは明かである。反對に、マルクスの方は『偽造挿入』したのではなく、重要な一句を隠匿したのだといふことになる。而かもマルクスに依つて隠匿されたといふこの一句は、『國際労働者協會』創立演説第五頁の『偽造挿入』したと主張される文句の數行前に引抄されてゐるのである。又、グラッドストーンの演説の『矛盾』について言へば、かの『資本論』第六四二頁註百五の中で『一八六三年及び六四年に於けるグラッドストーンの豫算演説に含まれてゐる不斷の見逃し難き矛盾』を指摘したのは、ほか

ならぬマルクスその人ではなかつたか？ 彼れはセドレー・テラーの如く此等の矛盾を自由主義的御都合論に都合のいいやうに分解せしめることを敢てしなかつたといふ點だけが違ふのである。

要するに、エラナー・マルクスの答辯を摘要すれば次ぎの如くなる。――『寧ろ反對に、マルクスは苟くも引抄の價値あるものは毫も抹殺することなく、又、一言半句も偽造挿入せることはなかつた。彼れは寧ろ、グラッドストーンの演説中に述べられたことは確かであるが、何故かハンサード速記録から洩れ落ちた一句をば復活させて、煙滅から救ひ出してやつたのである。』

これで、セドレー・テラー君も満足した。而して、この十餘年間に互り而も二大國に跨つた教授的な全無駄話の結果は要するに、もはや何人もマルクスの文獻的誠意を疑ふことを敢てしなくなつたといふことと、この時以後セドレー・テラー君もブレンタノ氏がハンサード速記録の法王的無過性を信じなくなつたと同様に、定めしブレンタノ氏の文獻的戰鬥文に信を措かなくなるであらうといふこととの二點に盡されてゐるのである。

一八九〇年六月二十五日

MARKUS

フリードリヒ・エンゲルス



# 資本論第一卷 總目次

新改譯版について

舊改譯版序文

第一版原著者序文

第二版原著者序文

第三版編輯者序文

第四版編輯者序文

## 第一卷 資本の生産行程

第一篇 商品及び貨幣……………五—二六

第一章 商品……………五

(一) 商品の二因子、即ち使用價值と價值(價值の實體と價值の大小)……………五

(二) 商品に表現される労働の二重性質……………一〇

(三) 價值形態即ち交換價值……………一七

A 單純、個別又は偶生の價值形態……………一八

(1) 價值表章の兩極。相對的價值形態と等價形態……………一八

(2) 相對的價值形態……………二〇

總目次



- a 相対的價值形態の内容.....10
- b 相対的價值形態の量的限定性.....11
- (3) 等價形態.....12
- (4) 單純價值形態の總體.....10
- B 總體的、換言すれば擴大されたる價值形態.....10
- (1) 擴大されたる相対的價值形態.....10
- (2) 特殊の等價形態.....10
- (3) 總體的なる、換言すれば擴大されたる價值形態の缺點.....10
- o 一般的の價值形態.....10
- (1) 價值形態の變化したる性質.....10
- (2) 相対的價值形態と等價形態との發展關係.....10
- (3) 一般的價值形態から貨幣形態への推轉.....10
- D 貨幣形態.....10
- (四) 商品の魔術性及びその秘密.....11
- 第二章 交換行程.....11
- 第三章 貨幣又は商品流通.....11
- (一) 價値の尺度 (價格—價格の標準—價格の一般的解釋—貨幣の計算名稱、計算貨幣—價値の大小と價格との量的不一致—その量的不一致—價格は商品の單なる観念的價値形態).....11

- (II) 流通要具.....11
- a 商品の轉形 (商品形態—貨幣形態—商品形態—商品形態と生産物の直接的交換—その交換との區別).....11
- b 貨幣の通用 (商品形態と貨幣通用—貨幣の二重地位—通用貨幣の量—通用の標準—通用の標準と標準—通用貨幣の量を決定する諸因子).....11
- c 儲貨、價値表章 (儲貨と現金、儲貨の標準—價値表章—貨幣及び儲貨—貨幣—量的的に通用せしめられる貨幣の標準の法則).....11
- (III) 貨幣.....11
- a 貨幣の退蔵.....11
- b 支拂要具.....10
- c 世界貨幣.....11
- 第二篇 貨幣の資本化.....11
- 第四章 貨幣の資本化.....11
- (一) 資本の一般的公式.....11
- (II) 一般的公式の矛盾.....11
- (III) 勞働力の購買 (自由なる勞働者—勞働力の價値—「勞働力」なる商品の特殊性質).....11
- 第三篇 絕對的餘剩價値の生産.....11



**第五章 労働行程及び価値増殖行程**……………107

(一) 労働行程 (労働対象、原料、労働要具—生産機関—生産的消費—資本家に依る労働力消費行程としての労働行程)……………107

(二) 価値増殖行程 (労働力の価値と労働行程に於ける労働力の価値増殖とは大きさを異にする—価値増殖行程、資本の発生)……………108

**第六章 不変資本及び可変資本**……………109

**第七章 剰余価値の率**……………110

(一) 労働力の搾取程度……………110

(二) 生産物の比例分に於ける生産物価値の表現……………111

(三) シーニョアの『最終一時間』説……………112

(四) 剰余生産物……………113

**第八章 労働日**……………114

(一) 労働日の限界……………114

(二) 剰余労働に対する熱求。工場主とボヤール……………115

(三) 労働搾取の法的制限なき英國諸産業 (レース製造業—製陶業—綿織造業—製紙製造業—パン製造業—製糖業—綿織造業—輸入製造業—船泊業)……………116

(四) 晝間労働及び夜間労働。交代制度 (冶金及び金属工業)……………117

(五) 標準労働日についての抗争。十四世紀中葉より十七世紀終末に至る労働日延長の強制法律 (労働者の健康及び壽命に對する資本の關心—イギリスの労働者保護法—十七世紀大工業時代に至る此の労働日制限)……………118

(六) 標準労働日についての抗争。労働時間の強制的法定制限。一八三三年より六四年に至るイギリスの工場立法 (一八三三年の條例—一八四四年の條例—一八四七年の條例—一八五〇年の條例—絹物工場—絨毯工場—綿織造業—緑色工場及び漂白工場)……………119

(七) 標準労働日についての抗争。イギリスの工場立法が他國に及ぼした反作用……………120

**第九章 剰余価値の率と量**……………121

**第四篇 相対的剰余価値の生産**……………122

**第十章 相対的剰余価値の概念**……………123

**第十一章 協業**……………124

(資本制生産の出発點、ソフト的産業と資本制生産との量的區別—社會的平均労働—生産機關の節約—協業的労働の社會的生産力—協業の初期的形態—協業の資本制的形態)……………125

**第十二章 分業及びマニファクチュア**……………126

(一) マニファクチュアの二重起源……………126

(二) 部分労働者及びその道具……………127

(三) マニファクチュアの二つの基本形態—混成的マニファクチュアと有機的マニファクチュア……………128

(四) マニファクチュアの内部に於ける分業と、社會の内部に於ける分業……………129

(五) マニファクチュアの資本制的性質……………130

**第十三章 機械及び大工業**……………131

(一) 機械の發達……………132

立法 (一八三三年の條例—一八四四年の條例—一八四七年の條例—一八五〇年の條例—絹物工場—絨毯工場—綿織造業—緑色工場及び漂白工場)……………119

(七) 標準労働日についての抗争。イギリスの工場立法が他國に及ぼした反作用……………120

**第九章 剰余価値の率と量**……………121

**第四篇 相対的剰余価値の生産**……………122

**第十章 相対的剰余価値の概念**……………123

**第十一章 協業**……………124

(資本制生産の出発點、ソフト的産業と資本制生産との量的區別—社會的平均労働—生産機關の節約—協業的労働の社會的生産力—協業の初期的形態—協業の資本制的形態)……………125

**第十二章 分業及びマニファクチュア**……………126

(一) マニファクチュアの二重起源……………126

(二) 部分労働者及びその道具……………127

(三) マニファクチュアの二つの基本形態—混成的マニファクチュアと有機的マニファクチュア……………128

(四) マニファクチュアの内部に於ける分業と、社會の内部に於ける分業……………129

(五) マニファクチュアの資本制的性質……………130

**第十三章 機械及び大工業**……………131

(一) 機械の發達……………132



- (一) 生産物への機械の價値移轉…………… 四九六
- (二) 機械經營が労働者に及ぼす第一次的影響…………… 五〇〇
- (三) 資本に依る補助的労働力の占有。婦人労働及び兒童労働…………… 五〇五
  - a 労働日の延長…………… 五〇六
  - b 労働日の延長…………… 五〇七
  - c 労働の能率増進…………… 五〇八
- (四) 工場…………… 五〇九
- (五) 労働者と機械との抗争…………… 五一〇
- (六) 機械のために驅逐された労働者についての補償説…………… 五一三
- (七) 機械經營の發達に伴ふ労働者の反撥及び牽引。木綿工業の恐慌…………… 五一五
- (八) 大工業に依るマニファクチャア、手工業及び家内労働の革命…………… 五一七
  - a 手工業並びに分業を基礎とする協業の廢止…………… 五一八
  - b マニファクチャア及び家内労働に對する工場制度の反應作用…………… 五二〇
  - c 近世的マニファクチャア…………… 五二二
  - d 近世的家内労働(レース製造、麥稈細工)…………… 五二四
- 。近世的のマニファクチャア及び家内労働が大工業に向つて進む推轉。此等の經營方法に工場法が適用される結果、この革命の進行が速められること(ミシン機械)…………… 五二六
- (九) 工場立法(保健上及び教育上の條項)。イギリスに於けるその普遍化(探鑛業)…………… 五二八
- (十) 大工業及び農業…………… 五三〇

### 第五篇 絶對的並びに相對的餘剩價値の生産

四九二—五三八

#### 第十四章 絶對的並びに相對的餘剩價値

四九三

#### 第十五章 労働力の價格と餘剩價値との大小變化

五〇四

- (I) 労働日の大小及び労働の能率が不變であつて、労働の生産力が可變なる場合…………… 五〇五
- (II) 労働日と労働の生産力とが不變であつて、労働の能率が可變なる場合…………… 五〇八
- (III) 労働の生産力と能率とが不變であつて、労働日可變なる場合…………… 五〇九
- (IV) 労働の持續と生産力と能率とが同時に變化する場合…………… 五一〇

#### 第十六章 餘剩價値率の種々なる公式

五一五

### 第六篇 労働銀

五一八—五五〇

#### 第十七章 労働力の價値(又は價格)の労働銀化

五一八

#### 第十八章 時間賃銀

五二七

#### 第十九章 請負賃銀

五三五

#### 第二十章 労働銀の國民的差異

五四五

### 第七篇 資本の蓄積行程

五五一—七六八

#### 緒言

五五一



第二十一章 單純なる再生産……………五五三

(資本の附屬物としての労働者階級。資本制生産行程に依つて再生産される資本家對労働者の關係)

第二十二章 餘剩價値の資本化……………五六七

- (一) 規模の擴大されつつある資本制生産行程。商品生産の所有律の資本制的占有律への推轉……………五六七
- (二) 規模の擴大されつつある再生産に關する經濟學上の謬想……………五六八
- (三) 餘剩價値の資本及び收入への分割。節欲説……………五六九
- (四) 資本及び收入への餘剩價値の比例的分割から獨立して蓄積の大小を決定する所の諸事情——労働力の搾取程度——労働の生産力——充用資本と消費資本との差の増進——前貸資本の大小……………五六七
- (五) 謂はゆる労働基金……………五六八

第二十三章 資本制蓄積の一般的法則……………六〇三

- (一) 資本の組成不變なる場合に於ける蓄積に伴ふ労働力の需要増加……………六〇三
- (二) 蓄積及びそれに伴つて生ずる集積の進行中に行はれる不變資本分の相對的減少……………六〇二
- (三) 相對的の過剩人口たる産業豫備軍の果進的生産……………六〇二
- (四) 相對的の過剩人口の種々なる存在形態。資本制蓄積の一般的法則……………六〇二
- (五) 資本制蓄積の一般的法則の例解……………六〇二
  - a 一八四六年より一八六六年に至るイギリス……………六〇三
  - b イギリスに於ける産業労働者階級中の薄給部分(榮養狀態——住宅狀態——ロンドン——ニューキヤッスル・アポン・タイン——ブラッドフォード——プリストル)……………六〇四

e 浮浪労働者(住宅事情——鐵道労働者——炭坑その他の鑛山に於ける労働者)……………六〇五

d 恐慌が労働者階級中の最厚給部分に及ぼす影響(ロンドン東部に於ける造船船労働者)……………六〇六

e イギリスの農業プロレタリア(浮浪労働隊)……………六〇六

f アイルランド……………六〇六

第二十四章 謂はゆる本來的の蓄積……………七〇八

(一) 本來的蓄積の秘密……………七〇八

(二) 農民に對する土地收奪——(十五世紀の七十年代以後及び十六世紀初期の數十年代に於ける耕地の物場化——宗教改革、及び寺領の奪取——封建的所有のブルジョアの所有化——王政復古と光輝燦爛たる革命)——國有地の奪取——共同地及びその盜掠——スコットランド高地に於ける所有地の解放、耕地の羊牧場化、及び羊牧場の礮場化)……………七一一

(三) 十五世紀終末以降に於ける被收奪者に對する殘虐な立法。賃銀引下げの法律……………七〇九

(四) 資本家的小作農業者の發生……………七〇七

(五) 農業革命が工業の上に及ぼした反應作用。工業資本のための國內市場の形成……………七〇八

(六) 工業的資本家の發生(植民制度——國債制度——近世的の租稅制度及び保護制度——大工業の初期に於ける兒童掠奪)……………七〇四

(七) 資本制蓄積の歴史的傾向……………七〇五

第二十五章 近世植民説……………七五八



原語及び譯註..... 1—45

資本論 第一卷 總目次 終

資本論 第一卷 第一冊目次

- 新改譯版について
- 舊改譯版序文
- 第一版原著者序文
- 第二版原著者序文
- 第三版編輯者序文
- 第四版編輯者序文

第一卷 資本の生産行程

第一篇 商品及び貨幣..... 五—二六

第一章 商品..... 五

- (一) 商品の二因子、即ち使用價值と價值(價值の實體と價值の大小)..... 五
- (二) 商品に表現される労働の二重性質..... 二
- (三) 價值形態即ち交換價值..... 一七
  - A 單純、個別又は偶生の價值形態..... 一八
  - (1) 價值表章の兩極。相對的價值形態と等價形態..... 一八
  - (2) 相對的價值形態..... 二〇







第五章 労働行程及び価値増殖行程……………一四九

- (一) 労働行程 (労働対象、原料、労働器具—生産機関—生産的消費—資本家に依る労働力消費行程としての労働行程)……………一四九
- (二) 価値増殖行程 (労働力の価値と労働行程に於ける労働力の価値増殖とは大きさを異にする—価値増殖行程、資本の発生)……………一五七

第六章 不変資本及び可変資本……………一七一

第七章 剰余価値の率……………一八三

- (一) 労働力の搾取程度……………一八三
- (二) 生産物の比例分に於ける生産物価値の表現……………一九一
- (三) シーニョアの『最終一時間』説……………一九四
- (四) 剰余生産物……………二〇〇

第八章 労働日……………二〇一

- (一) 労働日の限界……………二〇一
- (二) 剰余労働に對する熱求。工場主とボヤール……………二〇八
- (三) 労働搾取の法律的制限なき英國諸産業 (レース製造業—製陶業—硝子製造業—紙製製造業—パン焼業—醸造業—婦人服製造業—製治業)……………二一六
- (四) 晝間労働及び夜間労働。交代制度 (冶金及び金屬工業)……………二二〇
- (五) 標準労働日についての抗争。十四世紀中葉より十七世紀終末に至る労働日延長の強制法律 (労働者の健康及び壽命に對する資本の無關心—イギリスの労働者諸法現—十七世紀大工業時代に至る迄の労働日制限)……………二二九
- (六) 標準労働日についての抗争。労働時間の強制的法定制限。一八三三年より六四年に至るイギリスの工場立法 (一八三三年の條例—一八四四年の條例—一八四七年の條例—一八五〇年の條例—絹物工場—染織工場—染色工場及び漂白工場)……………二三五
- (七) 標準労働日についての抗争。イギリスの工場立法が他國に及ぼした反作用……………二七五

第九章 剰余価値の率と量……………二八一

第四篇 相對的剰余価値の生産……………二九一—二九一

第十章 相對的剰余価値の概念……………二九一

第十一章 協業……………三〇一

(資本制生産の出発點、ツンフト的産業と資本制生産との量的區別—社會的平均労働—生産機關の節約—協業的労働の社會的生産力—協業の初期的形態—協業の資本制的形態)……………三〇一

第十二章 分業及びマニユファクチュア……………三二六

- (一) マニユファクチュアの二重起源……………三二六
- (二) 部分労働者及びその道具……………三二九
- (三) マニユファクチュアの二つの基本形態—混成的マニユファクチュアと有機的マニユファクチュア……………三三三
- (四) マニユファクチュアの内部に於ける分業と、社會の内部に於ける分業……………三三一
- (五) マニユファクチュアの資本制的性質……………三三〇

第十三章 機械及び大工業……………三五二



- (一) 機械の發達…………… 一〇一
- (二) 生産物への機械の價値移轉…………… 一〇六
- (三) 機械經營が労働者に及ぼす第一次的影響…………… 一〇七
  - a 資本に依る補助的労働力の占有。婦人労働及び兒童労働…………… 一〇七
  - b 労働日の延長…………… 一〇八
  - c 労働の能率増進…………… 一〇九
- (四) 工場…………… 一〇九
- (五) 労働者と機械との抗争…………… 一一一
- (六) 機械のために驅逐された労働者についての補償說…………… 一一三
- (七) 機械經營の發達に伴ふ労働者の反撥及び牽引。木綿工業の恐慌…………… 一一四
- (八) 大工業に依るマニユファクチュア、手工業及び家内労働の革命…………… 一一四
  - a 手工業並びに分業を基礎とする協業の廢止…………… 一一四
  - b マニユファクチュア及び家内労働に對する工場制度の反應作用…………… 一一六
  - c 近世的マニユファクチュア…………… 一一七
    - a 近世的家内労働(レース製造、麥稈細工)…………… 一一七
    - o 近世的のマニユファクチュア及び家内労働が大工業に向つて進む推轉。此等の經營方法に工場法が適用される結果、この革命の進行が速められること(ミシン機械)…………… 一二五
- (九) 工場立法(保健上及び教育上の條項)。イギリスに於けるその普遍化(採鑛業)…………… 一二六

- (十) 大工業及び農業…………… 一六九



カール・マルクス原著  
高 畠 素 之 翻 譯

資 本 論 第 一 卷



カール・マルクス著

資 本 論

經濟學の批判

第一卷 資本の生産行程



この書を私の忘れ難き友、勇敢にして忠實、且つ高

潔なるプロレタリア先鋒の闘士ウキルヘルム・ウ\*

ルフ(一八〇九年六月二十一日タルナウに生れ、一八八六  
四年三月九日、亡命中マンチェスターに客死す)に捧ぐ。

# 第一卷 資本の生産行程

## 第一篇 商品及び貨幣

### 第一章 商品

#### (一) 商品の二因子、即ち使用価値と価値(価値の實體と価値の大小)

資本制生産方法が専ら行はれる社會の富は『尨大なる商品集積』(一)として現はれ、個々の商品(一)はその成素形態として現はれる。故に我々の研究は、商品の分析を以つて始まる。

(一)拙著『經濟學批判』(ベルリン、一八九五年刊、第四頁)(2)。

商品は先づ、外界の一對象である。即ち、その諸性質に依つて、人類の何等かの種類の欲望を充たす一の物である。この欲望の性質如何、即ちそれが胃腑から起るか、又は空想から起るかは、問題の上に何等の變化をも與へるものでない(二)。又、その物が如何やうにして人類の欲望を充たすか、即ち直接に生活資料として、換言すれば享樂の對象としてか、それとも汗回的に生産機關としてか、それも茲では問題とならない。

(二)『願望は欲望を含む。それは心の食欲であつて、餓の身體に於ける如く自然的のものである。…大多数(物の)は心の欲望を充たすことによつて價值を受けるのである』ニコラス・パーボン著『新貨經濟論』、ロツク氏の貨幣價值引上論考に答ふ』ロンドン、一六九六年刊、第二及び三頁(3)。

鐵、紙などの如き如何なる有用物も、これを二重の見地、即ち質と量との兩面から觀察することが出来る。斯くの如き有用物は、いづれも多數性質の集合體であつて、隨つて種々なる方面に有用なるを得る。此等の種々なる方面、隨つて有用物の様



様な用途を發見するは、歴史的の事蹟である(三)。有用物の分量に對する社會的公認尺度の設定も亦さうである。元來、商品尺度の多種多様なことは、部分的には、秤量せらるべき對象の性質の多種多様なに起因し、部分的にはまた、傳習に起因するものである。

(三)『物は固有價值(バーボンはこの言葉を使用價值の特殊代用語にしてゐる)を有つてゐる。而してこの固有價值は何處に於いても同一の價值を有つてゐる。例へば、磁石の鐵を引きつける性質の如きがそれである』(前掲第一六頁)。(四)磁石の鐵を引きつける性質は、この性質に依つて磁極性を發見した時に初めて有用となつたものである。

物の有用性は、この物を使用價值(さ)たらしめる(四)。然しこの有用性は、空中に浮んでゐるものではない。それは商品體の諸性質に基くものであつて、商品體を離れては存在しない。されば鐵、小麦、ダイヤモンドなどの如き商品體それ自身が一の使用價值、即ち財なのである。商品體のこの資格は、商品體の使用上の諸能性を占有するために、人類が多くの勞働を費したか、少しの勞働しか費さないかに懸るものではない。我々は使用價值を考察するに當り、つねに、その一定の分量を前提する。例へば何ダースの時計、何ヤールのリンネル、何噸の鐵などといふ如くである。商品の使用價值は、特殊の一學科たる商品學(五)に材料を供給するものである。

(四)『如何なる物の自然的價值も、その物が諸種の必要を充たし、又は人間生活の諸便宜に應ずる適當性といふことに存してゐる』(ジョン・ロック著『利子低減の諸結果に關する研究』(一六九一年初刊、一七七七年ロンドン出版ロック全集本、第二卷第二八頁)。(五)十七世紀に於いても尙、イギリスの著述家たちが使用價值の意味で *worth* なる言葉を使用し、また交換價值の意味で *value* なる言葉を使用してゐたことを、我々は屢々發見する。これは全く、現實の物に對してはチュートン系の言葉を使用し、主觀に反射された物に對してはラテン系の言葉を使用することを好む國語の精神に一致するところである。

(五)ブルジョアの社會に於いては、如何なる人も、商品の購買者として、百科辭典的商品知識を有すといふ擬制が行はれてゐる。

使用價值なるものは、使用又は消費に依つてのみ實現される。富の社會的形態の如何を問はず、使用價值は常にその實材的内容を形成する。而して我々が茲に考究せんとする社會形態に於いては、それは同時にまた、交換價值(?)の實材的負擔者たるのである。

交換價值は先づ、分量關係即ち一種類の使用價值が他種類の使用價值と交換される(六)比例——時と處とに準じて絶えず變化するところの——として現はれる。故に交換價值は偶然的な純相對的なものであり、隨つて商品に内在固有するところの交換價值(固有價值)ありといふは、一の形容矛盾であるやうに見える(七)。この問題を尙、詳しく考へて見よう。

(六)『價值は斯々の一物と斯々の他物、一生産の斯々の尺度と斯々の他の尺度との間に存する交換關係の中に成立つものである』(ル・トロワ著『社會的利益について』(デュルケム著『オクタルト、パリ、一八四六年刊、第八八九頁)。(七)『内在的交換價值を有つといふことは、何物にとつても不可能なことである』(バーボン前掲第一六頁)。或はバトラー

の言ふ如く、『一物の價值とは、その物が幾許の物を賣らすかといふことである。』

一定の商品、例へば一クオターの小麦は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金、約して言へば、種々様な比例に於ける他の諸商品と交換される。されば小麦は、單一の交換價值のみを有するものではなく、多數の交換價值を有してゐるのである。然るにx量の靴墨も、y量の絹も、z量の金なども、總べて皆、一クオターの小麦の交換價值であるから、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などは交互に置き換へ得るところの、又は互にその大きさを等しうするところの交換價值であらねばならぬ。そこで第一に、斯ういふ結論が生じて来る。即ち、同じ一商品の有效なる各交換價值は、一の等一物を言ひ現はしてゐる。第二にまた、總じて交換價值なるものは、それ自身と區別し得る或内容の表章様式即ち『現象形態』たり得るのみである。

更らに二つの商品、例へば小麦と鐵とを例に採らう。これら二商品の交換比例は如何やうにもあれ、それは常に、與へられたる分量の小麦を、或分量の鐵と等位に置く方程式、例へば、 $mx + ny = z$  の形を以つて示すことが出来る。この方程式は何を意味するか。それは同じ大きさの共通物が、二つの相異つた物即ち一クオターの小麦とpハンドレッドウェイトの鐵との内に存在することを示すのである。故にこの兩者は、それ自體に於いて小麦でもなく、また鐵でもない或第三者に等しいものである。隨つてこの兩者の各は、それが交換價值である限り、斯様な第三者に約元し得るものではなくてはならぬことになる。

幾何學上の單純なる一例を以つて、この事實を明かにしよう。如何なる直線形にしろ、その面積を決定し比較するためにはこれを三角形に分解する。而してまた、この三角形それ自體は、これをその目に見える形とは全く異つた言ひ現し、即ちその高さxと底との積の二分の一に約元する。これと同様に、諸商品の交換價值も亦、それに依つてヨリ多量なり少量なりを表現されてゐるところの「共通物に約元し得るのである。



この共通物は、商品の幾何學的、物理學的、化學的、又はその他の自然的性質ではあり得ない。商品の有形的性質は總じてそれが商品を有用ならしめ、使用價值たらしむる限りに於いてのみ、考慮に入るものである。他方にまた、商品の使用價值からの抽象こそ、商品の交換比例をば一目瞭然的に特徴するところのものである。この交換比例の内部に於いては、一の使用價值はそれが適當なる比例を以つて存在しなへすれば、他の如何なる使用價值とも同じに通用する。或はまた、老パーボンの言ふ如く、『一種類の商品と他種類の商品とは、その交換價值の大きさが等しければ共に同じものである。同じ大きさの交換價值を有する物の間には、何等の差異も區別もない』(八)。

(八)『一百磅に價する鉛なり鐵なりは、一百磅に價する銀なり金なりと同じ大きさの價值あるものである』(11)。(ニコラス・パーボン前掲、第五三及び七頁)。

各商品は、これを使用價值として見れば、互ひに質を異にするといふことが先に立つが、交換價值として見れば、ただ量を異にし得るに過ぎず、随つて使用價值の一原子をも含まないのである。

そこで、商品體をその使用價值から離れて見るとき、残るところはただ労働生産物たる一性質のみである。然し労働生産物でさへも、既に我々の手の中で變化してゐる。労働生産物の使用價值から抽象することは、同時にまた、労働生産物を使用價值たらしめる有形的な諸成分及び諸形態からも抽象することになる。斯くして労働生産物は、もはや、卓子でもなく、家でもなく、糸でもなく、その他何等の有用物でもない。労働生産物の凡ゆる有形的性質は消え去つてゐる。それはもはや、指物労働、建築労働、紡績労働、その他如何なる一定の生産的労働の産物でもない。労働諸生産物の有形的性質と共に、それらの物に表現されてゐる諸労働の有用的性質も亦消滅し、これら諸労働の種々なる具體的形態も亦消滅する。諸労働はもはや、互に相異なることなく、總べてが等一なる人間労働、即ち抽象的人間労働に還元されてゐる。

然らば、労働諸生産物の残基は何であるかを考察しよう。右の抽象の後に労働生産物に残るものは、同一なる空幻的の對象性のみである。即ち無差別なる人間労働の、換言すれば、その支出の形式に頓著するところなく考へた人間労働力の支出の、單なる凝結のみである。これらの物は結局ただ、その生産のために人間労働力が支出され、人間労働が蓄積されといふことを示すに止まる。これらの物は、斯くの如き共通なる社會的實體の結晶として見るとき、價值(12)——商品價值(13)——なのである。

商品の交換關係に於いては、交換價值なるものは使用價值から全く獨立したものととして現はれることは、我々の既に見たと

ころである。然るに、労働諸生産物の使用價值から現實的に抽象してしまふと、上に限定せる如き價值が残る。故に商品の交換關係たる交換價值に現れるところの共通物とは、即ち價值であるといふことになる。

本書の研究が進むにつれて、價值の必然的表章様式又は現象形態としての交換價值の説明を戻すことになるが、今は先づ、この形態から獨立して價值の性質を考へて見ねばならぬ。

要するに、一の使用價值、即ち財は、抽象的意義に於ける人間労働がその中に對象化され實體化されてゐるが故にのみ價值を有するのである。然らばこの價值の大きさは、如何にして秤量されるか。使用價值の中に含まれてゐるところの『價值形成實體』たる労働の量に依つて秤量されるのである。而して労働の量はまた、労働の時間的繼續に依つて秤量され、労働時間(14)は更らに時、日、等の如き一定の時間部分を尺度とするのである。

商品の價值がその生産の進行中に支出された労働の量に依つて決定されるとすれば、人が怠惰であり又は不熟練であればある程、商品を造り上げる爲にそれだけ多くの時間を要する譯であるから、彼れの造る商品はそれだけ價值多いやうに見えるかも知れぬ。然しながら、價值の實體を形成する労働とは、等一なる人間労働、換言すれば同一なる人間労働力の支出を謂ふのである。商品界の價值全體の中に表現される社會的總労働力は、無数の個別的労働力から成り立つてゐるが、茲では總べて一様なる人間労働力と見做される。而してこれらの個別的労働力の各個は、それが社會的の平均労働力たる性質を有し、また斯くの如き社會的の平均労働力として作用し、随つて一商品の生産上に、平均的或は社會的に必要な労働時間のみを要する限り、いづれも皆同一なる人間労働力である。而してその社會的に必要な労働時間とは、現在に於ける社會的に標準を成す生産條件と、労働の熟練及び能率の社會的平均程度とを以つて、何等かの使用價值を生産するに必要な労働時間を指すのである。

例へば、イギリスに於いて蒸氣織機の採用された結果、一定量の糸を織物にするのに恐らく従来の労働の半ばを以つて事足りるやうになつたであらう。イギリスの手織工は、この同一の仕事に對して事實上従前通りの労働時間を要したのであるが、彼れ自身の労働一時間の生産物は、今や半時間の社會的労働を表現するに過ぎなくなり、随つて従前の價值の半ばに低落したのである。

✓斯くの如く、一の使用價值の價值の大小を決定するものは、社會的に必要な労働の量、又はその生産上社會的に必要な労働時間に外ならぬのであつて(九)、個々の商品は、この場合、總じてその所屬種類の平均見本(10)と見るべきである(十一)。



斯くて同一量の労働を含むところの、換言すれば同一の労働時間に生産され得るところの諸商品は、みな同じ大きさの価値を有することになる。一商品の価値が他の各商品の価値に對して有する比例は、前者の生産に必要な労働時間が後者の生産に必要な労働時間に對して有する比例に等しい。『價值として見れば、如何なる商品も、凝結したる労働時間の一定量に過ぎぬ』(十一)のである。

(九) 第二版註——『諸種の生活必需品が互ひに交換される場合、その價值は、これらの物品の生産上必然的に必要とされ、且つ通例充用されるところの労働量に依つて決定される』(匿名者著『一般金利、特にまた公債その他の金利に關する考案』ロンドン、第三六頁(16))。この匿名者は前世紀に於ける注目すべき一著述であるが、それには刊行の日附が與へられてゐない。然しその内容から判断すると、チャーチ二世の治下、一七三九年又は四〇年の頃、公けにされたものであることは明かである。

(十) 『同一種類の凡ゆる生産物は相合して一の分量を成すものであつて、その價格は特殊の事情に頓着なく、全般的に決定されるものである』(N. トローメ前掲第八九三頁(17))。

(十一) 前掲拙著第六頁(18)。

されば商品の價值の大きさは、その商品の生産に必要な労働時間が不變であるとするれば變化することはないであらう。然るにこの労働時間は、労働の生産力に變化ある毎に變化するものである。而して労働の生産力はまた、種々なる事情、なかんづく労働者の熟練の平均程度、科學及びその工藝的應用の發達程度、生産行程の社會的結合、生産機關の範圍及び作用能力、諸種の自然事情、等に依つて決定される。

例へば同一量の労働が、豊年には八ブシエルの小麦に依つて代表され、不作の年には僅々四ブシエルの小麦に依つて代表される。また同一量の労働が、豊坑に於いては瘠坑に於けるよりも多量の金屬を供給する等の事實もある。ダイヤモンドは、地表に於いては稀有のものであつて、これを見出すには平均して多大の労働時間を要する。斯くしてダイヤモンドは僅少の量を以つて多大の労働を代表することになるのである。ヤコーブは、果して金の全價值が支拂はれたことあるかを疑つてゐる。ダイヤモンドに至つては尙更らである。エシュヴェーゲ(20)に依れば、一八二三年ブラジルの諸ダイヤモンド坑に於ける過去十年間の採掘總高は、同國に行はれる甘蔗及び珈琲栽培業の一年半の平均生産物の價格にも達しなかつた。而も前者はヨリ多くの労働、随つてまたヨリ多くの價值を代表してゐたのである。

同一量の労働も、豊坑に於いてはヨリ多大のダイヤモンドに依つて代表されるのであつて、ダイヤモンドの價值は低落することになる。また若し僅少の労働を以つて炭素をダイヤモンドに化し得るやうになるとせば、ダイヤモンドの價值は煉瓦の價值以下に低落し得るのである。概括して言へば、労働の生産力が大なるに従つて、一物品の生産に要する労働時間は益々小となり、その物品に結晶してゐる労働量、随つてこの物品の價值は益々小となるのである。反對に、労働の生産力が小なれば小なる程、一物品の生産に要する労働時間は益々大となり、斯くしてこの物品の價值も亦益々大となるのである。即ち一商品の價值の大小は、この商品に體現してゐる労働の量に正比例し、その生産力には逆比例して變化するのである。

物は價值たらずして使用價值たることを得る。即ち人類に對するその物の效用が、労働に依つて生じたのではない場合がそれであつて、例へば、空氣や、處女地や、自然的の牧場や、野生の木材などに於いて見るところである。また、物は商品たらずして有用であり、且つ人間労働の生産物たることを得る。例へば、自己の労働の生産物に依つて自己の欲望を充たす人は、使用價值を造り出すには相違ないが、商品を造り出すものではない。商品を生産するためには、彼れは單に使用價值を生産するといふのみでなく、また他人のための使用價值を、即ち社會的使用價值を生産せねばならぬ。否、單に他人のために(21)使用價值を造るといふことばかりではない。中世の農民は封建主君のために年貢とすべき穀物(22)を造り、僧侶のために十分一税とすべき穀物(23)を造つた。然し年貢とすべき穀物も、十分一税とすべき穀物も、他人のために生産されたものではあるが、そのために商品とはならなかつた。生産物が商品となるためには、それが使用價值として役立つ他人の手に交換を通して移轉されることを要するのである(21a)。最後に如何なる物も、使用對象たることなくしては價值たることを得ない。物が無用であるとすれば、その内に含まれてゐる労働も亦無用であつて、斯かる労働は労働とは認められず、随つて何等の價值をも形成するものではないのである。

(21a) 第四版註——この括弧内の説明のないため、マルクスは生産者以外の人に依つて消費される生産物の總べてを、商品視したといふ誤解が屢々生じたので、私は茲にこれを挿入することにした譯である。——F. E.

## (二) 商品に表現される労働の二重性質

商品は最初、一の二重物として、即ち使用價值及び交換價值として、我々の目に映じた。後に至り、労働も亦、價值に言ひ現はされる方面から觀察すれば、使用價值造出者としてのそれに屬するところのものと同一の特徴を有しなくなることが明か



になつた。商品に含まれる労働のこの二重性質は、私が初めて批判的に論議したところのものである(十二)。而してこの問題は、経済學を理解するについての樞軸であるから、茲に尙詳しく闡明する必要がある。

(十二) 前掲拙著、第一二、一三頁その他隨所。

試みに、一着の上衣と十ヤールのリンネルとの如き二商品を例に採らう。假りに  $10\text{ヤール} = 100\text{ヤード}$  とすれば  $100\text{ヤード}$  となるやうに、右の前者が後者に二倍した價值を有するものとする。

上衣は特殊の一欲望を充たすところの使用價值である。これを造り出すには、一定種類の生産的活動を要する。この生産的活動の種類は、その目的や、作業方法や、對象や、要具や、結果などに依つて決定される。斯くその有用性が生産物の使用價值に依つて、又は生産物が使用價值であるといふ事實に依つて表現される労働を、我々は簡單に有用労働(24)と名づける。この見地のもとに於いては、労働は常にその利用上の效果に關聯して考察される。

上衣とリンネルとが、おの／＼質を異にする使用價值である如く、その存在を媒介するところの労働も亦互ひに質を異にする。裁縫と機械とが即ちそれである。若し上衣とリンネルとが互ひに質を異にする使用價值でなく、随つてまた互ひに質を異にする有用労働の生産物でないとなれば、兩者は商品として對立することが出来なくなる。上衣は上衣と交換されるものではなく、同じ使用價值は同じ使用價值と交換されるものではないからである。

種類の相異つた使用價值または商品體の總和には、同様にまた種類を異にするところの、門、科、屬、種、變種、等に分類される様な有用労働の總和、換言すれば社會的分業が現はれる。この社會的分業は商品生産の存在條件であるが、然しその反對に商品生産は社會的分業の存在條件たるものではない。古代インドの共同體に於いては、労働は社會的に分割されてゐるが、然しその生産物は商品となるものではない。尙一層手近な例を擧ぐれば、如何なる工場に於いても労働は體制的に分割されてゐるが、この分割は労働者が自己の手に成つた生産物を交換するといふ事實によつて媒介されるものではない。互ひに獨立した個別的な私労働の生産物のみが、商品として相對立するのである。

要するに、各商品の使用價值には、一定の目的に合致した生産的なる活動(25)即ち有用労働が含まれてゐる。使用價值なるものは、互ひに質を異にする有用労働を含むにあらざれば、商品として相互對立することは出来ない。生産物が一般に商品の形を採る社會、即ち商品生産者の社會に於いてこそ、互ひに獨立した生産者の私營業として相互個別的に營まれる有用労働の斯かる質的差異は、複雑に編成された一體制なる社會的分業に發展して行くのである。

上衣を着る者が裁縫師であらうが、裁縫師の註文客であらうが、それは上衣にとつて區別の無いことである。いづれの場合にも、上衣は使用價值として作用する。同様に、裁縫業が特殊の一職業となり、換言すれば社會的分業の獨立した一部となつたからとて、上衣とそれを生産する労働との關係そのものは何等變化するところがない。衣服を着ようとの欲望に迫られたところにあつては、裁縫師といふ專業者の生じない以前、人類は既に數千年の久しきに亘つて裁縫してゐたのである。然し上衣やリンネル、換言すれば天然自然には存在せざる、素材の富の各要素の存在は常に、特殊の自然素材をば特殊の人間欲望に同化せしむるところの、一定の目的に従つてする特殊の生産的活動に依つて媒介されねばならなかつたのである。要するに労働なるものは、これを使用價值の形成者たる有用労働として見れば、凡ゆる社會的形態から獨立した、人類生存上の一條件であり、人類と自然との間の代謝機能(26)たる人類生活を媒介すべき永遠の自然必然事(27)なのである。

上衣、リンネル等の如き使用價值約言すれば商品體は、自然素材並びに労働なる二要素の結合したものである。上衣、リンネル等に含まれる各種有用労働の總和を控除するとき、常に残るところのものは、人類の助力なくして自然のまま存在してゐる物質的の基底である。人類は生産上ただ自然それ自身のする通りにしかなし得ないのである。即ち素材の形態を變更し得るに過ぎない(十三)。しかのみならず、この形態變更の労働に於いても、人類は常に諸種の自然力に依つて支持される。されば労働は、その所産たる使用價值即ち素材の富の唯一の源泉ではない。ウキリアム・ベターの言ふ如く、労働は素材の富の父であり、而して土地はその母である。

(十三) 『宇宙の凡ゆる現象は——人の手に依つて造られたものと、普遍的の自然律に依つて生じたものとを問はず——現實的の創造を代表するものではなく、素材の形態變化を代表するに過ぎない。人類の才能が再生産の觀念を分析するに方つて發見する唯一の要素は、集合離散のみである。斯くして土地、空氣及び田野の水が穀類に變形するとすれば、これ即ち價值(使用價值のこと。尤もウヰリは、フキジオクラットに對するこの論戰の中で、彼れ自身如何なる種類の價值を論じてゐるかを確かとは知らなかつたのである)及び富の再生産である。人の手に依つて昆蟲の膠が天鵞絨に變じ、又は金屬の若干分片が時計を形成する場合についても同様である』(ピエトロ・ウヰリ著『政治經濟考察』一七七三年初刊)クストチ編イタリー經濟名著集、近世篇、第十五卷第二二頁(28)。

以上は使用對象たる限りの商品を論じたのであるが、更らに轉じて商品價值を論ずることにしよう。然しこれは量の上の差異に過ぎないのであつて、この問



題は今のところまだ我々に關係がない。そこで我々は、上衣一着の價值がリンネル十ヤールの價值に二倍してゐるとすれば、リンネル十ヤールは上衣一着と同じ大きさの價值を有するといふことを想起する。上衣もリンネルも價值としては同じ實體の物であり、同一種類の労働を客觀的に言ひ現したものである。然るに裁縫労働と機械労働とは、互ひに質を異にする労働である。ところが、同一の人間が裁縫と機械とを交互に行ふ社會状態、換言すればこの二つの相異つた労働方法が畢竟、同一個人の労働の變形に過ぎず、尙未だ別々の個人の固定した専門的機能とならぬところの（恰も我々の專業裁縫師に依つて今日造られる上衣、明日造られるズボンが、同一なる個人の労働の變化を前提するに過ぎぬ如く）社會状態もある。更らに今日の資本制社會に於いても、労働需要の方向變化に従ひ、人間労働の一定部分は、或時は裁縫の形を以つて、或時は又機械の形を以つて供給されることは、一目瞭然の事實である。勿論、この労働の形態變化は、故障なしには行はれぬかも知れないが、兎にかく行はれねばならぬものである。

生産的活動の定形、随つてまた、労働の有用的性質を措いて問はぬとすれば、生産的活動について残るところのものは、それが人間労働力の支出であるといふ事實のみである。裁縫と機械とは、互ひに質を異にする生産的活動であるとはいへ、いづれも人間の脳髓や、筋肉や、神経や、手などの生産的支出である。而してこの意味に於いては、いづれも人間労働である。裁縫と機械とは、人間労働力支出上の相異つた二形態に外ならない。勿論、人間労働力は、いづれかの形で支出されるためには、それ自身既に多かれ少なかれ發達してゐることを要する。然し商品の價值なるものは、その儘の人間労働<sup>(20)</sup>の、即ち人間労働一般の、支出を表現するものである。

ブルジョアの社會に於いて、將官なり銀行家なりは極めて重大なる役目を演じ、反對にその儘の人間は頗る見すばらしい役目を演ずるのであるが(十四)、茲に謂ふ人間労働についても矢張り同様である。即ち人間労働とは、特別の發達なき通例の各人が、平均してその身體組織の中に持つ單純労働力の支出を意味する。勿論、この單純なる平均労働<sup>(21)</sup>それ自身は、國と文化時代との異なるに従つて性質を變更するものであるが、然し一定の社會について言へば、それは一定してゐる。複雑なる労働<sup>(22)</sup>は要するに、單純労働の強められたもの<sup>(23)</sup>、或は寧ろ倍加されたもの<sup>(24)</sup>に過ぎぬのであつて、少量の複雑労働は多量の單純労働に等しきものとなる。この換算が絶えず行はれることは、經驗の示すところである。或商品は最も複雑なる労働の産物であるかも知れない。而もその價值に依つて、それは單純なる労働の生産物と等しからしめられ、斯くしてまた單純なる労働の一定量を代表するに過ぎぬものとされる(十五)。種類の相異つた各労働がその尺度單位としての單純労働に換算され

る様々の比例は、生産者の背後に於ける社會的行程に依つて定められるものである。随つて生産者から見れば、それは習慣に依つて與へられるかの如き觀を呈して來る。以下、論旨を單純ならしむるため、各種の労働力は直接に單純労働力を代表するものと見る。これに依つて換算の勞が省かれることになるのである。

(十四) ヘーゲル著『法律哲學』(ベルリン、一八四〇年刊、第二五〇頁第一九〇節<sup>(24)</sup>)を参照せよ。

(十五) 茲では、例へば労働者が一日の労働に對して受ける賃銀又は價值のことをいふのではなく、労働者の一日の労働が對象化される商品價值についていふのであつて、このことは讀者の注意を要するところである。賃銀といふ範疇は、我々の説明の如上の段階に於いては、尙未だ存在して居らぬのである。

即ち價值としての上衣及びリンネルを考察する場合には、その使用價值の差異から抽象するのであるが、それと同様に、これらの價值に依つて代表される労働を考察する場合にも、その有用形態たる裁縫及び機械といふ差異から抽象することになるのである。使用價值としての上衣及びリンネルは、布と絲とを以つてする目的の一定した生産的活動の結合であり、反對に價值としての上衣及びリンネルは、同一種類の單なる労働凝結物であるが、それと同様に、これらの價值に含まれてゐる労働は、布と絲とに對する生産的關係を通して有意義となるものではなく、ただ人間労働力の支出としてのみ、意義あるものである。上衣及びリンネルなる使用價值の構成要素が裁縫と機械であるのは、この雙方が互ひに質を異にしてゐるからであり、またこの雙方が夫々上衣價值とリンネル價值との實體となるのは、その特殊の質から抽象して、いづれも人間労働の質といふ等一の質を有するものとされる限りに於いてのみ、言ひ得ることである。

ところが上衣とリンネルとは、單に價值一般であるばかりでなく、また一定の大きさを有する價值である。而して我々の假定に従へば、上衣一着の價值はリンネル十ヤールに二倍してゐる。然らば、これら兩價值の大小の差は何處から生じて來るか？それは即ち、リンネルは上衣に比して半分の労働しか含んで居らず、隨つて後者を生産するには、前者を生産するに比し二倍の時間に互つて労働力を支出せねばならぬといふことから生ずるのである。

斯くの如く使用價值についていへば、商品に含まれてゐる労働は單に質的のみ考慮に入るのであるが、價值の大小については、單に量的にのみ、即ち質のドン詰りなる人間労働に還元された後にのみ、考慮に入るのである。前の場合には、労働の『如何にして』と『何』とが問題であるが、後の場合には労働の『幾許』が、時間的繼續が問題となる。一商品の價值の大小は、その商品に含まれる労働量を代表するものであるから、一定の比例に於ける諸商品は、常に同じ大きさの價值でなければな



らぬ譯である。

上衣の生産に必要な凡ゆる有用労働の生産力が不変であるとすれば、上衣の価値の大きさは、上衣自身の量が増すに従つて大となる。今、一着の上衣がx日数の労働時間を代表するとすれば、二着の上衣は2x日数の労働時間を代表することになり、以下それに準じて行く。然るに一着の上衣の生産に必要な労働が二倍に増大し、又は半分に低減したと假定すれば、前の場合には、一着の上衣は従来二着の上衣が有つてゐただけの価値を有つことになり、また後の場合には、二着の上衣は従来一着の上衣が有つてゐただけの価値しか有たぬことになる。尤も、いづれの場合にも、一着の上衣は従来と同じ役をなし、それに含まれてゐる有用労働は従来と同じ品質を有つてゐるのであつて、ただその生産に支出された労働量が變化しただけである。

ヨリ多量の使用価値は、それ自身ヨリ大なる素材的富を代表する。二着の上衣は一着よりは多い。二着の上衣は二人に着せ得るが、一着の上衣は一人にしか着せられぬ。然し素材的富の量は増大しても、それに應じて価値の大きさは同時に減じ得る。この對抗的運動は、労働の二重性質から生ずるものである。生産力なるものは常に、有用な具體的な労働の生産力を意味することとは言ふ迄もない。而してそれは事實上、與へられたる期間に於ける、一定の目的に従つて營まれる生産的活動の作用程度を決定するに過ぎぬ。されば有用労働なるものは、その生産力の増減如何に正比例してヨリ豊富なる生産物源泉ともなり、またヨリ貧弱なる生産物源泉ともなるのである。反對に、生産力の變化は、価値に體現する労働その者に對しては何等の影響をも及ぼすものでない。生産力なるものは元來、労働の具體的な有用な形態の一屬性であるから、この形態から抽象し去るとき、生産力とはや労働に對して何等の關係をも有ら得るものではなくなる。随つて生産力は如何に變しても、同一の労働が同一の期間に造り出す価値量は不變である。然し同一の期間に造り出される使用価値の量には、種々なる差異が生じて来る。即ち生産力が増進すれば、ヨリ多量の使用価値を生ずるが、生産力が低減すれば、ヨリ少量の使用価値を生ずることになるのである。随つて、労働の豊度を増進せしめ、斯くしてまた労働より生ずる使用価値の量を増大せしむる生産力變化に依つて、この使用価値の生産に必要な労働時間の總量が短縮されるとすれば、斯かる場合には右の増大した使用価値總量の価値の大きさは減少することになる。それと反對の場合には、反對の結果が生じて来る。

如何なる労働も、一面から見れば、生理的意味に於ける人間労働力の支出である。而して斯くの如き、等一なる人間労働即ち抽象的人間労働といふ資格に於いては、如何なる労働も商品価値を造り出す。また他の方面から見れば、一切の労働は一定の目的に合致せる特殊の形態(36)を採つた人間労働力の支出である。而してこの具體的な有用な労働といふ資格に於いて

は、一切の労働は使用価値を生産するものである(十六)。

(十六) 第二版註——『労働のみが、如何なる時にも凡ゆる商品の価値を評し比較し得るところの、最終的且つ現實的の尺度であること』を證明せんがために、アダム・スミスは次の如く言つてゐる。——『同一量の労働は、如何なる時、如何なる處に於いても、労働者自身にとつて同一の価値を有して居らねばならぬ。彼れの健康、力、活動等が常態に在ると假定し、また彼れの有し得る熟練が平均程度のものであると假定すれば、彼れは常にその休息、自由及び幸福の同一量を割愛せねばならぬ』(『富國論』第一卷、第五章(36))。一方に、アダム・スミスはこの場合(如何なる場合にもさうとは限らぬ)商品の生産に支出された労働量が価値を決定するといふ事と、労働の価値が商品価値を決定するといふ事とを混同してゐる。随つて彼れは同一量の労働が常に同一の価値を有つといふ論證を與へようとしたのであるが、他方にまた彼れは、労働なるものは商品の価値に體現される限り労働力の支出としてのみ考慮に入ることを感じてゐた。然しこの場合にも亦、労働力の斯かる支出をば單に休息、自由及び幸福の犧牲とのみ解し、通例の生命活動(37)であるとはして居らぬ。勿論、彼れは近世の質銀労働者を眼の前に置いてゐたのである。——囊に註(九)に引抄したアダム・スミスの匿名先驅者は、スミスよりも遙か別に斯う言つてゐる。『或者は、この生活必需品を準備するため一週間の労働に従事してゐた。……而して交換に依つて異つた物品を彼れに與へるところの他の人は、自分にとつて恰度同一量の労働及び時間を要しただけのものを計算するよりも別に切には、適當の等價なるものが果して何であるかを算定することが出来ぬ。この事實は畢竟するところ、一方の人の物品に依つて代表される一定時間の労働が、他方の人の物品に依つて代表される同一時間の労働と交換されるといふことに外ならぬのである』(『前掲』一般金利特にまた公債利子に關する考想』ロンドン、第三九頁)。

〔第四版註——英語には、労働のこの二つの相異つた方面について、二つの相異つた言ひ現しを有つといふ長所がある。即ち使用価値を造り出して質的に限定される労働は Labour と對照して work (仕事) といはれ、価値を造り出して量的にのみ秤量される労働は work と對照して Labour と呼ばれる。英譯本第一四頁の註を見よ。F. E.〕

### (三) 價值形態即ち交換價值

商品は鐵、リンネル、小麦などの如き、使用價值即ち商品體の形で世に現れて来る。この形は、それらの物の在りの儘の現物形態である。然しながら、これらの物は二重物なるが故にのみ、即ち使用對象であると同時にまた價值負擔者(38)であるが



故にのみ、商品たるのである。換言すれば、これらの物は現物形態(39)と價值形態(40)との二重形態を有する限りに於いてのみ商品として現れ、又は商品の形を採ることになるのである。

商品の價值對象性(41)は攫み所のないものであつて、それはこの點に於いてタイクラー夫人(42)とは違ふのである。商品體は感性的に粗雑な對象性を有するものであるが、それと正反對に、商品の價值對象性には自然素材の一點一粒も混へられて居らぬ。されば個々の商品を如何に捻つて見ても、それが價值物(43)として攫み所のないことに變りはない。然しながら商品なるものは、同一の社會的單位なる人間労働の表章である限りに於いてのみ、價值對象性を有すること、随つてまた商品の價值對象性は、純社會的のものであることを想起するとき、この價值對象性は、商品對商品の社會的關係の上のみ現れ得ることとは、自明の事實となるのである。實際のところ、我々は曩に價值を見出すために、それを匿くまつてゐる商品の交換價值即ち交換關係から出發したのであるが、今また、この價值現象形態に論を戻さねばならぬ。

商品がその使用價值の種々雑多なる現物形態と頗る際立つて對照した共通の價值形態なる貨幣形態(44)を有つことは、何人も——他のことは知らなくても——知るところである。さりながら、我々は茲にブルジョアの經濟學に依つては未だ曾て試みられたことのない一事を成し遂げねばならぬ。それは即ち、右の貨幣形態の起源を論證すること、換言すれば商品の交換關係に含まれる價值表章(45)の發達を、その最も單純にして最も自立たぬ妻から、人目を眩惑する貨幣形態に至るまで、追跡することである。これに依つてまた、貨幣の謎は消滅することになるのである。

最も單純なる價值關係は、種類の異つた單一の商品——それは如何なる商品であつても構はない——に對する一商品の價值關係であることは明かである。斯くて二つの商品の價值關係は、一商品に對する最も單純な價值表章を供給することになるのである。

### A 單純、個別又は偶生の價值形態

x 量A商品=y 量B商品 又はA商品x量はB商品y量に値する。

20ヤールのリンネル=1織の上衣 又はリンネル20ヤールは、上衣一着に値する。

#### (1) 價值表章の兩極。相對的價值形態と等價形態

凡ゆる價值形態の秘密は、右の單純なる價值形態の中に伏在してゐる。随つて、これが分析こそ、困難の中堅たるものである。

種類の相異つた二つの商品AとB(即ち上例でいへばリンネルと上衣)は、この場合二つの相異つた役目を演ずることは明かである。即ちリンネルは上衣に依つて、その價值を言ひ現し、上衣はこの價值表章の材料として役立つのである。第一の商品は能動の役目を演じ、第二の商品は被動の役目を演ずる。第一の商品の價值は、相對的價值として表現されてゐる。換言すれば、それは相對的の價值形態(46)に在る。第二の商品は等價として作用する。換言すれば、それは等價形態(47)に在る。

相對的價值形態と等價形態とは、相互に従屬し交互に制約する不可分の二要素(48)であると同時に、また互に相排斥し或は相對抗する兩極端、換言すれば同一なる價值表章の兩極である。これらの兩形態は常に、價值表章に依つて相互關係せしめられる相異つた商品の間に配置される。例へば、リンネルの價值はリンネルでは言ひ現し得ない。20ヤールのリンネルは20ヤールのリンネル以外の、即ちリンネルなる使用對象の一定量以外の、何物でもないといふことを語るに過ぎぬのである。要するに、リンネルの價值はただ相對的のみに、即ち他の商品に依つてのみ、言ひ現され得るのである。されば、リンネルの相對的價值形態なるものは、他の何等かの商品がリンネルと對立して等價形態に在ることを前提する。他方に、等價として作用するこの他の商品は、同時にまた相對的價值形態に在り得るものではない。この商品は、自己の價值を言ひ現すものでなく、ただ他商品の價值表章の材料たるに過ぎぬのである。

勿論 20ヤールのリンネル=1織の上衣 と、言ひ現し、即ちリンネル20ヤールは上衣一着に値するといふ言ひ現しは1織の上衣=20ヤールのリンネルといふ、即ち上衣一着はリンネル20ヤールに値するといふ轉倒された關係を含む。然し上衣の價值を相對的に言ひ現すためには、この方程式を轉倒する必要がある。而して、斯くするや否や、リンネルは上衣に代つて等價となるのである。斯くの如く、同一の商品は、同一の價值表章に於いて、同時に相對及び等價の兩形態を採ることは出來ぬのであつて、これらの兩形態は寧ろ兩極的に相排斥するものである。

ところで、一の商品が相對的價值形態に在るか、又はその反對の等價形態に在るかといふことは、全く價值表章に於けるこの商品の位置の如何に懸ることである。換言すれば、それが自己の價值を言ひ現す商品であるか、又は言ひ現される商品であるかの如何に懸ることである。



(2) 相対的価値形態

a 相対的価値形態の内容

一商品の單純なる価値表章が、如何やうに二商品間の價值關係内に伏在するかを見出すためには、先づ量的方面から全く切り離して、この價值關係を觀察する必要がある。然るに大抵の人は、それと正反對の方法をとつて、價值關係の中に、二種類の商品の定量が等位に置かれる比例のみを見て、相異つた物の大小はこれを同一の單位に約元するとき、初めて量的に比較し得るに至ることを看過する。相異つた物の大小は、これを同一なる單位の言ひ現しとして見るとき、初めて同一分母の大きさとなり、随つてまた、通約し得る大きさとなるのである(十七)。

(十七) サミュエル・ペーリーと同様にして價值形態の分析に従事した少數の經濟學者たちは、第一に價值形態と價值とを混同したため、第二にまた實際的ブルジョアの粗硬なる影響を受けて最初から量的定性にのみ着眼したため、遂に何等の結果にも到達することが出来なかつた。『量の支配が、價值を構成するのである』(ペーリー著『貨幣とその變遷』ロンドン一八三七年刊、第一頁)。

20 $\text{H}_2\text{O}$ の $\text{C}_2\text{H}_4\text{O}_2$ の $\text{H}_2\text{C}_2\text{O}_4$ であるにしろ、又は  $\text{H}_2\text{C}_2\text{O}_4$ の $\text{H}_2\text{C}_2\text{O}_4$ であるにしろ、 $\text{H}_2\text{C}_2\text{O}_4$ であるにしろ、換言すればリンネルが少數の上衣に値するにしろ、多數の上衣に値するにしろ、いづれにしても、これらの比例は常にリンネルと上衣とが、價值の大きさとしては、同一單位の言ひ現しであり、同一性質の二物であることを意味してゐる。 $\text{C}_2\text{H}_4\text{O}_2$ の $\text{H}_2\text{C}_2\text{O}_4$ は、この方程式の基礎となるのである。

然し、これらの二商品は質的に等位に置かれるとはいへ、その演ずる役目は同一でない。そこでは、リンネルの價值のみが言ひ現されるのである。如何にしてか？ リンネルの『等價』又はリンネルと『交換され得る物』としての、上衣に關係せしめられることに依つてである。この關係に於いては、上衣は價值の存在形態(50)即ち價值物として通用する。なぜならば、單に斯かる物としてのみ、上衣はリンネルと同一であるからである。

他方にまた、リンネルの固有の價值性(51)が前方に現れて来る。換言すれば、それは、獨立した一表章を與へられるのである。なぜならば、リンネルはただ價值としてのみ、自己の等價物又は自己と交換され得る物としての上衣に相關となるからである。同様に酪酸は、蟻酸プロピルとは異つた物質である。然し雙方とも同じ化學的實體から成り立つてゐる。即ちいづれ

も炭素(C)、水素(H)、及び酸素(O)から成り、而かも同じ割合の結合、即ち $\text{C}_2\text{H}_4\text{O}_2$ を有つてゐる。そこで今、蟻酸プロピルを酪酸と等位に置くときは、この關係に於いて先づ蟻酸プロピルは單に $\text{C}_2\text{H}_4\text{O}_2$ の存在形態に過ぎぬものと見做されるであらう。而して次に、酪酸も亦 $\text{C}_2\text{H}_4\text{O}_2$ から成るといはれるであらう。斯くの如く、蟻酸プロピルを酪酸と等位に置くことに依つて、兩者の化學的實體は、その物體的形態から區別して言ひ現されることになるのである。

商品はこれを價值として見れば人間労働の單なる凝結であるといふとき、我々の分析に依つて商品は價值抽象(52)に約元されることになるが、然しその現物形態とは異つた何等の價值形態をも附與されることにはならぬ。然るに、他商品に對する一商品の價值關係に於いてはさうでない。この場合には、一商品の價值性質(53)は、他商品に對するそれ自身の關係を通して現れて来る。

例へば、上衣を價值としてリンネルと等位に置くとき、上衣に含まれてゐる労働はリンネルに含まれてゐる労働と等位に置かれることになる。ところが上衣を造る裁縫は、リンネルを造る機械とは異つた一の具體的労働である。然し、機械と等位に置かれることに依つて、裁縫は事實上これらの兩労働に於ける現實的等一物に、即ち雙方に共通した人間労働といふ性質に約元されることになる。この迂回に依つて、機械も亦價值を織る限りに於いては裁縫と區別せらるべき何等の特徴をも有しないこと、換言すれば抽象的人間労働であることが明かになる。種類の相異つた商品の等價表章に依つてのみ、價值形成労働の特殊性質が鮮明ならしめられる。蓋し商品に含まれてゐる種類の相異つた諸労働は、この等價表章に依つて事實上その共通物なる人間労働一般に約元されることになるからである(十七a)。

(十七a 第二版註) ウォリアム・ペーリー以後に價值の性質を看破した最初の經濟學者の一人なる有名なフランクリンは曰く『商業なるものは總じて、一の労働を他の労働と交換することに外ならぬものであらから、凡ゆる物の價值は、労働に依つて最も正確に秤量される』(スパークス編『フランクリン集』ボストン、一八三六年刊、第二卷第二六七頁(54))。斯様に凡ゆる物の價值を『労働に依つて』秤量するとき、交換される諸労働の差異は抽象し去られて、等一なる人間労働に約元されるときといふことは、フランクリンの意識しなかつたところである。彼れはこの事實を知らなかつた。然し彼れが言つてゐるのは、正にそのことなのである。即ち彼れは初めに『一の労働』と言ひ、次に『他の労働』と言ひ、最後に、凡ゆる物の價值の實體として、それ以上の名を附せず、單に『労働』と言つてゐる。

然し、リンネル價值を構成する労働の特殊性質を言ひ現しただけでは、まだ十分でない。流動状態にある人間労働力、即ち



人間労働は、価値を造り出すけれども価値ではない。それは裏切った状態に入り、對象的形態を採つたとき価値となるのである。リンネルの価値を人間労働の凝結として言ひ現すためには、我々はそれを、リンネル自身とは物的に異つてゐて、而かも同時にリンネルにも他の商品にも共通した一の「對象性」(68)として言ひ現さねばならぬ。この問題は既に解決されてゐる。

リンネルの価値關係に於いては、上衣はリンネルと質の等しい物、即ち同一性質の物として通用する。それは、一の価値であるからである。随つてそれはこの場合、価値が現れてゆくところの物、換言すればその捕捉し得べき現物形態を以つて価値を代表してゐるところの物として通用する。勿論、上衣なる商品の現物形態は、單なる使用価値である。上衣は我々の攫む最初のリンネルの一片と同様に、毫も価値を言ひ現すものではない。この事實は要するに、上衣はリンネルに對する価値關係の外に於いてよりも、その内部に於いての方が、多くの意義を有してゐる——恰も人に依つては、金織付きの上衣を着てゐると、それを着てゐない時よりも意義がある如く——ことを論證するに過ぎぬ。

上衣の生産に於いては、事實上、裁縫の形で人間の労働力が支出せられた。即ち上衣の中には人間の労働力が蓄積されてゐるのである。この方面から見れば、上衣は即ち「価値の負擔者」である。尤も上衣の斯かる性質それ自體は、上衣が如何に織り切れても、その糸目から透いて見える譯でない。而してリンネルの価値關係に於いては、上衣はただこの方面からのみ、即ち體現された価値として、価値物體としてのみ、意味を有つてゐる。リンネルは上衣がボタンをかけた盛裝に誤られず、その中に己れと血筋の繋つた美しい価値の魂を認めただのである。然しリンネルから見れば、価値が同時に上衣の形を採ることなくば、上衣はリンネルに對して価値を言ひ現し得るものでない。それは恰度、Bなる個人から見れば、Aなる個人が同時にまたAなる個人に對して陛下たり得ないのと同様である。

上衣がリンネルの等價たる価値關係に於いては、上衣形態が価値形態として通用し、リンネルなる商品の価値は、上衣なる商品の現物體を通して言ひ現される。即ち一商品の価値は、他商品の使用価値に依つて言ひ現されることになるのである。リンネルはこれを使用価値として見れば、感性的に上衣と相異なる一物であり、また価値として見れば、「上衣に等しき物」であつて、上衣たるが如く見える。斯くしてリンネルは、その現物形態とは異つた価値形態を與へられることになる。リンネルの価値性(67)は、上衣との等性を通して現れる。それは恰度、クリスト信者の羊性が「神の小羊」との等性を通して現れるのと同じである。

■ 眞に商品価値の分析が我々に語つた一切のことは、今やリンネル自身が他の商品上衣との交通を通して語つてゐるのを見るのである。ただリンネルは、己れ一人だけに通ずる言語、即ち商品語を以つてその思想を洩らすのである。リンネルはその価値が人間労働といふ抽象的性質から見た労働に依つて形成されることを語らんとするに、上衣なるものは、それがリンネル自身と等しく通用する限り、即ち価値である限り、自身と同一の労働から成ると言ふのである。リンネルはその崇高なる価値對象性がその粗硬なる現物體とは異なるものであることを語らんとするに、価値は上衣のやうに見える、随つてリンネルそれ自身はこれを価値物として見れば、上衣と全るで瓜二つだと言ふのである。ついでに言ふが、商品語もヘブライ語の外に尙幾多の、多かれ少なかれ正確な方言を有つてゐる。例へばラテン系の動詞ヴァレレ、ヴァレル、ヴァロアル(68)は、ドイツ語の「ヴェルトザイン」(69)よりもヨリ適切に、Bなる商品をAなる商品と等位に置くことは、Aなる商品それ自身の価値表章たることを言ひ現すものである。パリーは眞祭も同然だ(69)!

価値關係に依つて、商品Bの現物形態は、商品Aの価値形態となる。換言すれば、商品Bの現物體は商品Aの価値鏡となるのである(十八)。商品Aは、価値體としての、即ち人間労働の體化としての商品Bに關聯せしめられること(61)に依つて、使用価値Bを自分自身の価値表章とする。斯く商品Bの使用価値に依つて言ひ現された商品Aの価値こそ、相對的価値といふ形態を有するものである。

(十八) 或意味に於いて、人も亦商品の如くである。人は鏡を手にしてこの世に來たるものではなく、また「我は我なり」と主張するフキヒテ流の哲學者としてこの世に來たるものでもないから、彼れは先づ他の人に自分の姿を映して見る。ペテロなる人は先づ自分に等しいものとしてのポロなる人に連繫して(62)、初めて人としての自分自身に連繫するのである。然しまた、皮膚と毛髪とを有するポロは、斯くの如き現身のポロとして、人類なる種屬の現象形態として、ペテロの目に映るのである。

b 相對的価値形態の量的限定性

価値を言ひ現さるべき各商品は、十五シエッフエルの小麦、百斤の珈琲、などの如き一定量の使用對象である。斯くの如き一定の商品量は、一定量の人間労働を含むものである。されば、価値形態は、單に価値一般を言ひ現すばかりではなく、また量的に限定された価値、即ち価値の大小をも言ひ現すべきものとなる。斯くて商品Bに對する商品A、即ち上衣に對するリンネルの価値關係に於いては、上衣なる商品種類は單に価値體一般として質的にリンネルと等位に置かれるのみでなく、また例



へは二十ヤールのなる一定量のリンネルに對して、例へば一着の上衣といふが如き一定量の價值體又は等價物が等位に置かれることにもなるのである。

二十ヤールのリンネルに於けると正確に等量の價值體が含まれてゐること、即ちこれら二つの商品量はともに同じ分量の労働同じ大きさの労働時間に値することを前提する。然るに二十ヤールのリンネル、又は一着の上衣の生産に必要な労働時間は、機織若しくは裁縫上の生産力(力)に變化ある都度變化のするものである。そこで以下、斯くの如き變化が價值大小の相對的表章に及ぼす影響を研究せねばならぬ。

一、上衣の價值が不變で、リンネルの價值が變化する場合(十九)。例へば亞麻栽培地の豊度が減じたため、リンネルの生産に必要な労働時間が二倍に増大したとすれば、リンネルの價值も亦二倍に増大する。斯くて、 $20ヤールのリンネル = 1織のT$ は、 $20ヤールのリンネル = 2織のT$ となるであらう。なぜならば、一着の上衣は今や二十ヤールのリンネルに比べて僅かに二分の一の労働時間しか含まぬことになるからである。反對に例へば、機織が改良された結果、リンネルの生産に必要な労働時間が半分減じたたとすれば、リンネルの價值も亦半減して、今や $20ヤールのリンネル = 1織のT$ となる。されば商品Aの相對的價值、即ち商品Bに依つて言ひ現された商品Aの價值は、商品Bの價值に變化がないとすれば、商品Aの價值に正比例して増大し又は減少するのである。

(十九)「價值」といふ言ひ現しは、この場合——上段の説明に於いても、時に臨んで暫行的に用ゐた如く——量的に限定された價值、即ち價值量の意味に用ゐてある。

二、上衣の價值が變動して、リンネルの價值が不變である場合。例へば羊毛の收穫思はしからざるため、上衣の生産に必要な労働時間が二倍に増大したとすれば、 $20ヤールのリンネル = 1織のT$ は、 $20ヤールのリンネル = 2織のT$ となる。反對に若し上衣の價值が半分減じたたとすれば、 $20ヤールのリンネル = 2織のT$ となる。即ち商品Aの價值に變化なきときは、商品Bに依つて言ひ現されるAの相對的價值は、Bの價值變化に逆比例して増減することになるのである。

以上(一)及び(二)に於ける種々なる場合を比較するとき、相對的價值の同一なる分量變化が全く反對の原因から生じ得ることが知られる。即ち、 $20ヤールのリンネル = 1織のT$ なる方程式は、(一)リンネルの價值が二倍に増大した結果として、又は上衣の價值が半分に減じた結果としても、 $20ヤールのリンネル = 2織のT$ なる方程式に轉化され、更に(二)リ

ンネルの價值が半分に減じた結果としても、又は上衣の價值が二倍に増大した結果としても、 $20ヤールのリンネル = 1織のT$ なる方程式に轉化されるのである。

三、リンネル及び上衣の生産に必要な労働が、時を等しうして同一の方向に同一の比例を以つて變化することもあり得る。斯かる場合には、雙方の價值が如何ほど變化しても、 $20ヤールのリンネル = 1織のT$ なる方程式には變化がない。リンネル及び上衣の斯かる價值變化は、價值不變なる第三の商品と比較して見れば解る。若し凡ゆる商品の價值が同時に同一の比例を以つて増騰し又は低落するとすれば、相對的價值には變化が生じないであらう。この場合に於ける現實的の價值變化を知るには、右の價值騰落以後、同一の労働時間を以つて生産せられる商品量が従前に比して一般に大となつたか、小となつたかを見るべきである。

四、リンネルと上衣夫々の生産に必要な労働時間、隨つて夫々の價值は、時を等しうして同一の方向に、然し異つた比率を以つて又は反對の方向その他の様式に變化し得る。而して斯種の在り得べき一切の變化の結合が一商品の相對的價值に及ぼす影響は、單純に上記(一)(二)(三)各場合の應用に依つて知られるところである。

要するに、價值量の現實的變化は、相對的表章(即ち相對的價值の大小)に依つて一點の疑をも残さざる様に、又は一の餘すところなき迄に、反映されるものではない。商品の價值は不變であつても、相對的價值は變化し得る。また價值は變化しても、相對的價值は不變たることもあり得る。最後にまた、價值量とその相對的表章とが同時に變化しても、斯かる變化は必ずしも相一致するものでないのである(二十)。

(二十) 第二版註——價值量とその相對的表章との間の斯かる不一致は、俗學的經濟學に依りお定まりの鋭さを以つて利用されたところである。一例を擧げて見よう。「Aと交換されるBが増進する結果、Aが低減する(Aの生産に支出される労働が減少せざるに)ことを一度び許容するとせよ。然らば汝の普遍的な價值律は立どころに倒れてしまふ。……彼れ(リカルド)にして若し、Aの價值がBに比べて増進するとき、Bの價值がAに比べて低減することを許すとすれば、彼れは正に商品の價值は常にその商品の中に體化されてゐる労働に依つて決定されるといふ大命題の根柢を覆へすことになる。蓋しAの費用に於ける變化が、Aと交換されるBに關係させて見たAの價值を變化せしむるのみでなく、またBを生産する労働の分量に何等の變化も生ぜざるに、Aの價值に比べてBの價值を變化せしめるとせば、それこそ一の物品に附與された労働の分量が、その物品の價值を調節する(四)と主張する説を覆へす以上に尙、物品の生産費が價值を調節すると主張する



説をも、覆へすことになるからである』(ブロードハースト著『經濟學』ロンドン、一八四二年刊、第一一及び一四頁(66)。ブロードハースト氏は同様に斯うも言ひ得るのである。——試みに $\frac{10}{20}$ 、 $\frac{10}{50}$ 、 $\frac{10}{100}$ 等の分数を見よ。10なる数字は不變である。然しその相對的の大き、即ち分母20,50,100等に比例した大きは不斷に減少してゆく。斯くて例へば十なる整数の大きは、その中に含まれてゐる一なる單位の數に依つて『調節』されるといふ大原則は覆へされることになる。

(3) 等 價 形 態

Aなる一商品(リンネル)の價值が、種類の異つたBなる一商品(上衣)の使用價值に依つて言ひ現されるとき、後者それ自身の上に等價といふ特殊の價值形態が印刻されることは、我々の既に見たところである。リンネルなる商品は、上衣がその物體の形態とは異つた價值形態を採ることなくして自己と等しい値に通用するといふ事實に依つて、それ自身の價值性を表明する。即ちリンネルは實際のところ、上衣が直接自己と交換し得るといふ事實に依つて、それ自身の價值性を言ひ現すものである。されば、一商品の等價形態とは、要するに、それが他商品と直接に交換され得ること(66)の形態なのである。

上衣の如き商品種類が、リンネルの如き他の商品種類に對して等價の役をつとめるとしても、随つて、リンネルと直接に交換され得る形態に在るといふ特殊の性質が上衣に與へられるとしても、上衣とリンネルとの交換されべき比率は、それだけではまだ確められたことにならぬのである。リンネルの價值の大小は一定してゐるのであるから、この比率は上衣の價值の大小に懸る譯である。上衣が等價として、リンネルが相對的價值として、言ひ現されてゐるにしろ、或は反對に、リンネルが等價として、上衣が相等的價值として、言ひ現されてゐるにしろ、いづれにしても上衣の價值の大小が、その生産に必要な労働時間に依つて決定され、随つて價值形態から獨立して決定されることに變りはない。然し上衣なる商品種類が價值表章上、等價の位置を占めるや否や、その價值量はもはや價值量としての表章を受けなくなる。價值方程式の上からいへば、上衣なる商品種類は寧ろ一の物の定量として作用するに過ぎなくなる。

例へば、四十ヤールのリンネルは如何に『値して』ゐる。何に値してゐるかといへば、即ち二着の上衣に値してゐるのである。上衣なる商品種類はこの場合等價の役割を演ずるのであるから、換言すれば上衣なる使用價值はリンネルに對し價值體として通用するのであるから、随つてまた一定量の上衣はリンネルなる一定の價值量を言ひ現すに十分のものとなる。斯くして二着の上衣は四十ヤールのリンネルの價值量を言ひ現し得る。然しそれは自分自身の價值量、即ち上衣の價值量を言ひ現し得

るものでない。この事實、即ち等價なるものは、價值方程式上つねに一の物の、一の使用價值の、單純なる形態を有するに過ぎぬといふ事實の皮相的解釋こそ、かのペーリー並びに彼れ先驅者たり後繼者たる多くの人々をして、價值表章の中に單なる量的比率を見るの錯誤に陥らしめたものである。而も事實は寧ろ、商品の等價形態なるものは、何等の量的價值決定をも含むものでない。

等價形態を考察する際我々の注意に上る第一の特色は、使用價值が其反對物たる價值の現象形態になるといふ事實である。商品の現物形態は價值形態となる。然し茲に注意すべきことは、この物對物(67)はこれを商品B(上衣なり、小麦なり、鐵なり)の立場から見れば、他の隨意の一商品A(リンネルなど)が、それと關係せしめられる價值關係の内部にのみ、ただこの關係の範圍内のみ、行れるといふ事實である。如何なる商品も、それ自身に對しては等價關係に立つことが出來ず、随つてまた、自身の現物形態を以つて自身の價值の表章たらしめることは出來ぬのであるから、勢ひ他の商品を等價として、それに關係せねばならぬことになる。即ち他商品の現物形態を以つて、自己の價值形態たらしめねばならぬのである。

いま、商品體としての商品體、即ち使用價值としての商品體に適用される一の尺度を以つて、この事實を例解しよう。棒砂糖は物體なるが故に、重さを有してゐる(68)。随つて目方がある(69)。然し如何なる棒砂糖を眺めても、擦つても、その目方は分らない。いま、豫め目方の確定された種々なる鐵片を採る。鐵片の具體的形態は、棒砂糖の具體的形態と同様に、それ自身として考察するとき、重さの現象形態ではない。然し棒砂糖を重さとして言ひ現すには、それを鐵との重量關係に置く。この關係に於いては、鐵は重さ以外には何物をも代表せざる物體として作用する。されば鐵の各分量は、砂糖の目方の尺度として役立つ。砂糖體に對しては單なる代表された重さ(70)即ち重さの現象形態を代表することになる。而してこの役目は、砂糖なり、目方の確定せらるべき他の何等かの物體なりが、鐵との間に結ぶ右の關係の内部に於いてのみ、鐵に依つて演ぜられるのである。若しいづれにも重さが無いとすれば、兩者はこの關係に入ることが出來ず、斯くして一方は他方の重さの表章としては役立ち得なくなるであらう。

雙方を秤皿に載せるとき、いづれも重さとして同一物であること、随つてまた一定の比率に置いて見れば、いづれも同じ目方のものであることを、我々は事實に於いて知るのである。斯くの如く、目方の尺度としての鐵體は、棒砂糖に對して單に重さのみを代表するのであるが、それと同様に、上記の價值表章に於いても、上衣體はリンネルに對して單に價值のみを代表するのである。



然しこの點で、類似は終つてしまふ。織は砂糖の目方の表章たる資格を以つて、この兩物體に共通の現物性質なる重さを代表するのであるが、上衣はリンネルの價值表章たる資格を以つて、この兩物體の超自然的性質たる價值、即ち純粹に社會的のもの代表するのである。

一の商品なる例へばリンネルの相對的價值形態が、この商品の現物體及びその諸性質とは全く異つた或物、例へば上衣に等しき物として、それ自身の價值性を言ひ現すとき、この表章それ自身は一の社會的關係を包蔵するものであることを仄かしてゐる。等價形態の場合には反對である。蓋し等價形態なるものは、上衣の如き商品體がその儘の姿で價值を言ひ現してゐるといふこと、換言すれば本來的に價值形態を具備してゐるといふことを本領としてゐるのである。これは上衣商品がリンネル商品に對して等價の位置に立つ價值關係の内部に於いてのみ、言ひ得ることである(二十一)。然し物の諸性質は、他物に對するその物の關係から生ずるのではなく、寧ろ斯かる關係を通して顯證されるに過ぎぬのであるから、上衣はその等價形態、即ち直接に交換し得るといふ性質を、重さや保温性と同様に本來具備してゐるやうに見える。この點に、等價形態の謎的性質が由来してゐるのである。この謎的性質は、等價形態が完全に發達し、貨幣の形をとつて經濟學者の前に現はれるに及んで、初めて彼れのブルジョアの的に複雑な注意に上るのであつて、そのとき彼れは金銀に換ふるに、それほどまばゆくない諸商品で以つてすることに依り、また嘗て商品等價の役目を演じた凡ゆる商品の目録をば常に新たな満足を以つて讀み上げることに依つて、金銀の神祕的性質を解き去らうとする。ゴーン・シヨック・マニエールといふ如き最も單純なる價值表章が、既に等價形態の謎を提出してゐることは、彼れの氣付かなかつたところである。

(二十一) 斯かる反射關係は總じて一種特別なものである。例へば、或人は他の人々が彼れに對して臣民たる關係に立つが故にのみ國王である。然るに後者は前者が國王なるが故に、その臣民たるものと考へてゐる。

等價として役立つ商品の現物體は、常に抽象的人間労働の體化たるものであつて、それは一定の有用な具體的な労働の產物たることを常とする。斯くして、この具體的労働は、抽象的の人間労働を言ひ現したものである。例へば、上衣が抽象的の人間労働の單なる體現として通用するとき、事實上上衣の中に體現されてゐる裁縫も亦、抽象的の人間労働の單なる體現形態として通用することになる。リンネルの價值表章を通して見られる裁縫の有用性なるものは、この労働に依つて衣服隨つてまた人のミナリが造られるといふ點に存するものでなく、寧ろ價值たること、隨つてまたリンネルの價值に對象化されてゐる労働から毫も區別し得ざる労働の凝結たることを認めしむる一の物體が、それに依つて造られるといふ點に存してゐるのである。斯様な價值體となるためには、裁縫それ自身が人間労働たる抽象的性質以外の何物をも反射しないことを必要とする。裁縫なる形態に於いても、機械なる形態に於いても、人間労働力が支出されるといふ點に差異はない。即ち雙方とも人間労働の一般的性質を具備してゐるのであつて、例へば價值生産といふ如き一定の場合に於いては、いづれもこの見地の下にのみ考慮に入り得るのである。これら總べての點を通して、神祕的なところはなない。然し商品の價值表章になると、問題が轉倒して來る。一例を舉ぐれば、機械は機械たる具體的形態に於いてでなく、人間労働たる一般的性質に於いて、リンネルの價值を形成するといふ事實を言ひ現すためには、リンネルの等價を生産するところの裁縫なる具體的労働が、抽象的の人間労働の明瞭なる體現形態として機械に對立して來るのである。

斯くの如く、具體的労働がその反對物なる抽象的の人間労働の現象形態になるといふ事實こそ、等價形態の第二の特色たるものである。

然しこの具體的労働なる裁縫は、無差別なる人間労働の單なる表章として通用するとき、他の労働、即ちリンネルの中に含まれてゐる労働と等一の形態を有し、隨つて他の凡ゆる商品を生産するところの労働と同様に私的労働であるとはいへ、而かも直接に社會的なる形態を採つた労働となるのであつて、さればこそ、それは他の商品と直接に交換し得る生産物となつて現れるのである。斯く私的労働がその反對の形態なる直接社會的の形態を採つた労働になるといふことは、即ち等價形態の第三の特色たるものである。

これらの最後に述べた等價形態の二特色は、かの思想形態や、社會形態や、自然形態など幾多の形態と相並んで、更らに價值形態をも初めて分析したところの大思想家に溯つて考へるとき、ヨリ理解し易きものとなる。その大思想家といふのは、即ちアリストテレスのことである。

アリストテレスは先づ、商品の貨幣形態なるものが單純なる價值形態 換言すれば、任意に選んだ何等かの商品を以つてする一商品の價值表章の更らに發達した姿容に過ぎぬことを明かに述べてゐる。即ち彼れは「*ἀπὸ τῆς ἑνὸς ἀγαθοῦ*」といふ語句と「異なるところがない」と言つてゐる。

彼れはまた、この價值表章を含む價值關係が更らに、家屋が樺と質的に等しいものとされること、並びに斯かる本質上の等一性なくば、これらの感性的に相異つた物は、通約し得べき大さとして相互に關係せしめられ得るものでないことを認めてゐる。彼れは言ふ。「交換は等一なくして存在し得るものでなく、等一は通約性なくして存在し得るものでない」とが、



彼れは致で行き詰つてしまつて、價值形態のそれ以上に進んだ分析を放棄してゐる。「然し漸く種類の異つた物が通約され得るといふこと」換言すれば質的に等しいといふことは、「本當は不可能である。斯かる等一は、これらの物の眞の性質には關係なきものであつて、『實地の必要に對する應急策』たり得るに過ぎぬのである。」

要するに、アリストテレスは、彼れのそれ以上に進んだ分析が如何なる點で頓挫したかをみづから語つてゐる譯である。即ち、價值概念の缺如といふことがその頓挫の原因となつたのである。褥の價值表章に於いて、家屋が褥に比して代表するところの等一物、換言すれば、家屋と褥との雙方に共通するところの實體は何であるか？ 斯様な物は「本當は存在し得るものではない」と、アリストテレスは言ふ。何故存在し得ないか。褥と家屋との雙方に於ける現實的の等一物が家屋に依つて代表される限り、家屋は褥に比して等一物を代表することになる。而してその等一物とは、即ち人間労働のことである。

然るに、商品價値の形態に於いては、一切の労働が等一なる人間労働として、即ち同じ値打のものとして言ひ現されるといふ事實をば、價值形態それ自身の中から看取することを、アリストテレスにとつて不可能ならしめた原因がある。それは即ち、ギリシアの社會は奴隷労働に立脚するものであつて、人類及びその労働力の不等を自然的の基礎にしてゐたといふ事實である。一切の労働は人間労働一般であるが故に、又その限りに於いてのみ、等一であり同じ値打のものであるといふ、價值表章の秘密は、人類平等の概念が既に固定して先入的の俗見となつたとき、初めて解明し得るものである。然し斯かる事實は、商品形態が労働生産物の一般的形態となり、隨つてまた商品所有者としての人類相互の關係が、支配的の社會關係となつてゐる社會の下に、初めて行はれ得ることである。アリストテレスは商品の價值表章の中に等一關係を發見した點に、天才の閃きを示してゐるが、彼れの生存せる社會の歴史的制限に依つて、この等一關係なるものが「本當は」如何なる事實に存してゐるかを見出すことを妨げられたのである。

#### (4) 單純價值形態の總體(7)

一商品の單純なる價值形態は、種類の異つた他の一商品に對する價值關係、換言すれば交換關係の中に含まれてゐる。商品Aの價值は、商品Bを以つてそれと直接に交換し得るといふ事實に依つて、質的に言ひ現され、また、商品Bの一定量を以つて商品Aの一定量と交換し得るといふ事實に依つて、量的に言ひ現される。語を換へていへば、一商品の價值は、それが「交換價值」として表現されることに依り、獨立した形に言ひ現されるのである。本章の冒頭に於いては、通俗的に、商品は使用

價值及び交換價值であると言つたが、それは嚴密に言ふと誤りである。商品は使用價值即ち使用對象であつて、且つ「價值」なのである。商品はその價值が現物形態とは異なる特殊の現象形態を、交換價值なる形態を探るとき、斯かる二重物として表現されるのであつて、この形態は商品を他から切り離して觀察するときは決して存在するものでなく、種類の異つた他の一商品との價值關係又は交換關係に於いてのみ得られることになるのである。これだけのことを心得て置けば、右の如き言ひ方も有害とはならず、却つて省略の目的に役立つのである。

商品の價值形態換言すれば價值表章なるものは、商品價値の性質に起因するものであつて、反對に價值及び價值大小が交換價值なる表章様式に起因するものでないことは、曩の分析に依つて論證されたところである。而もこの後ちの見解こそ、マーカントリスト及びその近世的の蒸し返し屋なるフェリエー、ガニール(二十二)等、並びに彼等の反對論者なるバスターア及びその一派の如き近世自由貿易商人等の懐いてゐた妄想なのである。マーカントリストは價值表章の質的方面に重きを置き、斯くして貨幣に依り完成姿容を與へられるところの、商品の等價形態を特に強調することになつたのである。これに反して、如何なる價格を以つても商品を賣り飛ばしてしまはねばならぬ近世自由貿易商人は、相對的價值形態の量的方面に重きを置くのであつて、彼等から見れば、商品の價值も價值大小も、交換關係に依る表章以外の處、換言すれば、日々の物價表以外の處には存在するものでない。スコットランド人マクラウドは、ロムバード街(22)の錯亂したる觀念をば出來得る限り學識的に粉飾する任務を以つて、迷信的なマーカントリストと啓蒙された自由貿易商人とを綜合せしむることに成功したのである。

(二十二) 第二版註——エフ・セー・アー・フェリエー(税關副検査官)著『商業に關聯して考察せる政府』パリ、一八〇五年刊。シァール・ガニール著『經濟學體系』第二版、パリ、一八二一年刊(73)。

我々は商品Bへの價值關係に含まれてゐる商品Aの價值表章を仔細に觀察することに依つて、この關係の内部に於いては商品Aの現物形態は單に使用價值の姿容としてのみ、また商品Bの現物形態は單に價值形態即ち價值姿容(74)としてのみ通用することを明かにした。斯くして、各商品の中に含まれてゐる使用價值と價值との内部的對立は、外部的の對立に依り、換言すれば價值が言ひ現さるべき商品を直接單に使用價值としてのみ通用せしめ、反對に、價值を言ひ現す方の商品を直接單に交換價值としてのみ通用せしむる二商品間の關係に依つて、表現されることになる。要するに一商品の單純なる價值形態は、その商品の中に含まれてゐる使用價值と價值との對立の單純なる現象形態となるのである。

如何なる社會狀態の下に於いても、労働生産物は使用對象たるものであつて、ただ使用物品の生産上に支出された労働をそ



の『對象的』性質として、價值として、表現せしむる歴史的に限定された一の發展時期に於いてのみ、勞働生産物は商品に轉化されるのである。そこで商品の單純なる價值形態は、同時にまた、勞働生産物の單純なる商品形態であり、隨つて商品形態の發達なるものは、價值形態の發達と一致するといふことになる。

單純なる價值形態が不十分であることは、一見して知られる。この價值形態は、一列の轉形を遂ぐることに依つて初めて價格形態に熟成するところの胚種形態に過ぎぬものである。

商品Aの價值が他の何等かの商品に依つて言ひ現されるといふことは、要するに、Aの價值がそれ自身の使用價值から區別されるといふことに過ぎぬ。隨つてこの表章は、Aをそれ自身とは異つた何等かの單一なる商品種類との交換關係に置くだけであつて、他の凡ゆる商品に對するAの質的等一並びに量的比例を表現するものではないのである。A商品の單純なる相對的價值形態は、他の一商品の單一なる等價形態を伴ふ。斯くして上衣なる商品は、リンネルの相對的價值表章たる關係に於いては、リンネルといふ單一の商品種類についてのみ等價形態、即ち直接に交換し得る形態を採ることになるのである。

だが、單一なる價值形態は、おのづからヨリ完全な形態に推轉するものである。單一なる價值形態に依つても、Aなる一商品の價值が、種類の異つた單一の商品を以つて言ひ現されることは事實である。然しこの第二の商品が如何なる種類の物であるか、即ちそれが上衣であるか、織であるか、小麥又はその他の物であるかといふことは、どうでもよい問題である。そこで甲なる商品種類に對して價值關係に入るか、乙なる商品種類に對して價值關係に入るかに従つて、同一商品についても種々異つた單純なる價值表章が生ずることになる(二十三a)。斯様な可能的價值表章の數は、他の異つた商品種類の數に依つてのみ制限される。斯くて商品の個別的價值表章は、種々異つた單純なる價值表章の絶えず延長し得る一列に轉化される譯である。

(二十三a) 第二版註——例へば、ホーマーについて見るに、一の物の價值は種々異つた一列の諸物に依つて言ひ現される。

B 總體的の、換言すれば擴大されたる價值形態(23)

量A商品=1量B商品 又は =1量C商品 又は =1量D商品 又は =1量E商品 又は =etc.  
20ヤールのリンネル=1着の上衣 又は =10斤の茶 又は =40斤の咖啡 又は =1ダマターの小麥 又は =2オンスの金  
又は =1/2ポンドの銀 又は =etc.

(1) 擴大されたる相對的價值形態

一の商品、例へばリンネル、の價值は、今や商品界の他の無數の要素に依つて言ひ現されることになつた。他の各商品體は、リンネル價值の鏡となるのである(二十三)。斯くしてこの價值それは自身は、茲に初めて眞に無差別的な人間勞働の凝結として現れることになる。蓋し、この價值を形成するところの勞働は、今や明かに他の凡ゆる勞働と——これらの勞働が如何なる現物形態を有するにもせよ、即ち上衣に對象化されるか、小麥に對象化されるか、それとも織、金その他の物に對象化されるかを問はず——同じ値打の勞働として表現されることになるからである。リンネルはまた、今やその價值形態に依つて、もはや他の個別の商品種類のみに對して社會的關係に立つものではなく、商品界全體に對して同一の關係に立つこととなる。それは商品たる資格に於いては、この商品界の一市民である。同時にまた、その表章が無限に連系するといふ事實の中に、商品價值なるものは、それが現れてゆく使用價值の特殊形態に對しては無頓着であるといふ事實が存在してゐるのである。

(二十三) さればリンネルの價值が上衣に依つて表現される時は、リンネルの上衣價值といひ、小麥に依つて表現される時は、リンネルの小麥價值といふ。斯種の言ひ現しは、いづれも、上衣や小麥などの使用價值を通して現れるものが、リンネルの價值であることを示すのである。『如何なる商品の價值も、交換上の關係を示すものであつて……それと交換せらるべき商品の如何に従つて、或は小麥價值、或は織物價值などといひ得るものである。斯くして種類を異にした幾多の價值が、存在してゐる商品と同數の相異つた價值が存在することになる。而してこれらの價值はいづれも等しく現實的にして且つ名目的のものである』(『價值の性質、尺度及び原因に關する批判論。主としてリカルド及びその學徒の著作について。』諸見解の形成その他を論ずる作者著『ロンドン一八二五年刊、第三九頁(76)』)。この匿名書の著者サミュエル・ペーリーは當時イギリスの論壇を頗る騒がしたものであるが、彼れは斯く同一なる商品價值の種々雑多な相對的表章を指摘することに依つて、價值の凡ゆる概念決定を撲滅したものと考へた。彼れの見解は偏狹であつたとはいへ、とにかく彼れがリカルド説の急所を衝いたことは、リカルド學派が斯くまで激増して彼れを攻撃した(例へば『ウェストミンスター・レビュー』誌上で)事實から推知されるところである。

20ヤールのリンネル=1着の上衣 なる第一形態に於いては、これらの二商品が一定の分量比例を以つて交換され得るやう



になるのは偶然的の事實であり得る。然るに、第二形態に於いては、偶然的の現象とは本質的に異なり且つそれを決定するところの背景が直ちに認められる。リンネルの價值は、それが上衣、珈琲又は鐵などの、いづれに依つて表現されやうとも、語を換へて言へば種々様々の所有者の手に屬する無數の相異つた商品のいづれに依つて表現されやうとも、その大小には變化がない。斯くして二人の個別的商品所有者間に於ける偶然的の關係は消滅し、交換が商品價値の大小を規制するのではなく、反對に商品價値の大小が商品の交換比例を規制するものであることが明かになる。

(2) 特殊の等價形態

上衣、茶、小麥、鐵などの如き各商品は、リンネルの價值表章に於いては等價として、随つてまた價值體分として通用する。これら各商品の一定の現物形態は、今や夫々相並んで特殊の等價形態となる。同様に、これら種々なる商品體に含まれてゐる様々の具體的にして有用なる一定の労働種類も亦、今や人間労働それ自身の同様に數多き特殊の實現形態として、現象形態として、通用するのである。

(3) 總體的なる、換言すれば擴大されたる、價值形態の缺點

先づ、商品の相對的價值表章は未完成のものである。その表現系列は結了することがないからである。各價值方程式を相互に結合する鋼は、新たなる價值表章の材料を供給するところの、新たなる商品種類が現れて来る度び毎に、絶えず延長し得るものとなつてゐる。第二に、この鋼は相互に一致することなき、種類の相異つた様々の價值表章より成る錯雜な奇木細工を成してゐる。最後に——これは爾かあらねばならぬことであるが——各商品の相對的價值が、この擴大された形態を以つて言ひ現されるとすれば、各商品の相對的價值形態は他の各商品の相對的價值形態とは異つた價值表章の限りなき連系となる。擴大された相對的價值形態の缺點は、この形態に照應せる等價形態の上に反射する。各個の商品種類の現物形態はこの場合、他の無數の特殊等價形態と相並んだ特殊の等價形態であるから、總じてただ相互に排斥し合ふところの制限された等價形態のみが存在することになる。同様に、特殊の各商品等價に含まれてゐる一定の具體的な有用な労働種類は、人間労働の特殊な現象形態に過ぎず、随つて人間労働の餘すところなき現象形態となるものではない。人間労働なるものは、これらの特殊現象形態の中に、その完全なる又は總合的の現象形態を有してゐることは事實であるが、然し何等の統一的な現象形態をも有しては居らぬのである。

けれども、擴大されたる相對的價值形態は、第一形態に屬する左の如き單純なる相對的價值表章又は方程式の總和のみから成るものである。

20ヤールのリンネル=1蒲の上衣

20ヤールのリンネル=10斤の茶 その他

然るに、これらの方程式の各はまた、これを轉換して考へると、次の如き同一なる方程式をも含むことになる。即ち

1蒲の上衣=20ヤールのリンネル

10斤の茶=20ヤールのリンネル その他

實際のところ、或一人がそのリンネルを以つて他の多くの商品と交換し、斯くしてこのリンネルの價值が他の一列の諸商品に依つて言ひ現されることになると、他の多くの商品所有者も亦必然的にその商品を以つてリンネルと交換し、斯くして彼等の種々異つた商品の價值は、リンネルといふ同一なる第三の商品に依つて言ひ現されねばならぬことになる。そこで、20ヤールのリンネル=1蒲の上衣 又は =10斤の茶 又は = $\dots$ の等 といふ系列を轉換し、斯くして本來すでにこの系列の中に含まれてゐる逆行的の關係を言ひ現すとすれば、その場合には左の如き結果が得られることになる。

C 一般的の價值形態





(1) 価値形態の變化したる性質

商品は今や(一)その価値をば單一なる商品に依つて表現するが故に單純に表現し、また(二)同一の商品を以つて表現するが故に統一的に表現するものであつて、商品の価値形態は單純であると同時に、共通的であり、隨つて一般的のものとなる。第一及び第二の形態はいづれも、一商品の価値をば、この商品自身の使用價值たる商品體から區別した物として言ひ現すに過ぎぬ。

第一の形態は、 $1 \text{ 茶} \parallel 20 \text{ 糸}$ 、 $10 \text{ 糸} \parallel 1 \text{ 茶}$ の如き價值方程式を生ぜしめた。上衣の價值はリンネルに等しき物として、また茶の價值は鐵に等しきものとして言ひ現される。然し上衣並びに茶のこれらの價值表章なるリンネルに等しき物と、鐵に等しき物とは、リンネルと鐵とが異なると同様に相異なるものである。斯かる形態は、實際上には労働生産物が偶然的のまた時折り行はれる交換に依つて商品に轉化される極初期の時代のみ生ずることは明かな事實である。第二の形態は、第一の形態よりも完全に、一商品の価値をばそれ自身の使用價值から區別する。蓋し上衣を例に採るならば、その價值は今や一切の可能な形態を以つて、リンネルに等しき物、鐵に等しき物、茶に等しき物として、即ち上衣以外の凡ゆる物として、自己の現物形態に對立するからである。他方にまた、諸商品の共通した各價值表章はこの場合、直接に排除されることとなる。今や、夫々の商品の價值表章に於いて、他の一切の商品は、等價なる形態を以つてのみ現れることになるからである。擴大されたる價值形態は、一の労働生産物なる例へば家畜の如きものが、もはや例外的にでなく、寧ろ習慣的に、他の種々なる商品と交換されるやうになるとき、事實上初めて出現し來たるものである。

この新たに得られた形態に依つて、商品界の諸價值は、商品界から切り離された共通の同一商品種類なる例へばリンネルを以つて言ひ現され、斯くして凡ゆる商品の價值は、これらの物がリンネルに等しいといふ事實に依つて表現されることになる。各商品の價值は、今やリンネルに等しき物として單に自分自身の使用價值から區別されるのみではなく、また他の凡ゆる使用價值からも區別される。而して正にこの事實に依り、各商品の價值は、一切の商品との間に共通せるものとして言ひ現されることになる。即ちこの形態に依つて、初めて諸商品は現實的に價值として相互關係せしめられ、相互に交換價值として現れ得るやうになるのである。

さきの兩形態は、各商品の価値をば、種類の異つた單一の商品なり、又は斯くの如き一列の多數商品なりのいづれかに依つ

て言ひ現すものであつて、これらのいづれの場合に於いても、個々の商品が價值形態を採るのは、謂はば個々の商品の私事であつて、他の商品よりの助力なくして遂行し得るところのものである。他の商品は寧ろ前者に對し、等價としての單なる被動的な役<sub>レ</sub>を演ずるに過ぎぬ。反對に、一般的の價值形態は、商品界の共同事業としてのみ生ずるものであつて、一の商品は、他の凡ゆる商品が同時に同一の等價を以つてその價值を言ひ現し、而して新たに出現する商品種類は、いづれもそれを模倣せねばならぬといふ理由に依つてのみ、一般的の價值表章を受けるのである。これに依つて次の事實が明かになつて來る。即ち商品の價值對象性<sub>(78)</sub>なるものは、商品の單なる『社會的存在』に過ぎぬものであるから、商品の全般的な社會的關係に依つてのみ言ひ現され得るものであり、隨つて商品の價值形態なるものは、社會的に有效の形態でなければならぬことになるのである。今や一切の商品は、リンネルに等しき物となるのであるが、この形態を以つて單に質的の等一物として、價值一般として、現れるのみではなく、同時にまた量的に比較し得る價值量としても現れる。一切の商品は同一の材料なるリンネルの上に夫々の價值量を反射するが故に、これらの價值量はまた交互に反射し合ふこととなるのである。例へば  $10 \text{ 糸} \parallel 20 \text{ 糸}$ 、 $20 \text{ 糸} \parallel 10 \text{ 糸}$ 、 $1 \text{ 茶} \parallel 20 \text{ 糸}$ 、 $20 \text{ 糸} \parallel 1 \text{ 茶}$  であり、また  $10 \text{ 糸} \parallel 20 \text{ 糸}$ 、 $20 \text{ 糸} \parallel 10 \text{ 糸}$  であるとするれば、 $10 \text{ 糸} \parallel 10 \text{ 糸}$ 、 $10 \text{ 糸} \parallel 10 \text{ 糸}$  となる。換言すれば、珈琲一斤は茶一斤に比し、價值實體なる労働を四分の一しか含まぬことになるのである。

商品界の一般的なる相對的價值形態は、商品界から排除された等價商品なるリンネルの上に、一般的等價の性質を印刻する。リンネル自身の現物形態は商品界共通の價值姿容であり、隨つてリンネルは他の凡ゆる商品と直接に交換し得るものとなるのである。リンネルの物體的形態は、一切の人間労働の目に見える體化として、その一般的なる社會的蛹化<sub>(79)</sub>として通用する。リンネルを生産するところの私的労働なる機械は、同時にまた一般社會的なる形態、即ち他の凡ゆる労働と等一なる形態のもとに存在してゐる。一般的價值形態を構成する無數の方程式は、リンネルに實現されてゐる労働をば順を追うて他の商品に含まれてゐる各労働と等位に置き、斯くすることに依つて機械を人間労働一般の普遍的現象形態たらしめる。斯くして、商品價值に對象化されてゐる労働は、單に消極的の意味で、現實的労働の一切の具體的形態並びに有用性質から抽象された労働として表現されるといふのみではない。その積極的性質も亦、明かに現れて來るのである。商品價值に對象化されてゐる労働は、現實的の凡ゆる労働をば人間労働といふ共通の性質に、人間労働力の支出に、約元したものである。

各種の労働生産物をば區別なき人間労働の單なる凝結として表現せしめる一般的價值形態は、それが商品界の社會的表章であることを自身の構造に依つて示すもので、商品界の内部に於いては、労働の一般人間の性質が労働の特殊社會的なる性質



質を構成するものであることは、この一般的価値形態に依つて明かにされるところである。

(2) 相対的価値形態と等価形態との發展關係

相対的価値形態の發展程度には、等価形態の發展程度が照應するものである。然し茲によく注意すべきことは、等価形態の發展なるものは、相対的価値形態の發展の表章及び結果に過ぎぬといふ一事である。

一商品の單純又は個別的なる相対的価値形態は、他の一商品をは個別的の等價たらしめる。次ぎに、一商品の價值をば他の凡ゆる商品に依つて言ひ現すところの擴大されたる相対的価値形態は、これらの商品の各に種々異つた特殊等價といふ形態を印刻する(80)。最後にまた、特殊の一商品種類は、他の凡ゆる商品に依つてその統一的な一般的な価値形態の材料たらしめられるが故に、一般的の等價形態を受けるのである。

が、価値形態一般の發展と同一の程度を以つて、その兩極なる相対的価値形態と等價形態との對立も亦發展することになるのである。

第一の形態(80)の二つの(1)も既に、この對立を含んではゐるが、それを確立する迄には至つて居らない。同一の方程式を進行的に讀むか、又は逆行的に讀むかに従つて、リンネルと上衣の如き商品兩極の各は、交互同等に相対的価値形態たる位置を採つたり、等價形態たる位置を採つたりする。斯かる兩極的對立を確認するは、この第一形態に於いては尙努力を要することである。

次に第二の形態に在つては、つねに單一なる商品種類がその相対的價值を完全に擴大し得るものであり、語を換へていへば擴大された相対的価値形態を有するものであるが、それは他の一切の商品がこの單一商品に對して等價形態の位置にあるが故にのみ、又その限りに於いてのみ行はれ得ることである。この場合 80の二つの(1) 又は 10の二つの(1) 又は 10の二つの(1) 又は 10の二つの(1) 等の如き價值方程式の兩邊は、斯かる方程式の全性質を變更して、これを總體的価値形態から一般的価値形態に轉化せしむることなくしては、もはや轉倒し得るものでない。

最後に第三の形態は、ただ一つのものを除くほか、商品界に屬する一切の商品が一般的の等價形態から排除されてゐる故に、またその限りに於いてのみ、商品界に一般社會的なる相対的価値形態を附與するものである。即ち一の商品リンネルは、他の凡ゆる商品と直接に交換し得る形態、換言すれば直接社會的なる形態を採ることになるのであるが、それは他の凡ゆる商

品が斯かる形態から排除されてゐる故に、またその限りに於いてのみ、行はれることなのである(二十四)。

(二十四) 一般的なる直接の交換可能といふ形態は、恰も陽磁極が陰磁極から分離し得ざるものである如く、直接には交換し得ないといふ形態からは分離することの出來ぬ對立的の商品形態であるが、この事實は決して、右の一般的なる交換可能といふ形態から看取し得るものでない。そこで如何なるカトリック教徒をもローマ法王たらしめ得ると考へられるかも知れぬのと同様に、一切の商品は時を等しうして、斯かる直接交換可能の形態を刻印され得ると考へられるやうになるかも知れぬ。商品生産の中に人間の自由と個人的對立との絶頂を認める小ブルジョア(81)から見れば、この形態に伴ふ諸種の缺點から、なかなぐ直接には交換し得ないといふ缺點から免れることは、固より極めて望ましいことであらう。而してこの素町人的なる空想を描き上げたものは、實にブルドーンの社會主義である。蓋し彼れの社會主義は、私が他の處でも指摘した如く決して獨創の功績を有するものではなく、寧ろ彼れよりも久しき以前グレイ、プリーその他の學者に依つて遂によく展開されたものである。それにも拘はらず、斯種の智慧は、今日尙『科學』といふ名義を以つて或方面に繁榮してゐるのである。ブルドーン一派ほど『科學』といふ言葉を玩んだものはない。蓋し『概念を缺く處、そこには恰度言語が現れて来る』からである。

反對に、一般的等價として作用する商品は、商品界の統一的隨つてまた一般的なる相対的価値形態から排除されてゐる。若しリンネルが、換言すれば一般的価値形態の位置にある何等かの一商品が、同時にまた一般的なる相対的価値形態にも與かるとすれば、この商品は自分自身の等價として役立たねばならなくなり、斯くして 80の二つの(1) 又は 10の二つの(1) といふ、價值も價值量も言ひ現すことなき同義反覆が生ずることになるであらう。そこで、一般的等價の相対的價值を言ひ現すためには、寧ろ第三の形態を轉倒せねばならぬことになる。この等價は、他の諸商品との間に共通せる何等の相対的価値形態をも有せず、その價值は他の凡ゆる商品體の限りなき系列に依つて相対的に言ひ現される。斯くして今や、擴大された相対的価値形態たる上記第二の形態は、等價商品の特殊の相対的価値形態として現れることになる。

(3) 一般的価値形態から貨幣形態への推轉

一般的等價形態なるものは、價值全般の一形態である。隨つてそれは、如何なる商品にも歸し得るのである。他方にまた、一の商品は他の一切の商品から等價として排除される故に、またその限りに於いてのみ、一般的の等價形態(第三の形態)といふ位置を採るのであつて、この排除が終局的に特殊の一商品種類に限られた瞬間から、商品界の統一的なる相対的価値形



態は、茲に初めて客観的の固定性と一般社會的なる通用力(82)とを得ることになるのである。現物形態の上に等價形態が社會的に合成せしめられる特殊の商品種類は、今や貨幣商品となる。換言すれば、それは貨幣として作用することになるのである。商品界の内部に於いて、一般的等價たる役目を演ずることは、斯かる商品種類の特殊の社會的機能となり、随つてまたその社會的獨占に歸するものであつて、上記第二の形態の下にリンネルの特殊の等價として作用し、また第三の形態の下に自己の相對的價值をば、共通的にリンネルに依つて言ひ現した諸商品中の一定の商品金こそ、歴史的にこの優先地位を占めるものである。そこで今、第三の形態に於ける商品リンネルの位置に商品金を置くとすれば、左の結果が得られることになる。

D 貨幣形態



第一の形態から第二の形態へ、更らに第二の形態から第三の形態への推轉に當つて、本質的の變化が行はれる。然るに第四の形態は、リンネルの代りに今や金が一般的の等價形態を採るといふ一點を除けば、第三の形態と何等異なるところがない。第四の形態に於ける金は、第三の形態に於けるリンネルと同一のものに止つてゐる。即ちそれは一般的の等價となるのである。ただ直接にして一般的の交換可能なる形態、換言すれば一般的の等價形態は、今や社會的習慣に依つて終局的に金なる商品の特殊の現物形態と合成せしめられる様になるといふ一點に、進歩が存するのみである。金は豫めすでに商品として他の諸商品に對立してゐたればこそ、今やまた貨幣としてそれに對立するのである。金も亦、他の

の凡ゆる商品と同様に等價として——個別的交換行為に於ける單一の等價としてしる、又は他の商品價值と相並んだ特殊の等價としてしる——作用してゐたもので、それが次第に大なり小なりの領域内に於いて(83)一般的等價たる機能を盡くすやうになつたのである。金は商品界の價值表章の上にこの地位を獨占するや否や貨幣商品となるのであつて、それが貨幣商品となつた瞬間に初めて第四の形態は第三の形態から區別され、斯くして一般的の價值形態は貨幣形態に轉化されることとなる。すでに貨幣商品として作用してゐた例へば金の如き商品を以つてするところの、例へばリンネルの如き一商品の單純なる相對的價值表章は即ち價格形態(84)たるものであつて、リンネルの價格形態は次の如くなる。

20ヤールのリンネル=2オンスの金  
或はまた、二磅が金二オンスの鑄貨名であるとすれば、

20ヤールのリンネル=2磅  
となる。

貨幣形態の概念に於ける困難な點は、一般的の等價形態を、隨つてまた一般的の價值形態全般を、換言すれば上記第三の形態を理解することに限られてゐる。第三の形態は、再歸的に第二の形態なる擴大された價值形態に分解されるものであつて、その組成要素たるものは、即ち 20ヤールのリンネル=1層の上衣 又は x 量のA商品=1層のB商品 といふ上記第一の形態である。斯くして單純なる商品形態は、貨幣形態の胚種となるのである。

(四) 商品の魔術性(85)及びその秘密

商品は一見、自明的な、たわいない物のやうに考へられる。然るにそれを分析して見ると、形而上學的の煩瑣と神學的の氣紛れとに充ちた至つて奇怪な物であることが知られる。商品は使用價值である限り、その諸性質に依つて人類の欲望を充たすといふ見地から觀察しても、又は人間勞働の生産物たる資格に於いて初めてこれらの性質を受けるといふ見地から觀察してもいづれにしても、何等神秘的な點を有して居らぬ。人類はその活動に依つて、自然素材の諸形態をば自己に有用となるやうに變更するものであつて、これは感性的に明瞭な事實である。例へば木材の形態は、それで卓子を造る時に變更される。それにも拘はらず、卓子は木材といふ平常の有形物であることに變りはない。然るにそれは、商品として現れるや否や、有形的たると同時にまた超有形的なる一の物(86)となる。それは今や、足で床の上に立つのみでなく、また他の一切の商品に對して逆立



ちすることにもなり、自發的に踊り出す場合(二十五)に比し、遙かに不可思議な幻想をその木頭の中から展出する。  
(二十五)他のすべての世界が靜かに休止してゐるやうに見えるとき、陶器と卓子とが、他のものを鼓舞せんがため踊り出したといふ話を、我々は想起する。

要するに、商品の神祕的な性質は、その使用價值から生ずるものでなく、また價值決定の内容から生ずるものでもない。蓋し第一に、諸種の有用労働又は生産的活動は、如何に相異つたものであらうとも、それが人間の身體組織の機能であり、而して斯かる機能はその内容及び形態の如何を問はず、いづれも本質に於いては人間の脳髓や、神経や、筋肉や、感官などの支出であることは、生理學上の眞理である。第二にまた、價值大小の決定の基礎たるべき斯かる支出の時間的繼續即ち労働の量についていへば、労働の量なるものは感性的にその質から區別し得る。生活資料の生産に必要な労働時間なるものは、社會的發展段階の如何に従つて一樣にさうではなかつたにしろ、とにかく如何なる状態の下に於いても、人類の利害に關係せねばならなかつた(二十六)。最後にまた、人類が何等かの様式を以つて相互のために労働するとき、人類の労働は社會的の形態を與へられることになるのである。

(二十六) 第二版註——古代ドイツ人の間では、一モルゲン(87)の土地の大小は一日の労働に従つて計算された。斯くてモルゲンはターグ・ヴェルク(又はターグ・ヴァンネ)(88)、マン・ヴェルク(89)、マン・クラフト(90)、マン・マード、マン・ハヴェット(91)などと言はれた。ゲオルグ・ルドウキヒ・フォン・マウラー著『マルク(92)制度、莊園制度史概論』(ミュンヘン、一八五九年刊、第一二九頁以下)(93)を見よ。

然らば、労働生産物が商品形態を採るや否や帶ふるところの謎的性質は、何處から生ずるか？ 明かに商品形態それ自身から生ずるのである。諸種の人間労働が等一であるといふ事實は、労働諸生産物の等一なる價值對象性といふ物的形態を受け、人間労働力の支出が時間的繼續を以つて秤量されるといふ事實は、労働諸生産物の價值大小といふ形態を受け、而して最後に、労働の社會的性質を確立せしめる生産者間の關係は、労働諸生産物間の社會的關係といふ形態を受け、而して最後に、斯くして商品形態を秘密に充ちたものとする原因は、要するに左の事實に存することとなるのである。即ち商品形態なるものは、人間労働の社會的性質をば、労働生産物の對象的性質として、労働生産物の社會的なる自然性質として見えしめ、斯くしてまた總労働に對する生産者の社會的關係をば、生産者の外部に存在する各對象間の社會的關係として見えしめるといふことがそれである。斯かる物對物(94)に依り、労働生産物は商品といふ有形的にして且つ超有形的なる物、換言すれば社會的の物

となるのであつて、これ恰も物が視神經に與へる光りの印象が、視神經それ自身の主觀的刺戟としてではなく、寧ろ眼の外部に在る物の對象的形態として表現される如くである。ただ、物を視る場合には、現實に於いて外部的の對象なる一の物から、目といふ一の物に光が投せられるのであつて、物理的の二物間に於ける物理的の一關係が成立するに過ぎぬのであるが、商品形態並びにそれを表現してゐるところの、労働諸生産物間の價值關係はこれに反して、労働諸生産物の物理的性質及びそれに起因する物的諸關係とは何等關係するところなきものである。商品なる形態の下に、物と物との關係の幻想的形態を採つて人類の目に映ずるものは、人類自身の一定の社會的關係に外ならぬ。そこでこれに類似した現象を見出すためには、宗教の夢幻境に助を求めねばならなくなる。この境地に於いては、人類の頭腦の諸產物は、相互に關係し且つ人類とも關係してゐるところの、それ自身の生命を附與された獨立した存在物であるやうに見える。商品界に於ける人類の手で造られた諸產物についても同様である。私はこれを、労働生産物が商品として造られるや否やそれに固着し、隨つてまた商品生産から不可分のものとなつてゐるところの魔術性と名づける。

商品界のこの魔術的性質は、前述の分析に依つても知られる通り、商品を生産する労働獨特の社會的性質に起因するものである。

使用對象なるものは、總じてそれが相互に獨立して經營される私的労働の生産物なるが故にのみ商品となるのであつて、これらの私的労働の複合せるものは即ち社會的の總労働となるのである。生産者はその労働生産物の交換に依つて初めて相互社會的に接觸するのであるから、生産者の私的労働の特殊社會的なる性質も亦、この交換の内部にのみ現れるものとなる。換言すれば、諸種の私的労働は、交換が労働生産物間に、また労働生産物を通して生産者間に設ける關係に依り初めて、實際のところ社會的總労働の肢體たる實を示すのである。そこで生産者から見れば、その私的労働の社會的關係は、在るが儘のものとして現れる。換言すれば、労働上に於ける人と人との直接の社會的關係としてでなく、寧ろ人と人との物的關係及び物と物の社會的關係として現れることになるのである。

労働生産物なるものは、その交換の内部に於いて初めて感性的に相異なる使用對象性から分離された社會的に等一なる價值對象性を與へられる。有用物と價值物との、労働生産物の斯かる分割は、交換が既に十分の延長と重要さとを與へられ、有用物が交換を目的として生産され、物の價值性質が物を生産する際に考慮に入るやうになつたとき、初めて實際上に作用するものである。このとき以後、生産者の私的労働は事實に於いて二重の社會的性質を受ける。即ちそれは一方に、一定の有



用労働として一定の社会的欲望を充たし、斯くして總労働の、原生的に發達したる社会的分業組織の肢體たる實を擧げねばならぬ。他方にそれは、特殊の各有用私的労働が他の有用種類の各私的労働と交換し得るものであり、随つて値打の等しいものである限りに於いてのみ、それに従事する生産者の種々多様な欲望を充たすのである。如何なる點に於いても相異つてゐる諸労働が等一であるといふ事實は、その現實的不等一から抽象し去ることに依つてのみ、換言すればこれらの労働が人間労働力の支出として、抽象的な人間労働として、有する共通の性質に還元することに依つてのみ存在し得る。

私的労働の斯かる二重の社会的性質は、實地の取引に於いて生産物交換の上に現れるところの諸形態を以つてのみ、この労働に従事する生産者たちの頭腦に反射される。即ち彼等の私的労働の社会的に有用なる性質は、労働生産物が有用（而も他人にとつて）でなければならぬといふ形態を以つて、また種類の相異つた各労働が等一であるといふ社会的性質は、物質的に相異つた労働諸生産物の共通の價值性質なる形態を以つて、反射されるのである。

要するに人類は、その労働諸生産物が種類の相等しき人間労働の單なる物的外皮として通用するが故に、これを價值として相互關係せしめるのではなく、寧ろ反對に、種類の相異つた各生産物をば交換上價值として相互等に置くことに依つて、彼等の相異つた諸労働をば人間労働として相互等に置くのである。それは彼等の知らざるところであるが、然し事實に於いてさう行つてゐるのである（二十七）。價值が如何なるものであるかといふことは、公然看板に掲げられてゐるものではない。寧ろ各労働生産物は、價值に依つて社会的の象形文字に轉化されるのである。後に至り、人類はこの象形文字を讀み解いて、自己の社会的産物の秘密の奥に達しようとする。蓋し諸種の使用對象が價值として決定されるやうになることは、言語と同様に人類の社会的産物であるからである。労働生産物なるものは價值である限り、その生産上に支出された人間労働の物的表章に過ぎぬといふ、後年の科學的發見は、人類の發達史上一新時代を劃するものであるといへ、決して労働の社会的性質の對象的外觀を驅除するものではない。相互獨立に營まれる諸種の私的労働の特殊社会的な性質は、これら諸労働の人間労働としての等一性に存するものであつて、それが労働生産物の價值性質なる形態を採るといふ、この場合に於ける特殊の生産形態なる商品生産にのみ通用するところの事實は、商品生産の事情に囚はれてゐる人々にとつては、右の發見後に於いても依然終局的のものとして現れる。それは恰度、空氣が科學の力でその諸要素に分析されるやうになつた後にも、空氣の形態は依然一の物理的な物體形態として存し得るのと同様である。

（二十七）第二版註——さればガリアニは、『價值は人と人との間の一關係である』と言つたとき更に『物的外皮の下に隠

れてゐる關係』といふ一句を追加すべき筈であつた（ガリアニ著『貨幣論』クストチ編、イタリイ經濟學名著集、近世の部ミラノ一八〇一年刊、第三卷第二二〇頁（98））。

生産物の交換者にとつて先づ實際的に利害關係あることは、彼れが自己の生産物を以つて他人から幾許の生産物を受けるか、換言すれば生産物なるものは如何なる比率を以つて相互交換されるかといふ問題である。この比率は一定の習慣的固定に達するや否や、労働生産物の性質に起因せるものの如く見え、斯くして例へば一噸の鐵と二オンスの金とが相互等價であることは、恰も一封度の金と一封度の鐵とが物理上並びに化學上の諸性質を異にするに拘はらず、重量は相等しいといふが如くであるやうに見えて来る。實際のところ、労働生産物の價值性質なるものは、労働生産物が價值量として作用することに依り初めて確立されるのである。而してこの價值量なるものは、交換者の意思、先見、行動などから獨立して不斷に變化する。交換者から見れば、彼れ自身の社会的行動は、彼れが支配する物ではなく、寧ろ彼れを支配してゐる物の運動といふ形態を有することになるのである。

相互獨立して經營され而も社会的分業の原生的分子として全般的に相互依存する諸種の私的労働は、絶えずその社会的比率に還元されるものであるが、斯かる科學的洞察が經驗それ自身の中から生ずる以前、既に豫め十分發達したる商品生産を必要とする。蓋し斯かる私的労働に依る諸生産物の偶然的にして不斷に變動しつつある交換比例の下に、これらの物の生産上社会的に必要な労働時間は規律的の自然律（命）として權力的に勵行されること、恰も家が人の頭上に倒れかかる場合に於ける重力の法則の如くであるからである（二十八）。

（二十八）『週期的の革命に依つてのみ遂行され得る法則のことを、我々は何と考ふべきであるか。これ即ち、關與者の無意識といふ事實に立脚する一の自然律に外ならないのである』（エンゲルス著『國民經濟批判概説』アーノルド・ルーゲ及びカール・マルクス共編『獨佛年報』パリ一八四四年刊所載論文（97））。

要するに、労働時間を以つてする價值量の決定は、相對的商品價値の現象的運動の下に隠れてゐる一秘密であつて、これが發見は労働生産物の價值量が偶然的にのみ決定されるといふ外觀を止揚するといへ、この決定の行はれる現實的形態を決して止揚するものではないのである。

人類生活の諸形態に關する思索、随つて又これが科學的分析は、總じて現實に於ける發展に反對した進路を採るものである。それは後方から（98）、即ち發展行程の完成した結果を以つて、始まる。労働生産物に商品の性質を印刻する諸形態、換言す



れば商品流通の前提となる諸形態は、寧ろ不變のものとして人類の目に映るのであるが、これらの形態は人類がその歴史的性質ではなく、内容について説明を得ようとする以前、既に社會的生活の現物形態たる固定性を有してゐる。斯くして價值量の決定に達せしめたものは、商品價格の分析に外ならず、また價值性質の確定に達せしめたものは、諸商品の共通的な貨幣表章に外ならぬことになつたのである。而も商品界のこの完成形態たる貨幣形態こそ、私的労働の社會的性質、随つて私的労働者の社會的關係を示顯せしめずして物的に隠蔽するところのものとなるのである。例へば上衣や深靴などが、抽象的人間労働の一般的體化たるリンネルに關係せしめられると言ふとき、この言ひ現しの不合理なることは一目瞭然である。然し上衣や深靴などの生産者が、これらの商品をば一般的等價としてのリンネル——又は金銀であつても構はない。いづれにしても問題の上には何等の變化も生じないから——に關係せしめるとき、社會的總労働に對する彼等の私的労働の關係は、確然この不合理な形態を以つて彼等に現れる。

ブルジョア經濟學に於ける諸範疇は、正に斯種の形態から成るものである。これらの範疇は、商品生産といふこの歴史的に限定された社會的生產方法の生產事情に關する、社會的に通用し得べき客觀的な思维形態に外ならぬものである。されば商品界に於ける一切の神祕、商品生産の基礎の上に造られる労働諸生産物を圍繞する一切の魔法及び妖術は、我々が一度其他の生産諸形態に來たるや否や忽ちにして消滅してしまふのである。

經濟學はロビンソン物語を愛好するものであるから(二十九)、先づロビンソンをその島に出現せしめよう。ロビンソンは本來質素な男であつたといへ、而も充足すべき諸種の欲望を有し、随つて種々なる有用労働をなさねばならなかつた。彼れは道具(斧)や什器を造つたり、驢馬を馴らしたり、漁をしたり、狩をしたりせねばならなかつたのである。祈禱やその他類似の事柄については茲に言はない。なぜならば、彼れはこれに依つて享樂を與へられ、斯種の活動をば氣晴らしと見做してゐたからである。彼れの生産的機能は種々異つてゐたといへ、いづれも同一なるロビンソンの相異なつた活動形態に過ぎず、換言すれば、人間労働の相異つた様式に過ぎないことは、彼れの知るところであつた。彼れは必要のため、その時間を各機能の間に嚴密に割り振ることを餘儀なくされた。いづれの機能が彼れの全活動の上にヨリ大なる範圍を占め、又いづれがヨリ小なる範圍を占めるかは、所期の利用上の效果(100)を得るに當つて打勝つべき困難の大小に懸るものであつた。彼れは經驗に依つてこれを教へられた。彼れは時計や、元帳や、インキや、ペンなどを難船から救つたのであつたが、やがて善良なるイギリス人として帳簿をつけ始めた。彼れの家財目録の中には、彼れの所有に屬する使用諸物件や、これらの物件の生産に必要な各種

の作業や、最後に又、これらの種々なる生産物の一定量を得るについて平均的に必要な労働時間やを示す表が含まれてゐた。ロビンソンと彼れ自身の手で造り出された富を構成する諸物件との間に於ける一切の關係は、この場合極めて單純明瞭であつて、かのマックス・ヴェルト君(10)でさへも特別の努力なくしてこれを理解し得た程である。而かも價值決定上の凡ゆる本質的要素は、この關係の中に含まれてゐるのである。

(二十九) 第二版註——リカルドにもロビンソン物語がない譯ではなかつた。「彼れは原始的の漁夫及び獵師をそのまま商品所有者と見做し、兩者の間に魚と鳥獸とを交換せしめてゐる。而してこの交換は、これらの交換價值の中に對象化されてゐる労働時間に比例して行はれるものであつた。この際、彼れは原始的の漁夫及び獵師をして労働器具の計算上、一八一七年にロンドン取引所で通用してゐた年金表を利用せしめるといふ時代錯誤に陥つたのである。」オーウェン氏の平行四邊形共同宿舍の組織(11)は、ブルジョアの社會形態以外にリカルドの知る唯一のものであつたやうに見える(「カール・マルクス」經濟學批判」第三八及び三九頁)。

今、ロビンソンの明るい島から陰暗な中世ヨーロッパに目を轉じよう。ここには獨立した人間はゐないで、如何なる人も農奴と領主、家臣と藩主、俗人と僧侶といふ風に相倚存してゐることが見出される。物質的生產の社會的關係も、この生産の上に築かれた生活部面も、みな人的の倚存に依つて特徴を與へられてゐる。然しながら、この人的倚存が、與へられたる社會的の根柢となつて居ればこそ、労働も、生産物も、その現實とは異つた空幻的の姿容を採る必要がなく、現實労働(12)並びに現物給付(13)として社會的運營に關與するのである。この場合には、商品生産の基礎上に於けるとは異なり、労働の普遍性ではなく、その現實的形態が、特殊性が、労働の直接社會的な形態となるのである。徭役労働も、商品を生産するところの労働と同様に、時間を以つて秤量されることは事實であるが、然し領主に對する勤務に於いて支出されるものが自身の労働力の一定量であることは、如何なる農奴も知るところである。僧侶に給付すべき十分一税に至つては、彼れの祝福以上に明瞭な事實である。されば、斯かる社會の人々が相互に演ずる役割を如何に判斷して見たところで、労働上に於ける個々人の社會的關係は彼等自身の人的關係として現れ、物と物、労働生産物と労働生産物との間の社會的關係に依つて隠蔽されるものではない。

我々は共同的の労働、換言すれば直接社會化された労働を考察するに當り、凡ゆる文化民族の歴史の門口に見出される原生的の労働形態に溯ることを必要としない(三十)。ヨリ手近な實例となるものは、穀物や、家畜や、絲や、リンネルや、衣類などを自家の必要のために生産するところの農民家族に於ける田舎的家父長制の産業(14)である。これら各種の物件は、農民家



族から見れば、その家族労働の相異つた生産物たるものであるが、然しそれ自身商品として相對立するものではない。これらの生産物を造る各種の労働——農耕や、飼畜や、紡績や、機械や、裁縫などは、商品生産と同様にそれ自身の原生的分業を有する家族の諸機能であるから、その現實形態を以つてしても既に社會的機能となつてゐるのである。家族内に於ける労働の配分と個々の家族員の労働時間とは、男女及び老幼の差異に依り、また季節の變化と共に變化する労働の現物的條件に依つて規制される。然し時間的の持續によつて秤量される個別的労働力の支出は、この場合、最初より労働それ自身の社會的性質として現れる。なぜならば、個々の労働力は本來、家族に於ける總労働力の各器官として作用するに過ぎぬからである。

(三十) 第二版註——『原生的共有といふ形態は、スラヴ人獨特のものであり、甚しきはロシア人の間にのみ存在するところの形態であるといふ笑ふべき偏見が、最近弘く行はれてゐる。この共有なる形態は、ローマ人、チュートン人、ケルト人などの間に論證し得るところの本來的形態であつて、その種々なる標本の一部は遺跡として存在してゐるに過ぎぬといへ、而もそれらの總べてを含む形本は今日尙インド人の間に見出される。アジア殊にインドの共有形態をヨリ精密に研究するとき、原生的共有の種々なる形態から如何にしてその分解上の諸形態が生じ來たるかを明かにするであらう。例へば、ローマ的及びチュートンの私有の種々なる原形は、インドの共有の種々なる形態から推論し得るところである』(カール・マルクス著『經濟學批判』第一〇頁)。

最後に方面を變へて、自由なる個々人が共同の生産機關を以つて労働し、その數多き個別的労働力をば、社會的一労働力として意識的に支出するところの一社會を想像して見よう。斯かる社會に於いては、ロビンソンの労働の凡ゆる特徴は個人的にでなく社會的のみ反覆されるのである。ロビンソンの凡ゆる生産物は専ら彼れ自身の手になる生産物であり、隨つて直接に彼れ自身の使用對象であつた。然るに、この場合に於ける社會の總生産物は、一の社會的労働力である。この生産物中の一部は、更にまた生産機關として役立つのであつて、依然社會的のものとなつてゐる。然るに他の一部は、この社會の成員たちにより生活資料として消費されるものであつて、彼等の中に分配されることを要するのである。この分配の様式は、社會的生產組織そのものの特殊の種類、及びそれに照應せる生産者の歴史的發達程度の如何に應じて差異を生ずるであらう。然し商品生産と平行させて考へるため、各生産者の受くる生活資料の量は、彼れの労働時間に依つて決定されるものと假定する。斯くて労働時間はこの場合、二重の役割を演ずることになるのである。即ち社會的なる計畫を以つてする労働時間の配分に基いて、種々なる欲望に對する各種労働機能の正確なる比率が與へられると同時に、一方また労働時間は、共同労働に對する各生産

者の關與分、隨つて總生産物のうち個人的に消費し得べき部分に對する、各生産者の受分の尺度として役立つ。斯かる社會に於いては、労働及び労働生産物を通して與へられる人類の社會的關係は、生産上にも分配上にも透明的に單純なるものである。生産物が商品として、價值として取扱はれ、而してまた私的労働が、この物的形態(西)に依り等一なる人間労働として相互關係せしめられる點に一般社會的なる生産關係が存してゐる商品生産者の一社會にとつては、抽象的人類の崇讃を特徴とするクリスト教、殊にそのブルジョアの形態に發展したるプロテスタント教や自然神教などこそ、最も適當した宗教形態なのである。古代アジア、古代ギリシア及びローマ等に於ける生産方法の下に在つては、生産物が商品に轉化されること、隨つてまた人類が商品生産者として存在することは、從屬的の役割を演ずるに過ぎぬ。尤もこの役割は、當時の共同體が消滅に近づけば近づくほど、益々重要なものとなつた。嚴密な意義の商業民族は、エビクトルの神々の如く、又はポーランド社會の隅々に散在してゐたユダヤ人の如く、古代世界の隙間々々にのみ存在してゐたものである。

古代に於けるこれらの社會的生產組織體は、ブルジョアの生産組織體に比すれば遙かに單純にして透明のものである。然しこれらの生産組織體は、個々人が彼等を相互に結合してゐるところの自然的種族關係の緒から未だ斷ち切られて居らぬ個人的發達の未熟状態か、又は直接の主從關係かの、いづれかに立脚するものであつて、労働生産力の發達が尙低級段階に止まり、隨つて物質的生活の生産行程の内部に於ける人類の關係、換言すれば人と人、人と自然との間に於ける關係が尙局限されてゐることに制約されるものである。

斯かる現實的の局限は、觀念的には古代に於ける自然宗教及び民族宗教の上に反射されてゐる。現實界の宗教的反射なるものは、總じて日常生活上の實際の事情が、人類相互間並びに人類對自然間の透明的に合理的なる關係をば日々人類の目に呈示するに至り、茲に初めて消滅し得るものである。物質的生產行程に基く社會的生活行程の形態は、それが自由に社會化した人類の產物として彼等の意識的計畫的なる支配の下に立つとき、ここに初めてその神祕的假面を脱ぎ捨てることになるのであつて、それには社會が一定の物質的基礎を、一列の物質的生存條件を與へられることを要する。而してこれらの條件それ自身も亦、久しきに互る苦が發展史の原生的產物なのである。

經濟學は、不完全ながらも(三十一)價值及び價值量を分析して、これらの形態の下に横はる内容を發見したことは事實である。然しながら、この内容が何故斯かる形態を探るか、また労働は何故價值に依つて、時間的持續を以つてする労働の秤量は何故労働生産物の價值量に依つて表現されるかといふことは、經濟學の試問したことすらない問題である(三十二)。生産行程が



人類に依つて支配されるのではなく、反對に人類が生産行程に依つて支配されるところの社會形態に屬することを公然標榜してゐる諸公式は、經濟學のブルジョアの意識にとつては、生産的労働それ自體と全く同様に自明的の自然必然事象となつてゐる。斯くて經濟學は、恰も教父たちがキリスト教前期の諸宗教を取扱つた如くにして、社會的生産組織體のブルジョア前期的諸形態を取扱ふことになるのである(三十三)。

(三十一) 價値の大小についてリカルドの與へた分析の不十分であつたことは(而も彼れの分析は最良のものではあつたが)本書第三及び第四卷(四)の説明に依つて明かとなるであらう。ところで價値一般について言へば、正統派經濟學は、生産物の價値として表現される意味の労働をば、生産物の使用價値として表現される意味の同一なる労働から何處に於いても明文と明瞭なる意識とを以つては區別して居らぬ。が、事實上、この區別を與へてゐることは言ふ迄もない。蓋し正統派經濟學に於いては、労働は或時は量的に、或時はまた質的に觀察されてゐるからである。けれども労働の單なる量的區別は質の上にてける一致又は等一、換言すれば抽象的人間労働への約元を前提するものであることは、正統派經濟學の思ひ及ばなかつたところである。例へばリカルドは、次の所述に於いてデスチュート・ド・トレシー(10)の見解を承認すると言明してゐる。

『我々の本源的富といへば、肉體上及び道徳上の能性のみであることは確かである。そこでこの能性の使用たる何等かの種類の労働は、我々の本源的富財となるのであつて、我々が富と呼ぶ一切の物は、つねにこの能性の使用に依つて生ずるものである。これらの物は、それを造り出した労働を代表するに過ぎぬのであつて、若しそれに一つの價値、甚しきは二つの相異つた價値があるとすれば、斯かる價値は、これらの物の生じ來たる労働の價値にのみ起因し得ることも、また確かな事實である。リカルド『經濟原論』第三版、ロンドン、一八二一年刊第三三四頁(11)。我々はこの場合、デスチュートの所説が、リカルドに依つて、彼れ自身のヨリ深き意義を附與されてゐる事實を指摘するに止める。實際のところデスチュートは、一方に富を組成する一切の物が、『それを造り出した労働を代表する』と言ひながら、他方にこれらの物の『二の相異つた價値』(使用價値及び交換價値)が『労働の價値』に依つて與へられると説いてゐる。斯くて彼れは先づ一商品(この場合で言へば労働)の價値を前提し、然る後これに依つて他商品の價値を決定しようとする俗學的經濟學の淺薄さに陥ることとなつたのである。リカルドはこのデスチュートの所説をば、使用價値にも交換價値にも労働(労働の價値ではない)が表現されてゐるといふ意味に解した。而もこの二重に表現されてゐる労働の二重性質は、彼れ自身が區別を與へなかつたところであつて、彼れは『價値及び富、並びにその特異的性質』と題する全章の中で、ジャン・バチスト・セーの如き論者の區々たる末節

の穿鑿のために、骨を折らねばならなくなつたのである。さればこそ、彼れは終末に及んで、價値源泉としての労働について、デスチュートの言ふところは彼れ自身の見地と一致するが、他方に價値概念の上では、デスチュートの所説はセーの見解と一致することを見出して、全く喫驚した次第である。

(三十二) 商品殊に商品價値の分析に依つて、價値を交換價値たらしめる價値形態を見出すことに成功しなかつたといふ一點は、實に正統派經濟學の根本的缺陷の一である。アダム・スミスやリカルドの如き、正統派經濟學の最良代表者でさへも、價値形態を全く何うでもいゝものとして、換言すれば商品それ自身の性質とは何等關係するところなきものとして取扱つてゐる。これが理由は、單に價値量の分析が彼等の注意を吸収し去つたといふことのみでなく、それよりも更に深い處に存在してゐるのである。労働生産物の價値形態なるものは、ブルジョアの生産方法の最も抽象的にして且つ最も普遍的なる形態であつて、ブルジョアの生産方法はこれがため社會的生産の特別なる一種として、同時にまた歴史的のものとして特徴を與へられる。されば我々は、この生産方法をば社會的生産の永遠の現實形態と見るとき、必然にまた價値形態、隨つて商品形態、更らに進んでは貨幣形態、資本形態などの特殊性を見落すことになる。さればこそ、價値の大小が労働時間に依つて秤量されるといふ見地に於いては全く相一致する經濟學者たちの間にも、一般的等價の完成形態たる貨幣については、種々雑多の相矛盾した諸見解が見出されることになるのである。この事實は例へば、銀行營業を取扱ふ場合に著しく現れる。蓋しこの場合には、もはや貨幣の平凡な定義を以つてしては、十分でないからである。正統派に對立して、價値の中にただ社會的形態、或は寧ろこれが無實體的外觀のみを認むる復興マーカンチリズム(ガニール(12)その他)が生じた所以は茲にある。尙これを最後として一言して置く。——私の謂ふ正統派經濟學とは、かの俗學的經濟學とは異なり、ブルジョアの生産事情の内部的關聯を研究したウキリアム・ペー以降一切の經濟學を指すのである。俗學的經濟學はこれに反し、ただ外觀的關聯の内部に没頭するだけであつて、謂はば極めて大掛りな現象を輕々に解り易く説明するといふ尤もらしい口實を以つて、またブルジョアの日用に應ぜんがため、科學的經濟學に依つて久しい以前から供給されてゐた材料を絶えず新に反覆し、而もその他の點に於いては、ブルジョアの生産當事者たちが最善と認める世界について抱く平凡な自己滿足的な見解をば街學的に組織だて、これを永遠の眞理なりと呼號するに止めてゐる。

(三十三) 『經濟學者たちは、一種特別の考へ方をする。彼等にとつては、人爲的か自然的かの二種の制度が存在するのみである。即ち封建制度は人爲的の制度であり、ブルジョアの制度は自然的の制度であるとする。この點に於いて、彼等のなす



ところは二種の宗教を區別する神學者のなすところに似てゐる。蓋し自己の宗教は神の啓示に依るものであり、他の一切の宗教は人間の發明にかかるとは、これらの神學者の考へてゐるところである。——斯くて歴史は從來存在してゐたが、今ではもはや存在しないといふことになる（カトル・マルクス著『哲學の窮乏。ブルドーン君の「窮乏の哲學」への答論』一八四七年刊、第一一三頁（113））。古代のギリシア人やローマ人は盜掠に依つてのみ生活してゐたと、パスチア君は考へてゐるが、これは寔に滑稽な想像である。人類が若し幾世紀間にも互に盜掠に依つて生活してゐたとすれば、盜掠さるべき物が不斷に存在するか、又は盜掠の對象が絶えず再生産されて居らねばならぬ筈である。そこで、ギリシア人やローマ人も亦、ブルジョアの經濟が現世界の物質的根柢たるべく同様に、彼等自身の世界の物質的根柢ともなつてゐた一の生産行程を、一の經濟を有つてゐたかのやうに見えて来る。それとも、パスチアの謂はんとするところは、奴隸勞働に依る生産方法は盜掠制度に基くといふことであつたか？ 然りとすれば、彼等は危険な地盤に立つこととなる。アリストテレスの如き大思想家でさへも奴隸勞働の評價に於いて過誤に陥つたといふのに、パスチアの如き微々たる經濟學者が如何にして賃銀勞働の評價を誤りなくし得やうぞ。この際私は拙著『經濟學批判』（一八五九年刊）の刊行されたとき、アメリカに於ける或ドイツ新聞紙が私に向けた一非難を簡單に片付けて置く。この新聞紙は言ふ。——一定の生産方法、及びいづれの場合に於いてもこれに照應するところの生産事情、約して言へば、『社會の經濟的構造』は『法律上及び政治上の上部構造が依つて立ち且つ一定の社會的意識形態が照應する現實的の基礎であり』而して『物質的生活の生産方法が、社會的、政治的及び精神的の生活行程全般を決定する』といふ私の見地——斯かる見解は、物質的利害に依つて支配されてゐる現世界について言へば當を得てゐることは事實であるが、カトリック教に依つて支配されてゐた中世紀や、政治に依つて支配されてゐたアテナやローマについては通用しなくなるであらうと。これについて先づ奇怪に感ぜられることは、中世紀及び古代世界についての斯かる言ひ古るされた文句が、今でも何人かに知られずにあるなどと、得て假定したがる者があるといふ一事である。中世紀と雖も、カトリック教に依つては生活し得るものでなく、また古代世界と雖も政治に依つては生活し得るものでないことだけは明かである。寧ろ、彼等が如何にしてその生活資料を得たかの様式こそ、何れも一方の場合には政治が主なる役目を演じ、他方の場合にはカトリック教が主なる役目を演じたかを明かにするものである。尙、例へばローマ共和國について見るに、その祕密史を構成するものは實に土地所有の歴史であつたが、斯かる事實はローマ共和國の歴史を少し心得て居りさへすれば解ることである。他方にまたドン・キホーテは、廻國騎士なるものが如何なる形態の社會の下にも等しく容れら

れると妄想した過誤の償ひを受けたのであつた。

商品界に固着せる魔術性に依り、換言すれば勞働の社會的性質の對象的外觀に依つて、經濟學者の一部が如何ばかり惑はされてゐるかは、交換價值形成上に演ずる自然の役目についての冗漫な論争が就中これを論證するところである。交換價值なるものは、物の上に附與された勞働を言ひ現す一定の社會的様式であるから、それが自然素材を含み得ないことは爲替相場などと異なるところはないのである。

商品形態はブルジョアの生産の最も普遍的にして發達の最も幼稚なる形態であつて、今日に於ける如き支配的な、随つてまた特徴的な様式を以つてではないにしても、兎にかく早くから出現することになつたのである。随つてその魔術性を見透すことは、比較的尙容易であるやうに見える。然るにヨリ具體的な諸形態になると、斯かる單純の外觀でさへも消滅してしまふ。貨幣制度の幻想は、何處から來たものであるか？ それは、貨幣としての金銀が一の社會的生產關係を代表するものであると見ず、寧ろ奇異なる社會的性質を有する自然物の形態に在るものと見た。而してこの貨幣制度を眼下に見下してゐる近世經濟學も亦、それが資本を取扱ふ段になると魔術性を發揮して來るではないか。地代は社會から生ずるものではなく土地から生ずると考へたフジョクラットの幻想が消滅して以來果して幾日月になるか？

が、説明の尙早を避けるため、茲では商品形態それ自身に關する他の一例を以つて満足することにしよう。若し、諸商品に口あらば、彼等は斯う言ふであらう。我々の使用價值は人類にとつて關係あるものであるかも知れぬ。然しそれは、物としての我々に屬するものではない。物としての我々に屬するものは、我々の價值である。これは、我々自身が商品物としてなす交通に依つて證明されるところである。我々は交換價值としてのみ、相互に關係するものであると。

ところで、商品が經濟學者の口を通して語るところを聴け。曰く『價值（交換價值）は物の性質であり、富（使用價值）は人の性質である。この意味に於ける價值は必然的に交換を含むものであるが、富はさうではない』（三十四）。『富（使用價值）は人の屬性であり、價值は商品の屬性である。或一人、又は或一團體は富裕であり、一の眞珠又は一のダイヤモンドは價值豊かである。……一の眞珠又は一のダイヤモンドは、眞珠若しくはダイヤモンドとして價值を有つてゐる』（三十五）。

（三十四）匿名者著『經濟學上に於ける就中價值及び需給に關する言葉上の論争についての觀察』（ロンドン一八二一年刊第一六頁（16））。

（三十五）サミュエル・ペーリー前掲、第一六五頁（16）。



從來、如何なる化學者も、眞珠又はダイヤモンドの中に交換價値を發見したことはなかつた。然るに批判的の深味を得意とするところの、この化學的實體の經濟上に於ける發見者たちは、物の使用價値は物的性質からは獨立してゐるに反し、價値は物それ自身に屬するといふ風に考へる。彼等の斯かる見解は、物の使用價値なるものは人類にとり交換に依ることなく、物と人との直接の關係を通して實現されるのであるが、價値の方は反對に社會的行程なる交換を通してのみ實現されるといふ特殊の事實に依つて確證される。これについて、かの善良なるドグベリー(Dogberry)のことを想起しないものがあるだらうか。彼れは夜衛シークールに向つて、『身なりの善い人になるのは境遇の賜物だが、讀み書きができるやうになるのは天性だ』と教へたであつた(三五六)。

(三五六)前記『觀察』の著者及びサミュエル・ペーリーは、リカルドを非難して、彼れは交換價値をば單なる相對的のものから絕對的のものに轉化せしめたと言つてゐるが、事實は寧ろ反對で、彼れは交換價値としてのこれらの物(例へば、ダイヤモンドや眞珠)に屬する外觀的の相對性をば、斯かる外觀の背後に隠れてゐる眞實の關係に、即ち人間勞働の單なる表章としての相對性に還元したのである。リカルド學徒がペーリーに對して答へたところは、放膽的であつて正鵠に中るところがなかつたのであるが、それは畢竟、價値と價値形態(又は交換價値)との間の内部的關係につき、リカルドその人に依つて何等の解決も與へられて居らぬことを見出したからに外ならぬのである。

## 第二章 交換行程

商品はみづから市場に行つて、みづから相互に交換し得るものではない。そこで我々は、その保護人(3)たる商品所有者(3)のことを考へねばならぬ。商品は物であるから、人間に對しては抵抗力がない。若し商品が従順でないとすれば、人間はこれに對して強力を行使し得る。換言すれば、それを所有してしまふことが出来るのである(三三七)。これらの物を商品として相互關係せしめるためには、商品の保護人たちは、その意志がこれらの物に宿るところの人として相互關係することを要する。即ち一方の者は他方の者の同意を以つてのみ、換言すれば各人も共通の意志行爲に依つてのみ、己れの商品を讓渡して他人の商品を占有するに至ることを要するのである。

(三三七) 敬虔を以つて聞えた十二世紀に於いては、これらの商品の間には極めて微妙なる物が含まれることが屢々あつた。斯くて當時フランスの一詩人は、ランデーの市場に入り來たる商品の中に、被服材料や、皮革や、農具などの外に尙『自分の身體を熱愛する婦人』(3)をも算入した。

要するに、商品所有者は相互に私有者たることを認めねばならぬ譯であつて、この權利關係——法律上發達したものであると否とを問はず、契約がその形態となるところの——は即ち經濟上の關係を反射するところの意志關係であり、而して斯かる權利關係換言すれば意志關係の内容は、經濟上の關係それ自身に依つて與へられるものである(三三八)。この場合、各人は商品の代表者としてのみ、商品所有者としてのみ、存在するに過ぎぬ。本書の説明が進むに従ひ、總じて經濟上の舞臺に現れる諸種の人物は、彼等の間に存在してゐる經濟事情の人格化したものに過ぎぬことが明かになるであらう。

(三三八) ブルドーンは先づ、商品生産に照應せる權利關係から『永遠の正義』なる理想を汲み來たり、これに依つて、商品生産なる形態は正義と同様に永遠のものであるといふ、凡ゆる素町人どもの慰安たるべき論證を與へたのであつたが、然る後反對に、この理想に従つて現實的の商品生産及びそれに照應せる現實の權利關係をば改造しようとした。若し茲に代謝機能の現實的法則を研究し、それに基いて一定の問題を解決することをせず、反對に代謝機能をば『特殊性』と『親和性』との『永遠の理想』に依つて改造しようとする化學者があるとすれば、我々は斯かる學者のことを何と考へるであらうか？ 我々は高利貸附業が『永遠の正義』や『永遠の公正』や『永遠の互助』やその他の『永遠の眞理』に矛盾すると言ふとき、かの教父たち



がそれを『永遠の恩寵』や『永遠の信仰』や『永遠の神意』に矛盾すると言つた場合に比し、幾分でも高利貸附業について知るところが多くなるであらうか。

商品所有者をば商品から特に區別するところのものは、商品から見れば他の如何なる商品體も自己の價値の現象形態たるに過ぎぬといふ事實である。商品は生れながらの平等屋であり皮肉であるので、單にその魂ばかりでなく肉體までも、他の總べての商品と——それがマリトルン、以上醜いものであつても——交換せんものと絶えず待ち構へてゐる。商品は斯く商品體の具象性に對する感覺を缺いてゐるのであるが、この感覺缺乏は商品所有者の五種有餘の感覺に依つて補はれる。彼れの商品は、彼れにとつて何等直接的の使用價値をも有するものではない。然らずんば、彼れはこれを市場に持ち行かないであらう。それは他人にとつて使用價値を有するもので、所有者から見れば交換價値の負擔者たり隨つて交換上の要具たる使用價値(三十九)のみを直接有してゐるに過ぎぬ。そこで商品の所有者は、彼れに満足を與へるところの使用價値ある商品を目的として、自己の商品を手放さうとするのである。如何なる商品も、その所有者にとつては非使用價値であり、その非所有者にとつては使用價値である。隨つて如何なる商品に於いても、その所有者の變更される必要になつて来る。然るに所有者が變更されるといふことは、即ち商品が交換されることを意味するものであつて、商品はこの交換に依り、價値として相互に關係せしめられ、價値として實現されることになる。要するに如何なる商品も、使用價値として實現される得るに先だち、豫め價値として實現されることを要するのである。

(三十九)『蓋し如何なる財の用途も二重のものである。——一は物それ自体に屬するものであり、他はさうでない。例へば草靴は穿くことに役立つと同時に、また交換し得るものであつて、いづれも草靴の使用價値である。蓋し自己の手に缺乏してゐるところの物、例へば榮養物の如きを目的として草靴を交換する人と雖も、草靴を草靴として使用するからである。然しこの場合、草靴はその自然的用途に従つて利用されるものではない。草靴は交換のために存在するものではないからである』(アリストテレス著『共和論』第一卷第九章)。

他方にまた、如何なる商品も價値として實現され得るに先ち、使用價値たる實を示さねばならぬ。蓋し商品のために支出される労働は、それが他人にとつて有用な形で支出される限りに於いてのみ計算に入るからである。けれども、この労働が果して他人にとつて有用であるか何うか、換言すればこの労働の生産物が果して他人の欲望を充たすか何うかは、その交換に依つてのみ證明され得るのである。

如何なる商品所有者も、その欲望を充たすところの使用價値ある他の商品を目的としてのみ、自己の商品を手放さうとする。それだけの範圍内では、交換は彼れにとり個人的の行程に過ぎぬ。他方に彼れは、その商品を價値として實現しようとする。語を換へていへば、彼れ自身の商品が他商品の所有者にとつて使用價値を有するものと否とに拘はらず、同一の價値ある隨意の他商品にこれを轉化せしめんとするのである。それだけの範圍内では、交換は彼れにとり一般社會的の行程である。然しながら一切の商品所有者を通じて、同一の行程が専ら個人的のみであると同時に、また一般社會的のみであるといふことにはなり得ない。更らに立入つて考へるならば、各商品所有者にとつて他人の各商品は彼れ自身の商品の特殊價値たるものであり、斯くしてまた彼れ自身の商品は他の凡ゆる商品の一般的價値たるものである。然るに如何なる商品所有者も同一のことをするのであるから、一般的の等價となる商品はなく、如何なる商品も價値として相互等に置かれ價値量として相互比較される、一般的の相對的價値形態を有しないことになる。斯くて商品は商品として相對立することがなく、單に生産物として、使用價値としてのみ、相對立することになるのである。

商品所有者たちは茲に進退谷まり、ファウストの謂ふ如く『初めに實行あり』と考へる。即ち彼等は思惟する以前すでに實行してゐたのである。彼等の自然本能を通じて、商品性質の法則が作用してゐた。彼等はその商品を以つて一般的の等價たる他の何等かの商品と對立的に關係せしめることに依つてのみ、これを價値とし、隨つてまた商品として、相互關係せしめ得るのである。この事實は商品の分析に依つて知られたところである。然しながら一定の商品を一般的の等價たらしめ得るものは、社會的行爲のみである。即ち凡ゆる商品の社會的行動は、これらの商品の價値を全般的に代表すべき一定の商品を排除することになるのであつて、これがため、斯く排除された商品の現物形態は社會的に有效な等價形態となる。一般的の等價たることは、社會的行程に依つて、斯く排除された商品の特殊社會的な機能となり、この商品は斯くして貨幣となるのである。『彼等はただ一つの意向を有ち、己が能力と權威とを敵に與へたり。而して敵の名もしくはその名の數字ある徽章を有たぬ總べての者に賣買することを得ざらしめたり』(『ヨハネ黙示録』)。

貨幣結晶なるものは、種類の相異つた労働生産物をば事實上、相互等位に置き、以つてこれを事實上、商品に轉化せしむる交換行程の必然的な一產物である。交換の歴史的なる擴大及び深化は、商品の性質中に眠つてゐる使用價値と價値との對立を展開せしめる。この對立を通商上外部的に表現せしめようとする欲望は、商品價値の獨立した形態を生ぜしめるものであつて、商品が商品と貨幣とに分化することに依り斯かる獨立した價値形態が終局的に獲得される迄は休止するところがないのである。



る。斯くて、労働生産物が商品に轉化されるのと同じ比率を以つて、商品の貨幣化が行はれることになる(四十)。

(四十) 小ブルジョアの社會主義は商品生産を永久的のものにすると同時にまた、『貨幣と商品との對立』隨つて貨幣それ自身をも(貨幣は斯かる對立の中にのみ存在するから)廢絶せしめようとするのであるが、以上の説明に従つてこの小ブルジョアの社會主義の沒義道を判斷せよ。これ恰も、ローマ法王を廢絶して、カトリック教を存続せしめんとするが如くである。

これが詳細は拙著『經濟學批判』(第六一頁以下)について見られよ。

直接の生産物交換?は、一方に單純なる價值表章の形態を有してゐるが、他方には尙未だこの形態を有して居らぬ。それは即ち  $x \text{ 種 } A \text{ 種 } B \text{ 種 } C \text{ 種}$  なる形態である。直接的生産物交換の形態は  $x \text{ 種 } A \text{ 種 } B \text{ 種 } C \text{ 種}$  である(四十一)。この場合A及びBなる物品は、交換以前にはまだ商品でなく、交換に依り初めて商品となるのである。一の使用對象を可能的に交換價值たらしむる第一の様式は、それが所有者にとり非使用價值として、彼れの直接の欲望を超過した使用價值量として、存在するといふことである。如何なる物も、それ自體としては人間の外部に存在するものであつて讓渡し得るものである。而してこの讓渡が交互的であり得るためには、暗黙の間に人々がこれらの讓渡し得る物件の私的所有者として、その故にまた相互獨立した人格として、對立し合ふといふことを要するだけである。

(四十一) 二つの相異つた使用對象が交換されるに至らず、野蠻人の間に屢々見出される如く、諸種の物の雜然たる一塊りが單一なる物の等價として提供されてゐる間は、直接の生産物交換それ自身は尙初歩の階段に止まつてゐるのである。

而も斯くの如き相互獨立した關係は、原生的共同體——家長制家族の形態を採つたものであるにせよ、又は古インドの村落共產社會、ペルーのインカ國家等の形態を採つたものであるにせよ——の成員間には存在して居らぬ。商品交換は各共同體の盡きる處に、換言すれば各共同體が他の共同體又はその成員たちと接觸する點に始まる。が、諸種の物は、それが一度共同體の對外生活に於いて商品となるや否や、共同體内部の生活に於いても亦反應作用的に商品となつて来る。これらの物の量的交換比例は、その初め全く偶然的のものである。生産物はその所有者がこれを交互に讓渡しようとする意志行爲に依つて交換し得るものとなる。斯かる間に、他人の使用對象に對する欲望が次第に確立して来る。交換は不斷の反覆に依つて、一の規則正しい社會的行程となるのである。斯くて時經る間に、労働生産物の少なくとも一部分は、交換を目的として生産されねばならなくなる。この時以後、一方に直接の必要に對する物の有用性と、交換のための有用性ととの區分が確立され、使用價值は交換價值から分離することになるのであるが、他方にまた、物の交換される量的比例は、生産それ自體に倚存することとなる。

習慣は物を價值量として確定するのである。

直接の生産物交換に於いては、各商品はその所有者から見れば、直接に交換要具( )であり、非使用者にとつては等價である。(尤もこれは、各商品がその非所有者の使用價值たる限りに於いてのみ言ひ得ることなのである)。この場合、交換品は尙未だそれ自身の使用價值から、又は交換者の個人的欲望から獨立した價值形態を受けては居ぬ。斯かる形態の必要は、交換行程に入る商品の數及び種類の増大につれて、發達して来る。即ち、問題はその解決手段と同時に生ずることとなるのである。商品所有者が自身の物品を他の種々なる物品と交換し比較する取引は、種々なる商品所有者の種々なる商品がその取引の内部に於いて同一の第三商品種類と交換され、價值として比較されることなくしては、決して行はれるものでない。斯くの如き第三の商品種類は、他の種々なる商品の等價となることに依り、狭い限界内に止まるとはいへ、とにかく直接に、一般的即ち社會的なる等價形態を與へられる。この一般的等價形態はそれを生ぜしめた瞬間的の社會的接觸と生滅を共にするものであつて、急過的に交々甲なる商品に屬したり、乙なる商品に屬したりするのである。然し商品交換の發達につれて、この等價形態は専ら特殊の商品種類にのみ固着して、貨幣形態に結晶する。それが如何なる種類の商品に固着するかは、最初は偶然的に定まることであるが、これについては大體に於いて二つの事情が決定を與へる。即ち貨幣形態なるものは、交換に依つて他から得て來た最重要の物品——事實上自己の共同體に生じた生産物の交換價值の原生的現象形態たるところの——に固着するか、又は自己の共同體に生じた讓渡し得べき富の主なる要素となつてゐる使用對象(例へば家畜の如き)に固着するかである。貨幣形態は先づ遊牧民の間に生じて来る。蓋し遊牧民の所有物は悉く動産的の、隨つてまた直接に讓渡され得るところの形態を採つてゐるものであり、且つ彼等はその生活様式の上から絶えず他の共同體と接觸し、斯くして生産物の交換を行ふことにならざるからである。人類が人類自身を奴隸として原始的の貨幣材料にしたことは屢々行はれるところであるが、然し土地がこの目的に使用されたことはなかつた。斯かる觀念は發達したブルジョアの社會にのみ生じ得たところであつて、十七世紀の最終の三分一期に始まつた。而してこの觀念を國民的の規模を以つて遂行せんとする企圖は、それより一世紀の後、フランスに於けるブルジョアの革命の際、初めて試みられたところである。

商品交換がその地方的羈絆を打ち破り、斯くして商品價值が人間労働一般の體化に發展してゆくのと同一の比例を以つて、本來一般的等價の社會的機能盡すに適した商品である貴金屬が貨幣形態を探るやうになる。

『金銀は本來貨幣であるといふ譯ではないが、貨幣は本來金銀である』(四十三)といふ命題の眞理は、金銀の現物性質が貨



幣の機能に適してゐるといふ事實に依つて證明される(四十三)。然し以上の説明に依つて我々の知るところは、商品價値の現象形態として、換言すれば商品の價値量を社會的に言ひ現すところの材料として、役立つべき貨幣の一機能のみである。價値——換言すれば抽象的隨つて等一なる人間労働の體化——の現象形態たり得るものは、如何なる複本も同一の等態的性質を有する一物質に限られてゐる。他方にまた、各價値量の區別は純粹に量的のものであるから、貨幣商品たるものは純然たる量的の區別を與へられ得るものでなくてはならぬ。即ちそれは、意の儘に分割し綜合し得るものでなくてはならぬ。然るに、金銀は本來斯かる性質を具備してゐるのである。

(四十二)『拙著『經濟學批判』第一三五頁『貴金屬は……本來貨幣たるものである』ガリアニ著『貨幣論』クヌストチ編イタリ

一經濟名著集近世篇、第三卷第七二頁)。

(四十三)これについての詳細は、拙著『經濟學批判』中の『貴金屬』なる一節を見よ。

貨幣商品の使用價値は二重のものとなる。即ちそれは商品としての特殊の使用價値——例へば金が齧齒の填充や奢侈品の原料などに役立つ場合に於ける如き——の外に、尚その特殊の社會的諸機能から生ずる形式的の使用價値をも與へられる。

他の一切の商品は貨幣の特殊の等價に過ぎず、而して貨幣はこれらの商品の一般的等價であるから、これらの商品は特殊の商品として、一般的の商品たる貨幣(四十四)に對立するものとなるのである。

(四十四)『貨幣は一般的の商品である』(ウェリ前掲、第一六頁)。

貨幣形態なるものは一商品に固着した他の凡ゆる商品の關係の反射に過ぎぬことは、我々の既に見たところである。そこで貨幣が商品であるといふことは(四十五)、先づその完成した形態から出發して、然る後これを分析せんとする人にとつてのみ、一の發見となるのである。交換行程は、それに依つて貨幣に轉化せしめられる商品に價値を附與するものではなく、寧ろ特殊の價値形態を附與する。これらの兩事項を混同せる結果、金銀の價値は想像的のものであると考へられるやうになつたのである(四十六)。また、貨幣は一定の機能上それ自身の單なる表章を以つて代置せられ得るものであるから、そこで貨幣は單なる表章に過ぎぬといふ錯誤が生じて來た。然しこの錯誤の中には、物の貨幣形態は物それ自身から見れば外部的のものであつて、その背後に隠れてゐる人間關係の單なる現象形態に過ぎぬといふ豫覺が含まれてゐる。この意味に於いては、如何なる商品も表章であるといふことにならう。なぜならば、如何なる商品も價値として見れば、その生産に支出された人間労働の物的外皮に過ぎぬからである(四十七)。けれども一定の生産方法の基礎上に於いて物に與へられる社會的の性質、又は労働の社會

的性質に與へられる物的性質をば、單なる表章に過ぎぬとすることは、これ取りも直さず、これらの性質が人類の一般的合意と稱せられるものに依つて可とされた人類思索の專擅の產物であるとすることになる。かの十八世紀に愛好された説明方法は、實に斯くの如きものであつた。當時の學者は人類關係の發生行程を説明することが出来なかつたので、この關係の謎的形態の中から、せめて豫備的にでも奇異の外觀を取り去らうとしたのである。

(四十五)『貴金屬なる一般的名稱を以つて呼び得る金銀それ自身は……價値が昂騰しまた低落するところの……商品である。貴金屬のヨリ少量を以つて一國に於ける農業上又は工業上の生産物のヨリ多量と交換されるやうになるとき、貴金屬はヨリ高き價値を有するものと見做し得るのである』(一商人著『相互の關係から見た貨幣、商品及び交換の一般的觀念に関する論考』ロンドン、一六九五年刊第七頁)。(註)『鑄造せられたるものと鑄造せられざるものとを問はず、凡そ如何なる金銀も他の凡ゆる物の尺度に使用されるといへ、而も商品たる點に於いては、それは葡萄酒や、油や、煙草や、布や、毛織物などに劣るものではない』(匿名者著『商業就中東インド貿易に関する論考』第二頁)。(註)『我が王國の資財』及び富を貨幣にのみ局限するは當を得ぬことであり、また金銀は商品たらずと見做し得るものでもない』(匿名者著『最有利の商業たる東インド貿易論』ロンドン、一六七七年刊第四頁)。

(四十六)『金銀は貨幣となる以前すでに金屬として價値を有つてゐる』(ガリアニ『貨幣論』)。ロックは言ふ。『銀は貨幣たるに適した性質を有つて居ればこそ、人類は一般的の合意を以つてこれに一の想像的價値を附與したのである。』これに反對してローは次の如く言つてゐる。『諸國民は如何にして、一の物に想像的價値なるものを附與し得るであらうか……又はこの想像的價値なるものは如何にして、維持せられ得るであらうか』と。然し、この問題について、彼れ自身が如何に理解するところ少なかつたかは、次の言葉によつて知ることが出来る。『銀はその有する使用價値、換言すればその現實的價値に従つて交換された。而してそれは貨幣として採用されることにより、更に追加的の一價値を得るに至つた』(ジョン・ロー著『通貨及び商業論考』デル編、ギョーマン全集、『十八世紀財政經濟學者論集』第四七〇頁)。

(四十七)『貨幣は表章(商品の)である』(ド・フォルボネ著『商業要論』新版ライデン一七六六年刊第二卷第一四三頁)。(註)『貨幣は表章として商品に引き着けられるものである』(前掲第一五五頁)。(註)『貨幣は物の表章であつて、それを代表する』(マテスキュー著『法の精神』全集、ロンドン、一七六七年刊、第二卷、第二頁)。(註)『貨幣はそれ自身富であるから、單なる表章ではない。それは價値を代表するものではなく、價値そのものである』(ル・トロワ前掲、第九一〇頁)。(註)『我々は價値



の概念を観察するとき、物それ自体は單なる表章と見做され、物はそれ自身としてではなく、その値するものとして通用することを知らる(ヘーゲル前掲第一〇〇頁)。經濟學者よりも久しき以前、すでに法學者たちは、王權に媚びんがため、ローマ帝國の傳統とパンデクテンの貨幣概念とに基き、貨幣は單なる表章に過ぎず、また貴金屬の價値は全く想像的のものに過ぎないといふ見解を以つて、全世紀間國王の鑄貨製造權を擁護した。彼等の從順なる門生フキリッブ・ド・ウァロアは、一三四六年に發せられた一布告の中に述べて言ふ。『鑄貨の製造、制定、供給、その他貨幣に關する一切の處置、一切の流通、及び我が思ふ通りの、また是と信ずる價格をば、それに附與することは、ひとり我等及び國王陛下のみの權限に屬することは、何人も疑ひ得ざるところであり、且つ疑ふべからざることである』と。皇帝の勅令に依つて貨幣價値が定められるとは、ローマ法の定説であつた。貨幣を商品として取扱ふことは、明文を以つて禁止されてゐた。『何人も貨幣を賣買することを得ず。公用のために制定せられたるものは、商品とすべきにあらざればなり。』この問題に關する好個の説明は、パニニの『物の正當なる價値に關する論文』(クストチ編イタリイ經濟名著集、近世篇、第二卷)の中に見出される。彼れは殊にその第二篇の中で、法學者先生たちの所説を論駁してゐる。

商品の等價形態は商品の價値大小の量的決定を含むものでないことは、曩に述べた通りである。我々は、金が貨幣であり、隨つて他の凡ゆる商品と直接交換し得るものであることを知つたとしても、例へば十封度の金が幾許に値するかを知つたことにはならぬ。金は他の各商品と同じく、相對的に他商品を通してのみそれ自身の價値大小を言ひ現し得るに過ぎぬ。金それ自身の價値は、金の生産に必要な労働時間に依つて決定され、等量の労働時間が凝結してゐる他の各商品の分量に依つて言ひ現される(四十八)。金の相對的價値大小の斯かる確定は、金の生産所に於ける直接の生産物交換に依つて行はれる。されば、金が貨幣として流通に入るとき、その價値は豫め既に與へられてゐる譯である。十七世紀最終の數十年に於いても、貨幣の商品たることを知り得る程に貨幣分析は進んでゐたが、それでもまだ發端に過ぎなかつた。貨幣が商品であることを理解する點ではなく、寧ろ商品なるものは如何にして、何故に、また何に依つて、貨幣となるかを理解する點に、難關が存してゐるのである(四十九)。

(四十八)『若し或人が、一プシエルの穀物を生産し得ると同一の時間を以つて、一オンスの銀をペルーの地中からロンドンに運び得るとすれば、一オンスの銀は即ち一プシエルの穀物の自然價格となる譯である。然るに、探掘のヨリ容易な新鐵山が発見されたため、從來一オンスを獲得するに要した同一の努力を以つて二オンスの銀を獲得し得るに至つたとすれ

ば、穀物は一プシエル當り十志になつたとしても、他の事情に變化なき限り、一プシエル當り五志であつた從來と廉價の點に變りはないであらう(ウキリアム・ベター著、租税及び貢納論、ロンドン、一六六七年刊、第三一頁)。

(四十九)『貨幣に關する虚偽の諸定義は、これを二つの主要部類に大別することが出来る。貨幣を商品以上と見るものと、以下と見るものとが即ちそれである。』——ロッシア教授は斯く我々に教へた後、貨幣の本質に關する文献の難然たる目錄を擧げてゐるが、貨幣學說の現實の歴史については些かの理解をもほめかして居らぬ。彼れは更らに教へて言ふ。『尙また近時に於ける大抵の經濟學者が、貨幣を他商品から區別する(それなら貨幣は商品以上又は以下となるではないか)ところの特質を十分念頭に置かなかつたことは、拒み難き事實である。……この意味に於いて、ガニール等の半マーカーナリスト的な反動も、全然無根據なものではないことになる』(ロッシア著『國民經濟原論』第三版、一八五八年刊第二〇七—二一〇頁)。以上——以下——十分……なかつた——この意味に於いて——全然……ではない! 何と言ふ概念決定だ。而も斯種の折衷的な大學教授式謔言をば、ロッシア先生は謙遜にも經濟學の『解剖生理學的研究方法』と命名してゐるのである。ただ一つ、彼れの功に歸すべき發見がある。貨幣は『氣持のいい一商品』だといふ發見が即ちそれである。

× 神A商品=神B商品 といふ最單純な價値表章に於いても、他の物の價値大小を表現する方の物が、この關係からは獨立して、その等價形態を社會的自然性質として具備してゐるやうに見えることは、我々の既に見たところである。我々はこの虚偽の外観が如何にして確立されたかを追究した。この外観は、一般的等價が特殊の一商品種類の現物形態と合體するとき、換言すれば貨幣形態に結晶するとき、完成されるものである。一の商品は、他の諸商品の價値を全般的に代表するが故に初めて貨幣となるのであるが、表面に現れたところでは、寧ろ反對に、一商品が貨幣であるから、他の諸商品はそれに依つて一般的に自己の價値を代表せしめるやうに見えて来る。これを媒介するところの運動は、それ自身の結果の中に消滅して何等の痕跡をも止めない。諸商品の方からは何もしないで、自己の外部に自己と相並んで存在するところの一商品體として、それ自身の價値形態が完成されてゐることを見出すのである。これらの物——金銀は、大地の胎内から出て來るとき既に一切の人間労働を直接に體化したものとなつてゐるのであつて、貨幣屬性の生ずる所以は其處に在る。社會的生產行程に於ける人類の單なる原子的行爲と、隨つてまた人類の管理並びに意識的なる個人的行動から獨立した、生産事情の物的形態とは、先づ人類の労働生産物が一般的に商品形態を探る點に現れる。されば、貨幣屬性の謎とは畢竟、商品屬性の謎が眼に見えるやうになつて人目を射る如き形を採つたものに過ぎぬのである。



## 第三章 貨幣又は商品流通

## (一) 價値の尺度

説明を單純ならしめるため、本書の全體を通じて金が貨幣商品であると假定して置く。

金の第一の機能は、商品界に價値表章の材料を供給すること、換言すれば各商品の價値を同分母の大きさとして、質的に相等しく量的に相互比較し得べき大きさとして表現することにある。斯くして金は價値の一般的尺度たる機能を盡くすことになる。而してこの機能に依つてのみ、特殊の等價商品たる金は、先づ貨幣となるのである。

各商品は貨幣あるが故に通約し得るものとなるのではなく、寧ろその反對である。即ち一切の商品は、これを價値として見れば對象化された人間労働であり、隨つてそれ自身に於いて通約し得るものである。同一の特殊商品を以つてその價値を共通的に秤量することができ、斯くしてこの特殊商品は、共通的の價値尺度たる貨幣に轉化し得るのである。價値尺度としての貨幣は、商品の内在的價値尺度たる労働時間の必然的な現象形態である(五十)。

(五十) 貨幣が何故、例へば一枚の紙幣に依つて、労働時間が代表されるといふ如く、直接に労働時間それ自身を代表しないかといふ問題は、歸するところ、商品生産の基礎上に於いては、労働生産物が何故商品として表現されねばならぬかといふ問題と異ならない。蓋し労働生産物が斯く商品として表現されるといふことの中には、労働生産物が商品と貨幣商品とに二重化することが含まれてゐるからである。或はまた、右の問題は、私的労働が何故その反對物たる直接社會的の労働それ自體として取扱はれ得ないかといふ問題に歸する。商品生産を基礎とする『労働貨幣』なるものの淺薄な空想主義については他の處で(前掲拙著第六一頁以下)これを詳述した。茲に尙一言したいことは、例へばロバート・オーウエンの『労働貨幣』は劇場切符などと同様に眞の『貨幣』ではないといふことである。オーウエンは商品生産とは正反對の生産形態なる直接に社會化された労働を前提した。労働券なるものは、共同労働に對する生産者の個人的負擔、及び共同生産物中消費に歸すべきものとして定められた部分に對する生産者の個人的請求權を確認するものに外ならぬ。然し商品生産を前提して、而も貨幣の手に依り商品生産の必須條件を避けんとするが如きは、オーウエンの思ひも寄らぬことであつた。

一商品の價値を金で言ひ現したるもの、即ち  $x \text{ 商品} = y \text{ 貨幣商品}$  なる方程式は、その商品の貨幣形態であり、價格で

ある。上式の  $x$  と  $y$  の如き單一なる方程式は、今や鐵の價格を社會的に妥當に表現するに十分なものとなり、最早他の諸商品の價値方程式と相並んで整列することを要しない。なぜならば、金といふ等價商品は既に貨幣の性質を有つてゐるからである。斯くて商品の一般的なる相對的價値形態は、今や再びその本來の單純又は個別的なる相對的價値形態の姿容を採るやうになる。他方にまた、擴大したる相對的價値表章、換言すれば各相對的價値表章の限りなき連系は、貨幣商品の特殊相對的なる價値形態となる。然しこの連系は今や、諸商品の價格を以つて社會的に與へられることになるのである。試みに物價表を逆に讀んでゆくならば、貨幣の價値大小が凡ゆる可能の商品に依つて代表されてゐることを見出す。だが、貨幣には何等の價格もない。貨幣にして若し他の諸商品の斯かる統一的な相對的價値形態に關與しようとするれば、それは自分自身を等價としてこれに關聯せしめられねばならぬであらう。

商品の貨幣形態なる價格は、價値形態一般と同様に、商品の有形的なる現實的形態とは異なるところの、單なる觀念的又は想像的の形態に過ぎぬものである。鐵、リソネル、小麦などの價値は、我々の目には見えないが、これらの物それ自身の内部に存在してゐる。それは、これらの物が金に等しいといふことに依つて表象されるのである。而してこの金に等しいといふことは、謂はばこれらの物の頭の中のみ存在してゐるところの、金に對する一關係である。されば商品所有者は、これらの物の價格を外界に知らせるためには、彼れ自身の舌を貸し與へるか、又は紙札を下げてやらぬばならぬことになる(五十一)。

(五十一) 野蠻人又は半野蠻人は、これとは異つた様式に舌を使ふ。例へば、バリー大佐はバフィン灣(北極海)の西岸の住民について斯う述べてゐる。『彼等は生産物を交換する場合に、提供された品物を二度舐めた。斯くして後、彼等は取引が満足に終了したものと考へたらしかつた。』同様に東部エスキモー人の間にあつても、交換者は品物を受取る度毎に舐めて見る。斯くの如く、北方に於いては舌が物品占有の器官として使用されてゐるに反し、南方に於いては腹が蓄積所有物の器官とされ、斯くしてカファール人は腹の肥え具合で富の大小を評價するに至つたのであるが、これは怪むに足らないことである。これで見ると、カファール人といふ奴は、中々隅に置けぬ者どもであることが分る。蓋し一八六四年の英國政府健康報告を見ると、そこには労働者階級の少なからざる部分が脂肪營養の不足に悩んでゐる状態が訴へられてゐるのに、その同じ年、ドクター・ハーヴェーイなる人(尤も血液循環の發見者とは別人だが)はアルチオア及び貴族階級の脂肪過度を瘡やすといふ御吹聴の處方箋で、金儲けをしてゐたのである。

金を以つてする商品價値の表章は觀念的のものであるから、この目的には單なる想像的又は觀念的な金(金)以外の物は利用



し得ないのである。商品の価値が價格形態即ち想像的の金形態を附與されたからといって、それだけではまだ商品に金に實現されるものでなく、幾百萬マルクの商品価値を金で評價するといふだけならば、その目的のために一片の現實的な金を必要としないことは、如何なる商品販賣業者もよく知るところである。要するに、貨幣なるものは價值尺度としての機能からいへば、單なる想像的又は觀念的の貨幣として役立つに過ぎぬのであつて、この事實から奇怪極まる諸種の學説が生ずることになつた(五十二)。

(五十二) 拙著『經濟學批判』中の一節「貨幣の尺度單位に關する諸學説」(第五三頁以下)を見よ。

價值尺度たる機能に役立つものは想像的の貨幣のみであるとはいへ、價格は現實的の貨幣材料に全く倚存してゐるものである。價值、換言すれば一噸の鐵といふ如き物に含まれてゐる人間労働の量は、それと等量なる労働を含む想像的の貨幣商品量に依つて言ひ現される。そこで金、銀又は銅の何れが價值尺度として役立つかに従ひ、一噸の鐵の價值は全く相異つた價格表章を受けることになる。語を換へて言へば全く相異つた量の金なり、銀なり、銅なりとして表象されることになるのである。

そこで金銀の如き二つの相異つた商品が同時に價值尺度として役立つとすれば、この場合には如何なる商品も金價格及び銀價格なる二つの相異つた價格表章を有つことになる。而してこれらの價格表章は、金對銀の價值比例が例へば  $1:1\frac{1}{2}$  として不變である限り、穩かに竝立して行くのであるが、この價值比例に變動が生ずれば、商品の金價格と銀價格との比例は攪亂を受けることになる。これで見ても、價值尺度の複本位制は價值尺度の機能と矛盾するものであることが知られる(五十三)。

(五十三) 第二版註——『金及び銀が貨幣として、價值尺度として法律上並存する處にあつては、これらの物を同一物質として取り扱はうとする無益の試みが常になされてゐる。同一の労働時間が不變的に同一比例の金及び銀を以つて對象化されねばならぬと假定することは、これ取りも直さず金銀が同一の物質であり、且つ價值低き方の金屬なる銀の一定量は、一定量の金の不變的一斷片であると假定することになる。エドワード三世の治世からジョージ二世の時代に至るイギリスの貨幣史は、金銀價值比例の法律的確立と現實に於ける金銀價值の變動との衝突に因る不斷的混亂を以つて終始してゐる。或時は金、或時はまた銀が、價值以上に評價された。而して價值以下に評價された方の金屬は、流通の内部から引き上げられ、錆きつよされて輸出された。然る後、兩金屬の價值比例は、法律に依つて變更されたが、新たな名目價值は總て舊の如く現實的の價值比例と衝突し始めた。現時について言へば、インド及び支那の銀需用に依り金の價值は銀に比し極めて微弱ながら暫行的の低落を來たしたが、その結果銀の輸出が進み、銀の流通が金に依つて驅逐されるといふ、右と同一の現象が大規模に激

成されたことは、フランスに見るところである。一八五五年より五七年に至る間、フランスに於ける金の輸出に對する輸入超過は、四千一百五十八萬磅、銀の輸入に對する輸出超過は、一千四百七十萬四千磅であつた。金銀の雙方が法定價值尺度となつて居り、隨つて何れを支持しても、受取られねばならぬと同時に誰れでも隨意の一方を以つて支持し得る諸國に在つては、價值の増騰した方の金屬は打歩を生じ、價值以上に評價されてゐる方の金屬を以つてその價格を秤量されるやうになることは、他の總べての商品に於けると異なるところはない。要するに、後者の金屬のみが専ら價值尺度として役立つことになるのである。この方面に於ける一切の史的經驗も、結局は次の一點に歸してしまふ。即ち法律上二つの商品が價值尺度の機能を盡くす處に在つては、事實上つねにその一方のみが、價值尺度たる位置を確保することになるのである(前掲拙著第五二及び五三頁)。

價格の一定した商品は何れも  $A = x \text{ 金}$ 、 $B = y \text{ 銀}$ 、 $C = z \text{ 銅}$  等の形で表現される。右の中  $x, y, z$  は夫々  $A, B, C$  なる商品種類の一定量であり、 $x, y, z$  は何れも金の一定量を示す。斯くの如く、諸商品の價值は種々なる大きさの想像的數量に轉化される。換言すれば、此等の商品の現物體は種々難多なるにも拘らず、その價值は分母の相等しき様々の大きさに、様々の大きさの金に轉化されるのである。諸商品の價值は、斯様な相異つた數量として相互に比較され秤量されるのであつて、その結果、諸商品の價值を尺度單位としての一定量の金に關聯せしめる必要が技術上生じて來る。而してこの尺度單位それ自身は更らに、若干の可除部分に區分されることに依つて、尺度標準(五)となる。金、銀、銅などは貨幣となる以前、既にその金屬としての重量の中に斯かる尺度標準を有してゐるのであつて、例へば一封度といふものが尺度單位として役立つ場合、一方にそれはオンスその他のものに細分され、他方にまたハンドレッドウェイトその他のものに合算されることになるのである(五十四)。斯くして如何なる金屬流通に於いても、既與の重量標準名が貨幣標準即ち價格標準の本來の名稱となつて來る。

(五十四) 第二版註——イギリスで貨幣標準の單位となつてゐる一オンスなる金は可除部分には分割されないものであるが、この奇異なる現象の生じた所以は次の如くに説明される。『我國の幣制は本來、銀の使用にのみ適合するやう定められたもので、銀一オンスは適當なる一定數の個貨に分割され得ることを常としたのである。然るにその後、金を貨幣に鑄造するやうになつてからも、幣制は依然銀を本位としたものであつたから、隨つて一オンスの金を適當なる數の個貨に鑄造することは不可能となつた譯である』(マクラーレン著『通貨史』ロンドン、一八五八年刊、第一六頁)。

貨幣が價值尺度として盡す機能と、價格標準として盡す機能とは、全く相異なるものである。即ち貨幣なるものは、これを



人間労働の社會的體化として見れば價值尺度であり、確定された金屬量として見れば價格標準となるのである。價值尺度としての貨幣は、相異つた商品の價值を想像的の金量なる價格に轉化せしめることに役立ち、價格標準としての貨幣は、斯かる金量それ自身を秤量するものである。價值尺度を以つてするとき、商品は價值として秤量されるのであるが、價格標準なるものは反對に、様々の金量を一の金量で秤るのであつて、一の金量の價值を他の金量の重量で秤るのではない。價格標準を成立せしめるためには一定重量の金を尺度單位として確定する必要がある。これについては、分母の相等しき様々の大きさの尺度を決定する他の總べての場合に於ける如く、尺度比例の確立といふことが決定的に必要となつて来る。要するに、同一量の金が尺度單位として不變的に役立つ程、價格標準は益々良好にその機能を盡すことになるのであるが、反對に金が價值尺度として役立つ得るのは、金それ自身が労働生産物であり、隨つて變化し得べき價值であるが故にのみ行はれることである(五十五)。

(五十五) 第二版註——イギリスの文獻に於いては、價值尺度と價格標準との混亂は名狀すべからざる有様に違し、雙方の機能も、名稱も、絶えず混同されてゐる。

先づ、金の價值變動が價格標準としての機能を決して侵害するものでないことは明瞭な事實である。金の價值は如何に變動しても、相異つた金量は相互間に絶えず同一の價值比例を保つてゐる。金の價值が假りに一〇〇〇パーセント下落したとしても、十二オンスの金が一オンスの金に比して十二倍の價值を有つてゐることに變りはないであらう。且つまた、價格に於いて問題となることは、相異つた金量の相互比例のみである。他方に、一オンスの金は價值の騰落と共に重量を變ずるものでないから、その可除部分の重量も同様に變化することがない。これがため、金はその價值が如何に變動しても、價格の固定尺度としては、常に同一の機能を盡すことになるのである。

金の價值變動は更らに、價值尺度としての機能を妨げることにもならぬ。蓋し金の價值變動は、凡ゆる商品の上に同時に影響するものであつて、他の事情に變化なき限り、これらの商品相互の間に於ける相對的價值には、影響するところがないのである。尤も、これらの相對的價值は、今や從來に比し、或は高き或は低き金價格を以つて言ひ現されることになる。

商品が金で評價される場合にも、一商品の價值が他の何等かの商品の使用價值で表現される場合と同様に、與へられたる時期に一定量の金を生産するためには、一定量の労働を要するといふことだけが假定される。商品價格一般の運動については、曩に述べた單純なる相對的價值表章の法則が行はれる。

貨幣價值に變化がないとすれば、商品の價格は價值が昂騰する時にのみ一般的に昂騰し、また商品價值に變化がないとすれば、貨幣價值が低落する時にのみ一般的に昂騰し得る。反對に、貨幣價值に變化がないとすれば、商品の價格は價值の低落する場合にのみ一般的に低落し、また商品價值に變化がないとすれば、貨幣價值が昂騰する時にのみ一般的に低落し得る。斯く言へばとて、貨幣價值の昂騰に比例して商品價格が低落し、貨幣價值の低落に比例して商品價格が昂騰するといふことには決してならぬ。これは價值の不變なる商品についてのみ言ひ得ることである。例へば貨幣價值の昂騰と同時に同一の比例を以つて價值の昂騰する商品に在つては、價格は變化することがない。若しこの商品の價值が貨幣價值よりも緩慢又は迅速に昂騰するとすれば、その商品の價格の昂騰又は低落は、その商品の價值運動と貨幣の價值運動との差に依つて決定されることになる、以下準じて行くのである。

これより價格形態の考察を展さう。

金屬重量の貨幣名は本來の重量名から次第に分離されるのであるが、その様々な原因の中、歴史的に決定的なものを擧ぐれば左の通りである。——(一)發達程度のヨリ低き民族に外國貨幣が輸入されること(例へば古代ローマの金銀貨は、最初外國商品として流通してゐたものである)。斯かる外國貨幣の名稱は、國內に行はれる重量名とは異つてゐる。(二)富が發達するにつれ、ヨリ下級の貴金屬はヨリ高級の貴金屬に依つて、即ち銅は銀に依り、銀は金に依つて、價值尺度たる機能を奪はれる。尤もこの順序は、一切の詩的時代順と著しく矛盾するところがあるかも知れぬ(五十六)。一例を擧ぐれば、磅は元來、現實に於ける一封度の銀に對する貨幣名であつた。然るに價值尺度としての金が銀を驅逐するや否や、この磅なる名稱は金對銀の比例の如何に従つて、十五分の一封度又はその他の重量の金に附せられることとなつた。斯様にして貨幣名としての磅と、金の通例の重量名としての封度とは、相互分離されることになつたのである(五十七)。(三)數世紀の久しきに互つて持續された王侯に依る不純貨幣の鑄造。これがため、鑄貨の本來の重量の中から、實際のところその名稱だけが後世に遺されることとなつたのである(五十八)。

(五十六) この順序はまた、歴史的にも普遍的には通用しないのである。

(五十七) 第二版註——斯くして、イギリスの磅は、本來の重量の三分の一にも當らず、聯合以前に於けるスコットランドの磅は本來の重量の三十六分の一しか代表しないといふ結果を生じた。またフランスのリーヴルは本來の重量の七十四分の一、スペインのマラヴェヂは一千分の一以下、ポルツァガルのレイに至つては更らに甚だしいのである。

(五十八) 『今日單に觀念的の名稱たるに過ぎぬ貨幣種類は、如何なる民族に於いても、最も古き貨幣である。これらの貨幣



は何づれも、嘗ては現貨的の貨幣であつた。さればこそ、これらの貨幣は計算貨幣として役立つたのである』(ヘガリアニ著『貨幣論』第一五三頁)。

この史的行程に依つて、金屬重量の貨幣名を通例の重量名より分離せしむる事實は各民族の習慣となるのである。元來、貨幣標準なるものは、一方から言へば純粹に傳習的のものであり、他方から言へば普遍的に通用することを必要とするものもあるから、結局は法律に依つて規定されることになつて来る。斯様に例へば、一オンスの金といふが如き一定重量の貴金屬は、政府の力に依つて若干の可除部分に分割され、これらの部分は磅、弗その他の法定名を與へられることになる。これらの可除部分は斯くして貨幣の眞の尺度單位となるのであるが、それがまた更に志、片その他の如き法定名を有する他の可除部分に細分される(五十九)。一定の金屬重量が金屬貨幣の標準たることには變化がない。變化したのは、可除部分に分割されたことと、名稱を附せられたこととの二點である。

(五十九) 第二版註——デウキッド・アーカート君はその『通語集』(7)の中で、イギリスの貨幣標準單位なる一磅は、今日約四分の一オンスの金に等しいといふ驚くべき(1)事實について述べてゐる。曰く『斯くの如きことは尺度を不純ならしむるものであつて、標準を設定する所以ではない』と。他の凡ゆる事物に於ける如く、金重量の斯かる『不純名稱』の中にも、彼れは文明の不純化作用を見出してゐるのである。

價格、換言すれば商品價値の觀念的轉形たる金量は、今や貨幣名を以つて、貨幣標準の法律上有效なる計算名を以つて、言ひ現されることになる。その結果、イギリスでは、一クォーターの小麥は一オンスの金に等しいとはいはず、三磅十七志十片半に等しいといふやうになる。この様に、商品は貨幣名を以つて自己が幾許に値してゐるかを語るようになるのであつて、物を價値として、換言すれば貨幣形態を以つて、確定する必要の生じた場合には、貨幣はつねに計算貨幣として役立つのである(六十)。

(六十) 第二版註——『ヘラス人は貨幣を何に使用するかとの問に對して、アナカルシスは計算に、と答へた』(アテナユス著『學者の晩餐』シュヴァイグハイザー編、第二版、一八〇二年刊)。

物の名稱は、物の性質から言へば全く外部的のものである。或人の名がヤコブだといふことを知つても、その人について何も知つたことにはならぬ。同様に、磅、弗、フラン、デウカート、その他の貨幣名に於いては、價値關係の一切の痕跡が消滅してゐる。加ふるに、貨幣名なるものは、商品の價値を言ひ現すと同時に、また貨幣標準たる金屬重量の可除部分をも言ひ

現すものであるから、貨幣名といふ幽玄的表章の隠れたる意味は、愈々以つて解らなくなつて来る(六十一)。他方にまた、價値を商品界の雜多なる現物體から區別するためには、それが斯かる無概念的に物的にして且つ單純に社會的なる形態を採るやうになることが必要である(六十二)。

(六十一) 第二版註——『價格標準としての金は、商品價格に於けると同一なる計算名を以つて現れる。例へば、一オンスの金は、一噸の鐵の價値と同様に、三磅十七志十片半を以つて言ひ現される。そこで、この計算名は、鑄貨價格』と呼ばれるやうになつた。金(又は銀)は、それ自身の實質を以つて評價せられ、他の各商品とは異なり、國家に依つて一の固定價格を與へられるといふ、驚くべき見解が生じた所以は茲に在る。要するに、一定の金重量の計算の確立をば、斯かる金重量の價値の確立と混同したものである』(前掲拙著、第五二頁)。

(六十二) 拙著『經濟學批判』第五三頁以下『貨幣の尺度單位に關する諸學說』を参照せよ。『鑄貨價格』の引上げ又は引下げとは要するに、法律上確定された重量の金乃至銀に對する法定貨幣名をば、國家の手でヨリ大、若しくはヨリ小なる重量に流用し、斯くすることに依つて例へば四分の一オンスの金を將來は二十志貨ではなく四十志貨に鑄造するといふやうなことを意味するものであるが、この種の幻想は、一面公私債權者に對する拙劣な財政上の遺繰りを目的とすると同時に、また經濟上の『奇蹟療法』を目的とするものである。而してこの後者の目的から見た右の幻想については、ウキリアム・ペデーがその著『貨幣問答、ハリファックス侯(一六八二年刊)』(11)の中で、餘すところなく説き盡してゐるので、彼れの後年に於ける粗述者は兎もかく、直接の後繼者たるサー・ダドレー・ノースやジョン・ロックの如き人々でさへも、ただ彼れの所説を平凡化し得るに過ぎぬ有様となつた。彼れは殊に斯う述べてゐる。——『若し一國の富が一片の布令を以つて十倍に増大されるとすれば、我長官たちが久しき以前から斯かる布令を發しなかつたことが不思議となるであらう』(前掲第三六頁)。

價格とは、商品に對象化された労働の貨幣名である。されば商品はその價格を構成するところの貨幣量に等しいと説くことは、一の重語であつて、一商品の相對的價値表章なるものは、總して二商品間の等價關係を言ひ現すことになるのである(六十三)。だが價格なるものは、商品價値量の指標たる資格に於いて同時にまた商品對貨幣の交換比例の指標であるといへ、反對に商品對貨幣の交換比例の指標は、必ずしも商品價値量の指標でなければならぬといふことにはならない。いま、同じ大さの社會的に必要なる労働が、一クォーターの小麥と二磅の貨幣(約半オンスの金)とに表現されるとすれば、この二磅は一クォーターの小麥の價値量の貨幣表章、換言すればその價格である。ところで若しこの價格を三磅にすることを許すか、又は一磅にする



ことを餘儀なくせしめる事情が生じたとすれば、この一磅と三磅とは、小麦の價值量の表章としては餘りに小さく餘りに大きいものとなるとはいへ、それが小麦の價格たることに變りはないのである。なぜならば、それは第一に小麦の價值形態即ち貨幣であり、第二に小麦對貨幣の交換比例の指標となつてゐるからである。生産條件又は労働の生産力が不變であるとすれば、一クオターの小麦を再生産するには、依然同一量の社會的労働時間が支出されねばならぬ譯であつて、この事情は小麦生産者の意志にも、他の商品所有者の意志にも懸るものではない。

(六十三) 『然らずんば、貨幣に於ける一百萬フランは、商品に於ける同一の價值に比してヨリ以上の價あることを承認せねばならなくなる』(ル・トロローヌ前掲、第九二二頁)。<sup>12)</sup> 即ち『一の價值はそれに等しき價值以上の價ある』といふことにならるのである。

要するに、商品の價值量なるものは、商品の形成行程に内在してゐるところの、社會的労働時間に對する必然的の一關係を言ひ現すものであつて、價值量が價格に轉化された時、この必然的關係は商品とその外部に存する貨幣商品との間の交換比例として現れる。だが、この交換比例に於いては、商品の價值量と同様にまた、與へられたる事情のもとにその商品が讓渡されることころの價值よりもヨリ大、若しくはヨリ小なる價值が言ひ現され得る。斯くの如く、價格と價值大小との量的不一致を生ぜしめ、前者をして後者よりも大又は小ならしむる可能は、價格形態それ自身の内部に存在してゐるのであるがこれは決して價格形態の缺點ではなく、寧ろこれあるが故に、價格形態は規律が無規律の盲目的に作用する平均律としてのみ貫徹され得るところの生産方法に適應した形態となるのである。

だが、價格形態なるものは、單に價值量と價格と、換言すれば價值量と價值量それ自身の貨幣表章との間に於ける量的不一致を可能ならしむるのみでなく、また一の質的矛盾をも宿し得る。即ち、貨幣は商品の價值形態に外ならないのに、價格はもはや總じて價值表章では無くなる。斯くて例へば良心、名譽等の如き、それ自體としては何等の商品でもないものが、貨幣を目的として販賣に附せられ、その價格を通して商品形態を與へられ得る。斯くの如く、物は價值を有せずして、形式的に價格を有し得るのである。この場合、價格表章なるものは、數學上の一定の數量と同様に假定的のものとなる。他方に、何等の間労働も對象化されて居らない故に何等の價值をも有することなき未墾地の價格のやうな假定的の價格形態も、現實的の價值關係又はその派生的關係を宿し得るのである。

價格なるものは、相對的價值形態一般と同様に、例へば一噸の鐵といふが如き一商品の價值を言ひ現すのに、例へば一オンスの金といふ如き一定量の等價が直接に鐵と交換し得るといふ事實を以つてするものであつて、反對に鐵の方が直接に金と交換し得るといふ事實を以つてするものではない。そこで、商品が實際に交換價值の作用をなすためには、その現物形態を脱却し、單なる假想的の金から現實的の金に轉化されねばならぬことになる。この轉化、この變質作用は、商品にとつてはヘーゲルの『概念』にとつて必然から自由への推轉が、又はウミサリ蟹にとつて甲羅の破裂が、教父ヒエロニムスにとつて古きアダム<sup>13)</sup>の脱却が(六十四)苦しいことである以上に苦しいことであるかも知れないが、それでも、到底避けられぬ條件となつてゐるのである。

(六十四) ヒエロニムスは若き時、物質的の内慾と苦悶せねばならなかつた。それは、彼れが沙漠に於いて想像の美女と闘つたといふ事實に依つても知られるところであるが、彼れは更らに年老いて後も、精神的の内慾と苦悶せねばならなかつた。例へば彼れは斯う言つてゐる。——予は心の中で、の審判者の前に立つたと感じた。『汝は誰人ぞ』といふ審問の聲が聽えた。『予はクリスト信者である』と答へた。審判者は大喝して『欺く勿れ。汝はシセロ信者だ』と言つた。

商品はその現實的形態たる例へば銀の如きもの以外に、尙、價格に於いて觀念的の價值形態、即ち假想的の金形態を有し得る。が、商品は現實的に鐵でもあり、金でもあるといふ譯には行かぬのである。商品に價格を賦與するには、假想的の金を商品と等位に置けば十分である。商品がその所有者にとつて一般的等價たる機能盡し得るためには、金に依つて代置されることを要する。假りに鐵の所有者が或浮世的商品の所有者の處へ來て、鐵價格を指しながら、これが貨幣形態であると言つたとすれば、浮世的商品の所有者は、天上の聖ペテロが己れに向つて信仰箇條を讀み上げたダメンテに答へた如く答へるであらう。

『かの錢の純分と目方は十分能く吟味してある。だが言へ、君は尙それを懷中に藏してゐるか否かを。』  
價格形態なるものは、商品が貨幣と交換され得ること、また交換されねばならぬことを含んでゐる。他方にまた、金は豫め貨幣商品として交換行程内に活動してゐるが故にのみ、觀念的價值尺度として作用するのであつて、觀念上の價值尺度の下には硬貨が伏在してゐるのである。

## (二) 流通要具<sup>(14)</sup>

### A 商品の轉形

#### 第一篇 第三章 貨幣又は商品流通



商品の交換行程には、矛盾的にして相排除し合ふ諸關係が含まれてゐることは、藝に述べた通りである。商品が變遷して、これらの矛盾は除去されるものではなく、その運動し得る形態が造り出されるのであつて、これが總じて現實的の矛盾を融和させるところの方法となるのである。例へば、一の物體が絶えず他の物體へ落ち掛る(求心)と同時に、また絶えずそれから離れ去る(遠心)といふ矛盾がある。而して楕圓形なるものは、この矛盾を實現させると同時にまた融和させる運動形態の一となつてゐるのである。

商品は交換行程に依つて、それが使用價值となつて居らぬ人の手から使用價值となつてゐる人の手に移轉されるのであるが、交換行程なるものは、この意味に於いて社會的代謝機能となるのである。一の有用労働方法の生産物が他の有用労働方法の生産物に取つて代る。商品はそれが使用價值として役立つ處へ着いたとき、商品交換の部面から消費の部面に移轉されるが、この場合我々の興味を引く問題は、寧ろ商品交換の部面のみである。そこで我々は、この全行程をば形式的方面から觀察することが必要となつて来る。即ち社會的代謝機能を媒介するところの商品形態變化、語を換へていへば商品の轉形(16)のみを觀察することが必要となるのである。

この形態變化の理解は極めて不十分な状態に止まつてゐるのであるが、それは——價值概念その者の不明瞭に因るは別として——一商品の凡ゆる形態變化は、普通商品及び貨幣商品なる二商品の交換を通して行はれるといふ事實に因るのである。ところで若し、一商品が金と交換されたといふこの素材的要件のみを念頭に置くことすれば、我々の正に着眼せねばならぬこと、即ち商品形態の上に如何なる現象が生じたかといふことは看過されることになる。換言すれば、金は單なる商品としては貨幣でないこと、並びに他の商品は其の價格を通して、自己の貨幣形態としての金に關聯せしめられるといふことが看過されることになるのである。

商品は先づ、鍍金もされず、砂糖漬にもされず、ありの儘の姿で(16)交換行程に入り込む。交換行程に入った時、商品は商品と貨幣とに分化され、商品に於ける使用價值と價值との内在的對立を表現するところの外部的對立が生じて来る。この對立に於いて、使用價值としての商品と交換價值としての貨幣とが相對峙するのである。

他方にまた、この對立の兩翼は、何づれも商品であり、使用價值と價值との合成である。然し、相異つた物の斯かる合成は、それ／＼の極に於いて逆に表現され、斯くすることに依つてまた兩極の相互關係を表現する。商品は現實的には使用價值である。商品の價值性は、單なる觀念的のものとして價格の上に現はれる。商品は價格に依つて、自己の現實的價值形態として

の對極たる金に關聯せしめられる。反對に、物質としての金は、價值體現物としての貨幣として作用するに過ぎぬ。それは現實に於いて交換價值なのである。その使用價值は單なる觀念的のものとして、各相對的價值表章の連系の上に現れる。これらの相對的價值表章に於いて、物質としての金はその現實的なる各使用形態を總括せるものとしての對立諸商品に關聯せしめられる。商品の斯かる對立的形態は、商品交換行程の現實的運動形態を代表するものである。

これより、何等かの商品所有者、例へばお馴染みのリンネル機織業者に伴いて、交換行程の舞臺なる商品市場に行かう。彼れの商品は二十ヤールのリンネルであるが、その價格は豫め決定されてゐる。即ち二磅である。彼れはこのリンネルを以つて二磅と交換する。彼れは律義な男であるから、この二磅を以つて更に同じ價格の家庭用バイブルと交換する。斯くの如く、彼れから見れば、單に商品であり價值負擔者であるに過ぎなかつたリンネルは、その價值形態なる金と交換され、それから更に他の一商品なるバイブルと交換されるのであるが、このバイブルは使用對象として彼れの家庭内に持ち込まれ、其處で家庭教化の欲望を満たすことになるのである。

商品の交換行程なるものは斯くの如く、相互に對立し補充し合ふところの二轉形(16)なる商品から貨幣への轉形と、貨幣から商品への再轉形とを通して行はれることになる(六十五)。商品轉形の要素となるものは、即ち商品所有者の行爲なる販賣(商品を以つて貨幣と交換すること)及び購買(貨幣を以つて商品と交換すること)と、これら兩行爲の合成たる購買を目的とする販賣とである。

(六十五)『ヘラクライトスによれば、萬有は火より、火は萬有より轉化して成るものであつて、これ恰かも金が商品に轉化し商品が金に再轉化する如くである』(フェルチナンド・ラッサレ著『味者ヘラクライトスの哲學』ベルリン一八五八年刊、第一卷、第二二二頁以下)。ラッサレはこの部分への脚註(第二二四頁註三)の中で、貨幣は單なる價值表章に過ぎぬといふ誤つた斷言を與へてゐる。

いま、リンネル機織業者の立場からこの取引の最終の結果を見るに、彼れの手にはリンネルの代りにバイブルがある。即ち最初の商品の代りに、價值は等しいが、有用性は異つてゐる他の商品が、彼れの手に歸してゐるのである。彼れは同様にして、他の生活資料や生産機關をも占有するのであつて、彼れの立場から見れば、この全行程は彼れの勞働生産物と他人の勞働生産物との交換を、生産物交換を媒介するものに過ぎぬ。

即ち商品の交換行程なるものは、左の形態變化を以つて行はれることになるのである。



## 商品—貨幣—商品

W—G—W

この運動は、素材的内容の方面から観察すれば、A—A 即ち商品と商品との交換であり、社会的労働の代謝機能である。而してこの代謝機能が結末に達したとき、行程それ自身が終局を告げるのである。

W—G (商品の第一轉形、即ち販賣)。商品價值が商品の現物體から金の現物體へ躍り込むことは、私が嘗て他の處で言つた如く商品の命がけの飛躍<sup>(8)</sup>である。若しこの飛躍が失敗に終るとすれば、それは商品にとつては痛手ではないが、商品所有者にとつては確かに痛手となるのである。社会的分業は彼れの欲望を多方面ならしめると同時に、また彼れの労働を一面に偏せしめる。これがため、彼れの生産物は、彼れから見れば交換價值として役立つに過ぎなくなるのである。然るにこの生産物は貨幣を通してのみ、社会的に妥當なる一般的等價形態を與へられる。而も貨幣は他人の懐ろにあるので、これを他人の懐ろから引出すためには、商品は先づ貨幣所有者にとつて使用價值であることを要する。換言すれば、商品の生産に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されたものであること、即ち社会的分業の一節たる事實を示すものであることを要する。然るに分業なるものは、原生的の生産組織<sup>(9)</sup>であつて、その組織は生産者の背後に於いて織り成されたものであり、尙引續き織り成されてもゐるのである。交換せらるべき商品は恐らく、新たに生じた欲望の充足を標榜するか、又は自力を以つて新たな欲望を喚び起さうとする、何等かの新たな労働方法の生産物であるかも知れぬ。昨日までは同じ商品生産者の數多き機能の一であつた特殊の一作業も、今やこの關聯から引離されて自立し、斯くすることに依つてまた、その部分生産物をば獨立した商品として市場に送り出すといふこともあらう。四圍の事情がこの分離行程を實現せしめる程に成熟してゐる場合もあらうし、然らざる場合もあらう。今日一の社会的欲望を充たしてゐる生産物も、明日は他の類似種類の生産物に依つて、全部的又は一部の地位を奪はれることがあるかも知れぬ。

そこでリンネル機織工の労働の如きが、假りに社会的分業の公認された一節<sup>(10)</sup>であるとしても、單にそれだけのことで、彼れの生産物たる二十ヤールのリンネルの使用價值が保證される譯ではない。リンネルに對する社会的欲望も他の凡ゆる欲望と同様に制限を有してゐるものであるが、若しこの欲望が競争者たる他のリンネル機織業者の生産物に依つて既に充たされてゐるとすれば、蠶の機織業者の生産物は過多となり、餘冗となり、隨つて無用のものとなつてしまふ。夏も小袖といふ諺はあるが、彼れはその生産物を小袖にする目的で市場を往來するものではない。だが假りに、彼れの生産物が使用價值たる實を示し、斯くすることに依つて貨幣を吸引したとしても、次には、幾許の貨幣が吸引されたかといふことが問題となる。その答は既に、商品價值量の指標たる價格の中に豫想されてゐることは確かである。尤も商品所有者側に於ける純主觀的の誤算も考慮に入れねばならぬ譯ではあるが、斯かる誤算は市場に於いて即時客觀的に訂正されるものであるから、茲では措いて問はないことにする。彼れはその生産物の爲に、社会的に必要な平均労働時間のみを支出した筈であるから、彼れの商品の價格はその商品に對象化されてゐる社会的労働量の貨幣名に外ならぬ譯である。然るに彼れの認諾もなく、背後に在つて、リンネル機織業に於ける舊來の生産條件は變化を遂げる。斯くて昨日までは、リンネル—ヤールの生産上疑ひもなく社会的に必要な労働時間であつたものが、最早さうではなくなるのであつて、それは貨幣所有者が種々なる競争リンネル機織業者の相場表について熱心に論證せんとするところである。蠶のリンネル機織業者にとつて不幸なことには、この世の中には彼れの外にも尙澤山のリンネル機織業者が存在してゐるのである。

最後に、市場に在る如何なる一反のリンネルも、社会的に必要な労働時間のみを含むものと假定しよう。斯く假定しても、これら各反の總和は、餘分に支出された労働時間を含み得るのである。若し市場の胃腑が、一ヤール當り二志の平準價格ではリンネルの全部を吸収し得るものでないとなれば、これ取りも直さず、社会的労働時間中の餘りに大きな部分がリンネル機織業の形で支出されたことになり、その結果は、個々のリンネル機織工がその各の生産物に對して社会的に必要な労働時間以上を支出した場合と異なるところはないであらう。諺に共に捕はれた者は共に餓らるといふのは、このことである。市場に存在する一切のリンネルは單なる商品と見做され、その各反は全體の可除部分とされるに過ぎぬ。而してまた實際のところ、各一ヤールの價值は、同質なる人間労働の、社会的に決定された同一量を體化せるものに外ならぬのである。

かやうに、商品は貨幣を纏してゐるが、『まことの懸路は滑りかではない』<sup>(11)</sup>のである。社会的生産組織はその分散せる組成部分を分業の體系に表現するものであつて、この組織體の量的編成は、質的編成と同じく原生的に偶然的のものである。斯くて商品所有者たちは次の事實を發見することになる。即ち、彼等を獨立した私的生産者たらしめる分業はまた、社会的生産行程とこの行程に於ける彼等相互の關係とを彼等自身から獨立したものとなし、且つ人々相互の獨立を補充するに、全般的なる物的相互依存の一體系を以つてするといふことが、それである。

分業は労働生産物を商品に轉化し、斯くすることに依つてまた、労働生産物の貨幣化を必要ならしめる。と同時にまた、分業はこの變質作用<sup>(12)</sup>の成否如何を偶然に懸らしめるのである。だが、茲では現象を純粹の形で考察すべきであるから、その



順當な進行を假定せねばならぬ譯である。尙また、この現象が兎もかく進行して、商品が販賣不可能となることがないとすれば、その場合商品の形態變化は絶えず行はれてゆく。尤も變則的には、この形態變化の進行中に實體たる價值量が喪失されたり、追加されたりすることはあるかも知れぬ。

一方の商品所有者に在つては金がその商品に取つて代り、他方の商品所有者に在つては商品がその金に取つて代る。この場合に於ける明瞭な現象は、商品と金、即ち二十ヤールのリンネルと二磅の金貨との間に、所有者の變換が、位置の變換が行はれるといふこと、換言すればこれらの物が交換されるといふことである。だが、商品は何と交換されるか？ 曰く、それ自身の一般的使用價值形態と。また、貨幣は何と交換されるか？ 曰く、それ自身の使用價值の特殊な一形態と。金は何故、貨幣としてリンネルに對立するか？ 曰く、二磅といふ價格即ち貨幣名を通して、リンネルは既に貨幣としての金に關聯せしめられてゐるからである。本来の商品形態の脱却は、商品が讓渡されて、その使用價值が價格に於いては假想的にのみ存在してゐた金を現實的に吸引する瞬間に行はれるものであるから、商品の單なる觀念的使用價值形態たる價格の實現は、同時にまた、その反對たる貨幣の單なる觀念的使用價值の實現であり、商品の貨幣化は、同時にまた、貨幣の商品化であるといふことになる。即ち單一の行程も實は二重の行程であつて、商品所有者の極から見れば販賣である行程が、貨幣所有者の反對極から見れば購買であるといふことになる。換言すれば、販賣は購買でもあり、 $W-G$  は  $G-W$  でもあるといふことになる(六十六)。

(六十六) 『如何なる販賣も、同時に購買である』ドクター・ケネー著『商業及び手工業者労働に關する問答』デール編フキオタラット(ギョーマン全集)第一部、パリー、一八四六年刊、第一七〇頁(2)。或はまた、ケネーが『一般公理』(24)の中

以上を以ては、單に商品所有者間の關係、即ち彼等が自己の労働生産物を手放すことに依つてのみ他人の労働生産物を占有するといふ關係だけを念頭に置いたのであつて、それ以外には人類の何等の經濟的關係をも知るところがなかつた。斯かる關係のもとに於いては、一方の商品所有者は自己の労働生産物が本来貨幣形態を有してゐる金などの如き貨幣材料であるか、又は彼れ自身の労働生産物が既に脱皮して本来の使用價值形態を脱却したかの、いづれかの理由に依つてのみ、貨幣所有者として他の商品所有者に對立し得るに過ぎぬ。金は貨幣たる機能を盡す爲には、何處かの點から商品市場に入らねばならぬことと言ふ迄もない。即ちその生産所が商品市場となるのであつて、此處で金は直接の労働生産物として價值の等しい他の労働生産物と交換される。が、この瞬間以後、金は常に實現された商品價格を代表することになるのである(六十七)。

(六十七) 『一商品の價格は、他の商品の價格を以つてのみ支拂はれ得る』(メルシエ・ド・ラ・リゲキエール著『政治的社會の自然的及び本質的秩序』デール編フキオタラット(ギョーマン全集)第二部、第五五四頁(2))。

金がこの生産所での他の商品と交換されるといふ問題は暫く措き、如何なる商品所有者の手に入つたとしても、金は彼れに依つて讓渡された商品の轉形姿となり、商品の第一轉形  $W-G$  なる販賣の産物となるのである(六十八)。金が觀念的の貨幣たる價值尺度となつたのは、他の凡ゆる商品の價值が金を以つて秤量され、斯くして金がこれらの商品の使用價值形態の觀念對抗物となり、これらの商品の價值形態となつた結果である。而して金が現實的の貨幣となるのは、他の諸商品がその全般的讓渡に依つて金を自己の現實的に轉形した使用價值形態たらしめ、斯くしてまた、自己の現實的價值形態たらしめる結果なのである。商品は價值形態を採つたとき、その原生的使用價值並びに自己の根原たる特殊有用労働の凡ゆる痕跡を喪失して、區別なき人間労働の劃一的なる社會的體現に蛹化してゆくのである。

(六十八) 『この貨幣を所有するためには、先づ販賣して居らねばならぬ』(前掲第五四三頁)。

だから貨幣を見ても、それに轉化した商品が何んなものであつたかを知ることは出来ぬ。貨幣形態に於いては、如何なる商品も同じ物であるやうに見える。されば塵芥は貨幣ではないが、貨幣は塵芥をも代表し得るのである。いま、蠶のリンネル織業者がその商品を販賣して得る二個の金貨は、小麦一クオターの轉化した形態であると假定しよう。リンネルの販賣  $W-G$  は、同時にまたリンネルの購買  $G-W$  である。だが、リンネルの販賣としてのこの行程は、その反對なる小麦の販賣を以つて開始された運動を終了させる。  $W-G-W$  ( $G-W-W$ ) の第一段なる  $W-G$  ( $G-W-W$ ) は、同時にまた  $G-W$  ( $W-W-G$ ) であり、換言すれば  $W-G-W$  (小麦一クオター) なる他の一運動の最終段階である。一の商品が商品形態から貨幣に轉化されるといふ第一轉形は、同時にまた、他の商品が貨幣形態から商品に再轉化されるといふ第二の反對轉形たることを常とするのである(六十九)。

(六十九) 蠶に述べた如く、金又は銀の生産者はこれが例外となる。彼れは豫め販賣することなくして、その生産物を交換するからである。

$G-W$  (商品の第二轉形又は最終轉形、即ち購買)。貨幣は他の凡ゆる商品の轉形したる姿であり、他の凡ゆる商品が一般的に讓渡される結果であるが故に、絶對的に讓渡し得るところの商品となるのである。貨幣は凡ゆる商品の價格を逆に讀ま



せるものであつて、一切の商品體は貨幣商品化の忠實なる材料となり、これらの商品體の中に貨幣はそれ自身を反射するのである。同時にまた、商品が貨幣に送るところの秋波たる價格は、貨幣の轉形能力の制限を、貨幣それ自身の分量を示すものとなる。商品は貨幣となるに及んで消滅するものであるから、貨幣を見ても、それが如何にして所有者の手に歸したのか、又は何がそれに轉化したのかを知ることは出來ぬ。何處から來たにもせよ、出處は分らない。それは一方に於いて販賣された商品を代表すると同時に、他方にはまた、購買せらるべき商品をも代表してゐるのである(七十)。

(七十)『我々の手にある貨幣は、我々の買はんとする物を代表するのであるが、それは同時にまた、この貨幣を目的として我々の販賣した物をも代表するのである』(メルシェード・ラ・リゲキエール前掲、第五八六頁)。

G—W 即ち購買は、同時にまた M—D 即ち販賣であつて、一商品の最後の轉形は、同時にまた他商品の最初の轉形となるのである。曩のリンネル機織業者から見れば、彼れの商品の一生は、彼れが二磅を再轉形せしめたバイブルを以つて終了するのであるが、このバイブルの販賣者は、リンネル機織業者から受け取つた二磅を以つてブランドーと交換する。即ち W—G—W (リンネル—貨幣—ブランド) の最終轉形 G—W は、同時にまた W—G—W (ブランド—貨幣—ブランド) の第一段 W—G となるのである。商品生産者はそれ／＼特殊の商品のみを提供するので、これがためその販賣は過多に陥ることが屢々ある。然るに彼れの欲望は多方面に互つてゐるので、彼れは勢ひその實現したる價格即ち賣得貨幣をば、絶えず幾多の購買に分割することを餘儀なくされる。斯くの如く、一の販賣は、様々な商品の數多き購買に分流するものであつて、一商品の最終轉形は他の諸商品の第一轉形の總和を成すのである。

いま、リンネルといふ如き一商品の總轉形を観察するとき先づ注意に上ることは、これらの轉形が相互對立し補充し合ふところの二運動 W—G 及び G—W から成るといふことである。これらの相對立した二つの商品轉形は、商品所有者の相對立した社會的二行程を通して行はれ、彼れの相對立した經濟的二性質の上に反射される。彼れは販賣する位置に立つたときは販賣者となり、購買する位置に立つたときは購買者となる。然るに如何なる商品轉形に於いても、商品の兩形態たる商品形態と貨幣形態とは同時に對立した極に存在するものであつて、それと同様に、同一の商品所有者も彼れが販賣者たる場合には、他の購買者に依つて對立され、購買者たる場合には、他の販賣者に依つて對立される。同一の商品が商品から貨幣に轉化し、貨幣からまた商品に轉化するといふ相反した二つの轉形を順次に通過すると同様に、同一の商品所有者も販賣者から購買者へと絶えず役割を變へてゆく。斯くの如く、販賣者及び購買者たる役割は決して固定したものでなく、商品流通の内部で絶えずその演出人物を換へることになるのである。

一商品の總轉形は、これをその最單純なる形態について見るに、四つの極と三名の登場人物とを前提する。即ち、先づ貨幣が商品の價值形態としてこれに對立して來る。この價值形態は購買者たる他人の懐ろの中に硬貨的現實性を有してゐるのである。商品所有者は斯くの如く、貨幣所有者に依つて對立されるのであるが、商品が貨幣に轉化されるや否や、貨幣は商品の急過的な等價形態となる。而してこの等價形態の内容たるべき使用價值は、他の各商品體の中に存在してゐるのである。貨幣は第一の商品轉形の終點たると同時に、また第二の商品轉形の起點たるものであつて、第一取引に於ける販賣者は第二取引に於いては購買者となる。而して第三の商品所有者が、この場合、販賣者として彼れに對立して來るのである(七十一)。

(七十一)『要するに……四個の終點と三人の契約者とがある譯であつて、これらの契約中の一人は二度登場することになるのである』(ルトローヌ前掲、第九〇八頁)。

商品轉形の相反對した二つの運動段階は相合して、一の循環(一)——商品形態から商品形態の脱却を経て、また商品形態に復歸するといふ循環を構成する。この場合、商品それ自身が對立的資格に置かれることは言ふ迄もない。即ちそれは起點に於いては所有者にとつて非使用價值であり、終點に於いては所有者にとつて使用價值である。貨幣なるものは、斯様に、先づ商品の轉化せらるべき固形的な價值結晶として現はれ、次に商品の單なる等價形態として溶け去ることになるのである。

一商品の循環を成す二つの轉形は、同時にまた、他の二商品の相反した部分轉形を成すものである。同一の商品(リンネル)は、それ自身の諸轉形の系列の發端たると同時にまた、他の一商品(小麦)の總轉形の結末となるものであつて、第一轉形たる販賣の進行中にこれらの二役を兼ね演ずるのであるが、次いで、必然免れ難き運命として金に轉化(二)された場合には、それ自身の第二轉形と同時にまた、他の異つた商品の第一轉形をも結了せしめることになる。斯くの如く、各商品の轉形列に依つて畫かれる循環は、他の諸商品の循環と解け難く絡み合つてゐるのであつて、これら各種の循環の總和は、即ち商品流通(三)を成すものである。

商品流通なるものは單に形式上のみでなく、本質に於いても、直接的の生産物交換(物々交換)とは相異なるものである。いま、その経過を一瞥してみよ。リンネル機織業者は當然のこととしてそのリンネルをバイブルと、即ち自己の商品を他人の商品と交換した。だが、この現象は彼れ自身についてのみ眞實である。涼しいよりは暑い方がマシだと考へてゐるバイブル屋は、バイブルを以つてリンネルと交換しようとは考へて居らなかつた。それは恰度、リンネル機織業者がそのリンネルと小麦



との交換されたこと、等を知らぬのと同じである。Bの商品はAの商品に取つて換はる。けれどもAとBとは、交互にその商品と交換するものでない。AとBとが交互に購買し合ふといふ場合も、実際には生じ得る。だが、斯様な特殊の關係は、決して商品流通の一般的事情から必然に生じて来るものではない。この場合、一方に於いて、商品交換なるものが如何に直接的生産物交換の個人的及び地方的制限を打破して、人間労働の代謝機能を展開せしむるか、また他方に於いて、如何に取引當事者はリンネルを販賣することができ、リンネル機械業者がリンネルを販賣してゐたからこそ、熱血屋はバイブルを販賣することができ、熱血屋が永生の水を販賣してゐたからこそ、醸酒屋は焼いた水を販賣することができるのである。

要するに流通行程なるものは、直接の生産物交換とは異なり、使用價值の位置變化即ち所有者變化を以つて終滅するものではない。蓋し貨幣は終局に於いて一商品の轉形列から脱出したところで、その爲に消滅するものではなく、商品の去つた流通場所に、絶えず沈澱するからである。例へばリンネルの總轉形  $\text{C} \rightarrow \text{B} \rightarrow \text{A} \rightarrow \text{D} \rightarrow \text{E} \rightarrow \text{F}$  について見るに、先づリンネルは流通から脱け去り、そのあとに貨幣が来て、次にバイブルが流通から脱け去り、そのあとに貨幣が来る。商品を以つてする商品の代置は、同時にまた、第三者の手に貨幣商品を取り附かせる(七十二)。流通は不斷に貨幣を發汗するのである。

(七十二) 第二版註——これは自明の事實であるに拘はらず、經濟學者殊に自由貿易俗論者ともに依つて大抵は看過されてゐるのである。

如何なる販賣も購買であり、如何なる購買も販賣であるから、商品流通なるものは賣買間の必然的均衡を含むと、ふ定説ほど馬鹿々々しいものはない。それが若し、現實的には行はれる販賣の數は購買の數に等しいといふのであるとすれば、結局單なる重語に過ぎない。この定説の眞の意味は寧ろ、如何なる販賣者もその購買者を市場に伴つてゆくといふことを論證しようとする點にあるのであらう。然るに、販賣及び購買は兩極的に相對立した二人の人、即ち商品所有者と貨幣所有者との間の交互關係として見れば同一の行爲であつて、反對に同一一人の行爲として見るとき兩極的に相對立した二行爲となるのである。そこで販賣と購買とを同一ならしめる爲には、商品が流通の鍊金レトルトに投ぜられた後、貨幣としてその中から出て來ないとなれば、即ちそれが商品所有者に依つて販賣され、貨幣所有者に依つて購買されることがないとすれば、斯かる商品は無用のものになるといふ條件が必要である。更らにまた、交換行程なるものは、それが現實的には行はれる限り、商品の一生に於ける或は長期間、或は短期間、持續し得るところの休止點になるといふ條件も必要である。

商品の第一轉形は販賣であると同時に購買でもあるから、この分部行程はまた、獨立した行程ともなるのである。購買者は商品所有し、販賣者は貨幣を有してゐる。而してこの貨幣も亦、それが市場に復歸する時期は一樣でないにしても、兎にかく流通し得べき形態を保持してゐるところの商品である。誰かが購買することなくしては、何人も販賣し得るものでない。だが、販賣したからといつて、直ちに購買せねばならぬといふ譯でない。直接の生産物交換(物々交換)に於いては、自己の労働生産物を手放して他人の労働生産物を手に入れることとなるのであつて、これらの兩行爲の間には直接の一致が存してゐるのであるが、流通はこの一致を相對立した販賣と購買とに分裂せしめ、斯くすることに依つてまた、直接的生産物交換の時間的、場所的及び個人的制限を打破するのである。互ひに獨立して相對立する二行程が内部的の合一を成すといふことは、これ取りも直さず、この内部的の合一が外部的對立のうち作用してゐるといふことに異ならぬ。内部的には相互補充的關係に立つが故に各獨立することなき二行程が、外部的に獨立して、この傾向が一定の限界まで進むと、兩行程の合一は恐慌に依つて感壓的に維持されることとなる。商品に内在してゐる使用價值と價值との對立、私的労働が同時にまた、直接社會的なる労働として表現されねばならぬといふ矛盾、特殊の具體的労働が同時に、抽象的に一般的なる労働としてのみ作用するといふ矛盾、物の人格化と人格の物化との對立——凡そこれらの内在的矛盾對立は、商品轉形の對立に依つてその發達したる運動形態を與へられる。隨つてこの運動形態は恐慌の可能を、單なる可能のみを包含することになる。而してこの可能を現實たらしむる爲には、單純なる商品流通の立場からは尙未だ存在することなき一列の諸事情を必要とするのである(七十三)。

(七十三) ジェームズ・ミルについて私の述べたところ(『經濟學批判』第七四—七六頁)を参照せよ。この點について辯護的經濟學の研究方法には二つの特徴的な傾向がある。第一は、商品流通と直接的生産物交換との區別から單純に抽象し、以つて兩者を同一視すること。第二は、資本制生産に従事する人々の關係を、商品流通から生じた單純なる關係に歸し、斯くすることに依つて資本制生産行程の矛盾を否認しようとするのである。けれども元來、商品生産と商品流通とは、程度の上に大小の差があるといへ、兎にかく全く相異つた様々の生産方法のもとに見られるところの現象である。そこで、これらの生産方法に共通せる、商品流通の抽象的なる諸範疇だけを知つたところで、これらの生産方法の特殊の差異については何も知つたことにならず、隨つてこれを批判し得ることにもならないのである。他の如何なる科學に於いても、經濟學に於ける程、分り切つた事柄を、さも重大な問題でもあるかの如く取扱ふことが流行してゐる處はない。例へば、ジャン・バチスト・セーの如きは、商品が生産物であることを知つてゐるといふだけの理由で、恐慌を審判しようとしてゐる。



貨幣は商品流通の媒介者として、流通要件なる機能を與へられる。

## b 貨幣の通用

労働生産物の代謝機能を行はしめる形態變化  $W-G-W$  は、同一の價值が商品としてこの行程の起點となり、且つ商品として同一の起點に復歸すべきことを必要條件とする。即ち商品のこの運動は、循環的のものである。他方にまた、この形態變化は貨幣の循環を不可能ならしめる。蓋しこの形態變化に依り、貨幣は益々その起點から遠ざかるのであつて、復歸するものではないからである。販賣者がその商品の轉化した形態である貨幣を握つて手放さぬ限り、商品は第一轉形の段階を脱することができず、流通の前半を通過したに過ぎぬ。若し購買を目的とするところの販賣なる行程が終了したとすれば、貨幣は更に最初の所有者の手から遠ざかつてゆく。

尤も、リンネル機械業者がバイブルを買つた後更にリンネルを賣るとすれば、貨幣が彼れの手に復歸することは言ふ迄もない。だが、それは最初の二十ヤールのリンネルの流通に依つて復歸するのではない。この流通は寧ろ、彼れの貨幣をバイブル屋の手に遠ざけて行つたのである。貨幣は新たな商品について同一の流通行程が更新又は反覆された結果としてのみ復歸するのであつて、この場合にも亦、曩の場合と同一の結果を以つて終るのである。斯くの如く商品流通に依つて直接貨幣に與へられる運動形態は、貨幣が絶えずその起點から遠ざかることであり、換言すれば一方の商品所有者の手から、他方の商品所有者の手に流れて行くことである。即ち貨幣の通用(74)である。

貨幣の通用は、同一の行程が不斷に、單調的に、反覆されることを示す。商品は常に販賣者の側に立ち、貨幣は常に購買要件(75)として、購買者の側に立つ。貨幣は商品の價格を實現することに依つて、購買要件たる機能を盡すのである。それは價格を實現することに依つて、商品を販賣者の手から購買者の手に移轉せしめると同時にまた、それ自身、購買者の手から販賣者の手に遠ざかつてゆき、斯くして他の新たな商品との間に同一の行程を反覆する。貨幣運動の斯かる一面的形態は、商品の兩面的形態運動に起因するものであるが、この事實は隠蔽されてゐる。商品流通それ自身の性質が反對の外觀を生ぜしめるからである。商品の第一轉形は單に貨幣の運動としてのみではなく、また商品自身の運動としても、我々の目に看取される。商品はその流通の前半に於いて、貨幣と位置を換へる。それと同時に、商品の使用價值形態は流通から脱出して消費に歸する(74)。而してそのあとには、商品の價值形態即ち貨幣假面が代置されるのである。

(七十四) 商品が幾度も幾度も販賣されるといふ場合は、技ではまだ問題とならないのであるが、斯かる場合に於いても、

商品は終局的の販賣を以つて流通部面から脱出し、消費部面に入つて、其處で生活資料なり生産機關なりとして、役立つことになるのである。

次に商品はそれ自身の自然外皮ではなく貨幣外皮を以つて、流通の後半の段階を通過する。斯くて運動の連続は全く貨幣の側に歸し、商品から見れば相對立した二行程を含む運動であるところのものが、貨幣それ自身の運動としては常に新たな商品と位置を變換するといふ同一の行程を意味することになるのである。

そこで商品流通の結果、一商品の位置が他商品に依つて占められるやうになることは、これらの商品自身の形態變化に依つて媒介されるものではなく、流通要件としての貨幣の機能に依つて媒介されるもの如く見えて来る。即ちこの貨幣は、それ自身としては運動することなき商品を通せしめて、これを非使用價值として存在する人の手から使用價值として存在すべき人の手に移轉せしめるやうに見えて来る。而してこの運動は常に、貨幣それ自身の運動とは反對の方向になされるのである。貨幣は絶えず商品から遠ざかつて、みづから代つて流通内に位置を占め、斯くしてそれ自身の起點から遠ざかつてゆく。貨幣運動なるものは元來、商品流通の表章に過ぎぬのであるが、商品流通の方が却つて貨幣運動の結果であるかのやうに見えて来る(七十五)。

(七十五) 『貨幣なるものは、生産に依つて與へられる運動以外には何等の運動をも有さない』(ル・トロュー前掲、第八八五頁)。

他方にまた、貨幣は獨立した商品價值であるが故にのみ、流通要件たる機能を與へられるのであつて、流通要件としての貨幣の運動は、實際のところ商品それ自身の形態運動に外ならぬ。随つてこの事實は、貨幣の通用の中にも明瞭に反射されねばならぬ譯である。

一例を挙げれば、リンネルは先づその商品形態を貨幣形態に轉化する。リンネルの第一轉形  $M-G$  の最後の極である貨幣形態は、バイブルへの再轉化を示す第二轉形  $G-M$  の最初の極である。だが、これらの形態變化は、いづれも商品と貨幣との交換に依り、その相互の位置轉換に依つて行はれる。商品の轉化した形態として販賣者の手に來た同一の個貨が、また商品の絶對的に讓渡し得べき形態として彼れの手を去るのであつて、要するに同一の貨幣が二度その位置を換へる譯である。即ち、リンネルの第一轉形に依つて機械業者の懐ろに持つて來られた同一の個貨が、第二轉形に依つてまた外へ持つて行かれましてしまふのである。斯くの如く、同一商品の相對立した二つの形態變化は、反對の方向に向つてする貨幣の兩度の位置轉換の



上に反射される。

反對に若し、一面的の商品轉形のみが、即ち販賣又は購買のいづれか一方のみが行はれるとすれば、同一の貨幣は一度しか位置を轉換しないことになる。その二度目の位置轉換は、つねに、商品の第二轉形たる貨幣からの再轉化を言ひ現すものである。同一の個貨が頻繁にその位置轉換を反覆するとき、この事實の上には、單一なる商品の轉形列のみではなく、また商品界全般に於ける無數の相錯綜した轉形が反射される。尤もこれら一切の事實は、茲に問題となる單純な商品流通形態についての言ひ得るものであることは論を俟たぬ。

如何なる商品も最初流通に入つて、第一の形態變化を遂げると、其處から脱け去つてしまひ、代つて絶えず新たな商品が入り込んで来る。反對に、貨幣は流通要具として絶えず流通部面に止まり、絶えずその内部を駆け巡る。そこで流通部面なるものは、果して幾許の貨幣を不斷に吸収するかといふことが問題となつて来る。

同時に行はれ、随つて空間的に相並んで進行する幾多の一面的商品轉形、換言すれば、一方に於ける單なる販賣、他方に於ける單なる購買が、一國內には日々行はれてゐる。商品の價格といふことが、既に商品を一定量の假想貨幣と等位に置いてゐるのである。ところで、茲に考察する直接の流通形態は、常に商品を販賣の極に置き、貨幣を購買の反對極に置いて、兩者を相對立せしめるものであるから、商品界の流通行程に必要な流通要具の量は、諸商品の價格の總和に依つて既に決定されてゐることになる。實際のところ、貨幣なるものは、諸商品の價格總額に依つて觀念的に言ひ現されてゐる金の總量をば、現實的の形に表現するものに過ぎぬのであるから、この二つの量の相等しきことは白明の事實である。

だが、諸商品の價值に變化なきとき價格は貨幣材料たる金それ自身の價值の變化する通りに變化することは、我々の知るところである。即ち金の價值が下落すれば、商品價格は同一の比例を以つて騰貴し、金の價值が昂騰すれば、商品價格は同一の比例を以つて下落するのであつて、諸商品の價格總和が、斯く昂騰するか、下落するかにつれて、流通貨幣の量も亦同じ比例で増大するか減少するかしなければならぬ。この場合に於ける流通要具の量的變化は、貨幣それ自身から生ずることは論を俟たぬが、然しそれは流通要具としての貨幣の機能から生ずるものではなく、價值尺度としての機能から生ずるのである。商品の價格は先づ貨幣の價值と逆比例的に變化し、次に流通要具の量は商品の價格と正比例的に變化する。

例へば金の價值が低落するのではなく、銀が價值尺度として金に代るといふやうな場合、又は銀の價值が昂騰するのではなく、金が銀に代つて價值尺度たる機能を盡すといふやうな場合にも、右と全く同一の現象が生ずるであらう。即ち前の場合に

は、従前に於ける金よりも多量の銀が流通し、後の場合には、従前に於ける銀よりも少量の金が流通せねばならなくなるのであつて、いづれにしても、貨幣材料の價值、即ち價值尺度として作用する商品の價值は變化することになる。随つてまた、商品價值の價格表章、並びに商品價格の實現に役立つべき流通貨幣の量も變化することになるのである。

商品の流通部面には一つの穴があつて、其處から金又は銀（略言すれば貨幣材料）が與へられたる價值を有する商品として流通部面に入ること、我々の既に見たところである。この價值は貨幣が價值尺度としての機能を盡すに當り、随つてまた價格決定の行はれる際、既に前提されてゐるのである。ところで、假りに價值尺度それ自身の價值が低落したとすれば、この事實は先づ、貴金屬の生産所に於いて直接商品としての貴金屬と交換される他の諸商品の價格變動の中に現れて来る。殊にブルジョアの社會の發達幼稚なる段階の下に於いては、他の諸商品の少なからざる部分は、既に幻想的となり陳腐化した價值尺度の價值に依つて評價される状態を久しく續けるであらう。だが、一の商品は、相互の價值關係に依つて他の商品に感染して行くものであるから、商品の金價格又は銀價格は商品價值それ自身に依つて決定される比率を以つて次第に均衡を保つやうになり、遂には一切の商品價值が貨幣金屬の新たな價值に従つて評議されるやうになる。

この均衡化の行程は、貴金屬と直接交換された商品に代つて流入し來たるべき貴金屬の不斷の増大を伴ふものである。されば商品の訂正價格が普遍化し、又は既に低落し且つ或程度迄は現に尙低落しつつある新價值に従つて商品の價值が評議されるのと同じ比率を以つて、商品價值の實現に必要な金屬追加量も既に與へられてゐることになる。金銀の新たな産源の發見に伴ふ諸事實だけを觀察して、ヨリ多くの金銀が流通要具として作用した結果、商品價格が昂騰したのだといふ虚偽の結論に到達したことは、十七世紀及び殊に十八世紀の論者に見られるところである。元來、金の價值なるものは、實際のところ、價格評議の瞬間に與へられてゐるのであるが、以下の説明に於いても金の價值は豫め一定してゐるものと假定する。

斯く假定するとき、流通要具の量は諸商品の實現せらるべき價格總量に依つて決定されることになる。ところで、更らに各種商品の價格が與へられてゐると假定すれば、諸商品の價格總量は、流通の内部に存在する商品量の如何に懸ることは明かである。例へば一クォーターの小麥が二磅に値するとすれば、一百クォーターの小麥は二百磅に、二百クォーターの小麥は四百磅に値するといふ如く、販賣の際小麥と位置を轉換する貨幣量は、小麥の量の増大につれて増大せねばならぬことになるのであつてこれを理解するには、敢て腦漿を絞る必要もないのである。

商品の量が與へられてゐるとすれば、流通貨幣の量は商品價格の騰落につれて或は増大し、或は減小する。要するに、諸商



上に反射される。

反對に若し、一面的の商品轉形のみが、即ち販賣又は購買のいづれか一方のみが行はれるとすれば、同一の貨幣は一度しか位置を轉換しないことになる。その二度目の位置轉換は、つねに、商品の第二轉形たる貨幣からの再轉化を言ひ現すものである。同一の個貨が頻繁にその位置轉換を反覆するとき、この事實の上には、單一なる商品の轉形列のみではなく、また商品界全般に於ける無数の相錯した轉形が反射される。尤もこれら一切の事實は、茲に問題となる單純な商品流通形態についての言ひ得るものであることは論を俟たぬ。

如何なる商品も最初流通に入つて、第一の形態變化を遂げると、其處から脱け去つてしまひ、代つて絶えず新たな商品が入り込んで来る。反對に、貨幣は流通要具として絶えず流通部面に止まり、絶えずその内部を駆け巡る。そこで流通部面なるものは、果して幾許の貨幣を不斷に吸収するかといふことが問題となつて来る。

同時に行はれ、隨つて空間的に相並んで進行する幾多の一面的商品轉形、換言すれば、一方に於ける單なる販賣、他方に於ける單なる購買が、一國內には日々行はれてゐる。商品の價格といふことが、既に商品を一定量の假想貨幣と等位に置いてゐるのである。ところで、茲に考察する直接の流通形態は、常に商品を販賣の極に置き、貨幣を購買の反對極に置いて、兩者を相對せしめるものであるから、商品界の流通行程に必要な流通要具の量は、諸商品の價格の總和に依つて既に決定されてゐることになる。實際のところ、貨幣なるものは、諸商品の價格總額に依つて觀念的に言ひ現されてゐる金の總量をば、現實的に表現するものに過ぎぬのであるから、この二つの量の相等しきことは白明の事實である。

だが、諸商品の價值に變化なきとき價格は貨幣材料たる金それ自身の價值の變化する通りに變化することは、我々の知るところである。即ち金の價值が下落すれば、商品價格は同一の比例を以つて騰貴し、金の價值が昂騰すれば、商品價格は同一の比例を以つて下落するのであつて、諸商品の價格總和が、斯く昂騰するか、下落するかにつれて、流通貨幣の量も亦同じ比例で増大するか減少するかしなければならぬ。この場合に於ける流通要具の量的變化は、貨幣それ自身から生ずることは論を俟たぬが、然しそれは流通要具としての貨幣の機能から生ずるものではなく、價值尺度としての機能から生ずるのである。商品の價格は先づ貨幣の價值と逆比例的に變化し、次に流通要具の量は商品の價格と正比例的に變化する。

例へば金の價值が低落するのではなく、銀が價值尺度として金に代るといふやうな場合、又は銀の價值が昂騰するのではなく、金が銀に代つて價值尺度たる機能を盡すといふやうな場合にも、右と全く同一の現象が生ずるのであらう。即ち前の場合に

は、従前に於ける金よりも多量の銀が流通し、後の場合には、従前に於ける銀よりも少量の金が流通せねばならなくなるのであつて、いづれにしても、貨幣材料の價值、即ち價值尺度として作用する商品の價值は變化することになる。隨つてまた、商品價值の價格表章、並びに商品價格の實現に役立つべき流通貨幣の量も變化することになるのである。

商品の流通部面には一つの穴があつて、其處から金又は銀（略言すれば貨幣材料）が與へられたる價值を有する商品として流通部面に入ること、我々の既に見たところである。この價值は貨幣が價值尺度としての機能を盡すに當り、隨つてまた價格決定の行はれる際、既に前提されてゐるのである。ところで、假りに價值尺度それ自身の價值が低落したとすれば、この事實は先づ、貴金屬の生産所に於いて直接商品としての貴金屬と交換される他の諸商品の價格變動の中に現れて来る。殊にブルジョアの社會の發達幼稚なる段階の下に於いては、他の諸商品の少なからざる部分は、既に幻想的となり陳腐化した價值尺度の價值に依つて評價される状態を久しく續けるであらう。だが、一の商品は、相互の價值關係に依つて他の商品に感染して行くものであるから、商品の金價格又は銀價格は商品價值それ自身に依つて決定される比率を以つて次第に均衡を保つやうになり、遂には一切の商品價值が貨幣金屬の新たなる價值に從つて評議されるやうになる。

この均衡化の行程は、貴金屬と直接交換された商品に代つて流入し來たるべき貴金屬の不斷の増大を伴ふものである。されば商品の訂正價格が普遍化し、又は既に低落し且つ或程度迄は現に尙低落しつつある新價值に從つて商品の價值が評議されるのと同じ比率を以つて、商品價值の實現に必要な金屬追加量も既に與へられてゐることになる。金銀の新たなる産源の發見に伴ふ諸事實だけを觀察して、ヨリ多くの金銀が流通要具として作用した結果、商品價格が昂騰したのだといふ虚偽の結論に到達したことは、十七世紀及び殊に十八世紀の論者に見られるところである。元來、金の價值なるものは、實際のところ、價格評議の瞬間に與へられてゐるのであるが、以下の説明に於いても金の價值は豫め一定してゐるものと假定する。

斯く假定するとき、流通要具の量は諸商品の實現せらるべき價格總量に依つて決定されることになる。ところで、更らに各種商品の價格が與へられてゐると假定すれば、諸商品の價格總量は、流通の内部に存在する商品量の如何に懸ることは明かである。例へば一クォーターの小麥が二磅に値するとすれば、一百クォーターの小麥は二百磅に、二百クォーターの小麥は四百磅に値するといふ如く、販賣の際小麥と位置を轉換する貨幣量は、小麥の量の増大につれて増大せねばならぬことになるのであつてこれを理解するには、敢て腦筋を絞る必要もないのである。

商品の量が與へられてゐるとすれば、流通貨幣の量は商品價格の騰落につれて或は増大し、或は減小する。要するに、諸商



品の價格總量が價格變動の結果増減するが故に、流通貨幣の量も増減することになるのである。これには決して、凡ゆる商品の價格が同時に昂騰又は低落することを必要としない。場合に依つては、若干の主要商品の價格の昂騰乃至低落だけで、凡ゆる流通商品の實現さるべき價格總量を増大又は減少せしめ、斯くしてまたヨリ多量若しくは少量の貨幣を流通せしめるに十分である。商品の價格變動が現實的の價值變動を反射するにしろ、又は單なる市場價格變動を反射するに過ぎぬにしろ、いづれにしても流通要具の量に及ぼす影響は同一である。

いま、一クオターの小麦、二十ヤールのリンネル、一冊のバイブル、四ガロンのブランドー等が、相互聯絡なく、時を等しし随つて空間的に相並んで、販賣されるとせよ。即ち若干数の販賣（部分轉形）が、同時に行はれると假定するのである。いま、これらの商品おの／＼の價格が二磅、随つてその實現せらるべき價格總量が八磅であるとすれば、八磅といふ貨幣量が流通の内部に入らねばならぬ譯である。反對に若し、これらの商品が、我々の知る轉形列「クオターの小麦—一冊のバイブル—四ヤールのリンネル」の各部分を構成するとすれば、單に二磅だけでこれら各種の商品が順次に流通せしめられることになる。即ちこれら各種の商品の價格は、二磅の貨幣を以つて順次に實現され、合計八磅といふ價格が實現されて、結局醸酒業者の手に落ちつくことになる。要するに二磅の貨幣が、四回通用する譯である。同一の個貨が斯く反覆的に位置を轉換することは、商品が二つの相反した流通段階を通して運動する二重の形態變化と、相異つた商品の轉形の相互錯綜とを表現するものであつて（七十六）、この行程の通過する相互對立して補充し合ふところ諸階段は、空間的に相並立し得るものでなく、時間的に相前後し得るに過ぎぬのである。そこでこの行程の持續を秤量するには諸種の期間を以つてするか、又は同一の個貨が一定の期間に通用する度數を以つて貨幣通用の速度を測る。上記四商品の流通行程が、例へば一日間持續するとする。さうすると實現さるべき價格總量は八磅、一日間に於ける同一個貨の通用度數は四回、流通貨幣の量は二磅であつて、これを流通行程の與へられたる一期間について言へば、流通要具の量「流通要具として作用する貨幣の量」となる。

（七十六）『貨幣を運動せしめ通用せしむるものは、即ち生産物である。…貨幣の通用速度は量を補ふものであつて、必要な場合には、貨幣は寸時も休止することなく、甲なる人の手から乙なる人の手へ轉移されてゆく』（ル・トローム前掲、第一一五頁及び九一六頁）。

以上の法則は普遍的に通用する。

與へられたる期間に於ける一國の流通行程は、同時に行はれ空間的に相並立する多數の分散した部分轉形（販賣又は購買）を包括すると共に、また一部分は相並立し、一部分は相交錯するところの、多かれ少なかれ關節的に組織された幾多の轉形列を包括する。而して右の部分轉形に於いては、同一の個貨が一度だけ位置を轉換し、一度だけ通用するに過ぎぬのであるが、後に掲げた轉形列に於いては、同一の個貨が幾回も通用するのである。だが、流通内に存在してゐる同類個貨の通用總數に依つて、我々は各個貨の通用平均數、又は貨幣通用の平均速度を知ることが出来る。例へば、一日の流通行程の初めに流通内へ投ぜられる貨幣量は、同時に行はれ空間的に相並んで流通する諸商品の價格總量に依つて決定されることは言ふ迄もない。然しこの行程の内部に入るとき、一の個貨は、謂はば他の個貨に對して責任を負はされた位置に立つ。即ち一方の通用速度が疾められると、他方の個貨は通用を鈍くされるか、又は全く流通部面から驅逐されてしまふ。なぜならば、個々分子の平均通用數を乗ずると實現せらるべき價格總量に等しくなる金量だけしか、この流通部面に依つては吸収され得ないからである。即ち個貨の通用數が増大すれば流通量は減少し、通用數が減少すれば流通量は増大することになる。流通要具として作用し得る貨幣の量は、與へられたる平均速度のもとに於いては一定してゐるのであるから、流通の内部から例へば一定數の磅金貨を驅り出す爲には、それと等數の磅紙幣を流通の内部へ投ぜればよい譯であつて、これは凡ゆる銀行の常用手段となつてゐることである。

全般的に見た貨幣通用は、商品の流通行程、換言すれば商品の相反した二轉形を通しての循環を示すに過ぎぬのであるが、迅速なる貨幣通用は寧ろ商品の形態變化が迅速に進行すること、各轉形列が連續的に交錯してゐること、社會的代謝機能が急速に進行すること、並びに諸商品が流通部面から急速に消滅して、新たな商品に位置を讓ることなどを示すものであつて、要するに相互對立し補充するところの二段階なる、使用價值形態より價值形態への轉化と、價值形態より使用價值形態への再轉化との融合、換言すれば賣買兩行程の融合を意味することになるのである。反對に、緩慢なる貨幣通用は、これらの諸行程が分離して相對立するに至ること、換言すれば形態變化が停滯し、隨つてまた代謝機能が停滯するに至ることを示す。勿論、この停滯が何處から來るか、流通それ自身に依つては知り得ないところであつて、流通は單に現象そのものを示すに過ぎぬのである。貨幣の通用が緩慢になると同時に、貨幣の出沒が従前ほど頻繁でなくなることは、流通表面の到る處に見受けられる現象であるが、この現象に着目した通説が、これを流通要具の分量不足に歸したことは、さもあるべきことである（七十七）。

（七十七）『貨幣は…賣買に於ける通例の尺度となつてゐるものであるから、販賣すべき物を有してゐて購買者を見出し得



ない人は、國內又は一地方に於ける貨幣の缺乏こそ、商品の捌けない原因であると判断する。そこで貨幣逼迫の嘆聲が起つて来る。だが、これは大へんな考へ違ひである。…貨幣の増大を求めつつあるこれらの人々が現実に於いて必要としてゐるところのものは何であるか？ 農民は訴へて言ふ。—國內にモット貨幣がありさへすれば、好價格で生産物を販賣し得るであらうと。…これで見ると、彼等の要してゐるものは貨幣ではなく、賣りたくても賣れない穀物や家畜に對する好價格であるやうに考へられる。…彼等は何故、かやうな價格が得られぬのであるか？ それには、(一)穀物や家畜が國內に多過ぎて、市場に於ける大抵の人々は、上記の農民と同様に賣らうとするばかりで、買はうとするものは殆んどないこと。(二)輸出を以つてする市場の排出が停滞すること。(三)消費の減退(例へば貧困のため、家内支出が減少する場合の如き)。これらの中のいづれかが原因を成してゐる。されば、農民の生産物を捌かずやうにするものは、正金の増加ではなく、寧ろ實際に市場を壓迫する上記三原因中の一を除くことである。…商人や小賣業者も亦、同じ意味で貨幣を必要としてゐる。即ち彼等も亦、市場停滞のため商品を捌き得ないのである。…富が出来得る限り迅速に、一方の人から他方の人に轉動する場合ほど、一國が著しく繁榮することはないのである』(サー・ダドレー・ノーム著『商業論』ロンドン一六九一年刊、第一一—一五頁)云々。ヘレン・シュヴァンドの一切の欺瞞的論法は要するに、商品の性質に基づくところの、随つて商品流通の上に現れるところの諸矛盾は、流通要具の増大に依つて除去せられ得るといふことに歸する。尙また、生産行程並びに流通行程の停滞の原因を、流通要具の不足に歸せしめることが一般の幻想になつてゐるからと言つて、他方に例へば『通貨調節』に對する政府の不手際といふ如き原因に基く流通要具の現實的不足からは、斯様な停滞が生じ得ないといふことにはならぬのである。

かやうに、各期間に流通要具として作用する貨幣の總量は、一方には流通商品界の價格總量に依り、他方には商品界に於ける對立的流通行程の流動が緩慢に進むか迅速に進むかに依つて決定されるものであつて、右の價格總量の幾分の幾つが同一の個貨に依つて實現されるかといふことは、この後ちの事情の如何に懸るのである。然るに諸商品の價格總量の大小は、各種商品の價格のみでなく、またその量に依つても左右される。而してこれらの三因子—價格の運動と、流通商品の量と、最後にまた貨幣通用の速度とは、種々なる方向に相異なつた比例を以つて變化し得るものであるから、實現せらるべき價格總量、随つてまたそれを基礎とする流通要具の量は、幾多の變易を通過し得るものである。これらの變易の中、商品價格の歴史上最も重要なものだけを、以下に掲げよう。

商品價格が不變であるとすれば、流通商品の量が増大するか、貨幣の通用速度が減少するか、又はこれらの兩變化が相合して作用するかに依り、流通要具の量は増大し得る。反對に、流通商品の量が減少するか、又は流通速度が増大するかにつれて、流通要具の量は減少し得るのである。

次に商品價格が一般に昂騰するとすれば、その場合には、流通商品の量が價格の昂騰と同一の比率を以つて減少するか、又は流通商品の量は不變であつて、貨幣の通用速度が價格昂騰と同一の率を以つて増大するとき、流通要具の量は不變であり得る。それは、商品の量が商品價格の低落より急速に増大する場合か、又は流通速度が商品價格の低落よりも急速に減少する場合か、増大し得るのである。

最後に商品價格が一般に低落する場合には、流通商品の量が價格の低落と同一の比率を以つて増大するか、又は貨幣の通用速度が價格低落と同一の比率を以つて減少するとき、流通要具の量は不變であり得る。それは、商品の量が商品價格の低落よりも急速に増大する場合か、又は流通速度が商品價格の低落よりも急速に減少する場合か、増大し得るのである。各因子の變易は互ひに相殺し得るものであるから、各因子は絶えず變化してゐても、商品價格の實現せらるべき總額、随つてまた流通貨幣の量は變化することがない。そこで—比較的長期間について觀察すれば尙更らであるが—各國に流通する貨幣量なるものは、外觀に依つて豫想されるところよりも遙かに不適かに不變的な平均的水準を保つてゐること、並びにこの水準からの逸離は、生産上及び商業上の恐慌から、ヨリ稀にはまた貨幣價值それ自身の變動から週期的に生ずる激動を除いて考へるならば、外觀に依つて豫想されるところよりも遙かに小であることが見出されるのである。

流通要具の量が流通商品の價格總量及び貨幣通用の平均速度に依つて決定されるといふ法則は(七十八)、次の形にも言ひ現され得る。即ち、商品の價值總量及び商品轉形の平均速度が與へられてゐるとすれば、通用貨幣又は貨幣材料の大小は、これらのものそれ自身の價值の如何に懸るといふのである。反對に、商品價格は流通要具の量に依り、また後者は一國に存在する貨幣材料の量に依つて決定されるといふ幻想(七十九)は、これをその本來の代表者の所論について見れば、商品は價格なくして、貨幣は價值なくして流通行程に入り、然る後この行程の内部に於いて、商品價格の可除的一部が堆積された金屬の可除的一部と交換されるといふ、馬鹿々々しい假説に根柢を置いてゐるのである(八十)。

(七十八)『一國の商業に必要な貨幣には、一定の限度と比率とが存在するものであつて、これよりも多すぎたり少なすぎたりすると、商業は阻止されることになる。これ恰も、小賣業に於いて、銀貨の釣銭を與へる爲に、また最小の銀貨を以つて







C 鑄貨。價值表章

貨幣の鑄貨形態<sup>40</sup>は、流通要具としての貨幣の機能から生じて来るものである。諸商品の貨幣名たる價格の中に假想されてゐる金の重量分は、商品が流通に入つたとき、與へられたる額面の金片即ち鑄貨としてこれに對立せねばならぬ。貨幣を鑄造することは、價格標準を確立することと同様に、國家の任務に屬するところである。金銀が鑄貨として着用し更らに世界市場で脱ぎ棄てることの種々なる國民的制服は、商品流通の内部的即ち國民的なる領域と、一般的なる世界市場領域との分離を示すものである。

要するに、金貨と地金<sup>せがね</sup>とは、本來ただ態容に依つてのみ區別されるものであつて、金は絶えず一方の形態から他方の形態に轉化し得るのである(八十一)。だが、造幣局からの出路は、同時にまた鎔鍋への入路となる。蓋し金貨といふものは、その程度に大小の差はあるにしろ、兎にかくいづれも通用中に磨滅するものであつて、金の名義と實體、即ち名目上の内容と現實上の内容とは分離行程を開始することになり、同じ額面の金貨でも、重量が違ひ、随つて價值も異なるやうになつて来る。斯くて流通要具としての金は、價格標準としての金とは一致しなくなり、随つてそれは、金によつて價格を實現される商品の現實的等價ではなくなる。斯かる混亂の歴史こそ、中世より降つて十八世紀に至る近世の鑄貨史を構成するところのものである。流通行程なるものは、鑄貨の金實體を金假現に、換言すれば鑄貨をその法定金屬内容の單なる象徴に轉化せしめようとする原生的傾向を有してゐるものであるが、近世の法律は一定の量目程度を超えて磨滅したる金貨の通用を禁じ、又はその法貨たる資格を無効たらしめることに依つて、この傾向を認めてゐるのである。

(八十一) 鑄造料その他類似の細目を取扱ふことは、固より本書の目的外に屬するところであるが、茲には『英國政府が無償で貨幣を鑄造する』ところの『宏量』を嘆賞した浪漫的詭譎者アダム・ミュラーについて、サー・ダドレー・ノースの左の批判を掲げることしよう。『金銀は他の諸商品と同様に、満干を有つてゐる。スペインから若干の金銀が到着すると……それはロンドン塔に運ばれて行つて貨幣に鑄造される。その後久しからずして、地金の需要が生じて輸出される。輸出すべき地金がなく、悉く鑄造されてしまつてゐたとすれば、どうするか？ その場合には、鑄貨を銷き潰すの外はない。それは所有者にとつて何等の費用も要しないのであるから、これがため彼れは損失を蒙ることがない。だが、國民は損をするのである。彼れは驢馬に食はせる糞を糶ふ費用を拂はされるからだ。商人(ノース彼れ自身も、チャールズ二世時代に於ける最大商人の一人であつたが)にして若し、貨幣鑄造料を支拂ふべきであつたとすれば、彼等は適當なる理由なくしてはロンドン

塔に銀を塗らなかつたであらう。斯くして、鑄貨は常に地金銀以上の價值を有つことになつたであらう(ノース前掲、第一八頁)。

貨幣通用それ自身に依つて、鑄貨の現實的内容が名目上の内容から分離せしめられ、金屬上の存在が機能上の存在から分離せしめられるといふ事實——この事實の中には、金屬貨幣の鑄貨機能は、他の材料から成る表章<sup>(8)</sup>又は象徴<sup>(9)</sup>を以つて代用し得るといふ潜在的の可能を包含するものである。金又は銀の極少量を貨幣に鑄造するについての技術上の困難や、本來は金よりも寧ろ銀、銀よりも寧ろ銅といふ風に、ヨリ低級の金屬が價值尺度として役立つてゐたので、ヨリ高級の金屬が代つて貨幣となるべき、既にこれらのヨリ低級な金屬が貨幣として流通してゐたといふ事實に依つて、我々は金貨の代用としての銀表章並びに銅表章の歴史的役目を知ることが出来る。これらの代用貨幣は、鑄貨が最も速かに流通し、随つて最も速かに磨滅する商品流通部面、換言すれば賣買が絶えず極小規模を以つて更新される流通部面に於いて金に代はるのである。これらの衛星が金それ自身の位置を永久に占領してしまふことを妨げる爲に、それが支拂上金の代用品として受け取られねばならぬ限界を法律で規定することになる。相異つた鑄貨の通用すべき特殊の諸部面は、言ふ迄もなく相互交錯してゐるものであつて、金貨の外にも最小金貨の鈞錢用として諸種の補助貨が通用される。金は絶えず小賣上の流通に入るが、補助貨と引換へられてまた絶えず流通から投出されるのである(八十二)。

(八十二) 『若し銀貨の量が小口支拂に必要な程度を決して超えないとすれば、銀貨なるものは大口の支拂に十分たるべき量に蒐集され得るものではないであらう。……大口の支拂に金を使用すれば、必然にまた小賣取引の上にもそれを使用することになる。金貨の所有者は小口の購買にも金貨を以つて支拂ひ、買つた品物と共に銀貨の鈞錢を受けるので、若しこのこと勿りせば小賣商人の煩累となるであらうところの餘冗な銀は、彼れの手から引き取られて一般の流通に散布される。が若し、金から獨立して小口支拂を處理し得るだけ十分の銀が存在してゐるとすれば、小賣業者は小口販賣について銀貨の支拂を受けることになるから、銀貨は必然彼れの手で蓄積されねばならなくなつて来る』(デヴィッド・ブリーカナン著『大英國の租税及び商業政策研究』エヂンバラ、一八四四年刊、第二四八及び一四九頁)。

銀表章又は銅表章の金屬内容は、法律に依つて專擅的に決定される。これらの表章は、通用中金貨よりもヨリ速に磨滅するので、その鑄貨機能は事實上重量から、随つてまた一切の價值から全く獨立したものとなる。金の鑄貨存在は價值實體から全く分離され、相對的に無價值なる紙券の如き物が、代つて鑄貨たる機能を盡すやうになる。金屬の貨幣表章に於いては、この



純粹に象徴的な性質は尙、或程度まで隠蔽されてゐるが、紙幣に於いては明瞭に現れて来る。要するに、困難なのは最初の一步だけである(46)。

茲では強制的に通用せしめられる國家紙幣(47)だけについて言ふ。斯種の紙幣は、直接に金屬流通から生じて来る。反對に信用貨幣なるものは、單純なる商品流通の立場からはまだ全く知られて居らぬ事情を前提するのである。だが、この際一言して置きたいことは、嚴密な意味の紙幣は、流通要具としての貨幣機能から生ずるものであるが、信用貨幣なるものは、支拂要具としての貨幣機能にその原生的根元を有してゐるといふ一事である(八十三)。

(八十三) 支那の財務官ワン・マオ・イン(王孟尹?)は、尙かに帝國紙幣をば兌換銀行券に轉化しようとする計畫を立て、これを天子の前に陳上しようとした。彼れは一八五四年四月の帝國紙幣委員會の報告の中で手痛くやり込められてゐる。尤もこれがため、彼れが規定の答刑を受けたか何うかは報告されてゐない。その報告の結論には斯う書いてある。「當委員會は彼の計畫を慎重に審議した結果、それが悉く商人の利益となるのみで、帝室のためには何等の利益ともならぬことを見出した」(『支那に關する北京駐劄、ロシア帝國公使館の調査研究、ドクター・アー・アーベル及びエフ・アー・メクレンブルと獨譯ペルリン一八五八年刊』第四七頁以下)。(48) 通用に依る金屬の間斷なき廢減につき、イングランド銀行の某總裁は「上院の(銀行條例)委員會」に證人として述べて曰く、「年々新たに鑄造される磅金貨(49)は輕きに過ぎて来る。或年には十分の量目を以つて通用するものも、翌年には廢減のため反對の秤皿を釣り下げるに足るだけ量目を失ふ」と(一八四八年上院委員會報告、第四二九號)。(49)。

一磅、五磅等の如き貨幣名の印刷されてゐる紙券が、國家に依つて外部から流通行程の内部に投ぜられる。これらの紙券が現實的に同一類面の金貨に代つて流通する限り、その運動は單に金貨通用それ自身の法則を反射するのみである。紙幣流通獨特の法則は、紙幣が金を代表する比率にのみ起因し得るものであつて。これを單純に言へば次の如くである。即ち、紙幣の發行は、紙幣に依つて象徴的に代表される金(又は銀)が、紙幣なき場合現實に於いて流通すべき量を超えてはならぬといふことである。流通部面に依つて吸收され得る金の量が、絶えず一定の平均水準を上下してゐることは事實であるが、然し與へられたる一國に於ける流通器具の量は、決して一定の最低限度以下に降ることはない。而してこの最低限度は、經驗によつて確立されるものである。この最低限度量が絶えず或分を變へ、絶えず異つた金貨から成るといふ事實は、勿論その大小と、流通部面に於ける不斷の運動との上に、些かの變化をも與へるものでない。隨つてそれは、紙の象徴を以つて代用せられ得るのである。

また若し一切の流通路が、その貨幣吸收能力の及ぶ限り紙幣を以つて充たされてゐるとすれば、それは明日に至り、商品流通の變動の結果過充となるかも知れぬ。かうなると、もう限界がなくなるのである。然し紙幣はその限界——紙幣なき場合、現實的に流通し得べき額面等しき金貨の量——を超える時、それに依つて一般的信用失墜の危險が生ずることは暫く措き、商品界の内部に於いてはその内在的法則に依つて決定され、隨つてまた紙幣を以つて代表し得るに止まる量しか代表しないこととなる。例へば各紙幣が一オンスの金の代りに二オンスの金を代表するやうになつたとすれば、それは事實上、從來四分の一オンスを代表してゐた一磅金貨が、八分の一オンスを代表するやうになつたことであつて、その結果は、價格標準たる金の機能に變化が生じた場合と異ならぬ。斯くして、従前一磅なる價格を以つて言ひ現されてゐた價值は、今や、二磅なる價格を以つて言ひ現されることになる。

紙幣は金表章であり、貨幣表章である。商品價值に對する紙幣の關係とは、要するに、紙幣に依つて象徴的に感性的に代表されるどころと同一量の金が、商品價值を觀念的に言ひ現してゐるといふことに外ならぬ。一定量の金は、他の凡ゆる商品量と同様に、一定量の價值を體化してゐるものであるが、この意味での金を代表する限りに於いてのみ、紙幣は價值表章となるのである(八十四)。

(八十四) 第二版註——貨幣を取扱つた最良の著述家たちでさへ、貨幣の種々なる機能を理解することが如何に不明瞭であつたかは、例へばフラートンの著述に於ける次の一節に依つても知り得るところである。「國內交易について言ふ限り、通常金銀貨に依つてなされてゐる一切の貨幣機能が、法律に基く人爲的傳習的の價值以外には何等の價值をも有せざる不換紙幣の流通に依つて同様に有効に盡され得るといふことは、私の信ずるところに依れば、毫も否認し難い事實である。この種の價值は、今日十分の價值を有する鑄貨に依つて充たされてゐる一切の必要に應じ得るものであつて、發行高が適當な限界を越えないとすれば、本位貨幣の機能をも引き受け得るのである」(フラートン著『通貨の調節』第二版ロンドン、一八四五年刊、第二一頁(50))。要するに、貨幣商品なるものは、流通上單なる價值表章を以つて代用され得るが故に、價值尺度及び價格標準としての貨幣商品は無用に歸するといふのである！

最後に、金は何故それ自身の單なる無價值的表章に依つて代用され得るかといふことが問題となる。だが、金といふものは鑄貨又は流通要具としての機能上、孤立し獨立する限りに於いてのみ、斯く代用され得ることは、曩に述べた通りである。と



ところで、この機能の獨立化は、磨滅した金貨が引續き流通する場合には現れるが、個々の金貨について必然的に行はれるものではない。金は、それが現實的に通用してゐる間だけ、單なる鑄貨又は流通要具として作用するのである。だが、個々の金貨について當て嵌らぬことも、紙幣に依つて代用され得る最低限量の金については當て嵌る。この最低限量の金は、絶えず流通部に在り、不斷に流通要具たる機能を盡すものであつて、専らこの機能の負擔者として存在するものである。されば、その運動は、商品轉形  $W-G-W$  の相對立した行程の間斷なき交互轉換を表現するに過ぎぬものとなる。この轉形に於いて、商品の價值形態は、商品に對立してはまた直ちに消滅して行くのである。この場合、商品の交換價值は獨立した表現を與へられるが、それも單なる瞬間的段階に過ぎず、やがては他の商品に依つて代置されてしまふ。されば一方の人の手から他方の人の手へと、絶えず貨幣を遠ざけてゆく一の行程に於いては、貨幣の單なる象徴的存在だけで十分であつて、貨幣の機能上の存在がその物質的存在を謂はば吸収してしまふやうなことになるのである。この場合、貨幣は商品價格の瞬間的に對象化された反射に過ぎぬものであるから、自分自身の表章として作用するに過ぎず、隨つて一の表章を以つて代用し得るものとなる(八十五)。ただ貨幣の表章が、それ自身の對象的に社會的な通用力(6)を要するのみであつて、紙の象徴は強制通用に依つてこの通用力を與へられる。斯かる國家的強制は、一の共同體の限界に依つて定められた内部的流通部面の範圍内のみ通用するものであるが、それと同時にまた、この流通部面の内部に於いてのみ、貨幣は流通要具即ち鑄貨としての機能に全く没入してしまひ、それ自身の金屬實體から外部的に引き離された單なる機能的の存在様式をば、紙幣を通して與へられることになるのである。

(八十五) 鑄貨として作用する金銀、換言すれば専ら流通要具たる機能のみを盡す金銀が、それ自身の表章になるといふ事實から、ニコラス・バーボン<sup>(7)</sup>は政府の『貨幣價值増廣』權なるものを推論した。一例を擧ぐれば、一グロシェンとして知られてゐる銀量に、ターレルの如きヨリ大なる銀量の名稱を與へ、斯くすることに依つて、ターレルの代りにグロシェンを價權者に返済するといふ權利が即ちそれである。『貨幣は多くの人々の手を通過する時磨滅してヨリ輕くなる。賣買の際考慮されるものは、貨幣の名稱及び通用であつて、銀の純量ではない。金屬を貨幣たらしめるものは、政府の權力である』(ニコラス・バーボン前掲、第二九、三〇及び四五頁)。

(三) 貨幣

要するに、價值尺度として作用するところの商品、換言すればそれ自身の現物體を以つてするか又は代用物を通して、流通要具たる機能を盡すところの商品は、即ち貨幣であるといふことになる。隨つて金(又は銀)は貨幣である。金(又は銀)は一方に、それ自身の黄金(又は白金)の現身を以つて現れねばならぬとき、換言すれば、價值尺度に於ける如く單なる觀念的のものでもなく、また流通要具に於ける如く他の物に依つて代理され得るものでもなく、専ら貨幣商品として現れねばならぬとき、貨幣として作用する。他方にまた、それは、みづからその機能を盡すにしろ、或は代理物を以つてこれを盡さしめるにしろ、兎に角この機能に依つて專一的の價值形態となり、換言すれば交換價值の唯一の適當な存在となつて、斯かる資格を以つて單なる使用價值としての他の凡ゆる商品に對立するとき、貨幣として作用することになるのである。

a 貨幣の退藏

二つの相對立した商品轉形の連續的循環、換言すれば販賣と購買との止むところなき轉換は、貨幣の不休的なる通用の上に、即ち流通の作用絶ゆることなき機構としての貨幣機能の上に現れて来る。轉形列が中斷されて、販賣が次いで來たるべき購買に依つて補充されることなくや否や、貨幣は不動のものとなり、ポアギューベルの言葉を藉りていへば、動體から不動體に、鑄貨から貨幣に轉化することになる。

商品流通それ自身の最初の發達と同時に、第一轉形の結果である轉化したる商品形態、換言すれば金に轉化したる(8)商品をは把持すべき必要及び熱求が生じて來る(八十六)。商品は他の商品を購入する爲ではなく、貨幣形態を以つて商品形態に代はらしむる目的を以つて販賣される。この形態變化は、社會的代謝機能の單なる手段から、轉じてそれ自身が目的となる。商品の轉化したる形態は、斯くして絶對的に讓渡し得べき形態、又は單なる瞬間的の貨幣形態たる機能を盡すことを妨げられ、貨幣は退藏貨幣(9)に化し、商品の販賣者は貨幣退藏者(10)となるのである。

(八十六) 『貨幣としての富は……貨幣に轉化された生産物としての富に外ならぬものである』(メルシェード・ラ・リヴェキエール前掲、第五五七頁)。『生産物に依つて言ひ現された價值高は、單に形態を變へただけのものに過ぎぬ』(前掲、第四八六頁)。

商品流通の發端に於いて貨幣に轉化されるものは、有り餘つた使用價值のみであつて、金銀は自然にこの有り餘つた使用價值なる富の社會的表章となつて來るのである。而してこの素朴な貨幣退藏(9)形態は、傳統的の自足的生産方法に照應して固く限定された欲望範圍を有する民族の間に、永久的のものとなつて來るのであつて、それはアジア人就中インド人の社會に見



られるところである。商品の価格は一國に存在する金又は銀の分量に依つて決定されるとは、ヴァンダーリントの想像してゐたところであるが、彼れはインドの商品が何故かく廉價であるかと自問してゐる。答へて曰く、それはインド人が貨幣を埋蔵するからである。蓋し一六〇二年から一七三四年に至る間、インド人は本来アメリカからヨーロッパに輸出された銀一億五千萬磅を埋蔵した(八十七)。また一八五六年から一八六六年に至る十年間に、イギリスから一億二千萬磅の銀がインド及び支那に輸出され、而して支那に輸出されたものは、大抵みなインドに再輸出されるといふ有様であつた。これらの銀は、その初め豫州の金を以つて交換されたものである。

(八十七)『彼等はこの方法に依つて、凡ゆる財貨及び商品の価格を斯く低廉ならしめたのである』(ヴァンダーリント前掲、第九五及び九六頁)。

商品生産の發達が更に進むと、各商品生産者は物の神經ともいふべき『社會的質權』を確保せねばならなくなる(八十八)。彼れの欲望は絶えず更新されるので、不斷に他人の商品を購買することが必要となつて来る。而も彼れ自身の商品の生産及び販賣は時間を要し、且つ偶然に依つて左右されるやうになる。そこで販賣せずして購買することが必要になつて来るのであるが、斯くするためには、豫め購買することなくして販賣して居らねばならぬ。この行程はこれを普遍的規模に擴大するとき、自家撞着のやうに見えて来る。

(八十八)『貨幣は質權である』(ジョン・ベラーズ著『貧民、製造品、商業、拓植、不道德等に関する論文』ロンドン、一六六九年刊、第一三頁)。

然るに貴金屬なるものは、その生産所に於いて直接他の商品と交換されるので、金銀の所有者は購買を伴ふことなくして他の商品の所有者に販賣する譯である(八十九)。而して他の生産者も亦、同様に購買を伴ふことなくして販賣してゆくのであるが、これがため、貴金屬は更に凡ゆる商品所有者の間に分布されることになる。

(八十九)蓋し嚴密の意義の購買なるものは、商品の轉化したる形態としての、即ち販賣の結果としての、金又は銀を前提するからである。

斯くして、交易上(88)の到る處に大小様々な退藏金銀が生じて来る。商品と交換價值として、又は交換價值を商品として保持し得るやうになると共に、貨幣慾が喚び起される。商品流通が擴大されるにつれて、何時でも利用し得べき絶對的に社會的な形態を採つた富の力、換言すれば貨幣の力が増大して来るのである。『金は不思議な物だ。それを所有する人は、望み次第に

如何なる物の支配者ともなる。しかのみならず、金を以つてすれば、魂を天國に達せしめることも不可能ではないのである』(コロンブス『ジャマカからの書翰』一五〇三年)。貨幣が如何なる物から轉化して來たかは、それを見ただけでは分らないのであるから、商品であるか否かを問はず、一切の物は貨幣に轉化される。一切の物は賣買され得るものとなる。流通は、一切の物を收容し、これを貨幣結晶として放出するところの大なる社會的レトリックとなるのである。聖徒の骨でさへも、この鍊金術には逆らふことが出来ないものであるから、況して商業取引の手の届かないヨリ微妙な聖物に於いては尙更らである(九十)。各商品間の凡ゆる質的差異が貨幣に於いて消滅する如く、貨幣の方からもまた、極端なる平等主義者となつて一切の差別を抹除してしまふ(九十一)。だが、貨幣それ自身もまた一の商品であり、何人の私有ともなり得るところの外部的一物件である。斯くして、社會的の權力は私個人の私的權力となる。さればこそ、古代の社會に於いては、貨幣は經濟上及び道德上の秩序を破壊するもの(90)として排斥されたのである(九十二)。然るに幼少の頃すでに富の神ブルトウスの髪を捕へて大地の胎内から引き出した近世社會(九十三)は、黄金の聖杯(90)を迎へるのに、それ自身の生活原理の光りまばゆき權化たる待遇を以つてしてゐるのである。

(九十)この上なくクリスト教的なフランス王アンリ三世は、修道院その他から靈寶を奪つて貨幣に變へた。フォシス人に依るデルファイ神殿の寶物掠奪が、ギリシア史上如何なる役目を演じたかは周知の事實である。古代人の神殿なるものは、人の知る如く、商品の神の住居に役立つた。それは『聖き銀行』となつてゐたのである。商業民族たることを特色としてゐたフェニシア人から見れば、貨幣なるものは萬物の轉化した形態に過ぎなかつた。されば愛の女神の祭りに際し見知らぬ男に身を任かせた處女たちが、その報酬として與へられた錢を女神に獻じたといふことは、寧ろ當然の結果だつたのである。

(九十一)『金! 黄色な、キラ／＼と光り輝く貴き金!』  
それのみにて、黒は白となり、醜は美となり、

邪は正に、賤しきは氣高く、老いたるは若く、怯者は勇者となる……  
……神々よ、これは何! 何故にこれは  
汝等の祭司と下僕とを汝等の側より引き離し、  
選しき人々の枕をその頭の下より握り取る。  
この黄色な奴隷めは、



諸々の宗教を縫つては破り、咀はれたるを祝福し、  
白き癩者を崇めしめ、盗人らを坐せしめて、  
彼等に位を與へ、跪き讃む。

座席に連なる元老院議員と共に。これぞ  
悲しむ寡婦を再び嫁がしむる者……  
忌々しき現世、

汝、人類共通の娼婦『シエークスピア』アゼンの隣者』(ib)。

(九十二)『それは人の作れるもののうち、如何なるものも、  
錢の如く悪しきものなければなり。そは  
都市を破壊し、人を屋外に追ひ出だす。

そは悪しき教もて人を迷はし、  
正しき心を惡に向はしめ、  
凡ゆる狡猾に人を誘ひ

神に背ける行を告げ知らせる』(ソフォクレス著『アンチゴネ』(ib)。

(九十三)『食慾はブルトウスをも大地の中から引き出す』(アテネウス著『學者の晩餐』(ib)。

使用價值としての商品は特殊の一欲望を充たし、素材的富の特殊の一要素となるものであるが、商品の價值は、商品が素材的富を構成すべき他の凡ゆる要素に對して有する牽引力の程度を、商品所有者の社會的富を秤量する。未開時代に於ける單純なる商品所有者から見れば——西歐の自營農民から見てもさへさうであるが——價值は價值形態から分離し得ざるものであつて、退藏金銀の増大は即ち價值の増大を意味してゐる。貨幣の價值は、貨幣それ自身の價值變動に因るにしろ又は他の諸商品の價值變動に因るにしろ、いづれにしても變動することは事實であるが、然しこれがため、二百オンスの金は一百オンスの金よりも、三百オンスの金は二百オンスの金よりも多くの價值を含むといふ事實は妨げを受くるものでなく、他方に又、金屬としての金の現物形態は、他の凡ゆる商品の一般的等價形態であつて、凡ゆる人間の勞働の直接社會的な體化であるといふ事實も、妨げを受けることはないのである。貨幣退藏の衝動は本來、無制限のものである。貨幣は直接他の凡ゆる商品に換へ

られ得るものであるから、質的又は形態的の方面から見て無制限のものであり、素材的富の一般的代表となるのである。同時に又、現實的の各貨幣類は量的に制限されてゐるものであつて、效力の制限された購買要具たるに過ぎぬ。貨幣が量的に制限されて質的には無制限であるといふこの矛盾は、貨幣退藏者をして底止するところなき蓄積勞働に絶えず從事せしめる。彼れは恰も、一國を得る毎に新たな國境を得たに過ぎぬと考へる世界征服者の如くである。

金を貨幣として、退藏要素として把持する爲には、それが流通することを、換言すれば購買要具として享樂資料に轉化されることを妨げられねばならぬ。斯くて貨幣退藏者は、肉慾の快樂を黄金の物神に供げるのであつて、禁慾の福音も彼れにとつては眞鍮な問題である。他方に又、彼れは商品の形で流通内に投じただけのものを貨幣の形で其處から引き上げ得るに過ぎぬ。彼れは多く生産すればする程、ますます多く販賣することが出来る。斯くて勤勉と、節儉と、貪慾とは、彼れの主徳となり、多く賣つて少く買ふことは、彼れの經濟の一切となるのである(九十四)。

(九十四)『各商品の販賣者の數を出來得る限り多からしめ、購買者の數を出來得る限り少なからしめること、これ經濟上の凡ゆる方策が同轉するところの樞軸である』(ヴェリ前掲、第五二頁)。

退藏貨幣なる直接的形態の外に、尙、金銀商品の所有といふ審美的の形態が並存してゐる。金銀商品の所有はブルジョアの社會の富の發達につれて増進し來たるものであつて、『富者とならう、然らずんば富者と見せかけよう』(ヂテロー)といふことが、その動機となつてゐるのである。斯くて一方には、金銀の貨幣機能から獨立して不斷に擴大されるところの金銀市場が形成され、他方には又、主として社會的激動期に流用されるところの、貨幣の隠れたる供給源泉が形成されることになる。

貨幣退藏は金屬流通の經濟の上に色々な機能を盡すものであつて、その第一の機能は金貨又は銀貨の通用條件に起因するものである。商品流通の範圍や速度や、並びに商品價格などが、不斷の變動を遂げるとき、それにつれて貨幣通用の量も亦休むところなく増減することは、曩に述べた通りである。即ち貨幣通用の量は伸縮し得るものでなくてはならぬのであつて、或時は貨幣が鑄貨の形で牽引され、或時は又、鑄貨が貨幣の形で反撥されねばならぬことになる。現實的に通用する貨幣量をば絶えず流通面の吸收到に相應せしめる爲には、一國に存在する金又は銀の量が鑄貨機能を盡しつつある金銀の量よりも大であることを要する。而してこの條件を充たすものは、即ち退藏形態を採つた貨幣である。退藏貨幣の貯水池は、流通貨幣を出入せしめる溝路としても役立つものであるから、流通貨幣なるものは、洗してその通用溝路から溢れ出るやうなことはないのである(九十五)。



(九十五) 『一國の商業を續けるには、一定額の正金が必要である。この額には變化あるものであつて、必要に應じて多くもなければ少なくもなる。…貨幣のこの満干運動は、政府の干渉に依ることなくして自然に調節されてゆく。…二つのパケツが交互に利用されるやうなもので、貨幣が乏しい時には地金が貨幣に鑄造され、地金が逼迫した時には、貨幣が鑄き潰ぶされる』(ダドレー・ノース前掲、第二二頁)。(66)。久しく東インド會社の吏員であつたジョン・スチュアート・ミルは、インドに於いて依然銀の裝飾品が直接に退蔵貨幣たる機能を盡してゐる事實を確證して曰く『金利の高い時には、銀の裝飾品が貨幣に鑄造され、金利が低くなると、それがまた裝飾品に復歸する』(一八五七年の銀行條例に關する報告中ミルの證述。第二〇八四號)。(67)。インドの金銀輸出に關する一八六四年の議會文書に依れば、一八六三年に於ける金銀の輸入は輸出を超過せること、實に一千九百三十六萬七千七百六十四磅であつた。又、一八六四年に先立つ八年間に於ける貴金屬の輸入超過は、一億九百六十五萬二千九百七十七磅であつた。十九世紀中、インドに於いて貨幣に鑄造された貴金屬は、二億萬磅を遙かに超過するといふ有様であつた。

## b 支拂 要 具 (68)

以上考察せる商品流通の直接的形態に於いては、同一の價值量が常に二重の存在を有つてゐた。即ちそれは、一方の極に於いては商品として、反對の極に於いては貨幣として存在してゐたのである。斯かる状態のもとに於いては、商品所有者たちは交互的に存在する等價の代表者としてのみ相接觸することになつたのであるが、商品流通が發達するにつれて、商品の讓渡を價格の實現から時間的に引き離す諸種の事情が同時に發達して來る。茲では、これらの事情のうち、最も單純なものだけを暗示すれば足りるであらう。

或種の商品はその生産に長時間を要し、他の種の商品は短時間を要する。又、相異つた商品の生産は、相異つた季節に伴ふものであり、商品に依つてはその市場地に生ずるものもあれば、遠く隔つた市場に輸送されねばならぬものもある。これがため、或商品所有者は他の商品所有者が購買者となる以前、すでに販賣者たり得るやうになる。同一の取引が同一の人々の間に絶えず繰り返されてゐる間に、商品の販賣條件は生産條件に従つて調節されるやうになつて來る。他方に又、或種の商品(例へば家屋の如き)の利用は、一定期間を限つて販賣され、期間の満了したとき、購買者は初めて現實的に商品の使用價值を受け取ることになる。即ち彼等は、代價を支拂ふ以前に商品を購入する譯である。

一方の商品所有者は既存の商品を販賣し、他方の商品所有者は貨幣の單なる代表者、又は將來に於ける貨幣の代表者として

購買する。斯くて販賣者は債權者となり、購買者は債務者となるのである。この場合、商品の轉形又は商品の價值形態の發展は新生面を開くのであつて、貨幣も亦新たな機能を與へられることになる。それは支拂要具となるのである。(九十六)。

(九十六) ルーテルは購買要具としての貨幣と支拂要具としての貨幣との間に區別を與へてゐる。『汝は高利貸附業(69)に依つて此處では支拂ひ得ず、彼處では購買し得ないといふ二重の窮境を造り出すのである』。(マルチン・ルーテル著『高利貸附業に反對すべく、僧侶等へ』ウキッテンベルヒ、一五四〇年刊)。(70)。

債權者又は債務者の特質は、この場合單純なる商品流通から生じて來る。單純なる商品流通の形態變化が、彼等にこの新たな資格を刻みつけるのである。それ故、これらの役目は販賣者及び購買者の役目と同じく、最初は瞬時的のものであつて、同一の流通當事者が代る代るこれを演ずるといふ有様であつた。だが、この對立は本來、販賣者及び購買者の對立ほど快いものには見えず、且つ一層結晶し易いのである(九十七)。然し、この債權者債務者の性質は、商品生産から獨立しても生じ得るものであつて、例へば古代のギリシア及びローマに於ける階級闘争は、主として債權者對債務者の抗争として現はれた。この抗争は、ローマに於いては平民債務者(71)の没落を以つて終り、奴隷がこれに代ることになつたのである。又、中世に於いては、それは封建債務者の没落を以つて終つた。彼等はその經濟的基礎と共に、政治上の權力をも失つてしまつたのである。元來、債權者對債務者の關係は、貨幣關係の形態を採つて現れるものであるが、この場合に於ける貨幣關係は、ヨリ深奥なる經濟的生活條件の矛盾を反射するものに過ぎぬ。

(九十七) 十八世紀初期に於ける英國商人間の債務者對債權者關係につき、或匿名氏は述べて言ふ。『イギリスの商人社會には他の如何なる社會にも、また世界の如何なる國にも見出されないやうな慘虐の精神が蔓つてゐる』(匿名者著『信用及び破産條例に關する一論文』ロンドン 一七〇七年刊、第二頁)。(72)。

これより、商品流通の部面に論を戻さう。販賣行程の兩極に等價たる商品及び貨幣が同時に現れるといふことは、最早なくなつた。今や貨幣は第一に、販賣商品の價格決定上に價值尺度たる機能を盡すのであつて、契約に依つて確定された商品價格を以つて、購買者の債務、換言すれば彼れが一定の期日に支拂ふべき貨幣額を秤量することになるのである。

第二に、貨幣は觀念的の購買要具たる機能を盡す。それは購買者の支拂約束の中にのみ存在するといへ、商品を異つた所有者の手に移轉せしめるものであつて、支拂期日が満期となつた時に、初めてこの支拂要具としての貨幣は現實に於いて流通の内部に入る。換言すれば、購買者の手から販賣者の手に移轉されるのである。流通要具が退蔵貨幣に轉化されるのは、流通



行程が第一段で杜絶した結果、語を換へていへば商品の轉化した形態が流通の内部から引き上げられた結果である。支拂要具が流通の内部に入るの、商品が既に流通内から脱出した後のことであつて、この場合には貨幣は最早、流通行程を媒介するものではない。それは交換價值の絶對的存在として、一般的商品として、獨自に流通行程を終了させる。販賣者は貨幣に依つて何等かの欲望を充たさんが爲、貨幣退蔵者は商品に貨幣形態に保存せんが爲、また債務者たる購買者は支拂をなし得んが爲に、商品を貨幣に轉化させた。若しこの購買者が支拂をしないとすれば、彼れの所有品は強制販賣に附せられる。斯くして商品の價值形態たる貨幣は今や、流通行程そのものの事情に起因する社會的の必然に依つて、それ自身販賣の目的となる。購買者は商品を貨幣に轉化するに先だつて、貨幣を商品に再轉化する。即ち商品の第一轉形を行ふ以前に、第二轉形を行ふのである。販賣者の商品は流通する。けれども、その價格の實現は、私法上の貨幣請求權といふ形に於いてのみ行はれるのである。この商品は貨幣に轉化される以前、使用價值に轉化される。その第一轉形の完成は、後に及んで行はれるのである（九十八）。

（九十八）第二版註——私は本文の中で、何故これと反對の形態を考慮に入れなかつたか、それは一八五九年に刊行した拙著の左の一節に依つて知られるであらう。——「反對に、G—A なる行程に於いては、貨幣の使用價值が實現される以前、換言すれば商品が購買者の手に引き渡される以前、貨幣は現實的の購買要具として讓渡され、斯くして商品の價格は實現され得るのである。これは例へば日常の前拂形式で、又は英國政府がインドの農民から阿片を購買するやうな形式で、行はれる。……だが、この場合、貨幣は我々の既に知る購買要具の形で作用するに過ぎぬのである。……資本も亦、貨幣の形で前貸されることは言ふ迄もない。……だが、この見解は、單純なる流通の限界内に屬するものではなからず、『經濟學批判』第一九及び二〇頁）。

流通行程上の一定期間内に満期となる債務は、これを生ぜしめた販賣商品の價格總高を代表する。この價格總高の實現に必要な貨幣量の大小は先づ、支拂要具の通用速度の如何に懸るものであつて、二つの條件に依つて左右される。その一は債權者と債務者との關係が連鎖をなしてゐて、Bなる債務者から貨幣を受け取つたAが、これをCなる債權者に支拂ふといふ風になつてゐる事。その二は、相異つた支拂期日に幾許の時間が横はるかといふ事である。前後相續く諸支拂、又は後に及んで行はれる第一諸轉形の連鎖は、各轉形列の裏に攻究せる鏈れからは本質的に區別される。流通要具の通用は、單に販賣者と購買者との間の連絡を言ひ現すのみでなく、また、この連絡それ自身が貨幣通用と共に生じ、貨幣の中に存在してゐるのである。

然るに、支拂要具の運動なるものは、豫め完成されてゐる社會的の一關聯を言ひ現すものである。

諸種の販賣が同時に相並んで行はれるといふ事實は、鑄貨の量が通用の速度に依つて省かれ得る程度を制限するものである。が、他方に又それは、支拂要具の節約上に於ける新たな槓杆ともなるのである。諸種の支拂が同一の場所に集中する結果、その清算上特殊の設備方法が原生的に發達して来る。例へば中世に於けるリオン市のヴィルマン（振替支拂）の如き即ちそれである。Bに對するA、Cに對するB、Aに對するC等、等の債務請求權は、單にこれを相對照させるだけで、或程度までは正量（貸方）及び負量（借方）として相殺することが出来るので、債務殘高だけを支拂へばいいことになる。支拂の集中高が大なれば大なるほど、この殘高は相對的にますます小となり、隨つて流通する支拂要具の量もますます小となる。

支拂要具としての貨幣機能には、直接の一矛盾が含まれてゐる。各支拂が相殺される限り、貨幣は計算貨幣又は價值尺度として單なる觀念的機能を盡すに過ぎぬ。又、現實的の支拂を爲す限りに於いては、それは流通要具として、即ち單なる瞬間的媒介的社會的代謝機能形態として現れるものではなく、寧ろ、社會的労働の個人的體化として、交換價值の獨立した存在として、絶對的の商品として現れる。この矛盾は、金融恐慌（金融恐慌）として知られてゐる生産上並びに商業上の恐慌の際、前面に現れて来るのである（九十九）。斯かる恐慌は、各支拂の連鎖と、清算の人為的體系とが十分に發展した處にのみ生ずるものであつて、この機構が一般的に攪亂されるとき——それが如何なる原因に基くにもせよ——貨幣は何等の媒介に依らず突如として計算貨幣といふ單なる觀念的の形態から硬貨形態に轉換される。卑俗の商品を以つてしては、もはや貨幣の位置に代ること不可能となる。商品の使用價值は無價值となり、商品の價值はそれ自身の價值形態の面前に消滅してしまふ。ブルジョアは恐慌襲來の刹那まで、好景氣に陶醉した啓蒙的の自負心を以つて貨幣を單なる空幻に過ぎぬものとしてゐた。彼等は言つた。貨幣たるものは商品のみであると。然るに今や、貨幣のみが商品となるのである！といふ叫びが、世界市場の到る處に聽かされる。鹿が鮮かな水を喘ぎ求むる如く、彼れの靈は唯一の富なる貨幣を喘ぎ求めるのである（百）。恐慌の時、商品とその價值形態たる貨幣との對立は、進んで絶對的の矛盾となり、貨幣の現象形態などは何うでもいいことになつてしまふ。金で支拂はれるにしろ、銀行券その他の如き信用貨幣で支拂はれるにしろ、金融上の飢饉には些かの影響もないのである（百一）。

（九十九）茲にいふ金融恐慌とは、生産上並びに商業上に於ける一般の恐慌の特殊の段階を意味するものであつて、同じく金融恐慌と名づけられてゐる特殊の恐慌——獨自に出現し得て商工業の上に反應作用的に影響する所のもの——とは明かに區別すべきものである。この後者の恐慌の運動中心となるものは貨幣資本であつて、銀行や、取引所や、財政などを直接



の活動部面とするものである(第三版マルクス自註)。

(四)『信用制度から現金制度への斯かる突變は、實際上の恐慌に加ふるに學說上の恐慌を以つてするものであつて、流通當事者たちは、彼等自身の事情の測り知るべからざる秘密の前に戦慄するのである』(カール・マルクス『經濟學批判』ペルリ一八五九年刊、第一二六頁)。「貧者は無爲に暮してゐる。なぜならば富者は衣食を造り出すべき、従前と同一の土地及び人力を有してゐるとはいへ、貧者を雇ふべき何等の貨幣をも有しないからである。然るに一國に於ける眞の富は、この土地及び人力に存するものであつて、貨幣に存するものではないのである」(ジョン・ベラーズ著『産業大學設立案』ロンドン、一六九六年刊第三頁)。

(五)斯種の瞬間が『營業仲間』と稱する人々に依つて如何に利用されてゐるかは、次の叙述に依つても知ることが出来る。——『或時(一八三九年)ロンドンの食慾なる一老銀行家が、その私室で机の蓋を開け、一束の銀行券を取り出してこれを友人に見せながら、頗る上機嫌の體で言つた。これは六十萬磅の銀行券だが、私は金融を逼迫せしめるためこれを保留して置いたので、今日午後三時過ぎにこれをみな市中へ出すつもりである』(『爲學學說』一八四四年の銀行特許條例)ロンドン、一八六四年刊、第八一頁)。「一八六四年四月二十四日、半官紙『オブザーヴァー』は次の如く述べてゐる。——『銀行券の逼迫を目的として應用された手段につき、極めて奇怪な風説が傳はつてゐる。……まさかそんな如何はしい手段が應用されてゐるであらうとは思はれぬが、何しろ風説が餘りに弘く流布されてゐるので、茲に一言して置く必要を感じた次第である。』

ところで、與へられたる期間内に通用する貨幣總額を考へて見るに、それは——流通要具及び支拂要具の速度が一定してゐるとすれば——實現さるべき商品價格の總和に、満期となるべき各支拂の總和を加へた全額の中から、相殺される諸支拂と、更に同一の個貨が或時は流通要具として、或時は支拂要具として交々通用する度數とを減じたものに等しい。一例として農夫が二磅で穀物を販賣したとすれば、この二磅は流通要具として役立つ譯であつて、満期日の到來したとき、彼れはこの二磅を以つて機械業者から購買したリンネルの代價を支拂ふ。この場合、同一の二磅は支拂要具として作用することになる。ところが、機械業者がこの二磅を以つて、一冊のバイブルを現金買ひしたとすれば、それは新たに又、流通要具として作用する譯である、等、等。

されば價格や、貨幣通用の速度や、支拂上の節約などが與へられてゐるとしても、例へば一日といふ如き期間内に通用する貨幣量と、流通する商品量とは、もはや相一致しないものとなる。久しく流通から脱出して商品を代表するところの貨幣が今なほ通用すると同時に、將來に至らなければ貨幣等價の現れることなき商品が、現在すでに流通してゐるからである。他方に又、日々契約される支拂と、同じ日に満期となる支拂とは、到底通約し得ざる量となるのである(四)。

(四)一日の中に成立した販賣又は契約の額は、同じ日に流通すべき貨幣量の上には何等の影響をも及ぼさぬであらう。それは大抵の場合、後日に至つて流通すべき貨幣額について取り組まれた種々な爲替手形となつて現れるのである。……今日發行された手形、今日開始された信用は、總額からいつても、個々の金高からいつても、通用期限からいつても、明日又は明後日のそれと何等かの類似を有せねばならぬといふ譯はない。寧ろ今日發行された手形、今日開始された信用の中には、満期となつた際、過去の種々な日に生じた幾多の債務と相殺されるものが少なくない。十二ヶ月拂ひ、六ヶ月拂ひ、三ヶ月又は一ヶ月拂ひの諸手形が、一定の日に落ち合つて、當日満期となるべき債務額を大ならしめる場合が屢々ある。……『(『通貨問題批判』スコットランド人に與ふる書、イングランドの一銀行業者著)エデンペラ一八四五年刊、第二九及び三〇頁、隨所)。

信用貨幣なるものは、支拂要具としての貨幣機能に直接起因するものであつて、購買商品それ自身についての債務證書が、債務請求權移轉の目的を以つて再流通せしめられることになるのである。他方にまた、信用制度(五)が擴大するにつれて、支拂要具としての貨幣機能も擴大して来る。貨幣は支拂要具となるとき、商業上の大口取引の部面に適應した特殊の存在形態を與へられ、金貨や銀貨は主として小口取引の部面に押し遣られてしまふ(四)。

(五)現實的の貨幣が本來の商取引に入ること如何に少ないかの一例として、左にロンドン最大商館の一なるモリソン・デロン商會(六)の年收支計算書を擧げる。一八五六年に於ける同商會の取引は、幾百萬磅の多きに達してゐるが、茲ではそれを合計一百萬磅に縮算した。

入		出	
(單位磅)		(單位磅)	
日附後拂銀行及商業手形	五三三・五九六	日附後拂手形	三〇二・六七四
一覽拂銀行其他小切手	三五七・七一五	ロンドン諸銀行宛小切手	六六三・六七二
地方銀行券	九・六二七	イングランド銀行券	二二・七四三
イングランド銀行券	六八・五五四	金	九・四二七



金.....	二八〇八九	銀及銅.....	一四八四
銀及銅.....	一四八六	合計.....	一〇〇〇〇〇〇
郵便爲替.....	九三三		
合計.....	一〇〇〇〇〇〇		

『銀行條例特別調査委員会報告』一八五八年七月、第七一頁(8)。

商品生産の發展が一定の水準及び範圍に達すると、支拂要具としての貨幣機能は商品流通の部面を超える。支拂要具としての貨幣は契約上の一般的商品となり(百四)、諸種の賃子、租税その他のものは、現物給附から貨幣支拂に轉化される。

(百四)『商業の進路は斯く財貨と財貨との交換、又は財貨の交付と受領との關係から、販賣と支拂との關係に一轉したの

で、今や一切の取引は……純粹の貨幣取引となる』匿名者著『公債論』第三版、ロンドン一七二〇年刊、第八頁(8)。  
この轉化が如何に生産行程の全形態に依つて制約されてゐるかは、例へばローマ帝國が一切の租税を貨幣の形で徴收しようとして試みて兩度の失敗を招いた事實に徴しても明かである。ルキ十四世治下に於けるフランス農民の驚くべき窮乏については、ポアギユベールや元帥ヴォーバンや、その他の人々が、雄辯に指摘してゐるところであるが、この窮乏は單に苛斂誅求のみに起因せるものではなく、物納租税が金納租税に變へられたことにも起因してゐるのである(百五)。

(百五)『貨幣は萬物の死刑執行人となつた。』財政上の技術とは畢竟『この忌はしき沈澱物(貨幣)を得る目的を以つて、驚くべき多量の財貨や商品を蒸發せしめるところのレトルト』に外ならぬ。『貨幣は全人類に宣戰する』(ポアギユベール著『富貨幣及び租税の性質論』テール編ギョーマン全集、第一卷、財政經濟學者篇、パリ一八四三年刊、第四一三、四一七及び四一九頁)等。

他方に又、アジアに於いては、國家の徵收すべき租税は、物納地代の形態を主なる要素としてゐるのであるが、この地代形態は、自然事情の不易性を以つて反覆されるところの生産事情を基礎とするものであつて、それが又、反應作用的に、舊來の生産形態を保存することにもなるのである。この形態は、トルコ帝國が自己を保存する秘訣の一となつてゐる。日本の外國貿易は、ヨーロッパから強要されたものであるが、若しこの貿易が物納地代から金納地代への轉化を伴ふとすれば、日本の標本的農業はそれでおしまひである。日本農業の狹隘なる經濟的存在條件は、これがため解體することになるからである。如何なる國に於いても、一定の支拂期日が一般に確立されて來る。これらの支拂期日は、再生産上の他の循環を描いて問は

ないとすれば、一部分には季節の變化に伴ふ生産上の自然條件に基くものである。而して租税や賃子などの如き、商品流通の直接的生産物ではない諸種の支拂も亦、同一の自然條件に依つて制約される。社會の全面に分散されてゐるところの、一定の日に満期となるべきこれらの支拂に必要な貨幣量は、支拂要具の節約上に週期的ではあるが然し全く皮相的な攪亂を生ぜしめる(百六)。支拂要具の通用速度を支配する法則からして、源泉の如何を問はず一切の週期的支拂を通じて、支拂要具の必要量は支拂期間の長短に逆比例するといふ結論が生じて來る(七百)。

(百六)クレীগ氏は、一八二六年の英國議會調査委員会に述べて言ふ。——『一八二四年の聖靈降臨祭の月曜日、エヂンバラ市に於いては銀行等の需要激増し、十一時には一枚も我々の手許に残らなかつた。そこで融通を得るため種々なる銀行に順次問ひ合せたが、一枚も得られなかつた。斯くて多くの取引は、略式の銀行小切手のみを以つて處理されることになつた。然るに午後三時となるや、一切の銀行券が元の發行銀行に戻つて來た。要するに、これらの銀行券は手から手に轉々して行つたに過ぎぬのである』と。スコットランドに於ける銀行券の有効なる平均流通高は三百萬磅に及ばないが、而も定まつた支拂期日になると、總計約七百萬磅に上る各銀行所有の凡ゆる銀行券が流通せしめられる。斯かる際に、銀行券は唯一の特殊機能を盡すのであつて、これを盡して了へるや否や、夫々發行銀行に回流して行く。(ジョン・フライン著『通貨の調節』第二版、ロンドン一八四五年刊、第八六頁註(8))。尚、説明のため一言して置きたいことは、フライトンの當時、スコットランドに於いては、預金について小切手を發行することなく、兌換銀行券のみを發行してゐた。

(百七)『年々四千萬磅の取引をなすべき場合、六百萬磅の流通金貨だけで十分であるか何うか』といふ問に對し、ペターは例に依つて巧妙に答へてゐる。——『私はこれを肯定する。蓋し支出は四千萬磅であつたとしても、若し毎土曜日に工賃を受け取つては支拂ふ貧しき手工職人や賃銀労働者たちの間に行はれる如く、回轉が極めて短期(即ち毎週)であるとすれば、一百萬磅の五十二分の四十(8)を以つて右の目的に應じ得るであらう。然るに地代や租税に於ける如く回轉が年四期であるとすれば、一千萬磅を要することになる。そこで今、回轉期間が總じて一週乃至十三週(8)であるとすれば、一百萬磅の五十二分の四十に一千萬磅を加へた額の二分の一、即ち概算五百五十萬磅を以つて足ることになるであらう』(ウヰリアム・ペター著『アイルランドの政治的分析』ロンドン、一六九一年刊、第一三及び一四頁(8))。

支拂要具たる貨幣の發達に伴ひ、債務額支拂満期日の準備として貨幣を蓄積して置くことが必要になつて來る。獨立した致富形態としての退職貨幣は、ブルジョアの社會の發達につれて消滅するが、反對に、支拂要具基金としての退職貨幣は、ブル



チオアの社會の發達につれて益々増進するのである。

C 世界貨幣

貨幣は國內の流通部面から脱出したとき、其處に生じた價格標準や、鑄貨や、補助貨や、價值表章などの地方的形態を脱ぎ捨て、本來の貴金屬地金形態に復歸する。世界貿易に於いては、商品はその價值を普遍的に展開するのである。そこで商品の獨立した價值形態は、世界貨幣としての商品それ自身に對立することとなる。貨幣は世界市場に入つたとき初めて完全に、現物形態が同時に抽象的人間労働の直接社會的なる實現形態であるところの商品として作用するものであつて、貨幣の存在様式は茲にその概念と一致することになる。

國內の流通部面に於いては、單一の商品のみが價值尺度として、貨幣として役立ち得るに過ぎぬのであるが、世界市場に於いては、金銀二重の價值尺度が専ら行はれてゐる(百八)。

(百八) 國民銀行なるものは、自國內に於いて貨幣たる機能を盡す貴金屬のみを準備すべきであると規定する立法の不合理は茲に由來するのである。例へば、イングランド銀行が斯くして自ら『快よき障礙』を造り出したことは、人の知るところである。尙、金と銀との相對的價值に於ける變動の大なる歴史的時代については、前掲拙著第一三六頁以下を見よ。第二版補遺——サー・ロバート・ピールは一八八四年の銀行條例の中で、地金銀に基いて紙幣を發行し、而も銀準備が決して金準備の四分の一を超えないやうにすることをイングランド銀行に認可したのであるが、彼れは斯くすることに依つて難境を切り抜けようとしたのである。彼れはこの目的のために、ロンドン市場に於ける市場價格(金に依る)を以つて銀を評價しようとした。〔第四版註——金銀の相對的價值に於ける激動の時代がまたやつて來た。今から約二十五年前、銀に對する金の價值比例は 15:1 であつたが、今では約 30:1 となつてゐる。而して銀は金に比し尙引き續き低落しつつあるのである。これ、その根本に於いて兩金屬の生産方法に革命の行はれた結果である。従前、金は殆んど、含金岩の風化産物たる含金沖積層を洗滌することに依つてのみ得られたのである。然るに今や、この方法は最早十分でなくなり、含金石英層に加工するところの方法に依つて壓倒されることになつた。この新たな方法は古代人にも熟知されてゐた(チオドルス史書第三卷第十二篇、乃至第十四篇)とあるが、從來は副次的のみ行はれてゐたのである。他方に又、ロッキーマン山の西部に新たな巨大の銀層が発見され、且つそれがメキシコの銀坑と共に鐵道に依つて開發された。鐵道に依り近世的の機械や燃料が供給されるやうになつたので、これがためヨリ少額の費用を以つて、極めて大規模に銀を得ることが可能となつて來たのである。

る。然し金銀兩金屬が鑛石層中に存在してゐる様式の上には、非常なる差異がある。金は大抵純粹の形で発見されるが、その代り石英中に極めて少量づつ散在してゐるに過ぎぬ。そこで、探掘した含金鑛の全部を粉碎して、金を洗滌し、又は水銀を以つて抽出せねばならぬ譯である。斯くして一百万グラムの石英中に僅々一乃至三グラムの金を発見するに過ぎぬことは屢々見受けられるところであつて、三十乃至六十グラムを発見し得ることは滅多にない。銀は純粹の形で発見されることは稀であるが、その代り岩層から引き離すこと比較的容易なる特殊の鑛石中に発見されるものであつて、これらの鑛石は大抵四〇乃至九〇パーセントの銀を含んでゐるのである。又はそれ自身に於いては加工の甲斐ある銅や鉛などの鑛石中に、少量づつ含まれてゐることもある。これらの事實のみに依つても、銀の生産労働が減少して金の生産労働は寧ろ増大したこと、隨つて銀の價值低落は全く當然の結果であることを知り得る。而してこの價值低落は、今にして何等かの人為的手段に依り銀の價格を昂騰せしめない限り、更らに大なる價格低落として、言ひ現されることになるであらう。だが、アメリカの銀産源は、尙未だ極めて小部分しか人力の届くところとなつて居らぬ。隨つて銀の價值は尙久しく、低落状態にあるものと豫期される。この傾向は更らに、有用品や養澤品に使用すべき銀の需要が相對的に減少し、金張り品やアルミニウムなどを以つて銀に代用することが著しくなるに従つて、助長されるに違ひない。この見地に從つて、國際的強制通用に依つて銀が舊來 31:15:1 なる價格比例に引き上げられるであらうと主張する複本位論者のネトービズムを判斷せよ。寧ろ銀は世界市場に於いても、益々その貨幣性を失墜することになるであらうと考へられる。——F.E.L.]

世界貨幣は一般的なる支拂要具並びに購買要具たる機能を盡し、且つ一般的意義に於ける富(財)の絶對的に社會的なる體現として作用するものであるが、就中、國際的貿易差額の清算上に於ける支拂要具としての機能は最も重要である。そこで貿易の差額(百九)といふ、マーカンチリズムの合言葉が生じて來た譯である。相異つた國民間に於ける社會的代謝機能の在來の均衡が突如として攪亂されたとき、金銀は本質上國際的の購買要具として役立つことになる。最後に又、購買も支拂も問題となることなく、寧ろ富を一國から他國に移轉せしめることが問題となり、而して商品形態を以つてするこの移轉が、商品市場の景況又は實現せんとする目的それ自身に依つて不可能とされる場合に、金銀は富の絶對的に社會的なる體現として作用するのである(百十)。

(百九) マーカンチリズムは、金銀を以つてする貿易差額の清算をば、世界貿易の目的として取扱つてゐるのであるが、これに反對する論者たちも亦、世界貨幣の機能を全く見誤つてゐる。流通要具の量を規制するところの法則に對する彼等の誤



つた見解が、如何に貴金屬の國際的運動に對する彼等の誤つた見解の上に反射されてゐるかは、私がリカルドについて詳しく論證したところである(前掲拙著第一五〇頁以下)。「輸入超過なるものは、流通要具過充の結果に過ぎぬ。…硬貨の輸出は、その價值低落に因るものである。それは輸入超過の原因であつて、結果ではない」といふ、リカルドの誤つた定説は、ベーボンの所論の中にも見出される。即ち「總じて貿易差額の生じたる場合、それは貨幣が國外に輸出される原因となるものでない。斯かる輸出は寧ろ、各國に於ける貴金屬價値の差異に由因するものである」(ベーボン前掲、第五九及び六〇頁)。「マカロックはその著『經濟學文獻、ロンドン一八四五年刊』(88)の中で、ベーボンのこの先見を賞揚してゐるが、然しベーボンの所説が『通貨主義』(89)の不合理な前提を容れてゐる素朴な形式については、それを一言することすら慎重に避けてゐる。マカロックのこの著述が批判を缺き、甚しきは誠意さへ缺いてゐることは、貨幣學説の歴史を取り扱つた諸節に於いて絶頂に達してゐる。彼れはこれらの章の中で、たしかに『押しも押されぬ銀行家』だとして推獎してゐるオヴアストン卿(元は銀行家ロイド)の追従者として尻尾を振つてゐるからである。

(百十)例へば、補助金や、戰爭の執行又は銀行に於ける現金支拂の再開を目的としてなされる貨幣貸附などに在つては、價值は正に貨幣の形で要求され得るのである。

如何なる國も、その國內流通に充用すべき準備金と同様に、また世界市場の流通に充用すべき準備金を必要とする。そこで退藏貨幣の機能は、一部分には國內に於ける流通要具及び支拂要具としての貨幣機能に因り、一部分にはまた世界貨幣としての機能に因るものである(百十a)。而してこの後者の役目には、つねに現實的の貨幣商品たる現物體としての金銀を要する。ジュームズ・スチュアートが金銀を地方的にのみ通用するところの代用物から區別して、明瞭に「世界の貨幣」(90)として特徴づけた所以は茲にある。

(百十a) 第二版註——「退藏貨幣の施設は、一般の流通準備金からこれぞといふ支拂を受けずして、國際債務の決算上必要なる一切の用務を盡し得るものであるが、この事實については以下の事例以上に適切な實證を望むことは出来ぬであらう。——即ちフランスは嘗て敵軍の荒廢的侵入によつて受けた創痍から漸く恢復しかけた時、二十七月以内に聯合國に對して約二千萬の強制賠償金を——而もその顯著なる部分は正金で——支拂つたに拘らず、これがため國內の通貨は左して甚しく收縮又は攪亂を蒙ることなく、爲替相場の上にも何等警戒すべき變動を生ぜしめなかつた。而もこれら總べてのことは、極めて容易に行はれたのである」(フラートン前掲、第一九一頁)。「第四版註——更にヨリ適切な實例は、同じフラン

スが一八七一年から七三年に至る三十ヶ月の間に、如上の額に比して十倍以上の戰爭賠償金を——矢張りその著しき部分は金屬貨幣で——容易に支拂ひ得たといふ事實である。F. E.」

金銀は二重に流通する。即ち一方から言へば、それは産源を發して全世界市場に流れゆき、彼處に於いて大小種々なる程度を以つて各國の流通面に吸收され、そこで各國内の流通溝に流れ込み、磨滅した金銀貨を補充したり奢侈品の材料に使用されたり、退藏貨幣に固定されたりするのである(百十一)。而してこの第一の運動は、金銀以外の商品に實現された他國民の勞働と、金屬に實現された金銀産出國の勞働との間に於ける直接の交換を通して行はれる。第二に又、金銀は各國の流通部面間を絶えず往復する。而してこの運動は、爲替相場の間斷なき變動に伴ふものである(百十二)。

(百十一)「貨幣は絶えず商品に依つて索引されるものであつて、…これに依り、夫々の必要に應じて各國間に配分される」(ル・トロメ前掲、第九一六頁)。「不斷に金銀を供給するところの鑛山は、各國にこの必要量を與へるに十分の供給をなしてゐるのである」(ヴァンダーリント前掲、第四〇頁)。

(百十二)「爲替相場は毎週高低してゐる。或時期に於いては一國にとつて順に昂騰し、同じ年の他の時期に於いては、それだけ逆に昂騰する」(ベーボン著『新貨幣論』第三九頁)。(91)。

發達したるブルジョアの生産の下に立つ諸國に於いては、大嵩をなして銀行貯水池に流入し來たる退藏貨幣はその特殊の機能に必要な最少量に制限される(百十三)。若干の場合を除き、退藏貨幣の貯水池がその平均水準を越えて著しく過充することは、これ取りも直さず、商品流通が停滞し、商品轉形の流動が中絶されたことを示すものである(百十四)。

(百十三)「これら諸種の機能は、更に銀行券に對する兌換準備金たる機能が追加されるや否や、危険な衝突に陥り得るものである」。

(百十四)「國內交易のため無條件的に必要とする程度を超えて蓄積された貨幣は、死産となるものであつて…それが輸出されて再輸入されるといふ一事を除き、その所有國に何等の利益を齎すものでない」(ジョン・ペラーズ前掲、第一二頁)。「餘りに多くの鑄貨がある場合には、何うすればいいか。その中の最も重要なものを鑄潰ぶして、金製又は銀製の食器や什器にするか、然らずんばその需要乃至願望ある處へ商品として輸出するか、或は利子の高い處へ利子附で貸出すか、することが出来る」(ウキリアム・ペター著『貨幣問答』第三九頁)。「貨幣は國家といふ身體の脂肪に過ぎぬ。それが多過ぎる爲に國家の運動を障げることは、それが少な過ぎる爲に國家の病氣を惹き起すことと同様に、しばしば見られるところである」。



：脂肪が筋内の運動を滑かにし、食物なき場合身體に營養を供給し、且つ凹凸を平坦にし、身體を美しくすると同様に、貨幣は國家の動作を活潑にし、國內に食物拂底した場合には外國からそれを輸入し來たり、且つ諸種の債務を決済し、……國家全體、就中」と、著者は反語的に結論して、「貨幣を豊かに所有してゐる人々を美しくする」『ウァリアム・ベター著「アイランドの政治的分析」第一四頁（原註）。

## 第二篇 貨幣の資本化

### 第四章 貨幣の資本化

#### (一) 資本の一般的公式

商品流通は資本の起點たるものであつて、商品生産と、發達したる商品流通即ち商業とは、資本の依つて成立する歴史的前提を成すものである。世界商業及び世界市場は、十六世紀に於いて資本の近世生活史の端を開いてゐる。

商品流通の素材的内容を、種々なる使用價值の交換を問題外に置き、ただこの行程から生ずる經濟上の諸形態のみを考へるとき、その最終の産物として貨幣が見出される。商品流通のこの最終の産物こそ、資本の最初の現象形態たるものである。

歴史的には、資本は何處に於いても先づ貨幣の形で、貨幣財産、商業資本、及び高利貸附資本として、土地所有に對立して來る(一)。然し、貨幣を資本の最初の現象形態として認識する爲には、敢て資本の成立史を回顧するに及ばない。同一の歴史は、現に日々我々の眼前に演ぜられてゐる。今日でも尙、新たな各資本は先づ貨幣として、一定の行程に依り資本に轉化さるべき貨幣として、市場——商品市場、労働市場又は金融市場——なる舞臺に登つて來る。

(一) 人格上の隷従關係及び支配關係に基礎を置く土地所有の権力と、貨幣の非人格的権力との對立は、フランスに於ける二つの諺の中に明瞭に言ひ現されてゐる。即ち『領主なき土地はなく』、『金錢に主人なし』といふのがそれである。

貨幣としての貨幣と、資本としての貨幣とは、最初はただその異つた流通形態に依つてのみ區別される。商品流通の直接の形態は、M—C—M 即ち商品から貨幣への轉化、及び貨幣から商品への再轉化である。換言すれば、買ふ爲に賣ることである。然しこの形態と相並んで、更らにこれとは格別に異つた第二の形態が見出される。それはC—M—C 即ち貨幣から商品への轉化、及び商品から貨幣への再轉化である。換言すれば、賣る爲に買ふことである。運動の際、この後者の流通を畫く貨幣は、資本に轉化し、資本となるのであつて、その性質上すでに資本たるものである。

C—M—C なる流通を、更らに立ち入つて觀察しよう。この流通は單純なる商品流通と同様に、二つの相對立した段階を通過する。第一の段階なるC—M 即ち購買に於いては、貨幣は商品に轉化され、第二の段階なるM—C 即ち販賣に於いては、商



品は貨幣に再轉化される。ところで、この二つの段階を統合するものは、貨幣を以つて商品と交換し、同一の商品を以つて更らに貨幣と交換するところの總運動である。即ち商品を買う爲に買ふところの總運動、又は——賣買の形式的區別を無視して考へるならば——貨幣で商品を買ひ、商品で貨幣を買ふところの總運動が、右の兩段階を統合するのである(二)。而してこの全行程が消えて行くところの結果は、即ち貨幣と貨幣との交換であり(一)である。今、一百磅で棉花二千斤を買ひ、この二千斤の棉花を更らに一百十磅に賣るとすれば、結局に於いて一百磅を一百十磅と交換したことになる。即ち、貨幣を以つて貨幣と交換したことになるのである。

(二)『貨幣を以つて商品を買ひ、商品を以つて貨幣を買ふ』(メルシェー・ド・ラ・リウキエール著『政治的社會の自然的及び本質的秩序』第五四三頁)。

さて(一)なる流通行程は、若しこの迂路に依り同一の貨幣價值を以つて同一の貨幣價值と、即ち一百磅を以つて一百磅と交換しようとするのだとすれば、全く不合理な無内容的なものであることは、固より明かである。寧ろ一百磅を流通の危険に晒らさないで、固く握りしめてゐる貨幣退蔵者のやり方の方が、比較にならぬほど單純にして且つ確實だといふことなるであらう。

他方に又、商人が一百磅で購買した棉花を一百十磅で再販賣するにしろ、又は一百磅なり甚しきは五十磅なりで賣り飛ばしてはねばならぬにしろ、いづれにしても彼れの貨幣は、單純なる商品流通のもとに於ける場合は、例へば、穀物を販賣しその賣上げ貨幣を以つて衣服を買ふ農夫の掌中にある場合とは、全く異つた種類の、獨特にして斬新なる一運動を畫くことになる。そこで先づ、A—D—E及びD—E—Dなる兩循環の形態差異の特徴を考へて見なければならぬ。斯くすることに依つて又同時に、この形態差異の背後に隠れてゐる實質上の差異を知ることが出来るであらう。

先づ兩形態に共通するところのものを見ることにしよう。

これらの兩循環は、いづれも同一なる二つの相對立した段階A—D(販賣)とD—E(購買)とに分かたれる。而してこれらの兩段階のいづれに於いても、同一なる二つの物的要素、即ち商品と貨幣とが對立して居り、また同一の經濟的扮装をした二人の登場人物たる購買者と販賣者とが對立してゐる。いづれの循環も同一なる對立段階を統合せるものであつて、この統合は雙方とも三人の契約當事者に依つて媒介される。その一人は單に販賣するのみ、他の一人は單に購買するのみであつて、他の一人は購買と販賣とを交々行ふところの人である。

然しA—D—A及びD—E—Dなる兩循環は、同一なる對立流通段階の相反した順序に依つて、最初から區別されてゐる。單純なる商品流通は販賣に始まつて購買に終り、資本としての貨幣の流通は購買に始まつて販賣に終る。前者に於いては商品後者に於いては貨幣が運動の起點及び終點となり、また前者に於いては貨幣、後者に於いては反對に商品が總運動を媒介するのである。

A—D—Aなる流通に於いては、貨幣は結局、使用價值として役立つところの商品に轉化される。即ち貨幣は終局的に支出されることになるのである。然るに反對の循環形態なるD—E—Dに於いては、購買者は販賣者として貨幣を收納せんが爲に支出するのであつて、彼れは商品を購買する際に貨幣を流通内に投げ入れるが、それはこの商品を販賣することに依つて貨幣を更らに流通から引き上げんが爲にするのである。彼れは貨幣を再び自分のものにしよとする狡猾な考を以つてのみ手放すのであつて、要するに貨幣は前貨<sup>3)</sup>とされるに過ぎないのである(III)。

(III)『販賣の目的を以つて物を購買する時、それに使用される金額は前貨貨幣。と呼ばれ、販賣を目的とせずして物を購買する時、それが必要となる貨幣は支出(IV)とされるものと言ひ得る』(ジェームズ・スチュアート全集。息ジェネラル・サー・ジェームズ・スチュアート編、ロンドン、一八〇一年刊、第一卷第二七四頁)。

A—D—Eなる形態に於いては、同一の個貨が二度位置を換へる。販賣者はそれを購買者から受け取つて、更らに他の販賣者に拂ひ渡すのである。商品の代價としての貨幣の領收を以つて始まる全行程は、商品の代價としての貨幣の拂渡しを以つて終る。

然るにD—E—Dなる循環形態に於いては反對である。この場合には同一の個貨でなく、同一の商品が二度位置を換へる。即ち購買者は販賣者の手から商品を受け取つて、他の購買者の手へ引き渡すのである。單純なる商品流通に於いては、同一個貨の兩度の位置轉換は、これを一方の人の手から他方の人の手へ終局的に移轉せしめるものであるが、それと同様に、この場合、同一商品の兩度の位置轉換は、貨幣をその最初の起點へ回流せしめることになる。

起點への貨幣の回流は、商品を購入の當時よりも價高く販賣するか否かといふことに懸るものではない。この事情はただ、回流貨幣額の大小に影響を及ぼすのみである。回流といふ現象それ自身は、購買した商品を更らに販賣するや否や、換言すればD—E—Dなる循環が完全に畫かれるや否や、行はれるのであつて、茲に、貨幣が資本として經驗する流通と單なる貨幣として經驗する流通との間の、感性的に知覚し得べき區別が存してゐるのである。



W—D—Wなる循環は、一商品の販賣によつて得た貨幣が、更らに他商品の購買に依つて失はれるとき完成するものである。而して更らに貨幣がその起點に回流するとすれば、それはただ同一なる全行程の更新又は反覆に依つてのみ行はれることである。例へば私が一クォーターの穀物を三磅に賣つて得た貨幣を以つて、衣服を買ふとすれば、この三磅なる貨幣は終局的に私の手から支出されたことになる。私はもはや、それと何等關係するところがない。それは今や、衣服商の所有に屬してゐるのである。

ところで、私が又新たに一クォーターの穀物を販賣するとすれば、貨幣は私の手に回流して来るけれども、それは最初の取引の結果として回流するのではなく、寧ろ同一の取引を反覆した結果に過ぎぬのである。私がこの第二の取引を終了して、新たに商品を購入するとき、この貨幣は再び私の手から遠ざかつてゆく。さればW—D—Wなる流通に於ける貨幣の支出は、貨幣の回流とは何等關係するところなきものである。反對にD—M—Dに於ける貨幣の回流は、貨幣が如何にして支出されるかといふことに依つて制約される。この回流なくば、運動は失敗に終るか、又は行程は中断して未だ完成されぬものとなつてしまふ。なぜならば、この場合には、第二段階たる、購買を補充し完了せしめるところの販賣が缺如することになるからである。W—D—Wなる循環は、一商品の極から出發し、而して流通を脱出して消費に歸するところの、他の一商品を以つて終了する。さればこの循環の最終目的たるものは、欲望の充足たる消費であり、一口に言へば使用價值である。反對に、D—M—Dなる循環は、貨幣の極から出發して結局また同一の極に復歸する。されば、この循環運動の起點動機たり決定目的たるものは、即ち交換價值それ自身である。

單純なる商品流通に於ける兩極は、同一の經濟的形態を有つてゐる。即ちいづれも商品である。且ついづれも同一の價值量を持つる商品である。然し、これらの商品は、質の相異つた使用價值、例へば穀物と衣服とである。要するに、生産物の交換即ち社會的勞働を表現してゐる相異つた素材の交換こそ、この場合に於ける運動の内容を成すものである。

D—M—Dなる流通に於いては、さうでない。この流通は一見、同義反覆的なるが故に無内容であるかの觀がある。兩極とも同一の經濟的形態を有してゐる。即ち、いづれも貨幣であつて、質的に相異つた使用價值ではない。蓋し貨幣なるものは正に商品の特殊の使用價值が消え去つた商品變容を意味するからである。

先づ一磅を以つて棉花と交換し、然る後同一の棉花を以つて一磅と交換することは、これ取りも直さず迂回的に貨幣を以つて貨幣と交換し、同一の物を以つて同一の物と交換することに外ならず、寔に不合理な、徒爾に屬する操作である様に見える(四)。總じて貨幣類なるものは、その大小に依つての他の貨幣類から區別され得るのである。さればD—M—Dなる行程の内容は、兩極の質的差異に因るものではなく(兩極はいづれも貨幣であるから)寧ろ量的差異にのみ因るものである。最初に投入されたよりも多額の貨幣が、最後に流通の内部から引出されるのである。一磅で購買した棉花は、例へば100+10磅即ち一十磅で更らに販賣される。そこで、この行程の完全な形態はD—M—Dとなる。茲にDを以つて示したものはG+Dに等しく、最初前貸した貨幣量に一の附け加へをしたものを意味する。而してこの附け加へ、即ち原價值以上に出づる餘分は、私が餘剩價值と呼ぶところのものである。要するに、最初前貸した價值は、流通に於いてそれ自身を保存するのみでなく、更らにその大きさを變更し、一の餘剩價值を附け加へるものであつて、價值増殖を遂げることになるのである。而してこの運動こそ、最初前貸した價值を資本に轉化するところのものである。

(四)『貨幣を以つて貨幣と交換する者はない』とは、メルシェー・ド・ラ・リヴキエールがマーカントリストに向つて叫んだところである(前掲第四六八頁)。「商業」及び「投機」を取扱ふことを公然の目的とした或著述の中に斯う書いてある。——『凡そ如何なる商業も、種類の相異つた物を交換するといふことに存してある。而して利益(商人の?)なるものは正に、この種類の差異といふ點から生ずるものである。一斤のパンと一斤のパンとを交換したところで……何等の利益も得られないであらう。随つて商業なるものは、貨幣對貨幣の交換に外ならざる賭博とは反對の位置に立つものである。(トマス・コルベット著『個人の富の原因及び態様に關する研究。一名商業及び投機の原理の説明』ロンドン、一八四一年刊第五頁)』。コルベットはD—D(即ち貨幣を以つて貨幣と交換すること)が、單に商業資本のみとはいはず、凡そ如何なる資本にも共通の特徵的流通形態であることを見ないとはいへ、少なくともこの形態が、賭博と商業の一種なる投機とに共通したものであることを承認してゐる。ところが、其處へマカロックがやつて来て、販賣の爲の購買は投機であること、隨つて投機と商業との區別は消滅に歸することを見出して言ふ。——『或個人が再販賣を目的として生産物を購買する一切の取引は、事實に於いて投機である』と。(マカロック著『商業實用辭典』ロンドン、一八四七年刊、第一〇五八頁)』。阿姆斯特ダム取引所のビンダー(抒情詩人)ともいふべきピントは、更らに一層素朴に斯う述べてゐる。——『商業は賭博であつて(この文句はロアクから藉りたものである)、貧困者を相手にしては利のないものである。久しきに亘つて一切の對手から利を得る爲には、自發的に利潤の大部分を返還して更らに賭博を開始しなくてはならぬ』(ピント著『流通及び信用論』阿姆斯特ダム、一七七一一年刊、第二三二頁)』。勿論、W—D—Wの兩極なる商品と商品、例へば穀物と衣服とが、互ひに量を異にする價值であるといふ場合も生じ得る。



農夫は穀物を價值以上に販賣し、又は衣服を價值以下に購買し得るものである。彼れは又、衣服商に依つて欺瞞されることもあり得る。然し斯様な價值差異は、この流通形態それ自身の立場から見れば、純粹に偶然的なものである。この流通形態は、その兩極なる例へば穀物と衣服とが相互に等價であるとしても、 $G-W$ なる行程の如く全然意味を失つてしまふものではない。兩極の價值が等しいといふことは、寧ろこの流通形態に於ける順當なる進行の條件となるのである。

蓋し購買を目的とする販賣の反覆乃至更新も、更らにこの行程それ自身も、その外部に在るところの終局目的たる消費の中に、一定欲望の充足の中に、尺度と目標とを見出すものである。然るに販賣を目的とする購買に在つては、發端も終末も、共に同一物たる貨幣であり、交換價值であつて、この點から見ても既に販賣の爲の購買なる運動は無限のものとなるのである。勿論、 $G$ は $G+AG$ となり、100磅は100+10磅となることは事實であるが、然し質の方面のみから考へると、100磅は100磅と同一物なる貨幣である。又、量の方面から觀察すれば、100磅も100磅も、共に限定された一の價值高である。この100磅が若し貨幣として支出されるとすれば、それはもはやその役目を演じなくなり、資本たることを止めるやうになるであらう。それは流通の内部から引き上げられるとき、退蔵貨幣に化石してしまひ、最終審判の日に至るまでその儘保存されたところで、銀一文も増殖するものではない。

そこで苟くも價值増殖が問題となる限り、100磅についても100磅についても同一の増殖慾が存在することになる。なぜならば、いづれも交換價值の限定された表章であり、いづれも分量の増大を通して素面の富に近づかうとする同一の任務を有してゐるからである。最初に前貸された100磅なる價值は、流通の内部に於いてそれに付け加へられた100磅なる餘剩價值から瞬間的に區別されてゐることは事實である。然しこの區別は忽ち消え失せてしまふ。行程の終了したとき、一方には100磅なる原價值が生じ、他方には100磅なる餘剩價值が生ずるといふ譯ではない。生じて來るものは、100磅といふ一の價值であつて、この價值は最初の100磅と全く同様なる、價值増殖行程を開始するに適應した形態を以つて存在してゐる。循環運動の終末に達したとき、貨幣は再びその發端の形を採つて現れて來る(五)。

(五)『資本は…原資本と利潤(資本の増殖分)とに區分される。…尤も實地の上では、この利潤は忽ち資本に組み込まれ、それと相合して運用されるのである』エンゲルス著『國民經濟批判綱要』アノルド・ルーゲ及びカール・マルクス發行『獨佛年報』所載、パリ、一八四四年刊、第九九頁。

斯くして、販賣の爲の購買が行はれる各個の循環の終末は、おのづから新たな一循環の發端となる。單純なる商品流通、

即ち購買を目的とする販賣は、流通の外部に在る一の終局目的を——即ち使用價值の占有、換言すれば欲望の充足を遂行すべき手段として役立つのであるが、これに反して、資本としての貨幣の流通は、それ自身が目的となるのである。蓋し價值増殖するものは、この絶えず更新される運動の内部にのみ存するものであつて、要するに資本の運動は際限なきものとなるのである(六)。

(六)アリストテレスはエコノミク(家計術)を以つて、クレマチスチク(貨殖學)に對立させてゐる。彼れはエコノミクから論を起してゐる。エコノミクなるものは、これを生計術として見る限り、生活上に必要にして且つ家庭又は國家に有用なる財貨の獲得に限られてゐる。『眞の富(オ、アレヂニス・ブルトス)は、斯くの如き諸種の使用價值から成るものである。蓋し善き生活をなすに十分なる斯種の所有物の分量は、無制限ではないからである。ところが生計術には、いま一つの種類がある。それは主として、また當然に、クレマチスチクと名づけられるべきものであつて、これに依ると、富及び所有物には何等の制限も存しないやうに見える。商業(エ、カピリケ)は字義通りにいへば小賣商業といふことであつて、アリストテレスがこの言葉を採用したのは、商業に於いては使用價值が主たる地位を占めてゐるからである)は本來、クレマチスチクに屬するものではない。なぜならば、この商業上の交換は、彼等自身(購買者及び販賣者)に必要な物にのみ限られてゐるからである。『彼れは更らに説明して言ふ。——隨つて、商業の本來の形態は物々交換であつた。然し、それが擴大されるにつれて、必然的に貨幣が生じて來た。貨幣の發明と共に、物々交換は必然的にカピリケ即ち商業に展成されなければならなかつた。斯くしてこの商業は、その本來の傾向に反對してクレマチスチク即ち貨殖の術に成化することとなつたのである。』ところで、クレマチスチクは、次の點でエコノミクから區別される。——『クレマチスチクから見れば、流通が富の源泉である。而してクレマチスチクなるものは、貨幣を中心として回轉してゐるやうに見える。蓋し貨幣は、斯種の交換の發端及び終末となるからである。隨つてクレマチスチクの追求する如き富もまた無制限のものである。目的への手段のみを追求するところの技術は、目的そのものに依つて限界を附せられるから無制限のものではないが、標的を手段として追求することなく寧ろ終局目的として追求する一切の技術は、絶えずその標的に近づかんとするものであるから、努力に制限がないこととなる。同様に、このクレマチスチクにあつても、その標的には何等の制限がなく、絶對の致富といふことが標的となつてゐるのである。限界を有するものは、クレマチスチクではなくエコノミクである。後者は貨幣それ自身とは異つたものを目的とし、前者は貨幣の増殖を目的としてゐる。…貨幣を無限に保存し増殖すること



とを以つてエコノミークの終局標的なりと考へるに至つた人々は、互ひに折り重なつたこれらの兩形態を混淆してゐるのである(『アリストテレス著『共和論』ベッカー版、第一篇、第八、九章及び隨所)。

この運動の意識的負擔者として見るとき、貨幣所有者は資本家となるのである。彼れの人格、或は寧ろ彼れのポケットこそ貨幣の出發點たり復歸點たるものであつて、かの流通の客觀的内容たる價値の増殖は、即ち彼れの主觀的目的となるのである。而して抽象的の富をますます多く占有せんとすることが彼れの活動の唯一の起點動機たる限りに於いてのみ、彼れは資本家として、即ち人格化され意志並びに意識を附與せられたる資本家として機能することになるのであるから、使用價値なるものは決して資本家の直接の目的として取扱はるべきではない(七)。同様に個々の利得も、斯く取扱はるべきでなく、單に利得行爲の不休の運動のみが斯く取扱はるべきである(八)。斯かる絶對的の致富衝動、價値に對するこの熱情的な追求(九)は、資本家にも貨幣退藏者にも共通するところのものであつて、ただ貨幣退藏者は狂氣の資本家に過ぎないが、資本家は正氣の貨幣退藏者といふ點が違ふだけである。貨幣退藏者は貨幣を流通から救ひ出さうとすることに依つて、價値の不休なる増殖を(十)得ようとするのであるが、彼れよりも賢明なる資本家は、絶えず新たに貨幣を流通に委ねることに依つて、同一の目的を達成するのである(十)。

(七)『商品(其では使用價値の意味)は産業資本家の終局目的ではない。…彼れの終局目的となるものは貨幣である』(トマ・ス・チアーマーズ著『經濟學』について』第二版、ロンドン一八三二年刊、第一六六頁)。

(八)『商人は既得の利益を無視する譯ではないけれども、彼れの著眼は常に將來に向けられてゐる』(アントニオ・チェノヴェジ著『市民經濟教課』一七六五年刊、クストチ編、イタリー經濟名著集、近世篇、第八卷第一三九頁)。

(九)『利得に對する消し難き熱情、呪ふべき黄金慾こそ、常に資本家の意志を決定するところのものである』(マカロック著『經濟原論』ロンドン一八三〇年刊、第一七七頁)。  
マカロック及びその一味の論者は、斯かる見解を抱いてゐたといへば、例へば過剰生産の攻究に於ける如き學說上の窮地に立つた場合には、同じ資本家をば、ただ使用價値のみを念頭に置いて、靴、帽子、玉子、キ、ラコ、その他極めて有りふれた種類の使用價値の爲に眞の吸血鬼的渴望を展開するところの善良な市民に轉化せしめることを辭しなかつたのである。

(十)『ソザイン』(Savain)は貨幣退藏に該當したギリシア語獨特の言ひ現しである。同様に、英語の『ソー・セーヴ』(to save)も、『救ふ』及び『貯える』の兩意義を有してゐる。

(十一)『物の進行には存在しないところの無限性が、物の循環には存在してゐるのである』(ガリアニ)。

商品の價値が單純なる流通のもとに採るところの獨立した形態である貨幣形態は、單に商品交換を媒介するに過ぎず、運動か最終の結果に到達したと消滅してしまふのである。然るにこの『モノ』なる流通に於いては、商品及び貨幣の各は、價値として自身の異つた存在様式として、即ち貨幣は價値の一般的存在様式として、商品はその特殊の、謂はば假裝した存在様式として作用するに過ぎぬ(十一)。價値は絶えず一の形態から他の形態に推移して、而も、この運動のために失はれることがない。斯くして價値は、それ自身の運動を有する一の主體に轉化されるのである。自己増殖を遂げつつある價値が、その生涯の循環中に交々採る特殊の現象諸形態を確かと掴むとき、資本は貨幣であり、資本は商品である(十二)といふ命題が得られる。然しこれについて、貨幣なる形態と商品なる形態との間斷なき變化のもとに價値の大きさを變更せしめ、原價値としてのそれ自身から餘剩價値としてのそれ自身を分出せしめる行程、換言すれば價値それ自身を増殖せしめる行程の主體となるものは、實際のところ價値である。蓋し價値が餘剩價値を附け加へる運動は、價値それ自身の運動であつて、價値の増殖なるものは自己増殖を意味することになるからである。價値は價値であるが故に、價値を附け加へるといふ支妙な性質を得たのである。それは生きた子供を生ぜしめる。或は少なくとも、黄金の玉子を産むのである。

(十二)『資本を形成するものは素材ではなく、この素材の價値である』(ジャン・バチスト・セー著『經濟學』パリ、一八一七年刊、第一卷第四二八頁)。

(十三)『生産上の目的に使用される通貨(カーレンシー)は即ち資本である』(マクラウド著『銀行業の理論及び實際』ロンドン、一八五五年刊、第一卷第一章)。

『資本は商品である』(シェームズ・ミル著『經濟要論』ロンドン、一八二一年刊、第七四頁)。  
貨幣形態並びに商品形態をば或時は採り或時は捨てて、而もこの變化の間に自己を保存し擴大する斯くの如き行程の能動的な主體として見るとき、價値は先づ自己同一性を確認せしむる獨立した一形態を要するものである。而してこの形態は貨幣を通してのみ得られる。さればこそ、貨幣は凡ゆる價値増殖行程の起點及び終點となるのである。價値は最初一百磅であつたが今や一百十磅であるといふ風に増殖して行く。然し貨幣それ自身は、この場合價値の一形態として通用するに過ぎぬ。價値は二種の形態を有してゐるからである。貨幣は商品形態を採ることなくして資本となるものではない。さればこの場合、貨幣は貨幣退藏に於ける如く商品に對立して現はれ來たるものではないのである。一切の商品は、それが如何に見すばらしく見え、又は如何に悪臭を放つものであつても、信仰と眞理との點に於いては貨幣であり、内的に剝離を受けたユダヤ人であり、



加ふるに、貨幣からヨリ多くの貨幣を造り出す奇蹟的手段であることは、資本家の知るところである。單純なる流通のもとに於いては、商品の價值は使用價值に對立して高々貨幣なる獨立した形態を受けるに過ぎぬのであるが、今やそれは突如として、商品並びに貨幣を單なる形態とするところの、進行しつつある實體として、自己運動的の實體として表現されることになる。

而も、そのみでなく、價值は今や商品關係を表現するものではなく、謂はば自分自身に對して私的關係に入るのである。價值は恰度、父なる神が子なる神としての自分自身から區別される如く、原價值たる資格に於いては餘剩價值としての自分自身から區別されるのであつて、原價值も餘剩價值も、共に年齢を等しくするものであり、事實に於いて一人格を成してゐる。蓋し、十磅なる餘剩價值に依つてのみ、前貸された一百磅は資本となるのであつて、それが資本となるや否や、即ち子が生れ、子に依つて又、父が生れるや否や、雙方の區別は消え去つて二者一となり、一百十磅となるのである。

斯くして價值は、進行しつつある價值、進行しつつある貨幣となり、また斯かるものとして資本となる。それは流通から來て、更らに流通に入り、流通の内部で自己を保存し、増大し、ヨリ大なるものとなつて、流通から復歸し、斯くして絶えず新たに同一の循環を開始する(十三)。貨幣を生む貨幣を示すG—W—G、こそ、資本の最初の通譯者なるマーカンチリストに依つて與へられた資本の定義である。

(十三)『資本』…即ち自己を倍加するところの永久的價值(シスモンチ著『經濟新原論』第一卷、第九〇頁)。

賣る爲に買ふこと、即ちヨリ完全に言へば、更らに價高く賣る爲に買ふことを示すG—W—G、は、資本の一種なる商業資本(註)にのみ特有の形態であるやうに見えることは事實である。然し工業資本も亦商品に轉化され、更らに商品の販賣に依つてヨリ多くの貨幣に再轉化されるころの貨幣であつて、購買より販賣に至る間、流通部面の外部に於いてなされる諸種の行為は、この運動形態の上に些かの變化をも與へるものでない。最後に利子附資本に於いては、G—W—G、なる流通は短縮されて表現される。換言すれば、中間段階に依る、となく直接その結果に於いて、謂はば碑銘文體(註)を以つて、即ちG—G、として、ヨリ多くの貨幣に等しい貨幣として、自分自身よりも大きい價值として表現されるのである。斯くの如くG—W—G、は、事實に於いて、直接流通部面に現れた資本の一般的公式となるのである。

### (II) 一般的公式の矛盾

貨幣を資本に轉化せしめる流通形態は、商品や、價值や、貨幣や、流通そのものなどの性質について曩に述べた一切の法則と矛盾するものである。この流通形態を單純なる商品流通から區別するところのものは、同一の相對立した二行程なる販賣と購買との順序が轉倒されてゐることである。斯かる純形式上の區別を以つてして、如何にして此等の行程の性質をば、宛ら魔法を以つてするが如く變化せしめ得るであらうか？

單にそのみでなく、この轉倒は、相互取引する營業關係者三人の中の唯だ一人にとつてのみ存在するものである。假りに私が資本家であるとすれば、私はAから商品を買ひ、それをまたBに賣るのであるが、若し私が單純なる商品所有者であるとすれば、Bに商品を買つて、然る後Aから商品を買ふのである。然し私の取引先なるA、B兩人から見れば、この區別は存在して居らぬ。彼等は商品の購買者たるか、販賣者たるかに過ぎぬのである。私自身は、如何なる場合にも、單純なる貨幣所有者又は商品所有者として、即ち購買者又は販賣者として彼等に對立する。どちらの取引に於いても、一方の人に向つては單に購買者、他方の人に向つては單に販賣者としてのみ、即ち一方の人に向つては單に貨幣、他方の人に向つては單に商品としてのみ對立するのであつて、いづれの一方に向つても、資本又は資本家として、換言すれば、貨幣又は商品以上の何物かの代表、貨幣又は商品の作用以外の作用を與へ得べき何物かの代表として、對立するものではないのである。

私の立場から見れば、Aよりの購買とBへの販賣とは一の系列を成してゐる。然し、この兩行為間の聯絡は、唯だ私にとつてのみ存在してゐるのである。私とBとの間に行はれる取引はAの關知するところではなく、また私とAとの間に行はれる取引はBの關知するところでない。私が若し取引の順序を轉換することに依つて得べき特殊の利益についてなりとも、彼等に向つて明かにしようとするれば、彼等は私が取引の順序を誤つてゐること、總取引は購買に始まり販賣に終つたのではなく、寧ろ販賣に始まり購買に終つたものであることを論證するであらう。實際のところ、私の最初の行為なる購買は、Aの立場から見れば販賣であり、私の第二の行為なる販賣は、Bの立場から見れば購買であつた。

AとBとは、これを以つて満足することなく、更らに、この取引の全系列は蛇足でありベテンであつたと宣明するであらう。寧ろAは直接Bに商品を買ひ、Bは直接Aから商品を買ふことになるであらう。斯くして全取引は、通例の商品流通に於ける一方的行為に短縮され、Aの立場から見れば單なる販賣、Bの立場から見れば單なる購買に歸してしまふ。要するに、取引の順序を轉換したところで、單純なる商品流通の部面以上に出づることはないので、我々は寧ろ、この商品流通の性質上から見て、流通に入る價值の増大、換言すれば餘剩價值の形成といふことが許されるか否かを、確かめねばならぬのである。



單なる商品交換として表現された形態に於ける流通行程について考へて見よ。これは商品所有者の雙方が互ひに商品を買ひ、交互の貨幣請求権の残高を支拂期日に清算する場合、常に行はれることである。この場合、貨幣は商品の價值を價格で言ひ現すために、計算貨幣として役立つのであるが、商品それ自身とは物的に對立するものでない。使用價值が問題となる限り兩交換者とも利得を受け得ることは明かである。彼等はいづれも、使用價值としては自己に不用なる商品を讓渡して、自己の使用に必要な商品を受け取るからである。而して雙方の利益は、この點にのみ止まるものではないかも知れぬ。葡萄酒を販賣して穀物を購買するAは、恐らく穀物栽培者たるBが同一の労働時間を以つて生産し得るよりも多くの葡萄酒を生産するであらうし、また穀物栽培者たるBは、葡萄酒栽培者たるAが生産し得るよりも多くの穀物を同一時間に生産するであらう。即ちA、Bの各が、交換に依ることなくして自分自身のために葡萄酒と穀物との雙方を生産せねばならぬとした場合に比すれば、同一の交換價值を以つてAはヨリ多くの穀物を受け、Bはヨリ多くの葡萄酒を受けることになるのであつて、使用價值の點から見れば『交換は雙方に利得を與へる取引である』(十四)と言ひ得る。

(十四)『交換なるものは、當事者の雙方に常に(一)利得を與へるところの玄妙な取引である』(デスマット・ド・トレシー著『意志及びその效果論』パリ一八二六年刊、第六八頁)この書は同じ著者の『經濟論』よりも後に刊行されたものである。ところが、交換價值については、趣が異つて来る。『葡萄酒は澤山あるが少しも穀物を有たない人が、穀物は澤山あるが少しも葡萄酒を有たない人と取引し、而して五十の價值ある小麦と、葡萄酒としての五十の價值とが彼等の間に交換される。この交換はいづれの一方から見ても、交換價值の増殖を意味するものではない。蓋し、いづれの一方も、交換の行はれる以前すでに、この取引に依つて得られる價值に等しい價值を有してゐたからである』(十五)。貨幣が流通要具として商品間に介在し、購買と販賣との兩行為が感性的に分割されるやうになつても、問題の上には何等の變化も生じない(十六)。蓋し商品の價值なるものは、商品が流通部面に入る以前すでに價格に依つて表現されてゐるのであつて、價值は流通の前提であるが結果ではないからである(十七)。

(十五)メルシェー・ド・ラ・リヴ・エール前掲、第五四四頁(13)。

(十六)『この兩價值の一方が貨幣であるが、又は雙方とも普通の商品であるかといふことは、どうでもいい問題である』(メルシェー・ド・ラ・リヴ・エール前掲、第五四三頁)。

(十七)『價值を決定するものは契約者ではない。價值は契約の締結以前すでに決定されてゐるのである』(メルシェー・ド・ラ・リヴ・エール前掲、第九〇六頁)。

第九〇六頁(14)。

抽象的の見地に立つて、單純なる商品流通の内在的法則には由來することのない事情を暫く措き、而して一の使用價值を以つて他の使用價值に代置するといふ一點を除いて考へるならば、流通の内部にはただ商品の轉形(單なる形態變化)が行はれるだけあつて、同一の價值、換言すれば對象化した社會的労働の同一量が、最初は商品、次にはその商品の轉化せる貨幣、最後にその貨幣の再轉化せる商品として、同一なる商品所有者の手に在留してゐるのである。この形態變化は、價值の大小に於ける何等の變化をも含むものでなく、商品の價值それ自身がこの行程の持續中に受ける變化は、その貨幣形態の上に於ける變化だけに限られてゐる。この貨幣形態は先づ、販賣に提供された商品の價格として存在し、次ぎには價格に依つて既に言ひ現されてゐた一の貨幣額として、最後に又、等價商品の價格として存在してゐる。斯かる形態變化は、五磅紙幣をソヴエレン貨や、半ソヴエレン貨や、志貨などに兩替することと同様に、それ自體として價值大小の變化を含むものでない。されば商品の流通が價值の形態を變化せしむるに過ぎぬ限り、この流通は——現象が純粹の形で進行するとなれば——等價と等價との交換を行はしめるものとなるのである。さればこそ、俗學的經濟學でさへ、價值の何者たるやを知らぬに拘らず、一流の方法で流通現象を純粹の形に考察しようとする時、つねに、需要と供給とが相一致して、その作用が一般に行はれなくなることを假定するのである。斯くの如く、使用價值について言へば交換者は雙方とも利得を受け得るのであるが、交換價值については雙方とも利得を受け得ないのであつて、寧ろ『等一の存するところ、何等の利得なし』(十八)といふことになる。商品はその價值とは一致せざる價格を以つて販賣され得ることは事實であるが、この不一致は商品交換の法則の毀損として現れる(十九)。要するに、純粹の形について言へば、商品交換なるものは等價と等價との交換であつて、何等の價值増殖手段でもないのである。

(二十)。

(十八)ガリアニ著『貨幣論』(クストチ編、イタリー經濟名著全集、近世篇、第二四四頁)。

(十九)『外部の事情に依つて價格の増減が生ずる時、交換は交換當事者の一方にとつて不利となり、均等の關係は侵害されることになるのである。然しこの侵害は、斯かる外部的事情に由るものであつて、交換それ自身に起因するものではない』(ル・トロイエ前掲、第九〇四頁)。

(二十)『交換はその性質上、均等に基く契約であつて、均等の價值と價值との間に行はれる。それは受け取つただけのものを與へることを意味するのであるから、致富の方法となるものではない』(ル・トロイエ前掲、第九〇三頁)。



されば、商品流通を餘剰價値の源泉として説明しようとする企圖の背後には、大抵の場合一の物對物が、使用價値と交換價値との混同が伏在してゐるのである。假へばコンヂアックは斯う言つてゐる。——「商品交換に於いて等しき價値と等しき價値とが交換されると見るは誤りである。寧ろ反對に、兩契約者の各は、常にヨリ大なる價値を得べくヨリ小なる價値を提供する。……事實に於いて、常に等一の價値が交換されるとすれば、いづれの契約者も利得するところはないであらう。然るに雙方とも利得も受けてゐる。或は、いづれも利得を受くべきである。これ何故であるか？ 蓋し物の價値は、その物が我々の欲望に對して有する關係の中にのみ存するものであつて、一方の人にとつてヨリ多き物は、他方の人にとつてはヨリ少なき物、一方の人にとつてヨリ少なき物は、他方の人にとつてはヨリ多き物である。……我々は、自己の消費に缺くべからざる物を販賣に附す、と假定するものではない。……我々は、自己にとつて必要な物を受ける爲に、自己にとつて不用なる物を手放さうとする。即ちヨリ多くの物を得る爲に、ヨリ少なき物と與へようとするのである。……交換された物の各の價値が同一量の金に等しい場合には、交換なるものは等しき價値を得る爲に等しき價値を與へることであると判斷するは當然であるが……しかし我々は、他のいま一つの要件を考慮に入れねばならぬ。即ち兩當事者とも、餘分の物を以つて必要な物と交換するのではないかと云ふことが、問題となるのである(二十一)。

(二十一)コンヂアック著『商業と政府』(一七七六年刊)ギョーマン全集、經濟雜纂篇、パリ一八一七年刊、第二六七頁。コンヂアックは單に使用價値と交換價値とを混同してゐるばかりでなく、また如何にも子供らしく、生産者がその生活資料をみづから生産し、而して彼れ自身の必要以上に出づる過剩たる餘分のみを流通内に投ずるといふ一状態を、商品生産の發達した社會に歸してゐることは、以上の説明に依つて知られるところである(二十二)。而もコンヂアックの斯かる論法は、近世經濟學者の間にしばしば反覆されてゐるところであつて、殊に商品交換の發達したる形態である商業をば、餘剰價値の源泉として説かうとする場合には尙更らさうである。例へば次の如く主張されてゐる。「商業は生産物に價値を附け加へる。なぜならば、同一の生産物も消費者の手に入るときは、生産者の手に在るときよりも大なる價値を有することになるからである。されば商業なるものは、嚴密に言へば生産行爲と見做すべきである」と(二十三)。けれども商品は、先づその使用價値について、大にはその價値についてといふ風に、二重に代價を支拂はれるものではない。而して又、商品の使用價値が販賣者よりも購買者にとつてヨリ有用であるとすれば、商品の貨幣形態は購買者よりも販賣者にとつてヨリ有用であるといふことになる。若しさうでないとなれば、販賣者は果してその商品を賣るであらうか？ そこで嚴密に言へば、購買者は例へば商人の襖を貨幣に轉化

することに依つて、一の『生産行爲』をなすものだと云ひ得ることになるであらう。

(二十二)されば、ルトローマはその友コンヂアックに對して、頗る適切に斯う答へてゐる。——「總じて現存社會に過剩な物はない」と。同時に、彼れはコンヂアックを揶揄して言ふ。——「若し交換者の雙方が同じだけのヨリ少ない物に對して、同じだけのヨリ多い物を受けるとすれば、彼等の得るところに差異はない譯である」と。コンヂアックは、交換價値の性質について些かも氣付くところがなかつた。さればこそ、ウァルヘルム・ロッシャー先生は、彼れ自身のおどけなき概念の似合はしい證人にコンヂアックを選んだ次第である。ロッシャー著『國民經濟原論』第三版、一八五八年刊(註)を見よ。

(二十三)エヌ・ビー・ニューマン著『經濟要論』アンドヴァー及びニューヨーク、一八三五年刊、第一七五頁。

交換價値の杜等しい商品と商品、又は商品と貨幣とが交換されるとき、換言すれば等價と等價とが交換されるとき、何人も流通に投じたよりも以上の價値を流通から引き出すものでないことは明かである。斯かる場合、餘剰價値の形成は行はれるものではない。然るに、純粹の形態に於ける商品の流通行程は、等價と等價との交換を條件とするものである。ただ現實に於いては、何事も純粹の形には現れないのであるから、商品流通の場合にも、等價に非ざるものの交換が行はれると假定して見よう。

いづれにしても、商品市場に於いては商品所有者と商品所有者とが對立することになるのであつて、彼等が相互の上に揮ふところの權力は、彼等の商品の權力に外ならぬのである。商品間の素材的差異は、交換の素材的動機となるものであつて、この差異あるが故に、商品所有者は交互に倚存せしめられることになるのである。蓋し商品所有者中の何人も、自己の欲望の對象を保有することなく、他人の欲望の對象はいづれも保有してゐるからである。使用價値の斯かる素材的差異を除けば、商品間にはただ一つの區別しか與へられない。それは即ち、商品の現物形態と、轉化したる形態との區別、換言すれば商品と貨幣との間の區別である。斯くて商品所有者なるものは、單に商品の所有者たる販賣者、並びに貨幣の所有者たる購買者として區別されるに過ぎなくなる。

そこで今、何等かの説明し得ざる原因に依つて、商品を價値以上に、例へば一百の價値ある商品を一百十に、即ち一〇パーセントの名目的價格追加を以つて、販賣する特權が販賣者に與へられたと假定して見る。然る場合、彼れは十なる餘剰價値を得る譯である。けれども、彼れは販賣者たる後に購買者となるのであつて、今や第三の商品所有者が販賣者として彼れに對立して来る。而してこの販賣者も亦、一〇パーセント高く商品を販賣する特權を樂しむことになるのである。斯くて前の商品所有者は販賣者として十を利得したが、それは畢竟、購買者として十を失ふ所以であつたのである(二十四)。そこで歸するとこ



る、一切の商品所有者は、交互にその商品を一〇パーセントだけ価値以上に販売し合ふことになるのであつて、要するに、彼等の商品が価値通りに販売されたことと毫も異ならぬのである。商品価格の斯かる一般的な名目上の釣り上げは、商品価値が例へば金の代りに銀を以つて評議される場合と同一の結果を齎らすのであつて、商品の貨幣名たる価格はヨリ大となるであらうが、価値比例の上には何等の變化も生じないであらう。

(二十四)「生産物の名目価値の釣り上げは、…販賣者に何等の利益をも齎らすものでない。…なぜならば、彼等は販賣者として利得しただけのものを、購買者として支出することになるからである」(匿名者著『國富の本質的原則』ロンドン、一七九七年刊、第六六頁)。

反對に、商品を価値以下に買ふ特權が購買者に與へられたと假定して見よう。この場合には、購買者が更らに販賣者となることを考へる必要はない。彼等は購買者たる以前すでに販賣者であつた。彼等は購買者として一〇パーセントを利得する以前すでに販賣者として一〇パーセントを損失してゐた(二十五)。この場合にも、萬事は舊來通りである。

(二十五)「或人が本來二十四リールを一定量の生産物を、十八リールで販賣することを餘儀なくされたとするば、彼れが購買者たる位置に立つたときにも、從前ならば二十四リール支拂はねばならなかつた物を、十八リールで得ることになるであらう」(ルトローメ前掲、第八九七頁)。

要するに、餘剩価値の形成、隨つて貨幣の資本化なる現象は、販賣者が商品を価値以上に賣るといふ事實に依つても、また購買者がそれを価値以下に買ふといふ事實に依つても、説明され得るものではないのである(二十六)。

(二十六)「如何なる販賣者も、他の販賣者の商品を常にヨリ高く購買することなくして、自己の商品を常に値上げし得るものではない。同一の理由に依り、如何なる消費者も、彼れが販賣者の位置に立つた場合、常にヨリ安く販賣することなくして、常にヨリ安く購買し得るものではないのである」(メルシェード・ラ・リヴ・エール前掲、第五五頁)。

『事實上の需要なるものは、消費者が直接の交換を以つてするにせよ、間接の交換を以つてするにせよ、兎にかく商品のためその生産上に要費したよりも多量の凡ゆる資本部分を提供する能力及び意向(一)といふことに存する』(二十七)と、トレンス大佐は言つてゐるが、斯様な筋違ひの事柄を持ち込むことに依つて、問題は毫も單純化されるものではない。生産者と消費者とは、流通の下に於いては、單に販賣者及び購買者として對立するに過ぎぬ。そこで生産者の得べき餘剩価値は、消費者が商品の代價を價值以上に高く支拂ふことから來ると主張するのは、これ取りも直さず、商品所有者が販賣者として價值以上に高

く賣る特權を有つといふ、單純な命題に粉飾を施したものに外ならぬ。販賣者はみづから商品を生産したか、又はその生産者たる人を代表してゐるのであるが、購買者もそれに劣らず、自己の貨幣に依つて表現されてゐる商品のみづから生産したか、又はその生産者たる人を代表してゐるのである。即ち生産者が生産者に對立することとなるのであつて、彼等を區別する所のものは、一方が購買し、他方が販賣するといふ(一事に過ぎない。商品所有者が生産者なる名義の下に立つときは、商品を價值以上に高く賣り、消費者なる名義の下に立つときは、商品の代價を價值以上に高く支拂ふと説くことは、問題の解決に向つて一歩も近づかぬものではないのである(二十八)。

(二十七)「ロート・トレンス著『富の生産に関する一論文』(ロンドン、一八二一年刊、第三四九頁)。

(二十八)「利潤が消費者に依つて負擔されるといふ考は、確かに不條理極まるものである。消費者とは誰れのことか?」(チーヂ・ラムゼー著『富の分配に関する一論文』エチンバラ、一八三六年刊、第一八四頁)。

されば、餘剩価値を以つて名目上の價格釣り上げに、換言すれば販賣者が商品を價值以上に高く賣る特權に起因するとなす幻想の徹底的な代表者たちは、販賣せずして購買のみをなし、生産せずして消費のみをなす一階級を假定することになるのである。斯かる階級が存在は、茲までの説明に於いて到達した我々の立場、即ち單純なる商品流通の見地を以つてしては、説明し得ない所であるが、試みに先き廻りしてこの問題を考察することにしよう。この階級が絶えず購買する上に必要な貨幣は、權利上並びに強力上の何等かの名義に基いて、交換に依らず無償で商品所有者自身の手から不斷に流れて來ねばならぬ。斯かる階級に對して商品を價值以上に高く販賣することは、これ取りも直さず、無料で渡した貨幣の一部分を欺瞞的に取り返すことに外ならぬのである(二十九)。小アジアの諸都市は、斯様にして古ローマに年貢金を納めてゐた。而してローマは、この貨幣を以つて小アジアの諸都市から商品を購入した。それは價值以上に高く購買されたのである。即ち小アジアの人々は商業を通して、征服者たるローマ人から年貢金の一部を欺瞞的に取り返すことに依り、後者に一杯食はせたのであるが、それでも小アジア人の方が一杯食はされた人々であることに變りはない。彼等の商品は依然、彼等自身の貨幣を以つて代價を支拂はれてゐたからである。斯様なことは致當の、餘剩価値形成の何等の手段ともなるものでない。

(二十九)「或人がその商品の販路が無くて困つてゐる場合、先づ他人に貨幣を與へて、それで右の商品を購買せしめればよい、とマルサス君は薦めるであらうか」とは、或リカルド學徒が憤然としてマルサスに問うた所である。蓋しマルサスは、その門弟なる牧師チャーマーズと同様に、單なる購買者又は消費者の階級を経済上から崇讃してゐたのである」(匿名者著



『最近マルサス氏の提唱せる、需要の性質及び消費の必要に關する原理の研究』ロンドン、一八二二年刊、第五頁）  
そこで我々は、販賣者が購買者であり、購買者が販賣者である商品交換の範圍内に論を限ることにしよう。曩の窮境は恐らく、各當事者をば単に入格化された範疇とのみ解釋して、個別的に解釋しなかつた結果であつたらう。

商品所有者Aは、その仲間のB又はCが如何に熱心にこれを欲するも、彼れに對して報復することが出来ず、却つて彼れの爲に翻弄される所となるほど機敏であるかも知れぬ。彼れは四十磅の價值ある葡萄酒をBに販賣して、それと引き換へに五十磅の價值ある穀物をBから與へられる。即ち彼れは四十磅を五十磅に轉化し、ヨリ小なる貨幣からヨリ大なる貨幣を造つた譯であつて、彼れの商品は資本に轉化されたのである。この問題を尙立ち入つて考へて見よう。

交換以前には、Aの手には四十磅の價值ある葡萄酒、Bの手には五十磅の價值ある穀物があつた。即ち合計九十磅といふ價值があつたのである。交換後にも矢張り、九十磅といふ總價值が存在してゐる。即ち流通價值は總一文も増大することなく、ただA・B間へのその配分が變化したに過ぎぬのである。一方の者にとつて減損價值である所のものは、他方の者にとつては餘剩價值として現れ、一方にとつて、負數として現れる所のものは、他方にとつては、正數として現れる。若し、Aが交換といふ紛らはしい形態に依ることなく、直接に十磅を盗んだとしても、矢張り同一の變化が生ずることになるであらう。流通價值の總高は、その配分上の如何なる變化に依つても増大し得るものでないことは明かであつて、これは恰度、ユダヤ人がアン女王時代に造られた一個のフアイジング貨を一ギニーで賣つても、それがため一國の内部に於ける貴金屬の分量は毫も増大しないのと同じである。一國に於ける資本家階級總體は、自分自身を出しぬいて利得し得るものではない（三十）。

（三十）デスチュート・ド・トレシーはフランス學士會員であつたといへ、（恐らくは、であつたが故に）これと反對の見解を抱いてゐた。彼れは言ふ。『工業資本家は一切の物をその生産に要した所よりも價高く賣る』ことに依つて利潤を得る。然らば誰れに賣るのであるか？ 先づ相互に販賣し合ふのである』と（前掲、第二三九頁）。

斯くの如く、如何に扭つても捻つても、歸する所は依然として同一である。等價と等價とが交換されるとき、何等の餘剩價值も生ぜず、非等價と非等價とが交換されるときにも、同様に何等の餘剩價值も生じない（三十一）。要するに、流通又は商品交換は、何等の價值をも造り出さぬといふことになるのである（三十二）。

（三十一）『相等しき價值と價值との交換は、社會に存在する價值の總量を増大し又は減少するものでない。相等しからざる價值と價值との交換も亦、一方から取つただけの富を他方に加へるとはいへ、決して社會的價值の總量を變化せしめるものではない』（ジャン・バチスト・セー前掲第四三四及び四三五頁）。セーはこの命題をば、勿論それが如何なる結論を生ぜしむるかといふことに顯著する所なく、殆んど送語的にフ・ジョクラットから採用したものであつて、當時忘れ果てられたフ・ジョクラット派の文獻を彼れが如何にして自分自身の『價值』の増殖に利用したかは、次ぎの證言に徴しても明かであらう。『生産物を以つてのみ生産物を購買する』（前掲、第四三八頁）といふセー君の『最も有名な命題は、フ・ジョクラットの原本では『生産物は生産物を以つてのみ支拂はれる』（ル・トロイエ前掲、第八九頁）となつてゐる。

（三十二）『交換なるものは、總じて生産物に何等の價值をも附與するものでない』（エフ・ウェーランド著『經濟學の要素』ボストン、一八五三年刊、第一六八頁）  
以上説くところに依つて、我々は資本の基本形態——近世社會の經濟的體制を決定する資本形態——を分析せる際、何故その通俗的な、謂はば洪水前期的の形態なる商業資本並びに高利貸資本をば一先づ全く顧慮せず置いたかといふことが知られるであらう。

嚴密の意義の商業資本に於いては、ヨリ高く販賣せんが爲の購買を示すC—A—C、なる形態が最も純粹なる形に現れる。他方に又、この資本の全運動は流通部面の内部に行はれるものである。けれども貨幣の資本化、換言すれば餘剩價值の形成をば、流通それ自身に依つて説明することは不可能であるから、等價と等價とが交換されるやうになるや否や、商業資本なるものは、全く不可能のものとして現れ（三十三）、その存在はただ、購買する商品生産者と販賣する商品生産者との間に寄生的に割り込む商人が、雙方に對して二重に利得するといふ事實にのみ起因するもの如く見えて来る。この意味に於いて、フランクリンは『戦争は盜掠であり、商業は詐欺である』と言つた（三十四）。商業資本の價值増殖が、商品生産者に對する單なる詐欺に因るものとされない爲には、長列の中間諸段階を必要とするのであるが、此等の中間段階は、商品流通とその單純なる諸要素とを唯一の前提とする當面の場合にとつては、また毫も存在してゐないのである。

（三十三）『不變的な等價の支配下に立つとき、商業なるものは不可能となるであらう』（ギョー・オプダイク著『經濟論』ニューヨーク、一八五一年刊）  
『實體價值と交換價值との區別の根柢には、次の事實が横つてゐる。即ち物の價值は、商業上その物の代價として與へられる所の謂はゆる等價とは異なるものであり、語を換へていへば、この等價なるものは實は何等の等價でもないといふ事實がそれである』（フリードリヒ・エンゲルス前掲、第九六頁）。

（三十四）『ジャン・ミン・フランクリン全集第二卷、スバークス版、『國富について檢考すべき諸種の位置』の一節』。



商業資本について言ひ得ることは、高利貸附資本については尙更ら言ひ得る所である。商業資本に於いては、循環の兩極たる市場に投ぜられる貨幣と、市場から引き上げられる増大した貨幣とは、少なくとも賣買に依り、流通の運動に依つて、媒介されるのであるが、高利貸附資本に於いては、 $\phi - M - \phi$  なる形態は媒介なき兩極  $\phi - \phi$ 、即ちヨリ多くの貨幣と交換される貨幣に短縮される。斯かる形態は貨幣の性質と矛盾するものであり、随つて商品交換の立場からは説明し得ざるものとなるのである。さればアリストテレスは言ふ。——「クレマテスチークは二重のものであつて、一部は商業に屬し、一部はエコノミーに屬する。而して後者は必要にして賞讃に値するものであるが、前者は流通に基くものであつて、自然を基礎とせず相互の詐欺に立脚するものであるから、當然に擯斥せらるべきものである。斯かる事情の下に、高利貸附業なるものが世人から忌み嫌はれるやうになつたのは、極めて當然なことである。蓋し高利貸附業に於いては貨幣はそれ自身利得の源泉となり、それが發明された本来の爲には使用されないからである。貨幣なるものは、元來商品交換の爲に生じたのであるが、利子あるが爲に貨幣はヨリ多くの貨幣に擴大される。『*Das Kapital*』利子及び生れたるもの意なる名稱の生じた所以である。生れたものは生むものに似てゐるからである。利子は貨幣の貨幣であつて、凡ゆる營利部門の中もつとも反自然的なものである。』(三十五)アリストテレス前掲、第一〇章。

本書の説明が進むにつれて、商業資本も利子附資本も、共に派生の資本形態であることが見出されると同時に、又これらの資本が何故、歴史的に資本の近世的形態に先だつて出現したかといふことが、明かになるであらう。

餘剰價值は流通からは生じ得るものでないこと、随つて餘剰價值の形成については、流通それ自身の内部では目に見えない何物かが背後に在つて作用せねばならぬこと、これは曩に示した通りである(三十六)。けれども餘剰價值なるものは、果して流通以外の處から生じ得るか？ 流通とは商品所有者の一切の相互關係を總稱したものである。流通の外部に於いては、商品所有者は彼れ自身の商品との關係に立つてゐるに過ぎぬ。この商品の價值についていへば、商品所有者との關係は要するに、一定の社會的法則に従つて秤量される彼れ自身の労働の或分量がその中に含まれてゐるといふことに限られるのである。この労働量は、彼れの商品の價值大小に依つて言ひ現される。而して價值大小なるものは、計算貨幣に依つて表現されるものであるから、右の労働量は例へば十磅なる價格に依つて言ひ現されることになる。然し彼れの労働は、商品の價值と、それ以上に出づる過剰とに依つて表現されるものではない。換言すれば、十であると同時に又十一でもある所の價格、即ち自分自身よりも大なる價值に依つて表現されるものではない。商品所有者は、その労働に依つて價值を造り得るとはいへ、自己増殖的の價值

を造り得るものではないのである。彼れの新たなる労働を以つて既存の價值に新たなる價值を附け加へることに依り、例へば革を深靴に造り上げることに依つて一商品の價值を高めることが出来る。斯くして同一の材料も、ヨリ多量の労働を含むが故に、ヨリ多くの價值を有することになるのである。深靴は革に比してヨリ多くの價值を有するが、革の價值は舊來通りであつて、自己増殖を遂げた譯でなく、深靴製造中に餘剰價值を附加された譯でない。要するに、商品生産者が流通部面の外部に於いて他の商品所有者と接觸せずして價值を増殖し、以つて貨幣又は商品を資本に轉化することは不可能である。

(三十六)『*Das Kapital*』通例の市況の下に於いては、交換は利潤を齎らし得るものでない。交換以前に存しなかつた利潤は、交換以後にも存し得るものではないであらう(ラムゼー前掲、第一八四頁)。

斯くの如く、資本は流通の内部から生じ得るものではないが、さればといつて、流通以外の處から生じ得るものでもない。それは流通の内部に生じねばならぬと同時に、流通の内部に生ずるものであつてもならぬのである。

斯くして二重の結果が生じて来る。——

貨幣の資本化なる現象は、商品交換の内在的法則に基いて、即ち等價と等價との交換が出發點になるといふ前掲の下に、説明さるべきである(三十七)。尙未だ資本家の幼蟲として存在してゐるに過ぎない我が貨幣所有者は、商品を價值通りに買つて價值通りに賣り、而もその行程の終了するとき、最初投じたよりも多くの價值を引き出さねばならぬ。彼れが成長して、資本家の蝶となることは、流通部面の内部に行はれねばならぬが、さればといつて、流通部面の内部に行はれてもならぬ。これが問題の條件なのである。此處がローツス島だ。さあ踊つて見よ！(三)

(三十七)これは畢竟、商品價格が商品價值に等しいと假定しても、資本形成は可能でなければならぬといふ意味に外ならぬ。いは、如上の説明に依つて理解し得る所であらう。資本形成の事實は、商品價格と商品價值との不一致に依つて説明し得るものでない。若し價格が現實に於いて價值と一致しないとすれば、先づこれを價值に約元せねばならぬ。即ちこの不一致は偶然的の状態として、問題外に置くことが必要になつて来るのである。斯くすることは、商品交換の基礎上行はれる資本形成の現象を純粹の形に捕捉し、問題の本筋に關係のない攪亂的な附帶事情に依つて、觀察を妨げられぬやうにするため必要なことである。また、右の約元が決して單なる科學上の手續に止まるものでないことは、我々の知る所である。市場價格なるものは不斷に動搖し、不斷に騰落してゐるものであるが、此等の騰落は交互に相殺されて、内部的規準としての平均價格に歸してしまふ。これは長期間に互る如何なる企業に於いても、商人又は産業資本家の導星となるものであつて、彼等



は長期間全體について觀察するとき、商品は現實に於いてその平均價格以下でもなく以上でもなく、ちやうど平均價格で販賣されることを認めてゐるのである。そこで、苟くも利害を超越した思惟が彼等の關心となつてゐるものとすれば、彼等は資本形成の事實を、次の形で試問せねばならなくなるであらう。——價格が平均價格に依り、換言すれば、終局に於いては商品の價值に依つて規制されたとした場合、資本なるものはそも如何にして生じ得るか？ 茲に敢て『終局に於いては』と言ふのは、元來商品の平均價格なるものは、アダム・スミスやリカルドなどの信ずる所とは異なり、直接に價值の大小と一致するものではないからである。

(三) 労働力の賣買

貨幣を資本に轉化せしむべき價值増殖は、貨幣それ自體の上には起り得るものでない。蓋し貨幣なるものは購買要具もしくは支拂要具として役立つ場合には、それを以つて購買され又は代價を支拂はれる商品の價格を實現するに過ぎぬからである。貨幣は、その儘になつてゐて、それ自身の形態を變へないとき、謂はば不變の大きさを有する價值に化石してゐる(三十八)。同様に又、右の價值増殖は、第二の流通行爲なる商品の再販賣からも生じ得るものでない。なぜならば、この行爲は、商品を現物形態から貨幣形態に再轉化せしむるに過ぎぬからである。

(三十八) 『資本は貨幣の形を採つてゐるとき……何等の利潤をも生ぜしめるものでない』リカルド著『經濟原論』第三版、第二六七頁(註)。

そこで右の價值變化は、第一行爲なるものに於いて購買される商品の上に生ぜねばならぬ譯であるが、その商品の價值の上に生ずべきではない。なぜならば、等價と等價とが交換され、商品は價值通りの代價を支拂はれるからである。要するにこの價值變化は、商品の使用價值そのもの以外の處、換言すれば商品の消費以外の處からは生じ得るものでない。然るに、商品の消費の中から價值を引き出だす爲には、我が貨幣所有者は幸ひ流通部面の内部に於いて、市場に於いて、使用價值がそれ自身價值の源泉になるといふ特殊の性質を有する一商品、即ち現實的消費がそれ自身労働の體化であり價值の造出である所の一商品を見出さねばならぬことになる。而して彼れは事實に於いて、市場に斯かる特殊の商品を見出すのである。労働能力即ち労働力即ちそれが即ちそれである。

價值を生産する度び毎にこれを運轉するものである。

然し貨幣所有者が労働力を商品として市場に見出す爲には、種々なる條件が充たされてゐることを必要とする。商品交換なるものは、それ自身に於いては自己の性質から生ずる所のもの以外には何等の從屬關係をも含まぬ。斯かる前提條件の下に、労働力はそれ自身の所有者、即ちそれを自己の労働力とする人に依つて、商品として賣物にされるか又は販賣されるかの限りに於いてのみ、又その理由に基いてのみ、商品として市場に現はれ得るのである。それは商品として販賣される爲には、所有者に依つて自由に處分され得るものであることを要する。換言すれば、彼れは自己の労働能力の、自己の人格の自由なる所有者でなければならぬ(三十九)。彼れと貨幣所有者とは互ひに市場で相會し、等格の商品所有者として相互關係に入る。ただ、一方は購買者、他方は販賣者であるといふ一點が異なるだけであつて、いづれも法律上同等な人である。斯かる關係が持續し得る爲には、労働力の所有者が常に一定の時間を限つてこれを販賣することを要する。なぜといふに、若しこれを一括して賣り放しにするとすれば、彼れは取りも直さず自身自身を販賣することになつて、自由人から奴隸となり、商品所有者から商品に轉化されてしまふからである。彼れは絶えず人として、自己の所有物たり商品たる労働力に關係して行かねばならぬ。而して彼れはその労働力を常に暫行的に、即ち一定の期間を限つて、購買者の支配に委ね消費に歸せしむる限りに於いてのみ、換言すれば、それを讓渡すればとてその所有をも斷念することなき限りに於いてのみ、斯くすることが出来るのである(四十)。

(三十九) 古代ギリシア・ローマに關する諸種の百科辭典に、こんな馬鹿々々しいことが書いてある。即ち古代世界には、『自由なる労働者と信用制度とが無かつたことは事實であるが、この一點を除けば』資本は當時に於いても既に十分發達してゐたといふのである。モムゼン君も、その著『ローマ史』の中で、この點に關し錯誤に錯誤を重ねてゐる。

(四十) されば、各國の立法は、労働契約について一の最高限度を規定してゐる。自由の労働が行はれる處に在つては、法律に依つてこの契約の解約通告條件が規定されてゐるのである。種々なる國、殊にメキシコに於いては(南北戦争以前に在つてはメキシコから剝奪された諸領土に於いても、またクイーザの革命勃發當時迄は事實上ドナウ諸地方に於いても)、奴隸制度はペオナジ(註)なる形態のもとに隠蔽されてゐる。労働を以つて返還するといふ約束のもとに得た前借が親子代々傳つて行く結果、個々の労働者のみでなく、彼れの一家全體までが、事實上、他人及びその一家の所有物となつてしまふのである。メキシコ大統領ジュアレフ(註)はこの制度を廢止した。然し僭帝マキシミリアンは、勅令を以つて再びこれを實施した。ワシントン議會は、この勅令を目して、これメキシコに奴隸制度を復興せしむるものであるといふ適切な非難を與へた。『私の肉體上



及び精神上に於ける特殊の熟練及び活動能力について、…私は時間的に制限された一の使用を他人に譲渡することが出来る。なぜならば、それらのものは斯かる制限を受けるとき、私の全體と一般性とに對して在外的の關係(離權)に立ち得るからである。労働中に於ける私の具體的な全時間と、私の生産の全部とを譲渡するとき、私はそれらの物の實體を、換言すれば私の全般的活動並びに現實性を、私の人格そのものを、他人の所有に移轉することとなる(ヘーゲル著『法律哲學』ペルリ一八四〇年刊、第一〇四頁、第六七節)。

貨幣所有者をして労働力を市場に商品として見出さしむる第二の本質的條件となるものは、即ち、労働力の所有者が自己の労働の對象化された商品を販賣することができず、寧ろ彼れの生きた現身中にのみ存在する所の労働力そのものを商品として賣物にせねばならぬといふ事實である。

何人にしろ、自己の労働力とは異つた商品を販賣する爲には、生産機關たる例へば原料や労働器具などを所有して居らねばならぬことは、言ふ迄もない。何人も、皮革なくして靴を製造し得るものでない。ほかに、生活資料も必要である。何人も、『未來の音楽家』と雖も、未來の生産物を消費し得るものでなく、まだ生産されざる使用價值を消費し得るものでない。而かも人類は地球の舞臺に出現した最初の日に於ける如く、現在に於いても生産の終了に先だち、また生産の進行中にも、日々消費せねばならぬのである。生産物が商品として生産されるやうになると、生産された後に販賣されることが必要になつて来る。生産物は販賣された後に初めて生産者の欲望を充たし得るやうになるのである。斯くして生産時間のほかに尙、販賣に必要な時間が追加されて来るのである。

要するに、貨幣の資本化については、貨幣所有者が商品市場に自由なる労働者を見出すといふことが必要な條件となるのであつて、この自由といふことには二重の意義がある。即ち、労働者は一方に自由なる人として、彼れの労働力を彼れの商品として支配すると同時に、一方また他人に販賣すべき何等の商品をも所有せず、徒手空拳、彼れの労働力の實現に必要な一切の物から自由となつてゐるのである。

この自由なる労働者が、何ゆゑ流通部面に於いて貨幣所有者に對立するかとの問題は、労働市場を以つて商品市場の特殊の一部門となしてゐる貨幣所有者にとつては興味あることでない。我々にとつても、この問題は今のところ興味あることではないのである。貨幣所有者は實際の上から事實に則してゐるのであるが、我々は又、學說の上から事實に則するのである。が、茲に明瞭な一事がある。それは即ち、一方には貨幣所有者又は商品所有者を、他方には労働力のほかに何物をも所有せざる人を

生ぜしめるのは、自然の作用ではないといふことである。この關係は自然史的のものではなく、また凡ゆる歴史的時代に共通の社會的關係でもない。それは過去に於ける歴史的発展の産物であり、幾多の經濟的革命が行はれ、社會的生産の古き諸形態の全列が消滅した結果なのである。

曩に考察した經濟上の諸範疇も亦、歴史的の印跡を帯びてゐる。商品としての生産物の存在には、一定の歴史的條件が包含されてゐる。生産物は商品となる爲には、生産者自身に依つて消費せらるべき直接の生活資料として生産されてはならぬ。更に一步を進めて、一切の、或は少なくとも大多數の生産物は、如何なる事情の下に商品形態を採るかを研究するとすれば、それは全く特殊なる生産方法——資本制生産方法の基礎の上にのみ行はれることが見出されるであらう。然し斯くの如き研究は商品の分析には關係する所なきものである。生産物の壓倒的の大部分が商品化されることなく、直接に生産者の自家使用を目的として生産され、隨つて社會的生産行程が尙未だ全般に互つて交換價值の支配を受ける状態に達しないとしても、商品生産及び商品流通は行はれ得るのである。生産物を商品として表現するには、社會の内部に於ける分業が十分に發達して、物々交換に端を開くところの、使用價值と交換價值との分離が既に完成されてゐることを必要條件とする。而も斯様な發達段階は、歴史的に相異なつた各種の經濟的社會形態に共通する所のものである。

又は貨幣について見ても、これが存在は商品交換の一定の段階を前提するものである。單なる商品等價にしる、流通要具にして、支拂要具にして、又は退職貨幣及び世界貨幣にして、兎にかく特殊の貨幣形態なるものは、彼此いづれかの機能の範圍の差異及び相對的優勢の如何に従ひ、社會的生産行程の相異つた段階を示すものである。が、此等すべての形態の成立には、比較的發達微弱なる商品流通を以つて足ることは經驗の教ふる所である。資本にあつてはさうでない。資本の歴史的存在條件は、決して商品流通及び貨幣流通と共に與へられるものではない。資本なるものは、生産機關及び生活資料の所有者が労働力の販賣者たる自由の労働者を市場に見出す處にのみ成立するものであつて、この歴史的條件は、一の世界史を包括するものである。斯くして資本なるものは、最初より社會的生産行程の、一新時代を宣言してゐることになる(四十一)。

(四十一)されば資本制時代を特徴づけるものは、労働力が労働者自身に對して彼れの所有に屬する商品といふ形態を受けること、換言すれば彼れの労働が賃銀労働といふ形態を與へられること、これである。他方に又、労働生産物の商品形態が漸く一般化されて来るのも、この瞬間からである。

ところで、この特殊の商品たる労働力を、更らに立ち入つて觀察せねばならぬ。労働力なるものは、他の總べての商品と同



様に價值を有つてゐる(四十二)。この價值は如何にして決定されるか？

(四十二)『或一人の價值又は値打は、他の總べての物に於ける如く、彼れの價格となるものであつて、彼れの能力の使用の代價として與へらるべきものに相當してゐるのである』(トマス・ホッブス著『レヴィアサン』モールスウオース編、ホッブス全集 ロンドン一八三九—四四年刊、第三卷、第七六頁)。

勞働力の價值は、他の總べての商品の價值と同様に、この特殊の物品の生産随つて又再生産に必要な勞働時間に依つて決定される。勞働力は價值である限り、それ自身の中に體化されてゐる社會的平均勞働の一定量を代表するものに外ならぬ。勞働力なるものは、生きた個々人の能力としてのみ存在するに過ぎぬのであつて、その生産は生きた個々人の存在を前提することになるのである。個々人の存在が與へられてゐるとすれば、勞働力の生産なるものは、要するに彼等自身の再生産即ち生存維持に外ならぬ。生きた個々人はその生存を維持する上に、一定量の生活資料を要する。そこで、勞働力の生産に必要な勞働時間とは、歸するところ、この生活資料の生産に必要な勞働時間であるといふことになる。換言すれば勞働力の價值とは、勞働力の所有者の生存維持に必要な生活資料の價值である。然るに勞働力なるものは、その行使に依つてのみ實現され、勞働を通してのみ現實のものとなる。而して勞働力を實現して勞働とするに當り、人間の筋肉、神經、腦髓などの一定量が支出されるのである。それは恢復されることを必要とするものである。斯かる支出の増大は又、収入の増大を必要ならしめる(四十三)。勞働力の所有者は、今日勞働したとすれば、明日も亦力と健康との同一條件の下に、同一の行程を反覆し得なくてはならぬ。そこで彼れの生活資料の量は、彼れをば、勞働する所の個人として相當なる生活狀態の下に維持するに十分のものでなくてはならぬ。榮養、衣服、燃料、住宅等に關する自然的欲望は、それ自身、一國の風土的其他の自然的特徴の如何に従つて色々に異なるものである。他方に於いて、必要な欲望と稱せられるものの範圍並びに充足様式は、それ自身、一の歴史的産物であつて、大部分は一國の文化段階に懸るものであり、就中また、本質的には、自由なる勞働者の階級が如何なる條件の下に、隨つて如何なる習慣と生活上の要求とを以つて形成されたかといふことに懸つてゐる(四十四)。斯くて勞働力なるものの價值決定には、他の諸商品に於けるとは異なり、歴史的並びに道德的の一要素が含まれることになる。然し一定の國、一定の時期について言へば、必要な生活資料の平均範圍は一定してゐるのである。

(四十三)『されば古ローマのウィリクス(註)は、農業奴隷の監督人として『後者よりも輕微な勞働をしたから、ヨリ貧弱な給與を受けてゐた』(テオドル・モムゼン著『ローマ史』一八五六年刊、五八一—〇頁)だ。

(四十四)トマス・ソーントン著『過剩人口及びその救済』(ロンドン、一八四六年刊)を参照せよ。

勞働力の所有者は死を免れない。そこで市場への彼れの出現をば、貨幣の永續的資本化に要する如く永續的たらしむる爲には、勞働力の販賣者が『總べての生きた個體がする如く、生殖に依つて』(四十五)自己を不減ならしむることを要する。消耗と死亡との爲に市場から引き上げられた勞働力は、少なくとも同一數の新たな勞働力に依つて絶えず補充されねばならぬ。されば勞働力の生産に必要な生活資料の總額中には、補充勞働者(換言すれば、勞働者の子女の生活資料も含まれることになる)であつて、斯くすることに依り、特殊の商品所有者なるこの種族は、商品市場に自己を不減ならしめるのである(四十六)。

(四十五)ウァリアム・ベデー。

(四十六)『勞働の自然價格とは……風土の性質及び一國の風習上から見て勞働者の生存を維持するに必要なだけの、且つ市場への勞働供給を減損することなき一家の扶養をなし得せしめるに必要なだけの、生活資料及び享樂資料といふことである』(ロバート・トレンス著『對外國物貿易論』ロンドン、一八一五年刊、第六二頁)だ。茲に勞働と謂はれてゐるのは、勞働力の誤りである。

一般人間的の本性を改造し、それが一定の勞働部門に熟練と敏捷とを得て發達したる特殊の勞働力となるやうにするには、一定の訓練又は教育を必要とする。而してこれには又、大なり小なりの商品等價量を要するのである。勞働力の複合的性質の如何に應じて、その教育費の上にも様々の差異が生じて来る。それは通例の勞働力について言へば、極めて微小であるとはいへ、兎にかく勞働力の生産に支出される價值の一部となるのである。

勞働力の價值とは、畢竟するところ一定量の生活資料の價值に外ならぬ。隨つて勞働力の價值は、この生活資料の價值の變動につれて、この生活資料の生産に必要な勞働時間の大小につれて、變化するものである。

生活資料の一部なる例へば食物や燃料などは、日々新たに消費されるものであるから、日々新たに補充されることを要する。衣服、家具類などの如き他の生活資料は、ヨリ長き期間に互つて消耗される。隨つて此等の物は、ヨリ長き期間に互つて補充されねばいゝのである。或種類の商品は毎日、他の種類の商品は毎週、毎季等に消費され、又は代價を支拂はれねばならぬ。だが、此等の支出の總額が例へば一年間に互つて如何なる具合に配分されるにしろ、それは日々の平均收入によつて支拂されねばならぬ。いま、勞働力の生産上一日に要する商品の量をA、一週に要する量をB、一季(四分の一年)に要する量をC、その他等、等と假定すれば、此等の商品の一日の平均量は  $\frac{365A + 52B + 40 + U.S.W.}{365}$  に等しくなる。



平均的一日に必要な斯かる商品量の中に社会的労働が六時間含まれてゐるとすれば、一日の労働力には半日分の社会的平均労働が體化されてゐる譯である。語を換へていへば、一日の労働力を造るには半日分の労働が必要だといふことになる。一日の労働力の生産に必要なこの労働量は、労働力の日價值、換言すれば日々再生産される労働力の價值を構成するものである。若し半日分の社会的平均労働が三志又は一ターレルなる金量に依つて代表されるとすれば、一ターレルは即ち労働力の日價值に相當した價格となる。そこで若し労働力の所有者が、日々一ターレルでこれを賣物に出すとすれば、その販賣價格は價值に等しいことになる。而して曩の假定に依れば、自己の所有ターレルを資本化することに専念してゐる貨幣所有者は、労働者にこの價值を支拂ふのである。

労働力の價值の最終限界となり最低限界となるものは、即ち労働力の負擔者たる人間をしてその生命行程を更新し得せしめる爲に日々供給せねばならぬ商品量の價值である。換言すれば、彼れの肉體上に缺く可らざる生活資料の價值である。労働力の價格がこの最低限界まで低落したとすれば、それは即ち労働力の價值以下に低落した譯である。この場合、労働力は萎縮的の形でしか維持發展せられ得ないからである。然るに如何なる商品の價值も、平準的の品質を以つてこれを生産するに必要な労働時間に依つて決定されるのである。

労働力の斯かる價值決定は、問題の性質上當然に歸結し來たる所であるが、これを以つて粗暴の擧となし、ロッシと共に次の如く悲嘆する者があるとすれば、それは極めて安價な感傷である。——『生産行程中に於ける労働の生活資料から抽象して、而も労働能力を理解しようとするのは、これ取りも直さず、幻影を理解しようとするやうなものである。労働といひ、労働能力といふ以上は、労働者及び生活資料、労働者及び労働のことも含んでゐるのである』(四十七)と。労働能力といへばとて、労働のことを意味するものとは限らぬ。それは恰度、消化能力といへばとて、消化のことを意味するものとは限らぬのと同じである。消化の行程には、よき胃腸以外にも尙必要なものがあることは、人の知る所である。我々は労働能力について語るとき、労働者の生存に必要な生活資料から抽象するものではない。寧ろ生活資料の價值は、労働能力の價值に依つて言ひ現されるのである。労働能力なるものは販賣せられざる時、労働者にとつては何の効もないものであつて、彼れはその労働能力の生産上に一定量の生活資料を要したこと、而して又將來に於いても、その再生産上に絶えず新たにこれを要すべきことを、寧ろ冷酷なる自然必然事と感じてゐる。彼れは斯くして、シスモンチと同様に『労働能力なるものは、販賣せられざる時、何にもならぬ』ことを知るのである(四十八)。

(四十七) ロッシ著『經濟學教科書』ブリュッセル、一八四二年刊、第三七〇頁以下。

(四十八) シスモンチ著『經濟學新原論』(第一卷、第一二二頁以下)。

労働力といふこの特殊の商品の特性に伴ひ、購買者と販賣者との間に契約が締結されるとき、その使用價值は尙未だ現實に於いて購買者の手に移轉されるものでないといふ結果が生じて來る。労働力の價值は、他の總べての商品の價值と同様に、流通に入る以前すでに決定されてゐる。その生産には一定量の社会的労働が支出されたからである。然るに、労働力の使用價值とは、労働力が後に及んで實現されることである。即ち労働力の讓渡と、現實に於ける労働力の實現(換言すれば、使用價值としての労働力の存在)とは時間的に分離されてゐるのである。で、販賣に依る使用價值の形式的讓渡と、購買者へのその現實的引渡とが、時間的に分離されてゐるやうな商品にあつては(四十九)、購買者の貨幣は大抵みな支拂要具として作用することになる。資本制生産方法の下に立つ如何なる國に於いても、労働力の代價は、賣買契約に依つて規定された期間内に労働力が機能した後、例へば毎週の終末に、漸く支拂はれる。要するに労働者は何處に於いても労働力の使用價值を資本家に前貸してゐるのであつて、價格の支拂を受ける以前、すでに購買者をしてそれを消費せしめてゐるのである。即ち労働者は何處に於いても、資本家に掛賣りしてゐるのである。この掛賣りが決して空幻なものでないことは、資本家の破産した際、彼れの借りになつてゐる貨銀が、往々支拂はれず仕舞ひになつてしまふといふ事實に依つてのみでなく(五十)、またヨリ永續的な幾多の結果によつても、示される所である(五十一)。けれども貨幣が購買要具として作用するか、支拂要具として作用するかといふことは、商品交換それ自身の性質には何等の變化をも生ぜしめるものでない。労働力の價格は、家屋の賃賃價格と同様に、後及んで初めて實現されるものであるといへ、而も契約を以つて固く規定されてゐるのであつて、代價は後に支拂はれるけれども、販賣されることは事實である。が、その關係を純粹の形で理解する爲に、労働力の所有者がその労働力を販賣するとき直ちに、契約で定められた價格を支拂はれるものと假定することが便利である。

(四十九) 『如何なる労働も、給付後に初めて代價を支拂はれる』(匿名者著『需要の性質に関する原則の研究』第一〇四頁以下)。  
『商業上の信用なるものは、生産の第一創始者たる労働者が貯蓄の力に依つて一週間なり、二週間なり、一ヶ月なり、三ヶ月なり、労働の支拂延期に耐え得るやうになつた時、始まつたものに違ひない』(シヤール・ガニール著『經濟學體系』第二版、パリ、一八二一年刊、第一卷、第一五〇頁以下)。

(五十) 『労働者はその勤務を前貸する。』されどストルヒは據け目なく漸く附け加へてゐる。——労働者は『その貨銀を失ふ



こと以外には「何等の冒険をもするものでない。…労働者は素材的の何物をも移轉するものではない」と。(「ストルヒ遺稿」  
「五十二」)例一—ロンドンには二種のパン焼業者がある。一はパンを價值一杯に賣るフルプライスト (full priced)、他は

價値以下に賣るアンダセラーズ (underbakers) であつて、後者はパン焼業者總數の四分の三強を占めてゐる。(「パン焼職人不平の原因」に關する政府調査委員エイチ・ユース・トレメンヒアの報告、別丁三二頁、ロンドン、一八六二年) 彼等は殆んど例外なしに、明礬、石鹼、眞珠灰、石灰、ダービシャー石粉、その他類似的の、榮養分に富み健康に益のある氣持よき成分を混合したパンを販賣してゐる。(前掲青表紙本、並びに「不純パンの製造に關する一八五五年の委員會報告」及びドクターハッサルの「發覺したる不純製造」第二版、ロンドン、一八六二年刊を見よ) サイ・ジョン・ゴルドンは一八五五年の委員會に宣明して言ふ。「斯かる不純製造の結果、日に二斤のパンを食べてゐる貧乏人は今や現實に於いて、必要なる榮養素の四分の一をも攝取して居らぬ。ほかに健康上有害なる諸種の影響もあるが、それは暫く置いて問はない」と。「労働者階級の至つて顯著なる部分」は、斯かる不純製造の事實を熟知しながら、何故明礬や石粉なども購買することになるのであるか? トレメンヒア (前掲報告別丁第四八頁) は、これが原因を次の如く述べてゐる。「彼等が『そのパン焼業者なり雜貨店なりから、與へられる儘にパンを受け取ることは、避けられぬ所である。』彼等は労働した一週の終末に初めて賃銀を支拂はれるので、『彼等の一家が一週間に消費したパンの代金は、その週末にならなければ支拂ふことが出来ない。』トレメンヒアは更らに證人の供述を引いて、次の如く附言してゐる。「斯かる販賣を目的として、上述の如き不純物から成るパンが製造されることは、周知の事實である」と。「イングランドの農業地方には(スコットランドの農業地方に於いては尙更らであるが)、二週間、甚しきは一ヶ月の終末に、賃銀を支拂ふ處が少なからずある。支拂期間が斯様に長いため、農業労働者は諸種の商品を用ひせねばならぬことになる。…斯くて彼等は、ヨリ高い價格を支拂はせられる。彼等は掛賣りしてゐる雜貨店に事實上縛られてゐるのである。例へば一ヶ月末に賃銀を支拂ふことになつてゐるウールツ州のホーエンガムに於いては、他の處で一ストーン當り一志十片のパン粉を二志四片で販賣する。(「公衆健康」に關する「樞密院醫史」一八六四年の報告第六號、第二六四頁) 『ペースレー及びキルマーノック』(西部スコットランド)に於ける更紗捺染工たちは、一八五三年同盟罷工に依つて一ヶ月拂の賃銀を十四日拂に變更させた『工場監督官報告、一八五三年十月三十一日』(第三四頁)。資本家に対してする労働者の前賃の更らに發展せる美しい一例として、イギリスに於ける炭坑主の慣用手段を擧げることが出来る。彼

等は月末に賃銀を支拂ふのであつて、労働者は賃銀を支拂はれる迄の間、資本家から前借するのであるが、それは往々商品の形でなされる。而してこの商品の代價は、市場價格よりも高く支拂はねばならぬのである。これ即ちトラック制度 (truck system) である。『月に一度賃銀を支拂ふ』にして、毎週末現金を労働者に前貸することは、炭坑主たちの常用手段となつてゐる。この現金は賣店 (Kaminshops) 即ち炭坑主自身の所有にかかるとする雜貨店) で手交されるものであるから、労働者はこれを一方の手で受取つて、他方の手で支出してしまふことになる譯である(「兒童雇傭員報告、第三號、ロンドン、一八六四年」第三八頁、第九二頁)。

労働力といふこの特殊の商品の所有者が貨幣所有者から支拂はれる價值が、如何にして決定されるかは、我々のすでに知るところである。貨幣所有者が交換の結果受け取る場所の使用價值は、労働力の現實的消費、換言すれば労働力の消費行程に於いて初めて現れて來る。この行程に必要な一切の物件、即ち原料その他の物は、貨幣所有者が商品市場に於いて購買し、その十分な價格を支拂ふのである。労働力の消費行程は同時に又、商品及び餘剩價値の生産行程である。而して労働力の消費は、他の總べての商品の消費と同様に、市場換言すれば流通部面の外部に行はれる。そこで、我々はこれより、貨幣所有者及び労働力所有者と共に、この騒々しい上べだけの、何人の目にも認められる部面を去つて、入口に「商用のほかに入るべからず」と示されてあるところの隠れたる生産場所へ、彼等について行くことにしよう。我々は其處に、資本が如何にして生産するかといふことばかりではなく、また資本が如何にして生産されるかといふことを知るであらう。貨殖の秘密は、斯くして遂に曝露されねばならぬのである。

労働力の賣買は、流通換言すれば商品交換の部面に運動するものであつて、この部面は實際のところ、天賦人權の眞樂園となつてゐる。其處に支配してゐるところのものは、自由と、平等と、所有と、ペンタムとである。自由! なぜならば労働力の如き一商品の購買者及び販賣者は、彼等の自由意志に依つてのみ、左右されてゐるからである。彼等は法律上同權の自由なる人として契約するのであつて、契約とは畢竟、彼等の意志に共通の法的表章を與へる終局的結果に過ぎぬのである。平等! なぜならば、彼等はいづれも單なる商品所有者として相互に關係し、且つ等價を以つて等價と交換するからである。所有! なぜならば、各人は己れ自身の物のみを支拂ふからである。ペンタム! なぜならば、兩當事者とも自分のことだけを考へてゐるからである。彼等と結合して一の關係に入らしめる唯一の權力は、彼等の利己、彼等の個人的利益、彼等の私的利害の權力である。而して何人も斯く自分自身のことだけを考へて、他人のことを顧みないからこそ、萬人みな事物の豫定された調和に



従ひ、又は萬事に拔目なき攝理の保護の下に、相互の利益となり、共同の利福となり、全體の利害に一致する所の仕事だけをするようになるのである。

單純なる流通の、商品交換のこの部面(自由貿易俗論家たちは、彼等の諸見地、諸概念、並びに資本及び賃銀労働の社會に對する彼等の判断の標準を、この部面から藉りて來てゐるのである)を去るとき既に、我々の登場人物の相貌は幾分か變化してゐるやうに見える。曩の貨幣所有者は今や資本家として先頭に立ち、労働力の所有者は彼れの労働者として隨從して行く。前者は容體振つて作り笑ひしながら、業務に熱中した態度で、後者は、彼れ自身の皮を市場へ運び、而して今やそれを揉めされることの外には、何等期待する所なき人のやうに、ビク／＼と尻込みしながら。

### 第三篇 絶對的餘剩價値の生産

#### 第五章 労働行程<sup>(1)</sup>及び價値増殖行程<sup>(2)</sup>

##### (一) 労働行程

労働力の使用とは、労働それ自身のことである。労働力の購買者は、その販賣者に労働させてこれを消費する。斯くすることによつて、労働力の販賣者は現勢的に活動する所の労働力となり、労働者となる。従前にあつては、彼れは潜勢的にさうであつたに過ぎぬのである。彼れはその労働を商品として表現せしめる爲には、先づこれを使用價値として、何等かの種類の欲望を充たすに役立つ所の物として表現せねばならぬ。されば資本家は、特殊の使用價値を、一定の物品を労働者に生産させるのである。使用價値たる財貨の生産は、それが資本家の爲に、資本家の管理の下に行はれるといふことに依つて、一般的性質を變更するものではない。そこで労働行程なるものは、先づこれを一定の社會的形態から獨立して考察することが必要になつて來る。

労働は先づ人類と自然との間に於ける一行程、換言すれば人類が彼れ自身の行爲に依つて自然との間に於ける代謝機能を媒介し、調節し、管理する所の一行程である。人類は一の自然力として、自然素材<sup>(3)</sup>、そのものに對立する。人類は自然素材をば彼れ自身の生活に使用し得べき形で占有<sup>(4)</sup>せんが爲、彼れみづからの身體に屬してゐる諸種の自然力なる腕や、脚や、頭や、手を運轉させる。彼れはこの運動に依つて、彼れ自身の外部に於ける自然に作用してこれを變化せしめ、斯くすることに依つて又、彼れ自身の自然を變化せしめる。彼れは自己の自然の中に眠つてゐる諸種の伏能力<sup>(5)</sup>を展開して、その活動を彼れ自身の支配の下に置くのである。

この場合、動物的に本能の儘なる<sup>(6)</sup>最初の労働形態は問題とならぬ。労働者が彼れ自身の労働力の販賣者として商品市場に現れる状態に比べると、人間労働が尙未だその最初の本能的形態を脱却するに至らなかつた状態は、原始的な背景のうちに遠ざけられてしまふ。茲では、人類專屬の形態に於ける労働を假定するのである。蜘蛛は機械工の作業に類似した諸種の作業をする。蜜蜂はその蠟窠の構造に於いて建築師を顔色なからしめる。が、最悪の建築師と雖も、最良の蜜蜂の及ばない本來的